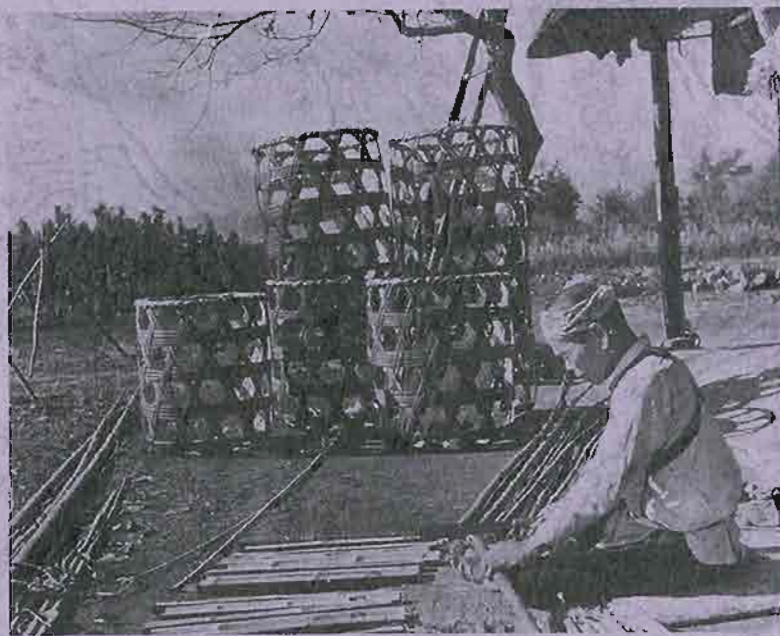


嵐山町博物誌調査報告

～第2集～



1997

埼玉県比企郡嵐山町教育委員会

嵐山町博物誌調査報告 第2集

嵐山町教育委員会

序

嵐山町博物誌の編さんが始まって五年が経過しました。

専門分野毎に部会が発足し、調査員各位にはそれぞれの調査・刊行計画に沿って刊行を目指して頑張っていたと思います。平成九年度には、いよいよ第一冊目として『中世編』の刊行を予定しており、着々と編集も進められているところです。

本調査報告は、博物誌本編の刊行に先駆けて、本編では集録しきれない膨大な調査情報を記録し、いち早く資料化することを目的として、昨年度から始められたものです。

今回は、近世と近代・現代の調査成果の中から二編の資料を集録しました。広野の中村武一氏宅に所蔵されていた「道中日記」は、前回集録した吉田小林家の道中日記と同年のもので、途中までは同行した十三人が西国札所めぐりのために宮川で別れた後の部分にあたります。前集と併せて、さらに詳しい解説を加えていただきました。「富岡寅吉日記」は、大蔵の富岡寅吉氏が昭和十四年の少年期に記録した日記で、戦前の小学生の日常生活の様子が淡々と綴られています。

資料の提供と掲載を快くご承諾くださった両氏には、この場をお借りして衷心から深くお礼を申し上げます。また、解説・執筆に当たられた調査員の皆様には深甚なる敬意を表す次第であります。

最後に、本書が郷土を愛する住民の皆様をはじめ郷土史研究を志す方々の研究資料として広く活用されることを願ってごあいさついたします。

平成九年三月

嵐山町博物誌編さん委員長

長 島 喜 平

例言

目次

一 本書は『嵐山町博物誌』編さん事業の一環として、近代・現代部
会が平成八年度に行なった文書調査の中から、その成果として二
編の資料を収録したものである。

二 博物誌の編さん部会の構成は、以下の組織表のとおりである。

自然編 動物部会

植物部会

地質部会

考古・歴史編 原始・古代部会

中世部会

近世部会

近代・現代部会

民俗編

民俗部会

事務局 嵐山町教育委員会生涯学習課博物誌編さん係

課長 大塚 治子

係長 植木 弘

係員 豊田 浩二 高橋 敏子

結城 珠枝 関口 羊子

三 本書の編集は、嵐山町博物誌編さん委員会（長島喜平委員長）の
指導のもと、嵐山町博物誌編さん係が行った。

四 本書の作成にあたり、中村武一氏、富岡寅吉氏からは本文に掲載
したそれぞれの文書資料のご提供並びに掲載についてのご快諾を
いただいた。銘記してお礼申し上げます。

弘化三年 伊勢参宮・四国三拾三ヶ所・金毘羅山・善光寺

道中日記 根岸 渡

..... 一

富岡寅吉日記 森山 茂樹・稲田 滋夫

..... 七四

弘化三年 伊勢参宮・西国三拾三ヶ所・金毘羅山・善光寺

道中日記

(嵐山町広野九 中村武一家文書)

凡例

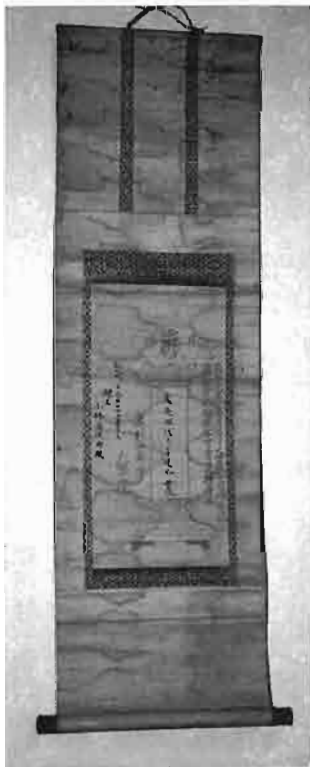
- 一 史料に使われてる旧漢字は、当用漢字になおした。ただし、地名については、そのまま使用した。
- 一 異体字は正字に改め、変体仮名はひらがなに改めた。
- 一 之は「の」になおし、カタカナのノはそのまま使用した。
- 一 方は「より」に、江は「へ」に、也は「なり」に、二而は「ニテ」に、者(ハ)は「は」に、斗は、「計(ばかり)」になおした。
- 一 壹、貳、参、拾は、一、二、三、十になおした。
- 一 壹りは「一里」になおした。
- 一 中喰、夕喰は、「中食、夕食」になおした。
- 一 金毘羅は「金毘羅」に、結構は「結構」に、燈籠は「灯笼」に、廻郎は「回廊」に、姓名は「姓名」に、本陣は「本陣」に、湊は「湊」になおした。
- 一 誤字と思われる字句には、ママを傍記した。
- 一 破損部分は「□」とし、不明字は「□」とした。
- 一 うぶへ(おぶい)、かへだん(かいだん=階段)などと、土地の訛が出てくるが、そのまま記した。
- 一 著者が付したふりがなは、そのままふりがなとして傍記した。

- 一 読みやすくするために、本文中に句読点を適宜付した。
- 一 日にちの経過がわかりやすいように、一字上に上げた。また、西国めぐりに関しても、番所の部分を一字上げた。



伊勢大麻(明治以降のもの)
志賀 根岸ナヲ家所蔵
写真上

高野山月牌(施主小林菊次郎)
吉田 小林武良家所蔵
写真左



△表紙1▽

道中日記

△表紙2▽

弘化三丙午

伊勢参宮

□ □

西国三拾三ヶ所 道中日記覚帳

金毘羅山 十二月吉日 中村善左衛門

善光寺

(黒印)

弘化三丙午年十二月十九日

大雨二付、無拋八ツ半頃、勝田村出立

勝田村より

一、菅ヶ谷へ 一里

同十九日晚

同所紺屋平兵衛殿へ、泊り。

旅籠代二百二十四文。宿ハ下々。

此間ニ大蔵川、かり橋、はし銭なし

一、今宿へ 二里半

同所、泊り宿少しあり。

同川あり、かり橋、はし銭、なし。

一、北ノ町屋へ 一里

同所、宿、茶やなし。

同二十日

一、高萩へ 一里

同所、中村屋寅蔵方ニテ昼食

相頼、一人前七十二文。

此間ニ、根岸川、橋銭八文出し候。

一、扇町屋へ 二里

同所、泊り宿あり。此所少し休

一、箱根崎へ 二里

同所、泊り宿少しあり。

一、拝嶋へ 二里

同泊り宿あり。此所少し休。

同拝島川、船橋とも二十四文出

此間ニ八王子川、かり橋、はし銭なし。

一、八王子へ 二里

同二十日晚、同所 亀屋喜左衛門殿へ

泊り、旅籠代二百文。宿ハ上々。

此間ニ、杉山峠下りて、少しの川あり。

此所武蔵

相模 国堺なり。

一、橋本へ 二里

同泊り宿あり。

此間ニ、武蔵野の大原あり。七ヶ村入合

まくさ場と、言原なり。

一、田名へ 二里

同泊り宿少しあり。

同田名川、舟賃十六文出し候。

此間ニ中津川橋銭なし。

一、萩野へ 二里

同二十一日、同所松坂屋普右衛門方へ

昼食へ相頼、一人前七十二文。

一、小野へ 一里半

此間ニ富岡村ニ少し峠あり。

次ニ神戸村より善葉峠ニ

とばぶき茶呑み休茶屋二軒あり。

此所ニ少し休、夫より下りて、川あり。

一、十日市場へ 三里半

同二十一日晚、同所、熊野屋清右衛門殿へ

泊り、旅籠代百八十四文。宿ハ中。

同所、出口ニ水なき大河原あり。

次ニ渋沢峠下りて篠久保村

通りて篠郷村峠登り、

辰巳の方ニ海見ゆるなり。

四拾八瀬川下へ出ル

神山村、店ニ少し休、夫より

十文字川、橋銭二十四文出し

次ニ関元へ出ル。此所より最乗寺

右へ行なり。

同二十二日

一、最乗寺へ 五里

此所、大門二丁目ニ大石灯籠

あり。此所茶屋二軒有。

大和屋源兵衛方へ昼食。

一人前七十二文。

夫より 社内ニ大キ成 □ □

あり并ニ大 □ □

道了大権現社内一本大かな □ □

一ぜんあり

石段百十四かへなり。石段中ニ

かなくさり、はりあるなり。

此間ニ中沼村少しの川、橋銭八文出、

次ニ同川下ニテ、又橋銭四文出し候。

一、塚原へ 二十八丁

同所、休茶屋あり。

此間ニ穴鍋村あななべニ少し休。

一、小田原へ 二里

此所ニ、大久保加賀守様、

御高十一万三千石余、

御城あり。

同宿右の方ニ、八方八ツ棟作り

うゐるふの名薬あり。

一、湯本へ 二里

同二十二日晚、同所御本陣

福住九蔵殿へ泊り。

旅籠代二百二十四文。宿八中。

此内名湯あり。

一、畑へ 一里

同所、泊り宿あり。

夫より難所登りて、とはぶき

休処ニ、三ヶ所あり。夫より

少し下りて、

箱根権現右へ、入口ニ鳥居

脇ニ石灯笼あり。夫より二丁

計り行、二ノ鳥居あり。又少し

行て、石段登りて、石ノ鳥居

次ニ箱根権現御本社なり。

其外参り所あり。石段下

別当金剛院信言 □ □

同寺ニ曾我兄弟 □ □

宝物、一組何人ニテも

百文開帳。

此所水海なり。

夫より四五丁戻りて、しんや

の角榊屋平七殿ニテ

相休、中食一人前百文。

夫より

相州箱根

御関所へ手形差上早速

罷通り

同二十三日

一、箱根へ 一里 □ □

此所、泊り宿多し。

此間ニ山中休茶や

同 みつや休茶やあり。

同豆州

相州 国堺なり。

夫より名高キ大難所下りなり。

一、三郷へ 三里二十八丁

同所、三郷大明神 社領五百三十石

三重の塔并ニにわ鳥の数不知。

此間ニ幾せ川、長サ三十六間

板橋あり。

一、沼津へ 一里半

同所、右の方ニ

水野出羽守様

御高五万三千石御城あり。

一、原へ 一里半

同二十三日晩、同宿脇本陣

香貫屋 重郎右衛門殿へ

泊り、旅籠代百七十二文。宿中

同宿中程、宮前植松与右衛門殿

持高三千石植木ぶげんと言。

つばき松長サ四尺横六間

四方の名松あり。

此間二本吉原村ニせんだんの

木多し。

同富士の正面なり。

次ニ鈴川二十四間板橋あり。

一、吉原へ 三里六丁

此間二本市場村ニ富士の
白酒名物あり、高し。
増田屋藤吉方ニ相休。

同間ニ富士川舟賃二十四文出し。

川ヲ上り岩淵村泊り宿茶屋

多し。此所粟粉餅名物あり、
高し。

此間蒲原分富士見峠ニ茶や

あり。此茶やニとふめがねヲ見
相休。

一、蒲原へ 二里二十六丁

同宿柏屋ニテ昼食仕候。

此間左の方、海辺なり。

一、由井へ 一里

同宿左の方、海ヲ見とふし

伊豆山、出先見ゆるなり。

同所、田子浦名所あり。

此間、さつた峠登りて、

休茶屋あり。此所少し休、

下りて奥津川。橋銭なし。

一、奥津へ 二里十二丁

同宿より左の方ニ、三保の松原

見ゆる。右の方寺下村

清見寺浦木戸より表の

方迄石垣なり。寺内まきの木

三、四尺廻り数不知。庭ニ梅の
名木あり。并ニ大松一本あり。

石の五重の塔あり。大そてつ

あり、浦ニ籠山色々大そてつ

数不知。山水あり。

清見寺本堂内かわらのき

つがうの敷なり。

寺領二百石余なり。

一、江尻へ 一里二丁

同二十四日晚

同宿脇本陣大竹屋平七殿へ

泊り、旅籠代百八十文。宿中。

同宿中程ニ、大川あり。

十八間板橋なり。

夫より町はづれ左りの

方へ久能山道あり。

一、久能山へ 三里

同所、下町、川寫屋九郎兵衛殿

へ荷物置、案内別当さむらへ

ヲ相頼、案内銭十人迄一組二百文出し

夫より登り石段石のい垣十七

曲り。此所ニ御門内ニ御関所へ、

銘々姓名手形ヲ上ケ、早速通り、

次ニ大門ニ御みぎの院様の

御じ筆客あり。次ニから金の

鳥居内ニ石灯笼五十六本

かね灯笼三本あり。次ニ

御手植高野牧、凡五尺廻り一本

五重の塔高サ十丈九尺なり。

次ニ権現様御はい殿前左り方ニ

大そてつ一かぶあり、

結構成。 其外参詣所あり。

御玉家 社領三千石

しごく谷下

御宮御番

榊原越中守様

同所ニ、与力同心五十人なり。

右、川寫屋九郎兵衛殿へ戻り、

同人宅へ置代置

是より府中通り左り □ □

浜辺ヲ通り伊豆山出先

見ゆるなり。

夫より行て、久能領

左右田広地広し。

次ニ駿河国八幡宮社広し。

一、府中へ 三里

同二十五日、同宿魚屋銀次郎方へ

昼食へ相頼、一人前七十二文。

次ニ浅間せんげん太神宮社領

三千石

其外、宮数多し。石段

百五ツ、拝殿かへるうの内

白木の神楽殿あり、

結構成御宮なり。

案内ちん、一人前四文出し候。

御番城御城代

本多対馬守様

御高九千九百五十石

御定番 寫津式部様

町御奉行 戸田寛十郎様

御目附 伊奈熊藏様

御勤番組頭 辻久左衛門様

御武具奉行 大谷木吉之丞様

御代官 池田岩之丞様

右の通り相違無御座候以上

弘化三年丙午ノ十二月二十五日改メ

御城下町広し。

右府中宿町内町数□

遊女町二丁入九十六丁ニ相わかれ、

結構成町家ニ御坐候。

此間ニ阿部川あり。うぶへ

こしちん一人前二十八文出し、

川ヲ上り手越村、此所

阿部川餅名物なり。

一、鞠子へ 一里十六丁

此間二十五間の土橋あり。夫より

少し行て、宇津ノ谷村とう

だんご名物あり。此所宇津ノ谷

峠坂道なり。峠少し登りて、

弘法大師の立し堂あり。

同村茶屋、鈴木や伝吉殿へ相休。

一、岡部へ 二里九丁

二十五日晚 同宿役人の内

柏屋良平殿へ泊り、

旅籠代百八十文。宿悪し。

此間ニ横内村右の方ニ

松平能登守様御陣屋

あり。此所ニ長サ三十間横二間

余の板橋あり。

一、藤枝へ 一里二十九丁

同宿左り方ニ

田中の城あり。

本田豊前守様

御高四万石外ニ

五千石 是ハ久能山御火番

御勤番料なり。

同宿出口ニ水なき大河原あり

一、寫田へ 二里八丁

同所分十六間の土橋あり。

同宿より十五、六丁行て、

名高キ大井川、うぶへ

越ちん、一人前二人懸り

百四十文出し候。

此間ニ駿州

遠州 国堺なり。

一、金谷へ 一里

此間ニ菊川峠坂道難所

なり。下りて又登りて佐野さや

仲山峠、茶屋十七、八軒あり。

あめの餅名物あり。

同所右の方、堂二間半四面

の堂本尊子生長観音あり。

夫より、少し下りて夜鳴石

あり。右の方ニ無間の山見ゆ

るなり。

一、日坂へ 一里二十四丁

同二十六日、同宿東屋清藏あずまや

殿へ昼食相頼、一人前

七十二文。町出口二十二間

横二間半板橋あり。

此所わらび餅名物あり。

是ハ悪し。食するなし。

此間ニ大和田村二十四間

土橋あり。

一、掛川へ 一里二十九丁

同二十六日晚、同宿

手嶋屋平太郎殿へ

泊り、旅籠代百八十文。宿上々。

同所右の方ニ、

太田備中守様御城有。

御高五万五千石なり。

同宿出少し行て大打場村ニ長サ

二十五間計りの土橋あり。

此所ニ遠州秋葉山道

あり。一ノ金鳥居并ニ金灯

籠、長凡一丈計りあり。

右ハ秋葉山道なり。

左ハ東海道なり。

此間ニ坂道峠難所なり。

同畑かま川、橋銭四文出し、次に

太田川橋銭八文出し候。

是より五十丁一里なり。

一、森へ 三里

此町家、事の外大町なり。

同所ニ相休、餅安し。

夫より四拾八瀬川始り、

此間小坂難所なり。雨天ニテ大難儀

仕候。

一、三倉へ 二里半
同所、小林や源吾方ニテ

昼食仕候。此所鶯餅

名物あり。

同坂道難所なり。

一、一ノ瀬へ 二十五丁

同所、泊り宿茶や、少しあり。

森より此所迄四拾八瀬

川有。冬ハ橋あり。

此間ニ坂道峠、雨天ニ付

大難儀仕候。

一、小なら安へ 一里半

同所ニ宿茶少しあり、悪し。

此間ニ御林峠、難所なり。

下りて又登り、雨天故

大難儀仕候。

此間ニけた川、橋銭二文出し候。

一、いぬいへ 一里

同泊り宿悪し。

此間大峠なり。

一、ふもとへ 十四丁

同所、澤屋善兵衛殿へ相休、

此所より四丁計り登り、

二ノ金鳥居大石灯籠あり。

同二十九丁目ニ、三ノ金鳥居

石灯籠二本、金作の灯
籠二本あり。次ニ、三十丁目ニ

子安堂あり。四十六丁目ニ

四ノ金鳥居、前ニ龍の金の

灯籠二本、次に大門外ニ

からかねの大仏并ニ二重

の塔あり。内ニまわり灯籠

其外当山常夜灯数

不知。

一、秋葉山へ 登り五十丁

次ニ石段登りて、

正観世音なり。

夫より又石段登り

三尺坊大権現なり。

当山御朱印五十石

寺くらし三百人なり。

余り大寺ニ付、一向様子

不相知候。

次ニ、細工小家、長サ四十三間

横五間、おろし十二間

同五間なり。夫より浦道下り

金鳥居一ツ有。

同二十七日晚

一、戸倉へ 五十丁

同所、柳屋銀次郎殿へ

泊り、旅籠代百六十四文。
此間ニ天龍川増水ニ付

十八文出し候。

一、さい川へ 二十五丁

泊り宿有。

此間峠ニテ大難所あり。

同日雨天ニ付難儀仕候。

一、石打へ 一里半

泊り宿あり。

此間大峠なり。

一、熊村へ 二里

泊り宿有。

此所ニテ昼食仕候。

同峠なり。

一、大平へ 二里

泊り宿有。

此間二峠あり。

此所ニ遠州

三州 国堺なり。

一、巢山へ 一里半

泊り宿有。

同、間ニ登り下り大難所有。

一、大野へ 一里半

同所、大町家、此所相休、夫より

少し行て、

いたじき川増水ニ付

越ちん、無埤二十四文出し

川ヲ上り、夫より少し行て、

鳳来寺道大キ成立石ニ

此処より一丁目始り。

二十四丁登り休茶や、

一、二軒、此所ニ相休、

夫より一町の間行者越と

申岩の上大難所あり。

一、鳳来寺へ 五十丁

此所 東照宮

御玉家 御朱印五百石

同、峯薬師寺領千石

同、浦西ノ方ニ鏡堂あり。

鏡四尺四方の大鏡其外

不数知。同浦ニ

三十の塔あり。宝物堂

あり。

一人前冥加銭六文ニテ諸宝

物開帳致し、

其外諸堂多し。

鳳来寺 岩本院外ニ

寺院二十ヶ寺有。

同二十八日晚

一、角屋へ 九丁

同町、柏屋与七殿へ泊り、

旅籠代百七十二文。

此間一里計行瀧川村

瀧川舟ちん五文出し

夫より行て、信玄村ニ

信玄公刀とき候、少しの池

水にぎりなり。

一、新城へ 三里

同宿、能町家なり。

同左の方ニ

菅沼新八郎様御在城

有。御高七千石。此所より

三十六丁一里始り、

此間ニ大原有なり。

一、大木へ 二里半

同所、おわりや市右衛門殿へ

昼食相頼、一人前六十四文。

此間ニほのを村大原一里四方

計りの原通り、少しの家村

ニ、八尺廻りの石ノ鳥居有。

是ハ三州惣鎮守なり。

夫より、東海道出合なり。

一、御油へ 二里半

同二十九日晚

同宿、若松屋源右衛門殿へ

泊り。旅籠代百八十文。

一、赤坂へ 十六丁

一、藤川へ 二里九丁

同宿、入口より少し行、左かわ辰の

目印辰巳屋、能茶や有。

同間二岡村二四十二間の

土橋あり。

此間二西尾領有。

大岡紀伊守様御陣屋有。

一、岡崎へ 一里半

同宿、左の方二

本多中務少輔様

御高五万石御城有。

町家長し。

夫より行て名高キ

二百八間の板橋有。

同宿少し相休。

一、池鯉鮒へ 三里三十丁

未ノ正月朔日

同宿、右の方角

海老屋権兵衛方へ昼食

相頼、一人前六十四文。

夫より行て、左の方二

桶狭間 古合戦場有。

此間三州

遠州 国堺なり。

同間二、あり松村、なるみしほり

本元なり。

同酒造蔵多し。百文二付

銘酒一升売なり。

一、鳴海へ 二里三十丁

此間二二十九間の板橋有。

夫より少し行て右へ入

四観世音大堂あり。

三重の塔有。

一、宮へ 一里半

同元日晚

同宿、脇本陣

山城屋吉左衛門殿へ

泊り。旅籠代

百八十文。

同本町つきあたりより

右へ八名古屋

津 道なり。

左ハ桑名、京都道なり。

同宿二

熱田大明神

社領一万石なり。末社

多し。常夜灯数

多し。同宿より右の方へ

名古屋御城有見ゆ

るなり。

一、名古屋へ 一里半

此所

尾張大納言様

御高六十四万石余なり。

御城あり。同所江戸同様

結構成町屋なり。町出口二

七十二間計り板橋あり。

夫より少し行町家あり。

同町へ船附なり。

一、甚木寺へ 二里

此寺ハ本尊観世音

三重の塔あり。

一、津 道なり。

同所、少しの町家なり。

牛頭天王 弥五郎殿

居森殿

御神領 千石なり。

同所、船宿問屋源蔵殿へ

昼食相頼、一人前百文出し。

同所ニテ桑名迄船二乗り、

船賃一人前七十五文出し

船玉一人前二十四文出し

同所より川土手凡一里余下り

焼田村より船二乗り出し

少し乗り下り

此川原二尾州

勢州 国堺なり。

右の方ニ増山河内守様

御高二万三千石御城見ゆる。

御城下堀ヲ乗り下り

桑名御城下へ乗廻

し同宿へ上り

一、桑名へ 三里半

同二日晚 同宿

堺屋三右衛門殿へ泊り、

酒肴少々御馳走ニ相成、

旅籠代百八十八文、

茶代金一分置、

伊勢三日市様より

御迎札建 講元衆

連中

同所

松平越中守様

御高十一万三千石

御城あり、結構成御城なり。

町家長し。

三嶋社

春日社 有なり。

町ノ出口より松並木の茶や

ニ焼蛤名物なり。

此間二百間二十七間の

板橋あり。次ニ六十間

余土橋并ニ二十間土橋

あり。

次ニ富田村、此浦ニ

松平下総守様

御陣屋あり。此所ニ

二万石余忍ノ御領分

あり。

桑名より五十丁一里なり

一、四日市へ 三里八丁

同宿ニ六十間の土橋、前後

泊り宿あり。此所ニ

脇本陣、能宿なり。

少し行立場あり。

とまり村に

追分 右ハ京道

左ハ伊勢道 なり。

一、神戸^{かんべ}へ 三里

此所ニ本多伊豫守様

御高一万五千石御城なり。

一、白子へ 一里半

同三日、同宿下町、つゞみや

新吉殿へ中食相頼、

一人前七十二文。

同所ニ奈良出張菊一

文殊、刀鍛冶あり。

同右の方ニ

紀州様御陣やあり。

次ニ子安観音

ふだん桜あり。

一、上野へ 一里半

此間ニ根上り松、次ニ江戸

橋有。夫より行右ハ京

左りハ伊勢道なり。

是より町つゞき津町入口

一、津町へ 二里半

同三日晚、同宿

若狭屋六左衛門殿へ

泊り旅籠代百八十八文

町つゞき間ニ六十間余

土橋あり。

此所

藤堂和泉守様

御高三十五万石

御城有。

此町中ニ三十六間の

板橋あり。らんかんぎぼし

町家七十二丁と言、長し。

一、雲津へ 二里

此所、雲津川舟賃十二文
前後共雲津なり。

一、月もとへ 十八丁

此所より右ハ大和廻り南部
越道あり。

左リハ伊勢道なり。

一、六軒茶屋へ 十八丁

此所、大和廻り、長谷越道なり。

一、松坂へ 一里

此所

紀州様御城代

あり。

一、くしだへ 一里半

此所、櫛田川、舟橋二文

此川前後櫛田なり。

同所、留女の名所なり。

同五丁計り行て、

左の方、つばや名物

多分あり。

たばこ本家あり。

此所ニテたばこ入御求メ

可被成候。

間二いなぎ川、舟橋一文

一、新茶屋へ 一里半

同四日 昼九ツ過ニ着致し、

三日市様手代津村

佐兵衛殿出向ニ出、夫より

太夫様より酒肴其外

きり食餅菓子出し

種々御馳走相成、同夜

同人宅へ泊り、

旅籠代二百文。

同五日 早朝より三日市様方ニテ

案内并ニ駕籠ヲ揃

右太々講中不残乗出し、

錢ヲ蒔。

一、小畑へ 一里

此所、少しの町家なり。

間ニ宮川、無賃渡しなり。

同五日

一、川崎へ 一里少し余

此所、町家なり。同宿ニ少し休、

夫より乗出し町中ニ大板橋

あり。同宿へ江戸より

大船附色々大問屋あり。

結構成町家なり。

一、くじ本へ 五六丁

此所、茶屋あり。

一、式軒茶屋へ 同断

同休茶屋少しあり。

此間ニ、しをあい川、舟ちん
行戻りニテ十二文。

宮川より

一、二見茶屋へ 百五十丁

此所ニ泊り。宿茶屋少し

あり。同所より

二見太神宮へ二丁程

あり。海中ニ立石へ参詣仕、

同所へ戻り、角屋六郎右衛門殿

へ三日市様より昼食

并ニ吸物、酒肴、持参致し、

種々御馳走ニ罷成申候。

夫より出立、錢ヲ蒔、駕籠ニ

乗り返り、右川崎町迄

返り、同宿より山田一志町へ

二十四丁なり。

一、山田へ 二十四丁

一志町三日市太夫次郎様へ

同五夕方方ニ駕籠ニテ乗り

込、種々御馳走ニ相成、同六日

早朝より乗り出し、錢ヲ蒔

外宮并四十末社参詣致し、

其外末社多し。天の宮、風の

宮、天の岩戸、高天原其外

末社多し。夫より下りて駕籠

二乗り、間の山へ銭ヲ蒔、夫より古市ヲ通り宇治橋有。此所二一ノ鳥居有。此所ニ寄り、夫より少し行、内宮へ参詣致し其外八十末社なり。夫より少し行て山坂峠なり。十六丁目ニ楠部峠茶屋

六郎右衛門殿へ種々御馳走の品取よせ、御馳走ニ相成、夫より乗り出し

同六日 内宮より

一、朝熊岳へ 七十二丁
此所、萬金丹本元一軒有。次ニ施帯茶有。夫より行諸堂多し。

石段少し登り虚空蔵菩薩へ
御堂内ニ五重の塔、かねの灯笼四本有。長ろう家有。寺院一ヶ寺有。諸堂へ参詣致し、夫より

乗り戻り楠部峠下りて茶屋
勘七宅へ参り、夕御膳酒肴種々御馳走ニ相成、夫より太夫次郎様へ戻り

同七日ニ太々修行仕、同八日八ツ頃ニ出立駕籠ニテ御見送り宮川迄、酒肴種々御馳走ニ相成申候。

一、川端へ 半里
宮川上の渡し無賃なり。

一、田丸へ 一里半

此所、たばこ入并ニ合羽名物本元二軒あり。

同宿ニ紀州様御持城有。
同八日晚
一、原へ 一里

此所、若松屋儀三郎殿へ旅籠代弁当附百四十文。
同五、六丁行て立石あり。

右ハ高見越よしの高野道
左ハ熊野道少し行て峠あり。

一、あふ風へ 一里半
此間ニ柳原村ニ順礼手引観世音あり。

一、栃原へ 一里半
同所、泊り宿休茶屋少しあり。
次ニ神セ村宿一軒有。

一、下楠へ 一里
此所、泊り宿少し有。
一、あをへ 半里

一、見せへ 一里
此所ニ少しの村宿ハ悪し。
同泊り宿少し有。

一、野尻へ 一里
此間みせ川、舟ちん八文出し候。

同泊り宿あり。
同少し行て

瀧原太神宮大社なり。
一、阿曾へ 一里
同泊り宿少し有

此間川あり
一、柏野へ 一里
同泊り宿あり。

同川あり。
一、崎村へ 半里
同九日晚、江戸屋甚蔵殿泊り、旅籠代弁当附百四十文。

同川あり。
一、駒村 半里

此所、泊り宿あり。
一、間弓へ 一里
同泊り宿あり。

同二坂峠 伊州 紀州 国堺なり。
同川あり。舟ちん六文出し。
二坂峠国境迄三十六丁一里なり。

是より五十丁一里なり。
一、長嶋へ 二里

同、泊り宿よし。

此所船附なり。同所より舟二乗べからず。

間二一石峠、古里村、次二

鋸坂、難所なり。

同三浦峠、難所なり。

一、三浦へ 二里

同、泊り宿有。

此間はじ懸ヶ坂有。

一、馬瀬へ 一里

宿同断

間二川三ツあり。

舟津村宿少し有。

一、古本へ 一里半

同宿少し、同能宿あり。

出口二川あり。板橋

夫より 少し行川端難所なり。

次二間越坂峠、大石ニテ上下ニテ

五十丁大難所なり。

夫より二十五丁登りて

岩舟地藏堂并ニ茶屋

一軒あり。左の方二

天狗の岩屋へ八丁行なり。

一、尾鷲へ 浜辺なり 一里半

同十日晩 浜田屋利八殿へ

泊り、旅籠代弁当附

百四十八文。

此所、能町家なり。

少し行て川あり。

次二八鬼山峠登り、

五十丁、大難所四十五丁

目二月輪寺本尊

三堂大荒神、此所二少し

休、夫より少し登りて下り

三十八丁難所なり。

一、三木へ 浜辺なり 三里

同所、能泊り宿ハなし。

此所より、曾根迄舟二乗りて

よし。曾根迄舟道一里

一人前四十四文ニテ乗り

陸を行バ、山坂二里難所なり。

一、曾根へ 浜辺なり 陸ハ二里

同泊宿あり。 舟ハ一里

此所ニテ昼食仕、

次二曾根太郎坂、同次郎坂

難所也

一、二鬼鷲へ 一里八丁

同泊り宿あり。

同浜辺なり。

次二、狼坂上下一里、難所なり。

一、新鹿へ 一里

同泊り宿悪し。

同山坂あり。

一、波田次へ 一里

同泊り宿なし。

間大引峠登りて

茶屋一軒あり。

一、大とまりへ 一里

同泊り宿悪し。

次二川有。橋銭二文出し候。

木本峠二千手観音堂あり。

一、木ノ本へ 十八丁

同十一日晚、山本屋文吉殿へ

泊り、同弁当附百六十八文。

此所ハ浜辺ニテ千軒ノ町家なり。

泊り宿ハ悪し。同所ハ

宿引なし。右ニ御心附

御泊り可被成候。

町出右の方二名岩あり。

次二高サ十八間計の岩ニツ

有。あふま権現の二王石なり。

次二花の岩屋といふ所有。

大石ニしめをはり鳥居

石灯坏とあり。

次二松山中ヲ通り浜辺なり。

此間、親しらずと

言所なり。波高きときハ通り

がたし。

一、有馬^{ありま}へ 半里

同泊り宿悪し。

夫より松林の中を行、

次二子しらずと言所あり。

舟渡し三文出し候。

市木村なり。又少し行て

下市木村二川あり。前同様なり。

一、阿田^{あた}和へ 二里

同泊り宿悪し。

此間二川あり、前同様なり。

一、井田へ 一里

同泊り宿ハ悪し。

此間松原、少し越テ宿少し有。

次二鳴川村ニ、舟番所有。

一人前二十五文出し、

川ヲ上り新宮町入口。

一、新宮へ 一里

同所、右の方少し行、

熊野権現 山役銭三十三文出し、

牛王御手判請

御本社末社多し。

浦二八角のきやう蔵有。

本社御普請ニテ御仮家なり。

此町家多し、なれ共

茶屋なし。同所ハ船附なり。

紀州様御家臣

水野土佐守様

御高三万五千石の御城なり。

町出はなれハ右の方

高根ニ龍蔵権現あり。

次二少しの坂有。

間二少しの峠有。右の方ニ

紀州様御見付高キ山ニのろし

大つゝ三本有。

一、みわ崎へ 一里

此所、能町家なり。浜辺ニテ

結構成町家なり。次二佐野村此所

より、うぐみの浜那知黒石有。

一、字久井へ 一里

同泊り宿あり。

間二小ぐし峠

大ぐし峠 山坂なり。

一、浜之宮へ 一里

此所、浜辺なり。泊り宿ハ百姓家なり。

同浜宮明神 三社権現あり。

千手観音

次二井関村

同十二日晚 同村下馬井一ノ鳥居

外、いかけや甚右衛門殿へ

漸々無心致し、泊り、旅籠

代弁当附二百文。

夫より登り、十八丁。四丁目ニ

仁王門入テ、右の方へ、八丁行ハ

三国一の瀧なり。

一、那知山へ 一里

坊舎四十軒余有。武州比企郡

の坊ハ宝蔵院へ附山役銭

百二十四文出し、造酒・素麵一膳

御馳走ニ相成、牛王御手判請、夫より

行道に地獄の釜と言あり。

西国第一番紀伊国

那知山 堂ハ五間四面辰巳向

本尊如意輪観音なり

次二熊野大権現本社并参り所多し。

同所より、西国二番紀三井寺へかけ

越道あり。夫より大雲取、大難所

二百丁の間、泊り宿休茶や不自由

の峠の内茶屋七ヶ所あり。

右茶屋へ無心すれハ宿

致ス。此間峠大難所なり。

一、小口へ

泊り宿あり。

次二少し川舟賃三文出し、

次二小雲取難所なり。

此間、泊り宿茶や、一、二軒あり。

一、受川へ 三里

同泊り宿あり。能宿も少し有。

次二川橋なり。

一、本宮へ 二十五丁

同十三日晚 武州比企郡八尾崎太夫様へ

泊り八弁当附二百文。

牛王御札請八十四日朝

町を行て、板橋渡り

尾崎太夫より案内出候共

頼み二不及。

熊野権現

十二社権現

其外末社多し。

裏二地主権現

おとなし天神

白川院和泉式部の

石塔有。所々

参詣致し、

尾崎太夫へ戻り候。

右の方行ハ本道

左の方行町入口の

板橋の前より、右の方へ

行バちか道なり。夫より

坂道十八丁行て、

小栗判官車塚有。

八丁行て、遊行上人

の名号石有。夫より

行て、湯峯入口に

一遍上人の爪にてほりし

六字の名号石有。并二

二重の塔ひだのたくミ

が建しと言なり。

此所より湯川へ行なり。

一、湯ノ峯へ 二十五丁

同所、名湯あり。

泊り宿もあり。

川中より樋ニテ湯ヲ取

湯坪三ツ有。

男湯

女湯 一度入六文ヅツなり。

次二七五しめ三めはり有湯

是ハ小栗判官入候。

本服致し候。湯も二十四文

ニテ入なり。

湯花ニテ出来し

薬師如来あり。

此所より、右へ少し行

又左へ細道ヲ登り、

夫より峠計り行なり。

所々ニ休茶屋一、二軒有。

夫より行て

湯川本宮出合の所ニ新宮

様御番所有。此所茶屋ニ相休。

一、湯川へ 二里

此所ニ泊り宿一軒あり。

悪しキ宿なり。

次ニ見越坂并ニ女夫坂

難所有。

一、野中へ 二里

同所ニ泊り宿多分あり、

悪し。村中に秀平の

桜并ニ野中清水一本

杉有なり。

一、近露へ 三十丁

同所、泊り宿四、五軒あり。

次ニ柏峠、左の方ニ

花山院経塚あり。

少し行テ川あり。夫より

大坂峠、大難所なり。

次二十文峠少し下りて

茶屋二軒あり。

一、高原へ 二里半

同所ニ泊り宿十軒計り

あり。

此間少し坂あり。

一、芝村へ 二十五丁

同所二川あり。前後二泊り

宿三、四軒宛々あり。

川向

同十四日晚 はりま屋

伝助殿へ泊り、旅籠

代弁当附百八十文。

宿上々。

同所より紀州様御家臣

安藤帯刀殿領分

ニテ是より三十六丁一里。

同所より少し行て

板橋渡り、夫より登り

塩見峠上り三十丁

峠より浜辺見ゆる。

同所二泊り宿二軒

あり。下り七十五丁

一、上三栖へ 二里半

同所二泊り宿あり。夫より

中三栖、下三栖、次二川

あり。次二万呂村上中下

三ヶ村通り、夫より田辺

出ルなり。

一、田辺へ 二里

同十五日、四ツ頃二同宿下長

町大和屋甚兵衛殿

相頼、峠大難所仕舞二

付祝として餅ヲつき

一人前百三十五文

懸りなり。

同所二

紀州様御家臣

安藤帯刀殿

御居城高三万七千石

同宿二町中二板橋二ツ

次の板橋らんかんぎほ

し 六十間計り橋あり。

結構成町家なり。

町出はづれ二松原あり。

此所二牛がはなといふ岩

あり。同所より南部迄

返り、舟に乗り一人前

八文舟道一里半陸行

バ二里なり。

此間浜辺なり。

一、南部へ 二里

同所、泊り宿あり。

此辺畑中二梅木数

不知。同宿出口二川あり。

次二南部峠并ニかた

くら峠有。茶屋二軒

あり。次二榎坂下りて

鳴田村ニ泊り宿二、三

軒あり。此所泊り宿

よし。間二川あり。

舟賃五文出し候。

一、切辺へ 二里

此所、泊り宿二、三軒、

宿ハ悪し。

次二豆坂同所ニ子王権現

不動の清水あり。

一、印南へ 半里

同十五日晩

同所、入口しん屋佐七殿

泊り、旅籠代弁当附

百六十四文。宿中。

此所より五、六丁計り行て

泊り宿少しあり。板橋

十七間あり。次二

津井村楠井村二泊り

宿一軒あり。上野村

野鳥村の畑中二清姫

草履塚石のい垣あり。

あんちん追欠みこしの松有。

次ニ塩屋が浦、同所ニ川あり。
舟賃三文出し。

次ニ日高川舟ちん八文出し、
川ヲ上り右の方へ土手

二十五丁計り行、藤井村

(付箋) 藤井村へ泊り宿あり

小松原へ三里

より左の方へ行五、六丁行

鐘巻村天音山道成寺

石段六十四かへ登り

仁王門 次ニ三拾の塔、其外

安珍の塚、鐘堂の跡有。

当山本尊観音なり。

同紀伊国むろの郡まな

ごの庄司清時が娘清姫の

ゑんぎ開帳一組何人ニテモ

百文。

下町少し茶屋あり。

同所より左の方少し行

田中ニ清姫蛇塚石垣あり。

一、原谷へ 二里

同所ニ泊り宿あり。此前より

大雨降り難儀仕候。

次ニ鹿ヶ瀬峠登り下りニテ

五十丁、間茶屋二軒あり。

次ニ川橋なり

一、井関へ 二里

同所ニ泊り宿、川あり橋なり。

一、湯浅へ 一里

同所、入海舟附、結構成町家なり

能泊り宿あり、中程より北ニハ

宿なし。入口ニ大川橋なり。

夫より少し行てほらづ

峠登り下り二十五丁なり。此辺

みかんの木多分有。

次ニ糸鹿峠、此辺ニも多

分仕り、此所ハみかん、たいたい

きかん名物なり。

登り下り三十丁の峠なり。

峠ニ茶屋泊り宿二軒有。

同所より少し下りて、糸鹿村

ニ雲雀山得生寺ニ中将姫の

旧跡宝物開帳、一人前八文。

夫より少し行て、有田川

舟ちん八文出し候。

一、宮原へ 一里半

同十六日晚

山形屋平蔵殿へ泊り、

旅籠代并当附百六十五文。

宿ハ悪し。

次ニかぶら坂上下五十丁

峠堂あり。弘法大師爪形

ちの地藏并ニ阿弥陀大石ニ

有なり。

一、加茂谷へ 一里半

同所ニ泊り宿あり。

次ニふじ白峠登り十二丁

峠地藏堂有。夫より少し

下りて、金岡が笹捨松并ニ

硯石といふ岩あり。

下り十八丁

藤白権現の社境内

ニ楠木あり。傍ニ鈴木

亀井の石塔有。東の方ニ

屋敷有。鈴木の子孫、今

も有と言なり。

此所迄熊野路と言なり。

一、藤白へ 一里半

此所、泊り宿多し。

町家広し。町末ニ

紀州椀名物有なり。

西国ニ番紀伊国

一、紀三井寺へ 一里半

堂ハ南向九間四面

本尊十一面観音なり。長三尺

紀三井山真言宗

寺領 金剛宝寺

二十石

其外参り所多し。

同九ツ時ニ参詣仕門前町

広し。富士屋次郎兵衛

方ニテ、昼食致し、同所より

和歌の浦へ船ニ乗り、

舟賃十三人ニテ百八十四文、

小勢ニテモ同じ。

舟道十八丁際ヲ廻

れバ一里なり。

一、和歌の浦へ 舟道十八丁

此所名所多し。

いもせの拝殿

玉津嵩明神

布引の松

塩がま

東照大権現

三重の塔并ニ

和歌天満宮

其外名所多し

和歌の浦より行て

五百羅くわん寺

秋葉山 次二

愛宕山あり。

其外、参り所多し。

次二根上り松、名木

多し。夫より行て

紀州様御家中多し。

左の方ニ御城あり。

御屋ぐら下迄少し

のよりなり。

御高五十五万石也。

和歌の浦より

一、若山 一里

同所町家広し。

町ヲ行て

加太、栗嶋へ行道有。

此所より加太へ 三里。

右へ橋ヲ渡り、本町

筋へ行。

粉川道

町出はづれニ惣門の

外ヲかけ作町と言宿

屋町なり。

此所迄和歌の浦より

二里半計りなり。

同所能宿ハなし。

本町二二、三軒能宿有。

一、八軒屋へ 一里

同所ニ泊り宿三軒あり。

少し町家なり。

夫より松並木行て

左の方へ川原下り

きの川あり。田井瀬渡し

舟賃八文出し候。

一、川那辺へ 一里

同所ニ泊り宿少しあり。

此所より根来道有。

一、西坂本へ 一里

同所ニ泊り宿二、三軒有。

此所より根来門前町也。

四、五丁行て石橋有。

坊舎四、五軒あり。

此所ニ山門建立の

普請はしめてあるなり。

三宝権現、次二

護摩堂あり。

根来秘密

伝法院 真言宗

新義

本尊不動明王

開山興教大師御廟

号覚鏝上人

其外諸堂多し。

又桜多し

庫裏へ参り願ひバ、

月牌 金二朱なり。

茶牌 金一朱なり。

次ニ二重の塔薬師如来

ハ三尊の弥陀堂

大キ成堂なり。

夫より少し下りて

六角堂、錐モミ不動明王

夫よりかけ越東坂本へ

出、西坂本より

此所迄十八丁なり。

次ニ長田観音寺

本尊如意輪観音

三重の塔あり。

同所より粉川へ

かけぬけ十八丁

東坂本より

一、粉川寺へ 百町

西国三番紀伊国

堂南向十五間四面

本尊千手観音長五尺

補陀路山天台宗

粉川寺

寺領百四十六石

同所諸堂参り所多し。

門前多し。

泊り宿多し。

同十七日晚

車屋文蔵殿へ泊り、

旅籠代弁当附

百七十二文。宿ハ悪し。

同十八日朝より大雪降り始る。

大難儀仕候。

一、麻生津へ 一里

此所、きの川麻生津渡し

大雪ニ付舟賃十二文出し

夫より 麻生津峠登り

二十八丁、峠ニ茶屋あり。

大雪積り大難儀仕候。

一、志賀へ 二里

同所、口ニ泊り宿一、二軒

あり。此間山路ニテ村はづ

れニ一軒有。

大雪降り大難儀ニ御座候。

一、花坂へ 一里

同所ニ茶屋四、五軒有。

此所へ大楽院より、迎の

案内出し置、酒肴ニテ

馳走致し、案内出し

私共ハ、大雪ニ付、すぐ道

致し、途中より案内者

追欠参り候て案内仕

同所より少し登り

弘法大師袈裟懸ノ石

次ニ山ヲ開候節火打石

同鏡石あり。

夫より行て下馬

所あり。同所より左へ

女人堂道、右へ大門道

なり。夫より行て

一、大門へ 五十丁

稀成大門北南へ 二十二間

西向なり

二重の家根赤かね瓦

高サ二十五間

仁王御長一丈八尺なり。

夫より七堂伽藍諸堂

多し。

大楽院へ 十八日九ツ時ニ

着致し、又案内相頼、夫より

そとは一本二百文

百文

四十八文 色々有。

御朱印二万千石なり。

高野山金剛峯寺

御本坊精嚴寺前ヲ

通り、奥院行、一ノ橋

渡り、左右ニ古跡の

石塔多し。

其外、諸大名大石塔

数不知。次ニあけち光秀石塔

われほんじ横ニあり。

二ノ橋渡り、左の方ニ、すがた

みの井戸有。

玉川向ニ蛇柳有。枯木なり。

当山開キ案内犬の石塔有。

こかへりに

わすれても

汲やしつらん

旅人の

高野のおくの

玉川の水

夫より行て

そとハ納メ所有。

次ニ、むミやうの橋渡り、

灯籠堂、常灯明なり。

長者の万灯

貧者の一灯 有。

同脇ニ日本中の骨納メ所堂

あり。

大雪あり。

一、奥院へ 五十丁

弘法大師御入定の所なり。

参詣致し候。

此所ニ弘法大師御廟所前ニ

松木葉柳の葉なり。是ハ

弘法大師下りし松と言なり。

夫より戻り道ニ木喰上人

十念光明真言大師真言

ヲ請。其外参り所多し。

山内不殘参詣致し

くわしく、事ハ中々

筆ニ尽がたし。夫より

大楽院様へ戻り、

同所町ニテしハ此所ニテ

求メてよし。一向かけ

直なし。

金堂ハ焼失ニテなし。

大楽院へ同十八日晚

泊り酒肴馳走ニ相成

坊人一人前四百文出し

月牌ヲ頼、色々札守ヲ請

月牌料 金一分なり。

御はんさい料四十八文。

同十九日 四ツ頃出立、

少々ツツ雪降り、夫より大雪ニ

相成大難儀仕候。

同所町中程過迄行

左へ橋ヲ渡り、夫より行

て女人堂あり。下り

不動坂、四寸岩大難所

此所ハ三足計り親の足跡

ふむ処なり。

此辺大雪降り大難儀仕候。

一、紙屋へ 五十丁

此所ニ高野山宿坊の

案内茶屋五、六軒、能宿

有。

右ハ 京道

左ハ 榎尾道なり。

夫より下りて 椎出村

次ニ、九度村森屋甚助

殿へ中食相頼一人前

同所、泊り宿も致スなり。

七十五文。

間ニ大川あり。橋なり。

一、慈尊院へ 二里

此所、弘法大師御母公の

御廟所拜殿二色々宝物

あり。二重の塔有。

次ニ 紀の川、舟渡し

永代無賃なり。

川ヲ上り左の方へ行

大野村、是より

榎尾山迄山路坂道難

所なり。不自由ニテ悪し

道ニテ夕方ハ早々泊り

テよし。

一、大畑へ 二里

此所、宿茶屋なし。

百姓宿頼てよし。

大畑峠へ紀伊

河内 国堺なり。

此所より三十六丁一里なり。

是より人家なし。

五十丁計り行、

百姓宿屋あり。

夫より峠下り悪しき

谷合二十丁計りあり。

夕方ハ悪しきなり。

夫より行て榎尾の

奥院あり。

一、瀧の畑へ 二里

同十九日晚 此所日暮ニおよび

無抛、百姓宿へ無心致候処、

関屋吉五郎殿大しん

ニハ候得共、木銭ニテ止宿

可致様被申候テ、無抛

木銭諸色代一人前

六十文出し、

白米一斗代

一貫百四十四文なり。

夕食朝食昼食共

右の通りニテ泊り、

私共、誠ニ難渋仕候。

諸色代一人前

百四十八文懸り。

西国四番和泉国

一、榎尾山へ 半里

本尊弥陀菩薩

同所当山寺中内不残

弘化二年巳ノ二月十四日ニ

焼失致候ニ付

飯家并休茶屋一軒有。

此所、当山坊舎宿致スなり。

弘法大師剃髪し給ふ所なり。

五番 葛井寺へすぐ道七里

私共ハ堺へ大坂へ行道ヲ

下り。

一、横山へ 五十丁

同所、泊り宿あり悪し。

村中二十間計りの板橋有。

次ニ宮崎村ノ池田村川有。

上野ヶ原といふ原あり。

此所畑中より信田森へ

左へわかれ道あり。

一里計り廻りなり。

夫より十八丁計り行て

信田ヶ原あり、少し

行て左の方土ひひ

有、内ニ渡辺丹後守様

御陣屋有。

御高一万三千石なり。

夫より、十五丁計り行

信田村出ルなり。

一、信田森村へ 二里

此辺より浜見ゆるなり。

同所、くづの葉稻荷大明神

浦ニ白狐旧社石宮有并ニ

石灯笼のしねん石有。

楠木千本枝有と言なり。

此間ニはぶ村休茶屋

一、二軒有。此所ニテ昼食

致し候。

一、大鳥へ 一里

同所ニ大鳥大明神

和泉国一ノ宮なり。

宿休茶屋あり。

此間ニ石津村ニ、十六間

の石橋あり。

一、堺へ 一里

此所撰津

河内 三ヶ国堺なり

和泉

同所、大船附町家

事の外広し。

河内屋友七殿ニ相休

案内ヲ頼、何人ニテも一組

百文。

住吉 宿院ヲ見物

同 奥院ヲ見物

次ニ 鏡天神へ参詣

御庭ニてうせんより下り

小西松ハさし梅

御朱印百二十石

次ニ 妙国寺

境内大そてつ日本一なり。

次ニ 菊一文字四郎金物

名物多分あり

きれ物ハ求べからず。

次ニ 鉄同町、夫より大和橋

板橋百間計りなり。

夫より行て 右の方ニ

なにわやの松、稀成

名木なり。

凡十二、三軒四方一本なり。

上二四、五軒四方松一本有。

此茶の浦ニあり。

茶ヲ出し、餅一ぼん出し、

高し。

次ニ

住吉本社四社大明神

社領二千石余

北門ヲ出 嶋津延(誕) 生石

神宮寺

大海神

奥天神

きしの姫松

次ニ 天下茶屋村ニ

茶店有。

名物和中敷有。

是より大坂入口。

一、大坂へ 二里

入口長町宿多し。

中程より北宿よし。

同二十日晚 定宿

平野屋佐吉殿へ泊り。

同二十一日 早朝より道頓堀筑

後芝居見物仕候。

芸代げけいせい桃山

錦四段目大和橋

馬切の段、三七、信高

中村志かん罷出相勤

申候。座本市川助太郎

小西が色好、加藤

軍術ぐんじゆつ 二十一日夜五ツ頃迄狂言

見物仕、土坪十三人ニテ

同坪四坪買切銀五十

六匁、小ふとん一枚三十文

昼食代百三十文、外に諸色

一人前百文懸りなり。

夫より右宿へ戻り、

同二十一日晚泊り

同二十二早朝より 宿番当殿

案内ニ相頼、何人ニテも一組

二百文出し、夫より罷出

綿安橋渡り、東堀

末吉橋渡り、次ニ

御城下へ出、石垣拾一丈
五尺内水中へ五、六丈入と言
右石垣、鉄、赤かね、なまり
ニテ石垣ヲつなぎ候と言なり。
次ニ表御門戸びら、なん
ばん鉄ニテは切、夫より
京橋御門同断なり。
次ニ天満橋六尺五寸間
百十五間の板橋渡り、
天満町一里余と言なり。
夫より 天神宮へ参詣
致し、夫より 淀川天神橋
六尺五寸間百二十五間の
板橋渡り、次ニから来橋
ハ五十間計りなり。夫より
江戸出店岩城舁屋
同越後屋、其外呉服
店多分あり。
次ニかうの池大家一丁
四方の内店かねかし
の家計りなり。
次ニ高麗橋三丁目
虎屋まんぢう稀成
大問屋名物一ツ
五文、高し。次ニ

西門跡二十間四面なり、
是ハ大閣様御建立なり。
同前々播摩屋市蔵
殿ニテ風呂敷買求メ
随分かくかうニ付且又
京都も直段同様くらへ
ニ御座候。夫より
東門跡十九間四面なり、
是ハ家康公様御建立なり。
裏門へ行ぬけ此門ハ
みかげ石の門なり。上筑山
杯有なり。
夫より行て、座摩神社
ニ金灯籠多し。
次ニ新渡辺橋并ニ
日しやく堀、次ニ
高う里橋渡り、
夫より遊女新町入口
五、六丁の内ハわるがし
と言所ニテ夜ハ心附通る
べし。
次ニ新町大見せ通り
九軒町。是ハ日本一の
揚屋と言。前ニ八重桜
多分あり。此所ニ

はしやうの古歌あり。
たまされてきて
誠なり
八重桜
又新町越後町此所ハ
遊女太夫と申六十九匁と言
美女なり。大見世四通り
ニ相分り大見世小見世
共八、九百軒と言なり。
同所遊女ハ金二朱より
十二匁金一分、夫より
六十九匁迄有なり
此所買べからず。
高し悪しなり。
夫よりすな場蕎麦
名物有、是ハ高し悪し。
次ニ淀川日本一大湊
大船数不知、次ニ高橋渡り
南詰メ、次ニ土佐守様
御高二四万石御陣屋城有。
次ニ長堀通り十丁計り
石屋計り有なり。
夫より行、阿弥陀ヶ池
善光寺如来池中ニ
九尺四面計り御堂有。

池廻り石の九いん有。

同所ニ休茶屋茶漬

麦喰蕎麦酒肴

其外色々安し。

此茶ニ相休申候。

次ニ四ツ橋二十間計り

の橋四方ニ四ツ有。そ

れゆへ四ツ橋と言なり。此処

きせる名物あり。

夫より新さへ町出、次ニ

高岡町行、堺筋

長堀橋南詰

平野屋佐吉殿へ

戻り、昼食へ遣、諸品

取集こりヲ買求候テ

同宿相頼

江州米原迄荷物

うん賃凡二十計り

一貫目長百文懸りなり。

八ツ過より平野やヲ罷立、

上大和橋渡り、次ニ

高津の宮へ少し登り、

同所ニ末社多し。

かね灯笼多し。

夫より少し行、生玉

神社并ニ新清水

次ニ荒陸山四天王寺

西門より入て元三大師

参詣仕、夫より

七堂伽藍 并ニ

聖徳太子御建立

五重の塔へ上り、一人前

十六文なり。諸堂多し。

三門の上ニ二つゞれの錦

ヲ七十三才の老男

唐人のすかたヲおり

候ヲ見物、代十三人前八文。

次ニ撰津

河内 国堺なり。

上大和橋より。

一、平野へ 二里

同二十二晩

同所、長原屋安兵衛殿

へ泊り、旅籠代弁当附

二百文。宿ハ悪し。

同所、大念仏大寺なり。

融通念宗の本山なり。

次ニ川辺村泊り。宿

休茶や少し有。次ニ

大和川百五十間の

板橋なり。橋銭六文出し候。

西国五番河内国

一、葛井寺へ 五十丁道 二里

寺領五石なり。真言宗

本堂五間四面南向

本尊千手観音

長五尺二寸

同所ニ泊り宿茶屋有。

此所より右ハ壺坂へ七里

左ハ道明寺少し廻りなり。

一、道明寺へ 十八丁

此所、天満宮参詣仕

道明寺本元なり。

次ニ營田八幡宮并ニ

應神天皇の御廟所

あり。

一、古市へ 一里半

同所、出口ニ大川あり。

橋銭二文出し、夫より

右の方へ土手へ十丁

計り行、大黒村

大黒天、日本第一と言なり。

次ニ壺井権現、次ニ八幡

参り、大木成楠あり。

石段下りて右の方ニ

壺井の井戸あり。

次ニ通法寺源家の菩提所なり。

源頼義公の墓有。

東の山ニ義家公并ニ茂信公の墓あり。

一、上太子へ 五十一丁

此所ニ聖徳太子御母、

間人皇后、太子妃三人の

御廟所一ツに納む。ゆゑニ

三骨一廟と号す。其外

諸堂多し。是より

南山ニ葛城かつらぎ金剛山

千早、観心寺、古砦つ、

きなり。

次ニ上ノ太子春日村ニ

泊り宿あり。同所舛や

藤右衛門方ニテ昼食遣。

一、山田へ 十丁

同所より十五丁行。竹の内

峠ニ河内

大和 国堺なり。

同所より左の方へ細道

山坂難所なり。岩屋峠

と言。又山路下りて辻堂

有。柱一本ニテ傘の如し。

わく石あり。此所より

左の方へ下り行テ

染井寺 中那姫蓮

の糸ヲ染井戸ニテ右の

蓮の糸染候得バ五色ニ

染わがりそばニ糸

掛桜有。夫よりすぐ

下り行、たいま北門へ

出なり。

一、當麻寺へ 一里

同寺本尊、観世音なり。

真言

浄土 兼学なり。

寺領三百石なり。

当山藕絲浄土曼陀

羅、中那(将) 姫十七歳

剃髮仕、右曼陀羅ヲ

一丈五尺四方九尺ニテ

中那(将) 姫織并ニ阿弥陀如来

相手ヲ致二時の内ニ右

曼陀羅織切候と言。

大和

河内 三ヶ国蓮の

泉 糸ヲ取織と言なり。

次ニ髪洗井戸あり。

三重の塔ニヶ所有。

諸堂多し。

私共ハ一組百二十文ニテ

曼陀羅并ニ三ヶ所

開帳致し、外ニめうが

銭一人前六文出し。

門前ニ泊り宿多し。

一、新座(庄)へ 一里

同所ニ泊り宿休処有。

一、御所へ 一里

同宿、休所あり。

此所ニ茅原村ニ役行者

御誕生の所寺ニ有。

一、土佐へ 一里半

同二十三日晚

同所、田中屋惣兵衛

殿へ泊り、旅籠代

弁当附百七十二文

宿中。

東ノ高根ニ二万五千石

植村出羽守様

御城有なり。

一、壺坂へ 十八丁

此所、本堂八間四面

八角辰巳向なり。

本尊尊十一面観音

同所より奥院へ六町

山上岩二千鉢仏

羅かんの像ヲ彫付

有之、難有所なり。

三重の塔有。此所ニ

休茶屋一軒あり。

左の方へ吉野屋

登り少し難所なり。

奥院より行ぬけなり。

越部へ下りなり。

一、越部へ 一里半

同所ニ休茶屋少し有。

前田半次郎、太郎仁助

根元有。泊り宿もあり。

間ニ吉野川、六ツ田渡し

舟賃八文出し、此渡し

道ぢんよし。

一、六ツ田へ 一里

此所ニ立灯籠一本有。

宿休茶屋少しあり。

同所より吉野迄

五十丁登り始り、少し

坂道なり。左右ニ山桜多

し。間ニ

一ノ行場一ノ蔵王有。

次ニ二ノ行場日本三鉢

薬師如来なり。

夫より行、三十丁目より

三十三丁目、此辺八千本

桜と言所なり。次ニ

入口七まがりの上ニ

秀頼公御建立の板橋

らんかんぎぼしニ切付

あるなり。次ニ少しの宿や

町かけつくりの泊り宿

多し。夫より少し

石段登り、

から金の鳥居

高サ二十二丈五尺

廻り一丈一尺

吉野山金峯山寺 寺中百軒余

寺領千石なり。

一、吉野へ 五十丁

仁王門北向あり。次ニ

御堂高サ十一丈二尺

十八間四面なり。南向

柱数七十二本の内

一丈余廻りつゝ、ちの木

柱一本有。次ニ

本尊蔵王権現

御長二丈六尺なり。

脇立役の行者長二丈四尺なり。

同不動尊長二丈二尺なり。

其外諸堂多し。

旧跡なり。案内ヲ頼、一人前ニ文

出し、次ニ少し行、右の方ニ

いてん山と言有。夫より行

吉水院へ少し下り

同所ニ義経の箭竹并ニ

駒つなぎ松木有。岩ニ駒

の足跡有。弁慶力釘

石へつうしてあるなり。

義経の居間、弁慶

のしあんの座鋪と言

所有。此所たら仁助

根元有事の分高し。

此寺ニ諸宝物開帳

一人前めうが銭六文ツツなり。

夫より右の道板橋迄

戻るなり。夫より右の方へ

坂路下るなり

一、いひがゐへ 五十丁

同所ニ休茶屋あり。

間ニ吉野川桜渡し、

舟賃八文出し、

川下二いも山せ山

見ゆるなり。

一、上市へ 二丁

同所ニ泊り宿よし。

此所ニテ昼食致し候。

一、ちまたへ 十六丁

同所より少し行て

右ハ多武の峯道なり。

左ハ岡寺へすぐ道三里

同所より外端峠なり。

一、瀧ノ畑へ 二十五丁

同所、泊り宿有。坂道難所なり。

一、瀧ノ畑分 一五、六丁

まどハ峠ニ、泊り宿三、四軒有。

一、四軒茶屋へ 二十四丁

同所ニ能泊り宿あり。

一、多武峯へ 十一丁

此所、惣門外ニ休茶や二軒

あり。同所へ荷物置参詣

ニ参り。

当山ハ女人きんせいなり、惣門の

外ニ女人道有。

当山本尊薬師如来

本社大職冠鎌足公の神靈

を祭るなり。其外諸堂

多し。十三重の塔有。

庭ニ菴羅樹、此みハ

きんり様

九方様 献上奉と言なり。

寺院四十二ヶ寺

寺領三千石なり。

右の茶屋へ戻るなり。

此所ニ少し休、餅安し。

夫より少し行て

左の方へ下りなり。

西国七番大和国

一、岡寺へ 五十丁

本堂南向五間四面なり。

本尊如意輪観音

寺領二十石なり。

真言宗龍蓋寺

門前ニ泊り宿五、六軒

あり。

一、あすかへ 八丁

同所ニ泊り宿あり。

飛鳥太神宮

并、八十末社あり。

夫より行て

天の角山あり。

一、阿部へ 一里

同所ニ日本三文殊あり。

休茶やあり、宿も致スなり。

一、桜井へ 十五丁

同所、町家長し。能泊り

宿多し。

一、追分へ 十八丁

同二十四日晚

同所、角屋十次郎殿へ

泊り、旅籠代弁当附

百五十六文。

同所中程ニ菊一文殊刀

鍛冶、名物有。何ニテも

求メべからず。

此所宿へ荷物置、

長谷寺へ参詣ニ参り。

一、黒崎へ 八丁

同所ニ夫婦まんちう名物

二ツ四文、安し。

西国八番目大和国

一、長谷寺へ 三十四丁

同所、門前入口ニ鳥居焼失二付

なし。町家長し。

能泊り宿、多分あり。

夫より

仁王門回廊、四十二間。

中同、十五間。上同、十八間なり。

本堂迄ツヅキなり。寺領三百石なり。

七間四面南向

本尊十一面觀世音

長二丈六尺なり。其外諸堂

参り所多し。

ぶたいあり。西方二

三重の塔あり。

同所より奈良南円堂へ

すぐハ七里龍田へ

廻りバ十里。

一、追分へ 戻りなり。

右、荷物請取出立。

一、金谷へ 半里

同所より細道右の方へ入

三輪明神、近道あり。

夫より行、浦二鳥居三ツ

あり。

本社ハ山なり。参詣致し

夫より三輪宿へ出ルなり。

一、三輪へ 半里

同所、泊り宿よし。

此所そうめん名物なり。

同龍田法隆寺へ廻り。

左へ行。

一、田原本へ 一里

此所、宿休茶屋あり。

同平野権平殿御在所なり。

御高五千石なり。

次ニ小川二、三度渡り、

細道なり。夫より行なり。

一、龍田へ 三里

同所、龍田大明神へ

参り、門前町泊り宿

よし。昼食仕候。

一、法隆寺 八丁

此所、八丁四方三十四ヶ

所の参りなり。

本堂并ニ諸堂大伽藍なり。

峯の薬師納物多し。

五重の塔あり、旧跡なり。

一、小泉へ 三十丁

此所、片桐石見守様

居城あり。

御高一万石余なり。

同所ニ泊り宿よし。

一、郡山へ 一里

此所

松平甲斐守様

御城有。

御高十五万石なり。

町家広し。

一、西ノ京へ 十二丁

同所寺あり。

本尊薬師如来

赤銅作りなり。

脇立日光様あり。

須弥段めのう石の敷石なり。

同所よりかけぬけなり。

一、唐招提寺へ 十丁

同所、七堂伽藍旧跡なり。

須弥段其上ヲ廻りテ

十二銅づゝなり。

一、菅原天神へ 十丁

此所、菅相烝御誕生

の所なり。

同所、休茶あり。

一、西大寺へ 十丁

本尊釈迦如来

愛染堂、本堂の西有。

観音堂、本堂の東二有。

一、法花寺へ 十丁

此所、律宗の尼寺ニテ

古跡なり。

一、不退寺へ 十三丁

同所、在原の業平の古旧なり。

一、南都へ 十五丁

此所、入口元興寺

五重の塔あり。

夫より行、

猿沢の池下三條通り

樽井町小刀屋善助

方へ泊り、旅籠代

弁当附二百文。宿ハ上々。

同人番当殿、案内ニ相頼、

一組八十八文なり。夫より罷

立猿沢の池ニ鯉多し。

池端ニきぬかけの柳

采女宮御前の娘此池へ入なり。

餘りおそろしき故

鳥居あとニあるなり。

南部の都の八重桜

名木今ハ枯て苗木なり。

次ニかさゝぎの橋渡り、

菩提院大御堂前ニ

石こつめの塚有。鹿ヲ殺

候つみニテ右のせいばい被致候なり。

次ニ大仏殿御堂

間口三十二間、奥行

二十八間なり。高二十六丈なり。

大仏御長五丈三尺五寸

有と言なり。

回廊百間ニ九十間なり。

前ニ金の大立灯籠

あり。

丸柱六十四本廻り一丈

四尺五寸なり。

是ハ日本一大仏なり。

東大寺

次ニ大釣鐘つりかねさしわたし

九尺一寸三分

波八寸三分高サ一丈

三尺、廻り二丈八尺なり。

金七分から金三分

貫目四万八千九百

貫目あると言なり。

次ニ四月堂

次ニ三月堂

次ニ二月堂

此所かねの灯籠あり。

じんこうこうぐう着し

よろへかぶと入置候処有。

次ニせいろ堂ニハ、

御朱印二万五千石、

外に鹿扶持米五百石。

次ニ春日四社。

前々左の方ニ、三代將軍

家光公様納しやくとう

の立灯籠有。其外

石灯籠并ニ金灯籠

数不知。右灯籠預り

世話仕候者八百八人

ニテ前夜油三斗六升

宛とぼすと言なり。

御供米一度ニ一石二斗

ツツ日三度都合三石六斗

ツツ満るなり。それヲさけ鹿の

扶持ニ致スと言なり。

回廊三十八間四面なり。

次ニ春日若宮へ參詣仕、

次ニ日本三天大黒天有。

次ニ大仏四ツ大門有。

かげきよ門

なんだへ門

東ノ門

西ノ門

次ニ御用

三條古鍛冶宗近名作

有、次二興福寺一丁

四方なり。同じき堂あり。

五重の塔有。

弘法大師御手植の松

凡千年余二なるなり。

松枝三十六間四方

八方出ルなり。

西国九番大和国

一、南円堂八角なり。

本尊ふくうけん作觀世音

若宮八幡の裏山ヲ手むけ山と

言なり。次二、三笠山の下二

川の細工名物品々有也、

かんしうぢう越懸ヶ石あり。

鹿の数不知なり。

同所二若宮八幡前当り

二白しうぞくの社人

案内人と同服ニテ御こう

り頂載致せ坏と戸ヲメ

色々と申せめるなり。

此所へハ御心附入べからず。

同所、遊女も高し。

同少し行、坂あり。

大和

山城 国境なり。

一、木津へ 五十丁

同所二泊り宿よし。

間二大和きの川、

舟賃十二文出し候。

一、玉水へ 二里

同泊り宿あり。

此間二なし嶋村二右の方

畑中二梅木多し。

一、長池へ 一里半

同 泊り宿あり。

一、しんでんへ 一里

同泊り宿あり。

此所より右へ行、

此町入口本町通り御茶所有。

かたぎや与平次、茶四、五はい御馳走

ニ相成。

一、宇治へ 半里

同所ニテ茶御求メ可被成候。

御茶献上五百石頂戴六郎殿

同三百石頂戴又兵衛殿

兩人きんり様

九方様 御献上御茶なり。

同所、平等院当寺ニ

源三位頼政の武具あり。

鳳凰堂屋根ノ上二鳥二ツ

あり。釣殿の観音右

平等院内なり。

扇の芝頼政自殺せし

所なり。次駒つなぎ松有。

此辺十帖の古跡あり。

川中二浮駕の塔台石計り

あり。次二宇治橋長サ

九十一間計りの板橋なり。

詰二橋姫明神宮橋下二

棋の寫と言有なり。

西国十番山城国

一、三宝寺へ 十三丁

本堂南向八間四面、本尊ん不檀金

千手観世音長一尺二寸

解説者註 ん不檀金：エンブダゴン

門前二泊り宿二、三軒、悪し。

次二黄辟山万福寺

稀成大伽藍なり。

寺領四百石禅宗の本山

寺院三十ヶ寺有と言なり。

一、黄辟山へ 十八丁

同所ニも悪し泊り宿一、二軒

あり。

一、六地藏へ 十八丁

同泊り宿あり。少しハ

能宿もあり。

一、下ノ醍醐へ 半里

同所二十六日晚、扇屋

傳左衛門殿へ泊り、旅籠

代弁当附百六十五文。宿中。

下醍醐ニ諸堂多し。

五重の塔あり。古旧なり。

同所より二丁計り行、女人堂有。

夫より登り難所なり。山坂三十計りなり。

同所より岩間寺迄ハ泊り宿

なし。尤岩間寺ニも悪し宿

一軒あり。外なし。

西国十一番山城国

一、上醍醐寺へ 一里

本堂南向九間四面

本尊準提觀音長五尺

寺領三千石と言なり。

同所女人きんせいなり。

寺院多し。

御堂より少し登りて

五大明王、次ニ理源大師

夫より下り二十五丁

次ニ笠取峠上下四十丁

同所ニ宿茶屋一切なし。

次ニ東笠取村、此所より

岩間寺へ八丁四丁登り

て、山城

近江 国境なり。

西国十二番近江国

一、岩間寺へ 七十丁

本堂南向三間二六間なり。

本尊千手觀音、長四寸三分

寺領三十五石

同所ニ悪し泊り宿一軒

あり。外なし。

同所より少し下りて北の方ニ

水海見ゆるなり。

西国十三番近江国

一、石山寺へ 五十丁

堂南向八間四面、本尊

如意輪觀音長一丈六尺

当寺ニ紫式部源氏の間

同物語りを書し所硯石

あり。并ニ名石多し。

二重の塔あり。龍宮より上り

し功德成仏の鐘男女共

信心してつくべし。

同所ハ近江八景、石山秋の月

名所なり。

仁王門より一丁計り敷石

石段迄あるなり。

門前町、泊り宿あり。少し

行て、左の方ニ、能泊り

宿三、四軒あり。

夫より勢田川辺通り。

一、勢田へ 十八丁

橋前ニ勢田山口鳥川ニ泊り

宿あり。

橋向、勢田町、泊り宿

能宿あり。

三十六間板橋 次ニ

九十六間板橋

右板懸ケ替ニ付、出来仕

御見分不相濟候ニ付、無賃ニテ

舟渡し候なり。

同所より東方二百足山見ゆる。

同戌亥方ニ膳所御城

本多下総守様

御高六万石なり

一、草津へ 二里

同所、能町家なり。町入口

左の方姥餅名物なり。

町出口右ハ東海道

左中仙道 道なり。

一、守山へ 一里半

同泊り宿、能宿多し。

次二大川有。板橋銭十文

出し候。

一、安村へ 一里

同茶屋有。宿なし。

一、鏡へ 一里

同泊り宿八百姓宿同様ニテ、

悪し。

間二川あり。橋銭六文出し候。

一、武佐へ 二里半

同所二十七日晩

近江屋喜十郎殿へ

泊り、旅籠代弁当附

百六十四文。同所より

三十丁余行、石杭

立あり。此所より田中細道

入観音寺道左の方

へ行。

同三十二番近江国

一、観音寺へ 一里十二丁

堂南向五間四面茅ぶきなり。

本尊千手観音長三尺

寺院一ヶ寺あり。

同所より右へ行、佐々木の城

跡あり。薬師堂へ八丁下りなり。

此間二佐々木明神社。夫より

かけぬけ少し行て、

浄厳院浄土宗なり。安土

宗論の有し大寺なり。

一、八幡町へ 二里

同町数六十六丁二相分り、

家数三千軒有と言なり。

同能町家なり。泊り宿

能相尋候得ハ能泊り

宿あり。

八幡宮へ参詣致し候。

西国三十一番近江国

一、長命寺へ 一里半

堂南向七間四面本尊

正観音長三尺、寺院五寺

六丁計り登り

三重の塔あり。諸堂参り所

多し。

寺領百石

夫より門前へ下り泊り宿

茶や少しあり。同所ニテ

中食遣、藤屋平吉殿

舟二乗り十三人ニテ五百文

ニテ酒代なし。榎村上り

舟道一里計り、夫より

田中村へ六丁計り行出ルなり。

舟きらいの板八幡町

へ戻るなり。夫より安村へ

出ルなり。

同所八舟多分あるなり。

同大津迄舟道八里

十人乗一艘金

一分位なり。此所舟二乗

べからず。

一、榎村へ 舟道一里

同宿茶屋一切なし。

一、田中へ 六丁

同宿茶屋なし。

一、二保へ 十二丁

同所、泊り宿茶やあり。

一、安村へ 二里

前同断なり。右の道へ廻り出なり。

間二右大川あり。

一、森山へ 一里

同同断なり。

一、草津へ 一里半

同同断なり。

一、勢田へ 二里

同同断なり。

橋前同断ニテ無賃

船渡し。

同大津迄船もあるなり。

一、鳥居川へ 川ひとひ

同所勢田の石山口と言所なり。

同二十八日晚

同松屋清左衛門殿へ泊り、

旅籠代弁当附

百七十二文。

同所より少し行て、

膳所御城

本多下総守様

御高六万石なり。

御城下町長し。

右御城ヲ廻りなり。

一、大津へ 一里半

同所、入口石場、かぎ屋と言

茶屋の前ニ呼次名松あり。

町家結構成町なり。つき当りより

右へ行なり。

西国十四番近江国

一、三井寺へ 五、六丁

堂南向十間四面

本尊如意輪観音長五尺三寸

寺領、五百石なり。

同二丁行、奥院諸堂多し。

景地なり。

同所より二丁半、下りて

弁慶引つり鐘あり。

此所ハ女人きんせいなり。

寺院多し。

一、唐崎一本松へ 一里半

此松一本葉名木なり。同所ニ

休茶屋三、四軒あり。

一、東坂本へ 十八丁

同所より、北国陸道なり。

同宿茶屋少しあり。

同所より左へ行

一、西坂本へ 行なり

同所ニ泊り宿茶屋あり。

是より坂道難所なり。

少し登りて

東照宮御玉家へ参詣。

石段下りて大寺あり。

又少し下りて稀成

大石橋渡り、門ヲ入

案内人少し銭ヲ出し

候得ハ、案内仕、夫より

行て、山王権現三社、

次ニ七社并ニ末社多し。

夫より登り。

山城国なり

一、比叡山へ 五十丁

根本中堂回廊附、次ニ

講堂大日如来、次ニ

薬師如来、同所ハ大雪あり。

戒壇堂釈迦如来、

何れも大伽藍なり。

次ニ茶屋一軒あり。

此所ニ休荷物ヲ置、夫より

伝教大師御廟所へ参詣

次に弁慶かじ水あり

弁慶になへ堂あり。次ニ

松龍寺より少し行て

右の方へ登り

惣輪塔なり。夫より

少し下りて黒谷

元三大師御廟所なり。

当山天台宗唐(庵か?)しより

うつされ本山なり。

寺院百軒と言なり。

寺領五千石なり。

夫より下りて三里半の間

坂道大難所なり。

一、八瀬へ 五十丁

同所ハ、泊り宿、少しあり。

宿ハ悪しきなり。

一、大原へ 五十丁

同所、泊り宿ハ百姓宿なり。

一、鞍馬へ 一里

門前ニ茶屋泊り宿、少しあり。

仁王門、夫より寺町少し有。

本堂焼失ニ付

毘沙門天、只今以仮堂なり。

此所ニ義経

弁慶 大刀

魔王僧正 宝物開帳、一人前六文

次ニ本堂焼跡なり。少し上り

牛若丸

せいくらべの石あり。

僧正が谷牛若丸劍術

手練の所なり。

石ニ刀切付あり。夫より

下り難所なり。

一、貴布祢へ 三十丁

同所、川ヲ渡り、右へ行

貴布祢大明神

夫より返り、次ニ市原村ニ

小野小町の寺あり。

一、上加茂へ 一里半

同所、加茂大明神末社

あり。門前ニ、茶屋あり。

此所より左へ行、みぞろ

が池行、次ニ下加茂、此所

大社なり。御祖皇太神宮

末社多し。夫より

京都寺町通り出ルなり。

一、京都へ 二里

同二十九日晚

同六角堂前

筑前屋治郎左衛門殿へ

泊り、案内人相頼、二百文出し候。

西国十八番山城国

一、六角堂 京

堂南向六角堂、本尊如意輪

観音、長一寸八分

参り所多し。

夫より東洞院通り御池上り、

太丸本店相横の場所通り

次ニ禁裏の御門入東洞院

高塚東関白様、次ニ西ハ

九條様、次に西方ほう

おう様御ひひの内屋敷計り

なり、次ニせんとうの御所東方

次ニ禁裏御殿南向

家根ハひわたぶきなり。

次ニ御ないし所并ニ

常の御殿なり。

御四姓殿間ニ右こんの橋

左こんの桜有

夫より御朝日の御門

天とうさま御迎ひ御門ひわた

ぶき東向なり。

次ニ東方白川殿様へ

参り、一人前三十六文出し、

御かわらけへ御神酒并ニ

年越しの大豆御札一枚

三品頂戴致し、其外

色々かん位二百疋位ニテ稻荷

かんハ出ルなり。

次ニ

西国十九番山城国

一、革堂 京

堂西向五間四面

本尊千手観音長八尺

寺領二十石

夫より加茂川、土橋銭二文出し候。

東山吉田様御殿、次ニ

吉田日本國中八百万神

参り前ニ茶やあり。此所ニ休、

夫より真如堂三十塔あり。

参り所多し。次ニ黒谷

三十の塔の内文殊菩薩

是ハ日本三鉢の内なり。

其外参り多し。

次ニ光明寺庭ニ熊谷殿

よろひ掛ケ松名木なり。

次ニ明知(智)光秀首塚あり。

同知恩院間口二十八間奥行

二十五間家根ニふしぎの傘

あり。前ヲ少し登りて

日本一の釣鐘あり。右寺

三門二重の家根大門なり。

次ニやさかの五重の塔有。

夫より少し行て

吉野屋ニテ昼食仕、

一人前百文ツツなり。

西国十六番山城国

一、清水寺 京

堂南向十七間四面

本尊千手観音長八尺

此所清水ぶたと言あるなり。

下ニ音羽の瀧あり。

諸堂多し。

三重の塔あり。次ニ

もんと宗国々人

石塔不数知。次ニ大仏

宮様御城下ヲ通り、

夫より十五、六丁行。

同十五番山城国

一、今熊野 京

堂南向七間四面

本尊十一面観音長一丈五尺

白川様御願所なり。

夫より十五、六丁戻り。

三十三間堂是ハ二間ニテ

六十六間堂なり。内ハ観音

不数知。次ニ日本二番の

釣鐘、次ニ大仏堂焼跡なり。

同十七番山城国

一、六波羅堂 京

堂東向八間四面

本尊十一面観音長一丈

夫より東門跡四十間

四面と言なり。

本尊前一間百五十四丈敷なり。

左右四間九十九敷敷なり。

夫より遊女町寫原、美女高し。

祇園町、今ハ相休居候ニ付、

京都名所多し。筆尽し

がたし。能案内取、見物仕

べし。同所より荷物

江州前原迄筑前屋

次郎左衛門殿より相廻し、

一貫目長百文の積り

ニテ相廻し、夫より

筑前屋治郎左衛門殿へ

二夜泊り、旅籠代四百文。

二月朔日四ツ半頃出立、夫より

二條様御城下ヲ通り、十八丁

計り行、北野天満宮

大社なり。社領六百石。

次ニ平野明神、夫より行

ぬけ明心寺へ参り、次ニ

御宝御所へ参り、此所ニ

五重の塔あり。

此間茶屋ニテ昼食致し、

夫より大雨ニテ難儀致し

嵯峨积迦堂大寺なり。

一、清涼寺へ 二里

寺領百石

門前ニ、泊り宿、五、六軒あり。

次ニ二尊院此辺かみそりど

名物なり。硯石其外小硯多

分あり。夫より十二丁行、

一の鳥居あり。茶屋一軒

有。次ニ心見の坂登り下り

十二丁行

一、清瀧きよたきへ 二十四丁

同朔日晚

同舛屋清助方へ泊り、上。

旅籠代弁当附

百六十四文。

此所ニ泊り、宿十軒計り

あり。同所より山坂難所なり。

一町目二ハ、泊り宿

愛宕迄宿ハあり。

一、愛宕山へ 三十八丁

奥院勝軍地蔵

太郎防大権現

此所宿坊国郡ニテ分り、

同所ニテ京都、大坂

龜山御城見ゆるなり。

石段下りて左へあなう

道、龜山道、下りなり。

夫より保津村迄下り

此間ニ

山城

丹波 国境なり。

保津川舟賃八文出し候。

一、龜山へ 三里

同所

松平紀伊守様

御高五万石御城なり。

町家泊り宿能所なり。

西国三十一番丹波国

一、穴太寺へ 二十丁

堂八間四面本尊正観音

長三尺

此所悪し茶屋あり。

宿ハなし。むしんすれバ

百姓宿同様の宿なり。

同所より二丁計り戻り、

右の方へ細道ヲ行、

少しハ、はやくも昼食

致べし。泊り宿并ニ

茶屋なし。山道ニテ

甚難儀道なり。此間四里

余り、間ニ茶や宿一切なし。

一、との畑へ 三里

同所、茶屋一軒あり、悪し。

泊り宿一切なし。

此間ニ

丹波

山城 国境なり。

坂道三、四丁下りて

観音へ出ルなり。

西国二十番山城国

一、善峯寺へ 一里半

堂東向五間二七間

本尊千手観音長八尺

寺領二百石

少し上ニ六角堂并ニ

二重の塔あり。此所ニ

凡左右へ二十間計り

はい行、五葉の名松あり。

同京都淀 稲葉丹後守様

御城一目ニ見ゆるなり。

同所より下りて悪しき

宿一、二軒あり。

一、あおへ 一里

同所ニ悪しき宿一軒

あり。同所より左の方へ

稲葉丹後守様

御高十万三千石御城

見ゆるなり。

此所山崎たから寺より

やわたへ廻り、行ぬけニテ

一里余廻りなり。

右ハ山崎町行、惣持寺へ

すぐハ二里半

一、山崎へ 一里半

同泊り宿能宿も一、二軒あり。

同宿より前より左の方へ

二、三丁行 狐川

渡し舟賃十六文出し

夫より少し行て、

八幡宮領地なり。夫より

東門へ出。

御本社

一、正八幡宮 二十丁

二十五間四面大社なり。

同所、門前大町家なり。

鳥居前

同二日晚 ちとせや弥兵衛殿へ

泊り、旅籠代弁当附

百八十文。

此所より御本社迄八丁登り

護国寺薬師如来

社領七千七百石

石灯籠多分あり。

五間四面二重の塔二ツ

あり。同所参り所多し。

寺院多し。

西鳥居へ下り

一、橋本へ 十六丁

此所、山城国なり。

八幡宮領地なり。

同所、泊り宿能町なり。

遊女もあるなり。

橋本渡し右淀川なり。

舟賃十六文出し

川ヲ上り撰津国なり。

一、桜井へ 是迄一里余廻りなり。

同所、大道出合茶屋あり。

此間左の方二

永井遠江守様

御高三万六千石

御城下町高つき町家

一、芥川へ 橋本より二里

同所、泊り宿能宿多分

あり。

同所より左の方へ

右永井様御城なり。

二十二ばん

同二十二番 津の国

一、惣持寺へ 一里

堂南向五間四面

本尊千手観音長三尺

同所、泊り宿ハ悪し。

一、郡山へ 一里

同所、泊り宿多分あり。

同二十三番 撰津国

一、勝尾寺へ 一里半

常南向七間四面

本尊千手観音長八尺

御門脇二泊り宿一軒有。

同所より中山寺へ行口に

茶屋泊り宿も致す一軒あり。

一、みのをへ 五十丁

此間少し間大難場あり。

下二みのを大瀧あり。此所二

不動堂役行者修行

の所なり。同所より十八丁計り

行、みのをを寺あり。

一、弁才天社 大社なり。

同所、行者堂其外参り所

多し。夫より十丁計り

行、平尾村此所、京

大坂中山池田道出合なり。

此間左の方へ、大坂見ゆるなり。

みのをを寺より

一、池田へ 一里

同所、池田諸白名酒有。

左の方へ伊丹宿見ゆる。

同所ニテ酒造蔵四、五十軒

あると言なり。

名酒格別高し。

町出口ニ六十軒計りの板橋有。

同二十四番 撰津国

一、中山寺へ 一里半

堂南向五間二七間

本尊十一面観音、長五尺五寸

諸堂多し。

泊り宿多分あり。

此寺ニ御守仏んま大王の

證文寺ニ有と言なり。

一、小浜へ 十二丁

同所能泊り宿多分あり。

此間ニ大川あり。橋銭三文出し候。

同日七ツ頃より雨天ニテ難儀仕候。

一、西宮へ 二里二十四丁

同三日晩

同京屋多兵衛殿へ

泊り、宿悪し。

旅籠代弁当附百六十四文。

町家広し、遊女もある

浜辺船附場所なり。

西宮太神宮 社領八十石

門前ニ能宿四、五軒有。

此辺造酒蔵多し。

同日大雨ニ付、難儀仕候。

一、いばら住吉へ 二里八丁

同所住吉大神宮有。少しの

町家なり。宿茶や少し

あり。

一、上野へ 五十丁

同所ニ茶や三軒、宿も

致スなり。

是より摩耶山へ

十八丁登り、難所なり。

仁王門ヲ入左の方へ

布引の瀧道あり。

夫より一丁計りの間

石段なり。

一、摩耶山 十八丁

本尊十一面観音

御堂多し。

石段ヲ下り布引瀧へ

かけごしなり。

一、布引瀧へ 一里

雄瀧六段ニ落るなり。

雌瀧川下ニあり。

生田川なり。次ニ松原あり。

中程より右へ川ヲ越し

生田森、名所なり。

梶原井、ゑびらの梅

敦盛菘

神功皇宮

高来行、夫より

桜馬場あり。

一、神戸へ 少しあり。

同所浜辺船附

能町家なり。

次ニ湊川越て右の方へ

一丁計り行

楠正成の墓あり。

次ニ川あり。水増ニ付、橋銭八文

出し候。

一、兵庫へ 二里

同所、能町家、船附、遊女も

ある入口より二、三丁行、

左へ築嶋道あり。

夫より築寫来迎寺へ

参り、宝物色々あり。

十人迄一組百文ニテ開帳

次ニ真光寺ニ

平相国清盛公の墓有。

十三重の石塔あり。

一、須摩へ 一里半

同所茶やあり。味噌名物あり。
宿ハなし。

左の浜辺ニ綱敷天神社
右の方松風村ニ行平の
目の松あり。

夫より案内ヲ頼
須摩寺の門の額ニ

敦盛の馬たらいなり、つゞぢの木
かごぼりと言なり。

上野山 福祥寺
本尊正観音

宝物敦盛の御影

青葉の笛

弁慶の制札外二色々

開帳一組百文

庭ニ若木の桜

神功皇宮釣さをの竹有。

源義経の腰掛松あり。

行平のきぬかけ松名木なり。

一ノ谷戦の時ノ陣鐘あり。

御朱印五十石。

夫より一ノ谷へ行ぬけなり。

敦盛の首塚あり。

義経せい揃の松

次ニ白き砂 源氏

赤き砂 平家

かきわけ砂と言あり。

浜辺を源平入乱の所
海中なり。

次ニ安徳天皇内裏の

跡、むかしハ八丁四方有と
言。次ニ一ノ谷、二ノ谷上ニ有。

城跡今ハ作り畑なり。後の山
ひよ鳥多し。てつかへが峯

次ニ、三ノ谷其外不数知。

夫より浜辺ニ

敦盛の大石塔あり。

此所敦盛おいかげ蕎麦

うどん名物あり、高し。

此所撰津

播磨 国境なり。

一、垂水へ 一里半

同所、宿ハなし、茶屋有。

次ニ仲哀天皇色々の

花をさ、せてえいらん

ありし所なり。

夫より

舞子の浜、松多し。

景地なり。

一、大倉谷へ 一里半

同所、宿多し。

是より明石十八丁つゞき

明石宿屋町なり。同所右の
方へ行、

忠のりの塚有。

一、明石へ 十八丁

同所ニ

柿本人丸大明神

社領 五十石。

盲杖の桜

別当月照寺庭ニ

一ト花八ツぶさの梅有。

夫より本町へかけぬけなり。

同宿ハ四日晚

木屋与兵衛殿へ泊り、

旅籠代弁当附。

百八十文。宿ハ下々。

同松平左兵衛督様

御高六万石御城なり。

町広し。

本町ヲ通り四十間余。

土橋ヲ渡り、能泊り宿

多分あり。

同宿ニ能わらんじ

多分あり。此辺ニテ

沢山相求メてよし。

同所より五十丁一里なり。

一、大久保へ 一里

同所、泊り宿多分あり。

一、長池へ 一里

同所より左へ入播磨

名所高砂へ行道なり。

半里計り廻り、間二少しハ

宿茶屋あり。

一、別府へ 一里

同所、浜辺通り、入口二小川

あり。舟賃三文出し候。

住吉大明神へ参詣仕

同所ニ手植松名木あり。

茶屋有、少し休。餅高し。

一、浜宮天満宮へ 六丁

加古の松鶴のすこもりと

言名松一本あり。

能茶屋あり。

此辺広キ松原ニテ

景地なり。

一、尾上へ 三十丁

同所、浜辺

同尾上社住吉大明神、

茶屋二軒あり、此所休。

尾上の鐘ちいさきかね

龍宮より上りし鐘なり。きを

付見べし。上に穴あり。

都恋しき片枝の

名松あり。

相生の松三代目の

松と言あり。

夫より少し行、

大川あり。舟ちん六文出し候。

一、高砂へ 十二丁

同所へ五日九ツ時着。

つり屋伊七郎殿ニテ

昼食致し、夫より

荷物ヲ置、同所

天王社参り参詣致し

御朱印 三十石

御庭ニ相生の松

元一本ニテ大木男松

一、石ノ宝殿へ 三十六丁道 一里

大石子高御座たかみくらの二神鎮

座なり。焼失ニテ御仮屋なり。

此辺名所なり。

一、曾根へ 半里

曾根天満宮社内名木松

今ハ枯れて古株あり。

二代目の松見事なり。

門前西ニ迫る処ニ宿

茶屋少しハあり。

夫より高砂へ戻るなり。

つりや伊七郎殿ニテ

夕食仕、一人前百ト八文。

右同人方より

金毘羅出船仕、同所より

丸龜迄、夫より田の口へ

乗り返り迄上下船賃

并ニ其外一切船人へ

相まかせ候テ一人前

七匁ニテ相極申候。つりや

ニテふとん一枚百文ニテ

借用仕、夫より八五日晩

船へ入

一、高砂

同五日晚、夜五ツ過二少しツツ

雨ふり候テ船出ス。

同六日朝晴天二少し赤雲

あり。大西風ニテ夕方迄

船ニ休居、同夜五ツ時分ニ

事の外おいよく候ニ付

船乗出し翌七日晴天

ニテおいよく船ハ少しも
もめず同七日朝五ツ時分

右の方へ播州赤穂の

御番城御高六万石御城

見ゆる。次ニ備前国

牛まると言御陣屋、此所

湊ニテ町屋多分見ゆる。

夫より天氣誠ニしづかニテ

夕七ツ頃ニ引汐ニテ、備前

の勢戸中鳶へ船ヲ附、

少し休居、夕食遣、夜

五ツ時分ニ餘り海中しづか

ニテろニテ越し出し、夜八ツ

頃ニ丸亀へ湊へ船附、船番

所あり。夫より船出、船人

案内仕、丸亀福嶋町

高砂引合船宿

つくだや金十郎殿へ

参り、少しふせり申候。

一、丸亀へ 船道 三十五里

同八日朝食遣 夫より出立

同所、京極長門守様

御高五万三千石御城下

福寫町、結構成町家

大湊なり。

一、金毘羅山へ 三里

下町入口ニかね鳥居あり。

町へ少し入、又石ノ鳥居

あり。町中程ニ、十二間

の板橋ろう家作なり。

夫より登り石段上り

薬師如来あり。夫より

又登り、社領三百三十石

御本社前ニかね灯笼

あおいの御紋附十本

石ノ灯笼二本、其外

参詣所多し。

からかねの御神馬あり。

凡二十丁計り登りなり。

夫より下り、左の方ニ

御本坊、此所より外

御札守等ハ一切無御座候。

石段石ノい垣石灯笼

数不知。夫より下りて

進物札買場一軒

より外ニ一切無御座、次ニ

御札箱包紙糸代共

九十六文出し、外ニ

一切無御座候。次ニ

森屋喜三郎殿ニテ

昼食相頼、一人前

長百文。同宿中程より

左へ善通寺道なり。

一里計り廻りなり。夫より屏風

が浦へ、又少しの廻りなり。

一、善通寺へ 一里半

寺領三百三十石

同所、弘法大師御誕生の

場、弘法大師一千年の

大石塔波あり。少し

脇ニ水祭の池。此池ハ

親子たり共戒名書付

池の中へ入仏祭ニなりと

言。少し前ニ勅願所

四国七十五番の札所

あり。右ハ七堂伽藍并ニ

五重の塔焼失仕、今ハ

五重の塔普請中

参り所多し。

此所茶やあり。宿ハなし。

一、弥谷寺へ 六十八丁

寺領三百三十石

寺院あり。

同所四国七十一番

の札所本尊十一面観音

弘法大師十七才の時
学文所と言なり。

此所へ登り少しハ難所なり。

一、屏風が浦

同所、入海なり。

此所、弘法大師御誕生

皿并ニ其外色々あり。

少し宛の堂二、三軒あり。

夫より勢戸中町ニハ

遊女もあり。

此間ニ一萬石御城あり。

一、丸亀へ戻り

弥谷より百二十五丁

右町家佃久田屋

金十郎殿泊り、夕食

代并ニ船番所一人前二十五文。

其外世話料共一食

ニテ百七十二文。

同日夕方より雨ふり始り、

同九日朝より暮迄大雨ふり

一日とうりう仕候。翌十日

天気よく候ニ付早々

船ニ乗出し、少し

おいわるし。日比と言

処へ四ツ頃ニ着致し、

同所ニテ少し休。

一、日比へ 船道 八里余なり

同所、小倉帯名物

少しハ安し。

同所より一里半計り行て

長尾村少し山坂、左右

石ノ景山なり。

備前国

一、瑜伽山へ 二里半

瑜伽山大権現

金毘羅大権現 諸堂多し。

二重の塔あり。

社領五十石

下門前町広し。

能泊り宿茶屋多し。

同所小倉帯名物

多分あり。

同亀屋富八殿ニテ

昼食仕、同所より左へ

少し山登り、又三十丁

計り、下りなり。

藤戸村此間二十間計り。

板橋あり。

一、あまきへ 二里半

同所、泊り宿あり。

少しの町屋なり。

此間 備前

備中 国境なり。

一、早嶋へ 一里半

同十日晩 同所

井満屋恒吉殿へ泊り、

旅籠代弁当附

長二百文。同所ハ

泊り宿四、五軒あり。

同所、戸川内蔵之介様

御在所高三千石なり。

一、にわせへ 二里

同所、泊宿多し。

町屋よし。少しハ

遊女もあり。

一、吉備宮へ 十八丁

備中ノ一ノ宮

吉備大明神大社

社領百六十石

門前町多し。能泊り

宿三、四軒あり。遊女もあり。

本社迄回廊百八十間

間ニ左の方ニ

御祈祷の釜、是ハ銀

十二匁御祈祷料差上候得ハ

別当祈念致し、釜
うなると言なり。

同所より二丁計り

行て堀の中二

備前

備中 国境なり。

備前一ノ宮

一、吉備宮 大社なり。

社領 三百石

同所、門前少しあり。

休茶や一、二軒有。

備中の吉備より

一、岡山へ 二里

松平内蔵守様

御高三十二万五千石

御城下町結構成

町屋なり。同所京橋掛

替二付、舟渡し無賃なり。

同所ニテ昼食仕。

一、藤井へ 二里

同所泊り宿有、悪し。

一、人市へ 二里

同泊り宿少しあり。

同所、吉井川増水二付

舟ちん二十四文出し候。

夫より行て左へ三丁

計り行。村名主殿ニ

がりうの名松あり。

一、印遍へ 二里

同所、備前焼物類名物

徳くり、此所ニテ御求可被成候

一、片かみへ 十二丁

同十一日晚

大黒屋増吉殿へ泊り、

旅籠代弁当附

百八十文。宿ハ上々。

外ニゑびすや林次郎殿

二軒ハ上々なり。

此間少し峠あり。

一、三ツ石へ 三里

同泊り宿茶やあり。

此間少し山坂登りて

備前

播磨 国境なり。

一、なしか原へ 一里

同所、泊り宿多し。

餅安し。相休申候。

此間二山坂少しの難所有。

一、宇祢へ 二里

同泊り宿茶や多し。

能宿もあり。

此所二千草川増水二付

舟賃十二文出し候。

一、鶴亀へ 一里半

同泊り宿少しあり。

一、片寫へ 一里半

同泊り宿多し。

一、正條へ 十八丁

同泊り宿計り、能宿

多し。此所ニ大川有。

増水二付舟賃八文出し

夫より行て少しの越川

あり。増水ニハ蓮台あり。

一、いかるがへ 一里

同泊り宿あり。

同所より少し手前二泊り宿茶屋

一、二軒有。此処より左へ書写山道あり。

一、青山へ 一里半

同米屋又四郎殿へ泊り、

同十二日晚

旅籠代弁当附百六十四文。

宿中。

同所より姫路へ一里

此間二少しの川あり。

橋銭三文出し候。

一、西坂本へ 一里

同泊り宿八くぢニテ

留宿仕候処なり。宿悪し。

西国二十七番播磨国

一、書写山へ 登り十八丁

本堂南向十三間四面

本尊如意輪観音奥院へ

二丁、女人きんぜい古旧なり。

七堂伽藍なり。

寺院六十軒と言なり。

寺領八百三十石

同日雨ふり難儀仕候。

一、東坂本へ 下り十八丁

少し同難所あり。

同所、泊り宿あり。

此間二川あり。橋銭三文出し候。

一、姫路へ 五十丁

酒井雅楽守様

御高十五万石

御城下能町家なり。

同町かわ細工名物

立花や庄八郎并二隣家

これもかわ細工かくつかう

二買へ申候。此二軒杯ニテ右

品物御求可被成候。

此間二市川、舟賃増水

二付十六文出し候。

西国二十六番播磨国

一、法花山へ 四里

本堂南向二十間四面

本尊千手観音石段七十

六かへ、次三二十五かへ二段あり。

寺領二百二十石

三重の塔并二経堂あり。

門前二泊り宿茶屋共一軒

あり。

一、東坂本へ 下り 八丁

同所、泊り宿なし。

夫より行て

笠原新田、次二

うづら新田何れも宿一、二軒、悪し。

此間松林あり并二松野が

原と言、広キ野なり。

一、はんじやうへ 二里

同泊り宿四、五軒、能宿

あり。此処ニも松野が

原と言大原あり。

同所ニそくがうし名菓あり。

一、高岡へ 一里

同泊り宿四、五軒あり。

此間二野村渡し舟ちん

十文出し候。

一、野村へ 十二丁

同十三日晚

扇屋源右衛門殿へ泊り、

旅籠代并当附百七十文。

宿中。泊り宿四、五軒有。

同日夜二入迄雨ふり難儀仕候

一、佐保社へ 二十四丁

同所、泊り宿多し。

町屋ニテ宿八よし。

佐保大明神 社領

十二石十二ヶ村惣鎮守。

一、山田へ 一里

同泊り宿三、四軒あり。

宿ハ悪し。

同日雨ふり難儀仕候。

一、馬瀬へ 一里

同泊り宿悪し。

一、坂本へ 一里半

同泊り宿二軒あり。

西国二十五番 播磨国 登り難所

一、清水寺へ 十八丁

本堂十二間四面

同千手観音、石段

少し登りて奥院并二
諸堂多し。二重の塔

あり。五葉の名松あり。

門前ニ茶屋一軒あり。

昼食仕候

宿ハなし。

此処より左りの方へ

成相寺道下り

一、播磨

撰津 三ヶ国境なり。

丹羽

一、市原へ 下り一里

同泊り宿あり、悪し。

右の方ニ泊り宿ベニ

八重颯と言名松あり。

一、古市へ 二里

同泊り宿、町家ニテ、宿ハ

よし。此間ニ村々ニ、三、四軒

ヅツ中ニハ能宿もあり。

次ニ西古佐村ニ少しの

川あり。橋銭ニ文出し候。

此間ニ家村、能宿四、五軒

あり。
一、追入へ 三里

同十四日晚

岸田屋栄助殿へ泊り、

旅籠代弁当附

百六十文。宿ハ下々。

此処ハ宿ハくぢニテ

差し宿ハむだなり。

夫より坂道難所十丁登り

二十丁下り

一、国領へ 一里半

同泊り宿三、四軒あり。

一、大たりへ 一里半

同所より村々ニ、二、三軒ヅツ

泊り宿あり、悪し。

一、福知山へ 三里半

朽木河内守様

御高三万二千石

御城下能町家なり。

昼食仕、同宿より河守迄

川舟あり。舟道二里半

此舟ハ乗りてよし。

一人前三十七文ニテ乗り

申候。

此間ニ丹後

丹波 国境なり。

一、河守へ くが道三里
同泊り宿あり。悪し処。

家数多し。

一、外宮へ 十一丁

此所四十末社あり。同所ニ

泊り宿二、三軒あり。

一、内宮へ 二十六丁

此所八十末社あり。

并二天の岩戸此所岩屋ハ

なし。少しの宮あり。夫より

丹後の宮津へ懸ケぬけなり。

同所泊り宿、能宿も有。

少しの坂道難所あり。

一、仏性寺村へ 一里

同泊り宿一、二軒あり。

茶屋ニ大江山の由来

上中下七十二文、夫より

少し行て、大江山左の

方へ見ゆるなり。

此間ニ泊り宿一、二軒有。

宿ハ悪し。此処より

普光峠上下一里余

難所なり。此峠より大江山

見ゆる。峠下りて

少し行て泊り宿一、二

軒。宿ハ悪し。
一、宮津へ 三里

同十五日晩 萬町東堀

角屋嘉四郎殿へ泊り、

旅籠代弁当附百七十二文。

宿上。同所ハ順札の者宿

ぢん番ニテ、さし宿ハ無用なり。

此処丹後縮綿名物。

宿へ荷物置、成相寺へ

行なり。海辺舟附なり。

松平伯耆守御高七万石

御城町家広し。

一、切戸文殊へ 半里

寺領 五十石

是ハ日本三文殊一なり。

龍宮より上りしゑびの鰐口

鮎の香灯日本三景の

内、二重の塔并ニ大門家根

二重なり。此処ニ茶屋四軒

有。ちいの餅名物、其外

色々あり。

天ノ橋立 知恩寺

次ニ舟渡しあり。行戻り

六文出し候。舟を上り、

天の橋立神社前ニ

清水有。龍灯の松、海

辺ニあり。

宮津より江尻迄舟道行戻り

三里、長五十文、是ハ乗りても

乗らずでもよし。

一、江尻へ 一里

同泊り宿少しあり。

悪し。夫より登り

難所十四、五丁あり。

同日朝より少しツツ雨ふり、

又大雨ニテ難儀仕候。

西国二十八番丹後国

一、成相寺へ 十八丁

本堂五間四面本尊正観音

十四丁目より雪四、五尺計り

積り有、難儀仕候。

門前ニ破れ茶や一軒

あり。悪し。御堂より

少しはなれて寺院一軒

見ゆるなり。

一、宮津へ 行戻り四里

大雨ニテ漸々右宿迄

戻り同日とうりう仕候。

同十六日晚泊り百七十二文。

同所より二十九番松尾寺

迄、舟すゝめても乗べから

ず、悪し。

此間ニ少しの坂あり。

一、くん田へ 一里八丁

同泊り宿一、二軒。悪し。

此所海辺なり。同所より田辺

迄舟すゝめても、荒海ニテ

乗べからず。次ニ七曲り

八峠少しの難所なり。同日

朝より大雨ニテ大難儀仕候。

一ノ坂対主王丸の柴かんじんの松あり。

間ニ宮津

間ニ宮津

田辺 領分境有。

峠下ニ不動松あり。

夫より少し行て

三庄太夫首引松、今ハ

枯木ニテ伐取、なし。

一、由良へ 一里半

浜辺なり。同所泊り宿

二、三軒。悪し。

此辺ニ、三庄太夫屋敷跡

あり。

和江村奥ニ 国分寺有

安寿姫ノ宮

此所八十八川落合

おとなし川。舟賃四文出し候。

一、中山へ 一里半

同泊り宿少しあり。

次ニ長瀬峠少し難所なり。

同日雨ふり一日難儀仕候。

一、田辺へ 二里

牧野河内守様

御高三万五千石

町家結構成町なり。昼食仕候

同所浜辺なり。

同宿少し行て

二十六間土橋あり。

一、市場へ 二里

同泊り宿有。此所ハ

かなりの宿なり。

一、吉坂 二里

同泊り宿少しあり。

同所ハ順礼人ハ延引

致候様子ニテ相見へ不留。

西国二十九番丹後国

登りハ八、九丁

一、松尾寺へ 十五丁

本堂南向五間四面

二重の家根

本尊馬頭観音

寺領二十一石

同十七日晚 大雨ニ付無摠

京屋宗五郎殿へ泊り、

旅籠代弁当附百四十八文。

宿ハ下々。同所ハ宿

じん番ニテ一夜宛止宿致スナリ

何れも宿ハ至て悪し。

同所より少し下りて

丹後

若狭 国境なり。

此辺より晴天ニハ、のとの湊見ゆると言

なり。

松尾寺より一里余行、みつ松村

浜辺、夫より小浜迄、四、五里の間

五十丁一里なり。

一、高浜へ 二里

同町家よし

能泊り宿あり。夫より一里

計り行、和田村、同所より

小浜へ舟あり。此舟ハ陸

道同事、同日雨ふり、難儀仕候。

一、本郷へ 二里

同泊り宿悪し。

此間ニかと坂、次ニせ坂有。

少しの難所なり。

一、小浜へ 三里

同所、入口右の方ニ

八百姫の宮町家行ぬけ

同町結構成町家なり。

酒井若狭守様

御高十二万石なり。

浜辺船附なり。町出口ニ凡

三十間計りの板橋あり。

一、遠敷へ 一里

泊り宿少しあり。

同所、右の方、此奥ニ南部

二月堂へ水出ル所有。

此所めのうの細工所

三、四軒あり。外道中筋

ニハ一切無御座候。此所ニ

テ御求可被成候。此間ニ左へ

北国筑前道あり。

一、比笠へ 一里

同泊り宿少しあり。悪し。

同日朝より少しツツ雨ふり、夫より

八ツ過より大雨ニ相成難儀仕候。

一、熊川へ 二里半

同十八日晚 丹後や七左衛門殿

へ泊り、旅籠代弁当附

百七十文。宿中。

是ハ酒井若狭守様より御出張御役人

町出口ニ女改メ御番所有。

夫より行て

若狭

近江 国境なり。

此間山中村ニ

御公儀様ノ御関所

あり。是ハ御旗本御高

五千石朽木縫之介様

御預りの御番所なり。

同所ハ笠ヲぬき、国郡

村御地頭所姓名ヲ申上

早々通り、

一、保坂へ 一里半

同泊り宿二、三軒あり。

宿悪し。

此所ニ京都道あり。

一、追分へ 半里

同所より右へ行ハ古津道なり。

間ニ生見^{うみ}村川橋なり。

一、今津へ 二里半

同十九日昼九ツ時ニ着致し、

同船宿木綿屋清兵衛殿

ニテ昼食仕少し間乗合

の者待合せ、漸々三十二人

乗合ニテ少勢ニテ船賃増

候テ、漸々九ツ半頃ニ船乗出し、

今津より長浜迄船七里、

小勢故一人前百二十文

外ニひる問屋清兵衛殿へ

世話料一人前十八文出し。

朝ハ雲りて九ツ時分より

晴天しづかニテおいよく

乗り出し、

人数五、六十人より 定メ船賃

問屋錢十八文右の通り 一人前七十五文

定メなり。

西国三十番近江国

一、竹生嶋へ 舟道三里

同十九日七ツ半頃着致し、祝六文

船人へ出し、石垣少し間へ船

乗込、夫より上り、小茶屋二軒

あり。此茶屋ニテ少し相休、

茶漬食し、何ニテも

事の外交し。夫より

石段二十六かへ登り、此所ニ

石ノ鳥居有。又石段

三十九かへ上り、

右の方少し行。

堂南向五間四面本尊

千手觀世音堂より回

廊十二、三間奥院へツヅき、

辨才天此堂ハ大閻秀吉

公ノ居城伏見桃山御殿

ヲ引移し寄附なり。

此所諸宝物一人前八文ニテ

開帳致スなり

寺領三百石

夫より船乗出し、

風並宜敷候テ早速

長浜へ着致し、夜五ツ

時分ニ着仕。

一、長浜へ 舟道四里

同十九日晚

あめや善兵衛殿へ泊り、

旅籠代弁当附百八十文。

宿中。同宿縮綿類

ひろうど類多分

織出し随分かつ

かうニ付御求メ可被成候。

此間ニ右の方へ江州

彦根城主

永井中将様

御高三十五万石

御城見ゆるなり。

江州

一、米原へ 二里

同所、荷物問屋磯辺

九兵衛殿へ右荷物

送り、蔵敷ラ一人前十文ツツ出し

右荷物請取、夫より

少しツツ雨降り、難儀仕候。

右の方へ美濃谷汲道

なり。同所より七、八丁行、

川あり。橋より左りへ

すぐ道行樋口村より

一、醒井へ 二里

往来へ出ル。

同泊り宿多し。

清水名水あり。

日本武尊 腰懸ケ石地藏堂あり。

一、柏原へ 一里半

同宿多し。

同宿伊吹山艾名草なり。

同所より十七、八丁計り行て

此所 近江

美濃 国境なり。

両国かべひとへニテ寐物

語とゆふ処なり。

近江国 長久寺村

美濃国 長久寺村

是ハ両国同様なり。

休茶屋一軒あり。

一、今須へ 一里

此所、泊り宿多し。

関ヶ原陣戦死の塚有。

一、関ヶ原へ 一里

同泊り宿多し。

同合戦場あり。

同熊坂長半物見ノ松有。

一、垂井へ 一里半

同宿多し。

同宿町はづれ二川有。

三十間余の土橋、次二

四、五間の土橋あり。

此所二右ハ美濃路尾張道

左ハ木曾路谷汲道なり。

次ニ青野が原なり。

一、青墓へ 一里六丁

此所ニ茶屋ニ少し休。

前の田ノ中ニ照天の姫汲

し清水井戸あり。

同所左の方

悪源太義平公

左馬頭義朝公

太夫進朝長公

右の通り石塔あり。

葦竹名所あり。

同所より左の方へ八丁

奥ニ万屋長者が屋敷跡有。

同所なしの名物あり。

同日雨天ニ付難儀仕候。

一、赤坂へ 十二丁

同二十日晚 玉屋新蔵殿へ

泊り、旅籠代弁当附

百四十八文。宿ハ上。

町中程より左へ谷汲道なり。

此所、白石川増水ニ付舟ちん

十八文出し、大雨ニ付大難儀仕候。

一、白石へ 三里

同泊り宿あり。

一、坂之下へ 三十二丁

同所宿茶やなし。

百姓宿なり。

此間村ニ新百番

観音山へ立あり。

次ニ新観音堂あり。

夫より八丁計り坂道

難所、雨天ニテ私共大難儀

仕候。又八丁下り。夫より

谷汲山迄平地道なり。

次ニ深坂村ニ観音足跡

石あり。次ニ念仏池有。

西国三十三番美濃国

一、谷汲山へ 七十五丁

本堂南向五間四面

本尊十一面観音長七尺五寸

文殊の作なり。

家根赤銅ぶきなり。

諸堂参り所多し。

仁王門より左右石灯笼

多し。石段三段あり。

寺領四十石

末ノ正月八日より伊勢出立、

同二月二十一日九ツ時ニ札納切

間ニ長瀬川増水ニ付十二文

出し候。

一、山口へ 二里半

次ニあみだ寺ニハ五、六軒

泊り宿あり。

此所より加納へ近道おべんの

渡しと御尋可被成候。きふへ廻り

半里計なり。

一、ぎふへ 三里

同能町家広し。

金花山金物名物あり。

織田信長公城跡あり。

一、加納へ 近一里

同二十一日晩 煙草や九蔵殿

へ泊り、旅籠代弁当附

百六十文。宿中。

同 永井肥前守様

御高三万二千石

御城下町広し、能宿

多し。

同所より一里計り行、

さかねと言、稀成大原

あり。原中ニ、三池新田

二、三軒人家あり。

此間長し。

加納より鵜沼迄馬取てよし。

此間四里八丁長し。

長丁場なり。

一、鵜沼へ 四里八丁

同泊り宿あり。

同所より右の方へ

尾州様御家臣

成門集人正様

御高三万五千石

御城見ゆるなり。

夫より行て

さつき坂左の方ニ

川端、次ニ勝山岩穴観音あり。

一、太田へ 二里

同泊り宿あり。

同所より十丁計り行て、

尾州大田川増水ニ付、

舟賃五十二文出し候。

一、伏見へ 二里

同泊り宿あり。

一、御嶽へ 一里五丁

同所、入口ニ薬師堂大堂なり。

同二十二日晚

銭屋源右衛門殿へ泊り、

旅籠代弁当附百四十八文。

宿上。

同所より少し行て小坂

二ツ有。次ニ坂登り口ニ

石の中より粉出ルきず

の妙薬あり。是ハむかし

弘法大師かじ名石と言なり。

夫より行て、坂道峠ニ

休茶屋あり。

此間長丁場なり。

此間峠ニテ近江の水海見ゆるなり。

一、細久手へ 三里

同能泊り宿あり。

此間ニひわ峠山坂なり。

一、大久手へ 一里三十丁

同能泊り宿あり。

此処より十三峠少しの

難所なり。はい焼餅名

物あり。

間ニふるかや村ニ休茶屋

三、四軒有。次ニ

まさかね村ニ石灯籠

二本あり。此所ニ左へ

伊勢道あり。此所ニ

櫛細工本家五、六軒。

此所迄三里余山坂、

少しの難所多し。

此間長丁場。

同宿入口ニ川あり。二十三間の板橋有。

一、大井へ 三里半

同能泊り宿あり。

此間ニ山坂峠なり。間ニ休茶

やあり。

入口ニ川あり。前後五、六軒土橋中板橋

六間有。

一、中津川へ 二里半

同能泊り宿あり。

此所、太神宮御誕生ノ湯

あり。少し行て覚明かくめい

行者ノ一命石有。是ハ

しやうごう（解読者注 莊殿）

のをとすると

言なり。

此間少しの峠あり。

一、落合へ 一里

同二十三日晚

猪口屋五左衛門殿へ泊り、

旅籠代弁当附

百四十八文。宿上。茶代

百文十三人ニテ置申候。

出口ニ川あり。板橋なり。

此所より木曾路なり。

此間ニ

十曲峠美濃

信濃 国境なり。

同二十四日雨天ニ付峠難儀仕候。

峠茶や二狐かうやく

あり。

一、馬籠へ 一里五丁

同能泊り宿あり

同宿ハ坂宿なり。

馬籠峠ニ栗赤飯

名物あり。峠下りて

一里計り谷合行なり。

同日雨ふり難儀仕候。

一、妻籠 二里

同能泊り宿あり。

此間、坂道峠ニ茶屋泊宿

二、三軒あり。此間ニ

今井四郎兼平城跡あり。

一、三留野 一里半

同同断。

此間ニ清水茶や二軒有。

次二十二鏡茶や休所有。

一、野尻へ 二り半

同 同断。

此間少しの峠あり。

同間ニ平沢村二十二色漬物

名物あり、二、三軒。

次ニ大しかけ十六間

板橋あり。

一、須原へ 一里三十丁

同 同断。

此間ハ長丁場ニテ

間ニ立町と言所ニ茶屋

能泊り宿多し。

次ニ小野ノ瀧此所少し
登り、茶屋あり。蕎麦
名物あり。此所より

十丁計り行て

大しかけ十六間の

稀成板橋あり

次ニねざめ蕎麦屋

越前屋ニ相休蕎麦ヲ

食し、格別結構成品物

安し。名物なり。

たせや二軒より外ニ

茶やなし。

此所ニ名所あり。

臨川寺浦瀧太郎。

名所、川中ニとこ石井ニ

かま石ぞう石色々

名石あり。川向ニ

浦嶋の社あり。案内

ちん一人前五文なり。

入口此所左方紀州様御陣屋あり。

一、上ヶ松へ 三里九丁

同二十四日晚

伊勢や伝兵衛殿へ泊り、

旅籠代弁当附百四十八文。

外ニ百文茶代ヲ遣し候。

此間少しの峠あり。
板橋あり。

一、福島へ 二里半

同宿上の段町、松原屋万蔵殿

へ相休、餅名物安し。

町屋長し。

同宿出はづれニ

御関所有。

尾張様御家臣御高七千五百石

山村甚平様御預り御役人

御出張

双方ニ御門あり。

此間板橋あり。

夫より行て

江戸

京都 振分所なり。

一、宮越 一里半

泊り宿あり。

此間ニ木曾義仲の

城跡あり。少しの峠

あり。板橋あり。

一、藪原へ 二里

同宿、木櫛名物なり。

品物ハ悪し候得共念入候

得バ能品物ヲ出し候。

二十五日昼食遣、大雪ふり
始り、次ニ鳥居峠

大難儀仕候。峠下りて

奈良井宿へ入口なり。

一、奈良井へ 一里半

同宿、重箱名物なり。

かけ直多し。心附

直ヲ附べし。品物ハ

悪し。能品物もあり。

随分安し。

同宿より十八丁行

平沢村ニ色々細工重箱

多分あり。夫より行て

少しの峠あり。

一、熱川へ 一里半

同二十五日晚

藤野屋幾蔵殿へ泊り、

夕食蕎麦、朝ハ御膳并ニ

旅籠弁当附二百四十八文。

同宿ハ、宿引ハ至テ

悪し処ニテ、夕方ハ用心

致スべし。

町出口ニ重箱改メの

御番所あり。手札

持参可被成候。

此辺ハ悪し場所なり。

此間少しの峠あり。

一、本山へ 二里

同宿も悪し処ニテ

夕方ハ宿引多し。

用心致スベシ。

一、洗馬へ 三十丁

同宿ハ能泊り宿多し。

蕎麦名物あり。

町ヲ少し行、茶屋一、二

軒あり。

右ハ仲仙道

左ハ善光寺 道なり。

一、江原^{がうはら}へ 一里半

同茶や泊り宿能宿も

あり。

一、村井へ 一里半

同泊り宿茶やあり。

一、松本へ 一里半

同町長し能町なり。

太物類色々手拭杯ハ

安し。大店多し。

餅安し。

同所

松平丹波守様

御高六万石の御城あり。

一、岡田へ 一里

同宿より上田迄荷物

相廻し、道法十一里間

一貫目六十四文懸りニテ

相頼相廻し申候。

同宿、御本陣問屋

七左衛門殿、右荷物

相渡し、請取仕候。

夫より行てあた坂峠

難所あり。峠ニ休茶や

四軒あり。夫より下り

一、荊谷^{かろや}原へ 一里半

同所、泊り宿あり。

一、会田へ 一里十丁

同下問屋善左衛門殿へ

泊り、旅籠代弁当附

百四十文。同所より少し

登りて、左の方ニ弘法大師

堂浦山岩の上ニ石ノ塔并ニ

観音多し。名景なり。此堂ニ

日本三ヶ所茶ニ名水あり。

次ニたち峠登り三十丁

十八曲難所なり。次ニ乱橋^{みだればし}村

とばぶき休茶やあり。次ニ

中峠少し坂道なり。次ニ

法橋^{ほつきやう}村ニ休茶やあり。

三十丁計りの峠なり。

長丁場。

一、青柳^{あおやぎ}へ 三里

同能泊り宿あり。

同少し行、大石切通し。

此処岩の上ニ

秩父

坂東 百番観音立あり。

西国

又少し行、小石切通し

あり。夫より少しの下りなり。

一、おミへ 一里十丁

同能泊り宿あり。

同所より少し行、

猿が馬場村柏餅名物有。

ばんバ峠登り十八丁

此所ニとばぶき茶屋三軒

あり。右の方ニ大池あり。

下り三十六丁なり。此間ニ

茶や二、三軒あり。此茶や

内ニ火打石名跡あり。同所より

右の方ニうば捨山見ゆる。

下りて中川原村二宿

茶や少しあり。次二桑村

宿茶や少しあり。

此間長丁場。

一、稻荷山へ 三里

同町家能泊り宿あり。

一、篠野へ 一里

同茶屋泊り宿あり。

此所右ハ江戸仲仙道出ルなり。

左ハ善光寺道なり。

同所へ荷物置候テ善光寺

へ参詣二行てもよし。

此間東辺川中畷古合

戦場あると言なり。

一、丹波嶋へ 二里

同泊り宿あり。

夫より行てさい川

河原二十丁計りなり。渡し場

三瀬舟渡し其間ニかり橋一ツ

あり。其外五ヶ所腰場あり。

腰ちん一人前二十四文出し

川ヲ上り少し行、荒木村

二舟番所、舟賃四十六文出し

次ニ吹上村ニ荻萱親子の

地藏尊あり。此寺ニ加藤左衛門

藤原重氏公旧跡あり。

寂照院西光寺又少し行て

善光寺町入口なり。町家

広し。門前左りかわ

ひしの目印ふじや

平左衛門殿へ泊り、旅籠代

弁当附百七十二文。宿ハ

上々。十三人ニテ茶代二百文出し

格別馳走ニ相成申候。

同二十七日七ツ半頃二宿へ着、夫より

夕方ニ参詣仕。

一、善光寺へ 一里

仁王門より敷石あり。次ニ

三門樓門とも言大門なり。

家根二重板ぶきなり。次ニ

本堂間口四十八間

奥行三十間

南左の方善光寺如来なり。

中当山ヲ開キ善光公なり。

并ニ善祐次ニ弥生の前様

左右ニ右灯笼多し。

諸堂多し。本堂ニテ

阿弥陀如来御影ヲ請受

二十二文なり。大門町ニ表具師

あり。表具致候ヲ取替仕なり。

同二十八日朝開帳。

藤屋平左衛門殿ニテぞうり

じゅず出し

代二十二文、同人庭ニテ花并ニ

御末香うり代九文出し候。

同二十八日明ヶ方ニ御堂へ参り、

阿弥陀如来前権僧上様

并ニ役僧五、六人ニテ開帳致し、

夫よりめうが銭六文出し

かへだん廻り三度廻りて

出ルなり。夫より赤門あり。是ハ

大勧進寺へ国郡村名

姓名ヲ呼出し、御座鋪へ

上り、さんげ水六文出し、

僧正代僧出さんげ文

十念ヲ請、代僧きやくろく

ニ乗りて血脈ヲ戴キ、夫より

出ルなり。大勧進寺中ニ寺院

四十六ヶ寺あり。

寺領千石。

夫より宿へ戻り、朝食遣

同日四ツ頃ニ出立、又さい川舟賃

前ニ同断なり。

一、丹波嶋へ 一里十二丁戻り

同断

一、篠野追分へ 二里 戻り

同所ひしや丈次郎殿ニテ昼食致。

右ハ稻荷山道なり。

左ハ仲仙道江戸ニ道行なり

少し行て、ちくま川

やしろ渡し、舟賃二十二文

出し候。

一、屋しろへ 三十丁

同茶屋泊り宿少しあり。

夫より少し行て

ひとへ小倉名物多し。

此処ニテ求てよし。

一、下戸倉へ 一里半

同能泊り宿、遊女も有。

同所より一里余行て

少しの坂道川端ニあり。

一、さかきへ 一里半

同二十八日晚 同宿

御本陣中沢四五右衛門殿へ

泊り、旅籠代弁当附

百七十二文。酒肴格別の

御馳走ニ相成十三人ニテ茶代

二百文出し、宿ハ上々なり。

町出口左の方村上義清公

墓あり。此間長丁場ニテ所々ニ

休茶屋あり。

一、上田へ 三里

同所、松平伊賀守様

御高五万三千石なり。

町家長し。能町なり。

中程東山堂伝八郎殿

岡田より相廻し候荷物受取

世話代一人前十文

出し。昼食仕夫より出立。

同宿太物類随分かくかう

ニ付求てよし。

此間に休茶やあり。

此間、大谷村茶屋前より

右すわ

信州 道あり。

一、うんのへ 二里

同能泊り宿あり。

一、田中へ 十八丁

同泊り宿あり。

此間に川あり。板橋あり。

一、小諸へ 二里半

同二十九日晚 同宿

御本陣上田宇源次殿へ

泊り、旅籠代弁当附

百八十文。宿ハ上々。

同牧野遠江守様

御高一万五千石なり。

能町家長し。

町出口ニ二十二間計り

板橋あり。夫より少し行て

松林あり。是ハ

加州様御林なり

此間ニ乙女坂あり。此間

長丁場ニテ所々ニ休茶屋あり。

次ニ、三ツ家村此所休茶や

一、二軒あり。

同所ニ少しの川あり。是ハ

浅間山ちの池より流し

出候ちの水と言なり。同所より

浅間山別当

真楽寺へ

二十五丁

夫より行て左の方ニ

御公儀様 松御林多分

見ゆるなり。

此辺追分原と言なり。

此間長丁場。

一、追分へ 三里半

仲仙道本道出合なり。

同所ハ作場等一切なし。

遊女押買仕候処心付
用心致べし。

同所より十八丁計り行

かり家村此所より右の方へ

女道あり。かりや原と言

大原なり。

一、沓掛へ 一里三丁

同宿も賣女多し。

此間左右大原なり。

此原へ真田様儀

家康公様まちぶせ

の原なり。

一、かる井沢へ 一里五丁

同宿二昼食仕、夫より

臼井峠登り十八丁。

此所二茶屋二軒あり。

左の方二

熊野権現五社有。

神東殿有。坊舎十

軒計りあり。

此所信州

上州 国境なり。

同所より少し下り左の方二

仁王堂あり。夫より下りて茶や

一軒有。是ハ馬へ食ス

物せつたい所と言。又下りて
中山茶屋七軒あり。

此所立場なり。夫より行て

峯の茶や三、四軒あり。

夫より下り大難所十八丁、

此間二はね石と言あり。用心

すべし。

長丁場。

一、坂本へ 三里

同三月朔日晚 同宿

山二屋文兵衛殿へ泊り、

旅籠代二百文。宿ハ上々。

同宿買女多し。

同所より少し行下りて

十間計りの板橋有。

夫より少し登り

横川

御関所なり。

此所

板倉伊豫守様

御預り御役人検門出

張なり。

同所二休茶屋八、九軒有。

酒造蔵一軒有。夫より

行て

下横川村二休茶屋二軒。
此間二

妙義山道右へ少し

行、小川橋三ヶ所渡り

行、妙義山黒門へ出ル。

一、妙義山へ 二里半

同所、泊り宿あり。

白雲山其外参り所あり。

此所各々様方

御案内の通りなり。

一、中ノ岳へ 妙義より一里半

正一位武尊大権現其外

大日如来大黒天石ノ名石

多し。

同所、御案内の通りなり。

夫より妙義へ戻り

妙義山黒門の外

茶屋より

左ハ松井田行道

右ハひやのくぼ道私共行なり。

安中へすぐ道

間二大川あり。橋銭四文出し候。

一、ひやの久保へ 一里半

同所、麻類細引あみ

馬のはづ縄求メてよし。

此間、原市村少し町家なり。

一、安中へ 二里

此所 板倉伊豫守様

御高三百石 町家長し。

町出口二川あり、橋あり。

入口二川あり、橋錢八文。

一、板鼻へ 三十丁

此間二川有、橋錢八文出し候。

一、高崎へ 一里三十丁

同二日晚 同宿新町

越後屋源兵衛殿へ泊り、

旅籠代二百文。宿上なり。

此所

松平右京亮様

御高八万石。町家長し。

同宿より少し行、田中村より

右へ、山名村次二藤岡町道

なり。此所、並木辺、巾着類

糸織帯其外色々

多し。

一、倉ヶ野へ 一里十九丁

同宿泊り宿よし。

此間 岩鼻御代官

御預り

林部善太左衛門様

次二

岩花渡し舟賃十文出し候。

一、新町へ 一里十四丁

同宿昼食致し、

此処、於菊稻荷大明神有。

間二からす川橋なり。

此所上州

武州 国堺なり。

一、本庄へ 二里半

能町家なり。

此間二 岡役所黒田様

御陣屋有。

次二岡部村

安部寅之助様御国城

二万石なり。

同所

岡部六弥太忠澄

石塔あり。

夫より行て右の方二

忠澄桜あり。

此間長丁場なり。

一、深ヶ谷へ 二里三十四丁

同三日晚 同宿

近江屋彦右衛門殿へ泊り、

旅籠代二百三十二文。

宿上々。

同所二馬を相頼十三人の

荷物附金二朱駄賃テ

夫より稻荷町万屋へ参り

わかれの酒呑昼食致し

一人前百文。夫より出立。

一、田中村へ ちか 二里

此所荒川あり。舟賃十二文

出し候。

一、勝田村へ 二里

右の通り順道下向仕候。

末三月四日下向なり。

参宮同行人姓名覚

吉田

一、彦右衛門 一、宇八

一、兵右衛門 一、菊五郎

一、恒吉 一、甚右衛門

一、源次郎 一、増蔵

一、長吉 一、元次郎

一、次郎吉 一、和三郎

一、仁兵衛 一、倉五郎

一、文太郎 一、伊勢松

一、政次郎 一、三郎右衛門

一、松五郎 一、金蔵

武蔵国比企郡勝田村在也
 奈哥武羅善左衛門

- △裏表紙▽
- 一、定次郎
 - 一、周治郎
 - 一、政五郎
 - 一、喜七
 - 一、代五郎
 - 一、太四郎
 - 一、初五郎
 - 一、富八
 - 一、忠五郎
 - 一、長五郎
 - 一、善左衛門
 - 一、勝五郎
 - 一、平吉
 - 一、松五郎
 - 一、清三郎
 - 一、文五郎
 - 一、新八
 - 一、辰五郎
 - 一、助治郎
 - 一、彦右衛門
 - 一、兵右衛門
 - 一、恒吉
 - 一、長五郎
 - 一、政次郎
 - 一、忠五郎
 - 一、初五郎
 - 一、善左衛門
 - 一、定次郎
 - 一、周次郎
 - 一、新八
 - 一、政五郎
 - 一、喜七
 - 一、善左衛門
- （菅谷）
- （廣野）
- （黒印）
- 西国同行
 締メ 三十九人

「嵐山町博物館調査報告」第1集 正誤正表
 「伊勢・中国 道中日記帳」（弘化三年）

頁	行数	誤	正
1	4	風来寺	風来寺
1	7	今比羅	金比羅
3	1	〈挿入〉	廿日
4	12	七拾文	七拾文
4	13	小野江	小野江 巻り
5	1	茶屋有	茶屋有此
5	1	そばに久び	そばにくび
5	21	うす水	うす水入
5	23	甲甲	甲甲
7	5	三十八丁	廿八丁
8	3	三丁	三丁
8	6	武拾四門	武拾四文
8	17	見ゆへる	見ゆる
9	6	松巻本	松巻本
9	12	平七方泊り	平七方ニ泊り
9	18	別当待	別当待
10	8	〈挿入〉	大そてつあり同所
10	13-1	左り	左り方
10	15	八幡社	八幡宮社
11	18	御地之	御坐候
13	10	七八軒あめ	七八軒也 あめ
14	9	百拾文	百八拾文
14	17	五拾間	五拾丁道
16	7	廿九丁目二	廿九丁目二
16	16-4	三百人	三百人也
17	10	さい川口江	さい川江
19	18	三十六巻り	三十六丁巻り
20	7	惣鎮守	惣鎮守
21	2	大岡	西方大岡
21	5	御序城	御城
21	8	未正月	未ノ正月
21	13	百文三	百文ニ
22	5	熱甲	熱田
22	5	御神殿	御神領
23	13	城外堀	城外堀
24	20	追分いけ	追分いせ
24	10	右三方に	右之方に
25	10	上野江	上野江 巻り半

26	3	間土橋	間ニ土橋
26	4	和泉守	和泉守様
27	12	御地走	御馳走
28	6	しおあめへ	しおあへ
28	9	二身茶や	二見茶や
28	12	二身大神宮	二見大神宮
29	5	下宮	外宮
29	6	中喰之儀	中喰之儀ハ
29	9	たけこく蔵	たけこく蔵
29	11	因幡様	因幡様
29	15	〈挿入〉	にて種々御馳走被
29	16	罷帰り	罷帰り
30	2	大島	大島
30	2	馳走	御馳走
30	14	旅籠代	旅籠
32	2	橋銭	川橋銭
32	6	有り	有
34	8	丹羽市江	丹波市江
35	7	四社舎	四社舎
36	9	七二也ニ	ちうやニ
37	7	納メ	納り
38	17	唐金きぼし	唐金のきぼし
39	4	四寸岩ト	四寸岩
40	18	大坂	大坂
41	15	〈挿入〉	ハ、有 はんりう 町にて
42	3	大鼓橋	太鼓橋
42	6	御堂内	御堂内ニ
42	13	天下ふすや	天下茶や
42	16	大坂	大坂
43	1	八拾文	八拾八文
43	4	崖邊大神宮	崖邊大神宮
43	9	まんじゅう	まんちう
43	15	大坂	大坂
44	4	大坂	大坂
44	4	金毘羅	金毘羅
44	16	出舟落	出舟仕舟落
45	2	ちふし	とふし
45	11	丸亀亦間屋	丸亀舟間屋
45	14	廿三日	廿二日

46	3	八尺五間	八尺間五間
46	10	入口廻り様	入口廻り
47	9	とふうに	とふうりう
47	13	大風殿	大風殿
49	15	大坂	大坂
50	7	四方之内	四面之内ニ
50	13	此面武重堀	四面武重堀
51	10	此節退	同退
52	2	大坂	大坂
52	11	三重三塔も	三重の塔之
52	17	熊谷活郎	熊谷治郎
53	11	旅籠代	籠代
55	11	青農ヶ原	青農ヶ原
57	4	ほそくねへ	ほそくてへ
60	5	御成有	御城有
60	11	難儀場所	難儀之場所
60	13	角屋新兵エ	角屋新之丞
62	15	巻万千石	巻万五千石
65	4	松坂屋	松坂屋
66	3	惣五郎	惣五郎
69	2	喜左エ門	善左衛門

菅谷村大字千手堂
 「高橋金次郎日誌」（大正三年）

頁	月日	誤	正
90	9月1日	圓形共計	圓形善計
107	9月1日	圓形共計	圓形善計

*圓形善計は圓形にがり

『弘化三年 伊勢参宮・西国三拾三ヶ所・金毘羅山・善光寺道中日記覚帳』

(嵐山町大字広野九番地 中村武一家文書)

解説

一、史料の概要と筆者

この史料は、嵐山町広野九番地の中村武一家文書の一点である。昨年、『嵐山町博物誌調査報告』第一集に、『弘化三年 伊勢・中国道中日記帳』(吉田・小林武良家文書)を掲載した。その「はじめに」で記したが、伊勢参宮後、宮川で西国三十三ヶ所廻りのために別れた十三名の道中記が今回の史料である。前者の旅が六十一日であったのに対して、この旅は七十四日を要している。両者の最後の部分をあわせて読んでいただければ分かることだが、この旅の参加者は六人程符合しない。江戸時代は名前は発音が同じならどんな漢字でも通用しているが、音が合わないのは不思議である。

この道中記の筆者は、日記の裏表紙に「武蔵国比企郡勝田村住人 奈歌武羅善左衛門」とあり、中村善左衛門である。中村武一さんの御先祖であるので記録を見せていただいたが、善左衛門を名乗る方は何代もあるので、お墓を見せていただいた。

忠山良義居士、善兵衛、安政二年九月五日卒、八十歳

善明智光居士、善左衛門、明治二十七年二月一日卒、八十一歳

とある。弘化三年に当てはめると善兵衛七十歳、善左衛門三十四歳であるので、旅の厳しさを考えると、後者の善左衛門に間違いのないと思われる。三十四歳とはその当時にあつては男盛りと思われる。これ以外は中村家に記載はない。

二、伊勢講・伊勢道中等に関する史料

嵐山町域で伊勢講があつたムラは、大蔵、平沢、志賀、越畑、吉田、杉山、古里、勝田などである。伊勢講の記念碑、奉納物等はまだ調べていないが、多々ある筈なので調査が進み次第明らかになると思う。

伊勢講に関わる文書史料

(一) 旅日記(金銭出納簿等より作成したものを含む)

伊勢参宮・西国三拾三ヶ所・金毘羅山・善光寺道中日記覚帳 一八四六(弘化三年) 広野・中村武一家文書 筆者中村善左衛門。弘化三年十二月十九日三月四日。総勢三十九名の内西国同行者十三名。菅谷↓八王子↓最乗寺↓小田原↓(東海道) ↓秋葉山・鳳来寺↓伊勢↓那智↓本宮↓紀三井寺↓高野山↓大坂↓葛井寺↓当麻寺↓吉野山↓長谷寺↓奈良↓長命寺↓京都↓(丹波国) ↓(山城国) ↓(摂津) ↓高砂↓丸亀・金毘羅↓瑜伽山↓岡山↓姫路↓宮津↓竹生島↓谷汲山↓(中仙道) ↓善光寺↓妙義山↓(中仙道) ↓深谷↓勝田。

伊勢・中国道中日記 一八四六(弘化三)年 吉田・小林武良家文書二 筆者小林菊次郎。講中三十八外二名。二十七名が一緒に旅行する。弘化三年十二月十九日二月二十日帰村。(東海道) ↓秋葉山・鳳来寺↓伊勢↓奈良↓大坂↓丸亀・金毘羅↓兵庫↓京都↓(中仙道) ↓善光寺↓中仙道↓深谷↓吉田。

道中見聞誌 一八七六(明治九)年 吉田・藤野治彦家文書一八二 筆者藤野喜一郎。明治九年一月八日二月十五日奈良で終っている。総勢三六名。菅谷↓八王子↓最乗寺↓小田原↓(東海道) ↓秋葉・鳳来↓(東海道) ↓伊勢↓那智↓本宮↓紀三井寺↓大坂↓葛井寺↓当麻寺↓吉野↓長谷寺↓奈良。続きの第二冊があつたかどうかは不明。

伊勢参宮并西国道中記 一八八一(明治十四)年 越畑・馬場章夫家文書 筆者馬場房次郎。一行十九名で出発四名のみ伊勢で別れ西国三十三ヶ所廻りを行う。明治十四年一月二十日四月四日。菅谷↓八王子↓大磯↓(東海道) ↓秋葉↓伊勢↓那智↓本宮↓紀三井寺↓高野山↓大坂↓葛井寺↓当麻寺↓吉野↓初瀬寺↓奈良↓石山寺↓京都↓(丹波) ↓(摂津) ↓高砂↓丸亀・金毘羅↓瑜伽山↓岡山↓姫路↓宮津↓竹生島↓長浜↓谷汲山↓(中仙道) ↓善光寺↓(中仙道) ↓小前田↓越畑。中村善左衛門一行と同じコースだが日程は一日異なる。

伊勢道中宿駅休泊控簿 一八八三(明治十六)年 平沢・内田豊作家文書六
明治十六年二月十三日～三月三十日まで四十七日間。同家史料八「伊勢道中
記」の金銭出納簿。内田清右衛門(四十六歳)・内田保五郎(五十七歳)・内田
島五郎(五十八歳)・内田勝右衛門(四十一歳)・西水吉(二十八歳)・奥平弥
之吉(五十五歳)・吉野倉吉(五十三歳)・村田文吉(五十二歳)の総勢八名。

〔伊勢道中記〕 一八八三(明治十六)年 平沢・内田豊作家文書八 筆者内田
清右衛門。「道中安全目出度始」で始まり題名を欠く。明治十六年二月十三日
～三月三十日の日記。川越↓(新河岸川)↓(東海道)↓伊勢↓奈良↓吉野↓
高野山↓由良↓(船)↓淡路島↓(船)↓(四国)むや岡崎↓(陸路)↓金毘
羅・丸亀↓(船)↓大坂↓京都↓(中仙道)↓善光寺↓(中仙道)↓熊谷↓平
沢。

参宮道中記 一八九八(明治三十二)年 古里・安藤武家文書 明治三十一年
旧正月十日～二十二日まで十三日間の旅行費用覚え。鉄道を利用。古里↓(東
海道)↓伊勢↓京都↓大坂↓(船)↓多度津・金毘羅↓(船)↓東海道↓古
里。

家計詳細録 一九〇六(明治三十九)年 志賀・大野浩家文書二 明治三十九
年八月四日～八月十四日まで十一日間の大野角次郎伊勢参宮費用の記述があ
る。志賀↓(東海道)↓伊勢↓奈良↓高野山↓大坂↓多度津・金毘羅↓(東海
道)↓志賀。

(二) 旅行案内

〔二新講 諸国同盟結社 東駅周旋方笈 明治十年十一月改 社中判取〕 一八
七七(明治十)年 古里・中村常男家文書 東京より京・大坂至り伊勢両宮
道、秋葉山、豊川社、武州大山道まで。

〔讃州金毘羅道中記〕 (江戸時代) 吉田・中島立男家文書二二七 高砂浦南本

町金ひら出船宿牛柄山内 志方屋惣兵衛。木版一枚刷り。

〔御定宿びぜんや藤五郎 京都三条通大ばし東つめ〕 (明治初) 吉田・中島立
男家文書二二二 「大和まはり御客様六軒茶やにて京都へ御廻しの御荷物御預
り申候し。并、西国廻り御客様田丸口川畑柳町大坂や七右衛門方にて京都へ御
廻しの御荷物預り申候」。

〔諸国蒸気船出湊・蒸気金毘羅出船所 大坂さかいすじ長堀ばし南詰 御定宿
平野屋佐吉〕 (明治初) 吉田・中島立男家文書二二二 「一私所持之蒸気船
風当二不抱、丸亀表口四時二着船仕候已上」「并に京都登り船毎日出し申候」。

〔御定宿 大阪さかいすじ長堀橋南詰 平野屋佐吉〕 (明治初) 吉田・中島立
男家文書二二七 「讃州・金びら船并二西京へ登り船毎私之浜より出船仕
候」。東国より、大山、秋葉山、鳳来寺、伊勢。六けん大坂平佐出張所。

〔真誠講 發起内国通運会社 講元佐々木莊助〕 (明治初) 吉田・中島立男家
文書六五 伊勢より西国の宿屋案内。

〔伊勢朝熊岳 虚空蔵菩薩〕 (年不詳) 吉田・中島立男家文書一三三 木版
一枚。

(三) 太々講

雨宮月参太々講員之証 (明治) 大蔵・山下豊作家文書二一八 山下仙造。
第二二六二二号。伊藤事務所。活字。

神道月参太々講社規約 (明治) 大蔵・山下豊作家文書五三 活字。

永代太々御神楽帳 一七〇七(宝永四)年 越畑・土橋敷家文書一三 宝永四
年六月吉日。「是ハ仮帳ニテ御人数相極極候上御祈禱之大帳写者也」。神楽の由来

を記し、武蔵七郡の信心者の願望満足、災難消除、富貴万福、無病延齡を祈る。御師・三日市太夫次郎、権祢宜従五位上度会神主正兩永代折袴金奉納者連名簿。

伊勢内宮正遷宮奉加（辰三月） 杉山・杉山貞男家文書一五六 老貫九百文及び金壹分三朱也。他に太郎丸村御初穂式百文四軒、三百三拾式文二軒、預り申候。午三月六日。

太々講中控帳 一八二六（文政九）年 古里・中村常男家文書二六九 文政九年戌二月十六日。

伊勢太々講金取立帳 一八五六（安政三）年 古里・中村常男家文書四〇五 安政三年辰正月吉日。講中十五名。世話人瀧次郎、森吉、常三郎、栄五郎。

伊勢太々講金取立帳 一八六八（明治元）年 古里・中村常男家文書五一二 明治元年辰十二月吉日。

伊勢太々講連名覚帳 一八六四（元治元）年 古里・安藤文博家文書三〇八（三二二） 元治元年子三月十六日。講主長左衛門代運太郎 孫重郎 計四十四名。

伊勢太々講連名覚帳 一八六八（慶応四）年 古里・安藤文博家文書三〇八（三二三） 慶応四年辰二月日 古里村・安藤運太郎。講員四十四名。

伊勢太々講金取調帳 一八七一（明治四）年 古里・安藤文博家文書三〇八（三二一） 講金取立四十四名内不参九名。参加者三十五名。

伊勢太々講中書類 一八八〇（明治一三）年 古里・安藤文博家文書六二〇 明治十三年二月十四日。旧正月五日出立。六十四名。講元安藤貞良。

大々御楽料領収書 一八八〇（明治十三）年 古里・安藤文博家文書六二〇 明治十三年伊勢参宮関係金銭出納記録及びその受け取りの一切。

伊勢太々講道中案内綴 一九一八（大正七）年 古里・安藤武家文書 比企郡古里講長安藤才介、副講長安藤幸藏他。主催熊谷駅前新井峰吉。総勢三十九名。大正七年一月三十一日～二月七日、伊勢往復。一月三十一日～二月十八日、伊勢↓金毘羅↓安芸宮島・岩国錦帯橋↓長野（三泊）↓熊谷。団体会費払込金綴。湖南汽船営業御案内。費用記録。記。大正七年一月伊勢団体連名簿冊。大正七年一月三十一日出発伊勢参宮講金掛込簿。大正七年春伊勢参宮太々講仮規約。

（四）見舞・土産・饞別

参宮留主行覚帳 一八四七（弘化四）年 吉田・小林武良家文書一三八 これ小林菊五郎が伊勢参宮中の留守見舞いの記録で、正月四日の日付で十六軒より、米九斗、小豆八斗、銭千文、半紙八帖の見舞いを受けている。

大山・富士山・善光寺・入湯・其他神参り他よりもらひ土産物覚帳 一八五五（安政二）年 吉田・小林武良家文書二六 安政二卯年より明治十八年までの土産品記帳及び禎蔵誕生控。

伊勢記 一八八〇（明治十三）年 志賀・根岸なを家文書四 国太郎の参宮の際饞別。計十七名、米四斗六升、小豆八升、金三円七十銭。

伊勢参宮饞別受簿 一八九八（明治三十一）年 古里・中村常男家文書八六九 明治三十一年旧正月十日。金八円五十五銭貫。

参宮土産記帳 一九一（明治四十四）年 吉田・小林武良家文書二三 小林禎蔵の土産二十名分。小林くに御祝銭計十名、二円四十銭、手拭一筋。

参宮餞別控 一九二二(明治四十五)年 志賀・大野益一家文書二一 大野等
助が参宮の際の餞別。計二十九名、五円六十銭、半紙十四帖、宮一。下向祝は
計五名、六十銭、すし一、めん一。

参宮餞別實控 一九一七(大正六)年 志賀・大野益一家文書二六 餞別計二
十五名、七円六十五銭。下向礼は計六名、一円九十銭。

伊勢参宮餞別實控 一九四一(昭和十六)年 志賀・大野益一家文書三九 餞
別は計二十名、二十円七十銭。

(五) 記念碑

神徳無疆記 一九〇〇(明治三十三)年 古里・安藤文博家文書五八六 明治
三十三年九月吉日。兵執神社に建てた碑文の原稿。明治十三年五十三名、明治
三十一年三十九名を安藤貞良と中村清介が伊勢参宮に引率した記念碑。

(六) その他

産泰大神宮 太々講中連名記 (午三月) 古里・中村常男家文書

旅日記 (明治) 杉山・杉山貞男家文書一六六 復飭願及神葬祭届の日記。

三、旅の行程と様相

この旅の一行のルートは図一に示した。また道中の交通費、昼食代、旅籠代
等の金銭出納の記録と参詣・見学した寺社・史跡・名勝地その他ををまとめた
が表一である。

では、この道中記の記述に沿って、少しばかり気のついたことを説明して
みよう。

出立の準備 出立の前に、道中の所持品をあれこれと準備しなければなら
ない。旅行の所持品の中で必ず忘れてはならないものが往来手形(往来切手・道

中手形)と関所手形である。往来手形は身分証明書で、名主、旦那寺の住職な
どいざという場合に身元引受人となれる地位と責任をもったものが発行する。

往来手形には本人が万一旅先で志望した場合の処置まで書いてある。普通これ
で関所を通れるが箱根の関所はそうはいかない。関所手形のほうは名主など村
役人が発行する。往来手形は一人につき一枚ずつ、関所手形は同行の者が何人
であろうと、関所ごとに一枚必要である。日記の十二月二十三日には、「相州
箱根御関所へ手形差上早速罷通り」とある。二月十八日の「熊川」では「女改
め御番所」とあるが幕府は(江戸からの)出女に注意することを指示してい
た。その他、二月二十五日「福島」(木曾福島)、三月朔日「横川」(碓氷)に
も関所の記載があるが、関所手形が必要であったのは箱根だけである。

出発の日 旅したくをととのえて、いよいよ出発の日、弘化三丙午年十二月十
九日となる。江戸時代は月を基準とした太陰暦なので大の月は三十日、小の月
は二十九日、一年は三五四日となる。毎年地球の公転より十日ほど少なく
なる。そこで一年が十三ヶ月の年を設けないと是正ができなくなる。その是正の
月が閏月で、同じ月を二度繰り返す、後の月を閏月と言う。これは三十二ヶ
月、あるいは三十三ヶ月に一回の割合で置かれる。「増補日本歴史便覧」(汲古書
院発行)と言う便利な書物で調べると、弘化三年十二月十九日は、西暦一八四
六年二月四日と言うことになる。次に、八ツ半と言う時刻が出て来るが、この
頃は不定時法だから午後二時頃だろう。

出発にあたっては、藤野喜一郎日記には「首途、講中一同鎮守社内へ集まり
御神酒を備、時銭致し夫より午後二時より発足、村方一同村塚迄送り」とあ
る。馬場房次郎日記には「鎮守ニテ追酒盛、金六円五十銭、樽壺本割合老人前
参拾弍銭六厘」とある。これらは、明治になってのものだが、江戸期は別当寺
の僧が道中安全の祈禱をし祝詞をあげたりお粥をしたに相違ない。集まった村
人には時銭が行われ、いざ出発と言う時は、村人は村境まで送って行った筈で
ある。

地名 地名は徒歩の時代の道や宿は、鉄道など乗り物の発達により、さびれた
り廃れたもの、また市町村制の変化により現在の地図では消えてしまったもの
が多い。

里程 次に里程だが、これは尺貫法で、一間は畳の長辺、一町は六十間約百十メートルと考えればよい。ただし、「十二月二十七日、森へ、三里、是より五十町一里なり」とあり、秋葉山から鳳来寺を回り、「十二月二十九日、新城へ、三里、中略、此所より三十六町一里始り」との記述がある。この間、森から新城までは五十町一里の計算である。このような所は道中何ヶ所もある。また始まりのわからない所などあり、正確には押さえ難い。これがどういう事なのか不明である。古い制の名残と考える以外にない。伊勢道は四十八町を一里と言うのは偽りで馬子駕籠かきの類のためにすることであると、ものの本にはあるが、江戸時代は三十六町一里が基本なのである。

宿料 宿名には本陣とか脇本陣とか格式のついたものは宿料は高い。宿には上・中・下の評価が付けてある。宿泊代を見ると、一行平均は

宿泊代	善左衛門	二百五文	菊次郎	百七十三文
宿泊代(弁当付)	〃	百七十三文	〃	百六十八文
昼食	〃	八十文	〃	七十三文

となつてゐる。計算の仕方でも多少異なるかも知れないが目安とはなろう。

橋銭・渡し賃 橋を渡るには現代の感覚では奇異に思われるが橋銭が必要で、無賃の橋の方が極く稀である。渡しは今殆どないが江戸時代は至る所であった。諸大名の時代ゆえ国防上もあつたのだから。十一月二十七日に「此間二天竜川増水に付十八文出し候」次の日「いたじき川増水に付、越ちん無掬二十四文出し候」とあり増水の際は増賃を必要とした。それどころか、大雨の後などは「川止め」と言つて通行禁止になりやむなく逗留するはめになる。

茶代 一月二日の晩は桑名の堺屋三右衛門方に泊まつて酒肴を少々もらい「茶代金一分置」とある。道中には茶屋が要所要所にあり休むと茶代を置いた。通例は波銭(四文)一枚あるいは二枚のようであるから、この金一分は高額だ。一両は四分だから公定では千文だが弘化四年の記載はないが一両が天保十三年六八三〇文、嘉永六年が六三〇〇文であるので中間六五〇〇文で計算すると一分は一六二五文である。これを三十九人で割ると一人前四十二文となる。

『嵐山町博物誌調査報告』第一集掲載の小林菊次郎「伊勢・中国道中日記帳」には、「尤此宿八三日市より御迎札建置、無掬泊り」とある。この善左衛門の

日記にも「伊勢三日市様より御迎札建講之衆連中」とある。要するに御師の配慮があるので顔を立てたのだ。宿泊料も一八八文と高い。ヨンドコロナイの日記には中村とある)が出迎えた。ここには宿名はないが菊次郎の日記で秋田屋浅右衛門とわかる。一八七六(明治九)年の藤野喜一郎日記でも「新茶屋、当所秋田屋浅右衛門方へ三日市御師より迎え札あり」とある。善左衛門日記には、この新茶屋でも酒肴はじめ種々御馳走になるとあるが、旅籠代二百文とやはり高い。

御師 もともと伊勢神宮は私幣禁止で天皇の外は直接伊勢の神に供物を捧げることが出来なかつた。それがゆるんで権祢宜が御祈禱師として祈りを捧げるようになる。これが御師(オシ・伊勢ではオンシ)であり、御師とは御祈禱師の省略形であるともいわれている。御師は伊勢に居を構え権祢宜(太夫)であるところから何々太夫と名乗り、地方の信者(檀那)と結び付き師檀關係を結んだ。毎年定まった時期に伊勢講を訪問し大麻(大麻とお袂いのお札)と伊勢曆を配り、御祈禱料として御初穂(その年始めて収穫した穀物を神仏に奉るもの、その代わりとして金銭、米などを包むこと)を受け取る。また音物と呼ぶみやげ物として伊勢名産の白粉、売葉、墨、紙、海苔などを持参したがこれらは商品として売られることも多かつた。御師は講の人たちに歓迎され、講元の家や所定の伊勢宿に泊まり、そこに講中を集め、大神宮の御利益を説き、五穀豊稔、家内安全を祈り、参宮の段取りを決めた。参宮一行が伊勢に着くと太夫が丁重に出迎え御師宿に案内する。ここで御供料、神楽料、神馬料が奉納されるがみな御師の収入となつた。神楽料は太々神楽、大神楽、小神楽、添神楽で太々神楽は『膝栗毛』によれば「やすくしても金十五両」とある。先ず御供祈禱をし、米や銭を蒔き、次に神楽を奉納し銭を蒔いた。この神事が終わると新鮮な海の幸と銘酒で大宴会を開き翌日から内宮外宮を参詣し、二見ヶ浦や、朝熊山など近辺の名所見物などをし、精進落とし(肉食をしたり女郎買いなどをして精進の状態から平常の状態に戻ること。精進とは身を清めること)には、日本三大遊廓の一つ古市で遊んだ。大神宮のお札や掛け軸、その他伊勢の土産物を求めて帰路に着く。このように、御師は各地の信者たちに伊勢神宮の大

をくばるだけでなく、伊勢参宮にやってきた信者たちの滞在中の世話をする大切な役割をしていた。ちなみに、嵐山町辺を「縄張り」にしていたのが三日市太夫次郎であった。

伊勢神宮の御師の制度は、一八七二（明治四）年、檀家廻りや大麻の分配禁止となり廃止となった。その時の挨拶状が御用留に残っている。内容は、壇那廻りは駄目になったが参詣の際は尋ねて欲しい。委細は手代の徳田芳三に聞いて欲しい。また太夫次郎改め、三日市公好となったということである。しかし、安藤金藏の道中記には、一八九八（明治三十一）年旧正月十三日の所に「伊勢山田三日市太夫次郎宅三夜泊り」とある。一九〇六（明治三十九）年大野角次郎メモには「山田泊料六十五銭」である。

御師がいたのは伊勢神宮だけではない。一月十三日本宮の所に、「武州比企郡八尾崎太夫様へ、中略、尾崎太夫より案内出候共頼みに不及」との記事がある。尾崎太夫も御師であろう。一月十八日、大雪の中を高野山へ向かって花坂で「大楽院より迎ノ案内出し置、酒肴ニテ馳走致し案内出し候、中略」とあり、伊勢でも、本宮でも、高野でも、この一行の来る情報を正確に把えて出迎えているのだ。

宮川 伊勢では、一月五、六、七日と御師三日市太夫次郎宅に泊まり駕籠に乗って内宮外宮は勿論、あたりを見物し、酒肴で至れり尽くせりの歓待を受けた。七日太々講修行し、八日午前中馳走を受け昼過ぎ駕籠で宮川まで送って貰い、ここで帰国する者、中国へ行く者、西国三十三ヶ所へ行く者とそれぞれの方向に向かって出発して行く。善左衛門日記には記載がないが菊次郎日記には「宮川にて西国の者に相別れ候」とある。藤野喜一郎日記には宮川の所に「今朝ハ御師より酒宴之馳走に預り、漸午後三時頃発足思々に相分帰国の者あり。我等ハ拾式名（一行三十六名中）ニテ西国路へ趣」とある。馬場房次郎日記には「伊勢宮川ニテ中国、西国追分」とあり、一行十九名で十五名が中国へ、四名が西国へと別れたと云う意味で追分とは分岐と言う意味である。

難所越え 一月十五日田辺で大和屋甚兵衛の所で峠難所仕舞祝として餅をついている。那知から大雲取小雲取、多数の峠特に大坂峠の難所を通り切れた喜びが伝わってくる。

後の二月二十一日、西国三十三番美濃国谷汲山華嚴寺での「未の正月八日より伊勢出立。同二月二十一日九ツ時札納切」という記述、これは短い文章だが筆者の感慨いかにばかりか。

農業に関する記載 次の印南では、「此辺畑仲ニ梅木数不知」の記載がある。一月十六日湯浅の所に「みかん、だいたい、きんかん名物なり」とあり、一月二十六日玉水では「畑中に梅木多し」と書いてある。旅はいろいろの情報をもたらしただろうが、農業に関する記載がまことに少ない。農閑期のせいだろうか。

木賃宿 一月十九日瀧ノ畑で「関屋吉五郎殿大じんには候得ども木賃にて止宿いたすべきよう申され候ひて」とある。これは要するに宿を無心した所、宿泊の原形の宿と食事を作る焚木と道具代を払って自炊せよと言うことだ。諸色とは炊事道具や薪代で一人前六十文、白米一斗一人前十八文で計百四十八文であった。木賃とは木銭で、薪代と言う意味だ。木賃宿は一般には安宿で江戸時代は各所にあった。だがこれは木賃宿ではなく大尽とあるから資産家だ。この記載は面白い。道中は案内記などで不自由しないだろうが、宿泊は思い通りに行かない場合もあった。丹波、丹後、摂津の方でも難渋する。二月二日西国三十一番善峰寺へ向かう。この間七里強山の中、途中「との畑」と言う所に茶屋が一軒あるだけだ。現在の地図でも道に迷ってしまう。二月十四日晚、追入で「岸田屋栄助殿へ泊り、中略、此処ハ宿はくちにて差し宿はむだなり」の記述がある。くじ引きで希望の所へ泊まれないと言うことであろう。

平野屋佐吉 宿については、この人たちも大坂で平野屋佐吉へ泊まる。時代は下るが藤野喜一郎日記を読むと、桑名を過ぎ「さや」という所で市川や次郎平で休むと「大坂宿引多シ、中ニハ大坂大和や弥三郎より菓子杯進物に預り、京都扇や正七より酒宴に預り」更に行き六軒では「当初の大坂平野や手代宿引、三十五名之者へ酒の馳走に預り候」とある。

荷物送り 平野屋佐吉で十三名は荷物を近江の米原へ送ってもらう。「うん賃凡二十計り一貫目長百文懸なり」とある。二月二十日、江州米原で問屋磯辺九兵衛からその荷物「蔵敷を一人前十文ヅツ出し」受け取っている。二月二十六日岡田で上田まで荷物を送り二月二十九日上田で荷物を受け取っている。この

頃になると街道は整備され不自由はなくなっている。荷物を送っていないところは記述はないが馬などに頼んだのだろうか。

酒手 一月二十八日「舟に乗り十三人ニテ五百文ニテ酒手なし」の記載がある。駕籠かきや、馬方船頭などは酒手をねだる風習があった。

四国への船賃 二月五日晩高砂より丸亀に向かう。舟は風任せだから記述を読んでもらうことにして、舟賃だが、菊次郎らは一月十六日晩大坂平野屋佐吉方で、金毘羅舟往復金沓分と決めている。善左衛門らは二月五日晩、高砂のつりや伊七郎方で船賃は銀七匁と決めている。前に出した計算でいくと金沓両が銀六十四匁二分、銭を六千五百文とすると銀一匁は百一文になる。すると菊次郎らは一千六百二十五文、善左衛門らは七百七文となり距離は高砂の方が近いが、それにしても倍以上なので、やはり金毘羅舟は大坂から船出するのがメイプルトかと思われる。

帰村 三月四日、荷物は馬を頼んで運び、駄賃二朱（一朱は沓両の十六分の一、四百六文ほど。従って一人前六十三文ほど。）を払い、稻荷町万屋で「わかれの酒肴昼食いたし、一人前百文、夫より出立・中略・下向仕候」とある。

馬場房次郎日記には、小前田の木志屋で泊まり翌日、今市・二里、奈良梨・十九丁「四月四日、明石屋より村方へ人出立」とある。菊次郎にも善左衛門にも記述はないが、帰村を連絡して村境まで村人が出迎えたのに違いない。運命共同体では暇乞いや送り迎えは当たり前前の事である。

土産 土産についてみると、最初に記した吉田・小林武良家文書二六「大山・富士山・善光寺・入湯・其他神参り他よりもらひ土産物覚帳」を見ると「伊勢大神宮参詣土産 辰二月十九日 富田 又左衛門」として、

- 一 釵拂 沓本
- 一 金毘羅御札 沓枚
- 一 秋葉山御札 沓枚
- 一 広ざん前掛ケ 沓筋
- 一 びろふとう半いり 沓筋
- 一 大風呂敷一ばん 沓枚
- 一 ちりめんの角金ちやく 沓ツ

一 扇子 沓本

一 いかみ 沓枚

一 かし 沓包

とある。この辰は安政三年丙辰、一八五六年と思われる。「びろふとう半いり」はピロッド半襟である。又右衛門は農閑期に秋葉伊勢中国金毘羅のコース（善光寺は不明）を旅したのである。

費用 さて善左衛門日記に記されている金銭は、銭十六貫二百二十一文、金一分、銀六十三匁である。これは約金三両三分ということである。しかし、これには日々の茶代、小遣い、御師の太々神楽の奉納料や諸社奉納費用など都市での遊樂費、それと親戚や近所への土産代などの大口が記されていない。この頃になると生活必需品は勿論一切の生活用品嗜好品など手に入れることができた。また泊まり部屋などに訪問販売まである。したがって街道での消費は人によつては多かつたのではないか。

最後に半紙百二枚二ツ折りに書かれたこの中村善左衛門の道中日記は、最初の書き出しを見ると、『博物誌調査報告』第一集掲載の道中日記の筆者小林菊次郎と二人で一緒に書いたのかと思われる程似ているが、次第に頁を追うごとに善左衛門の記述が詳細になっていく。おそらく案内記などを参考に自分のメモと合わせ、作りあげたものだろう。勿論これに先行する日記があったと思われるが更に質を高めたのであろう。それにしてもこの日記は以降旅をする者に貸し出され大いに重宝されたに違いない。前掲の藤野喜一郎日記、馬場房次郎日記を見ると前者は半分程だが、後者は全く同じコースを辿っている。日数も一日しか違わない。何も記載はないが偶然の一致なのだろうか。

「弘化三年 道中日記」行程および費用

月	日	地名	川越 (舟)	川越 (橋)	宿名 (宿泊)	宿名 (昼食)	費用	札所・名勝	備考
		勝田							立春2月4日
		菅谷			紺屋平兵エ		224		
12.20		今宿							2月5日
		北町屋							
		高萩	8			中村屋寅藏	72		
		扇町屋							
		箱根崎							
		拝島	24	24					
		八王子			亀屋喜左エ門		200		武相国境
12.21		橋本							2月6日
		田名	16			松坂屋普右上門	72		
		萩野							
		小野							
		十日市場	24		熊野屋清右エ門		184		
12.22		最乗寺	12			大和屋源兵エ	72	道可大権現	2月7日
		塚原						名薬ういろ	
		小田原							
		湯本			福住九藏		224	名湯	
12.23		畑				栴屋平七	100	箱根権現.100文	関所
		箱根							相豆国堺
		三島						三島大明神三重塔	
		沼津							
		原			香貫屋重郎右エ門		172		
12.24		吉原	24						2月9日
		蒲原				柏屋			
		油井							
		奥津						清見寺石五重ノ塔	
		江尻			大竹屋平七		180		
12.25		九能山						久能山五重塔 200文	2月10日
		府中	28			魚屋銀次郎	72	浅間大神宮社 4文	
		鞠子							
		岡部			柏屋良平		180		
12.26		藤枝	140						2月11日
		島田							駿遠国境
		金谷							
		日坂				東屋清藏	72		
		掛川	12		手島屋平太郎		180		秋葉山道へ
12.27		森							50町一里
		三倉				小林屋源五郎			
		一ノ瀬							
		小なら安	2						
		いぬい							
		ふもと						門前	
		秋葉山						秋葉大権現	
		戸倉			柳屋銀次郎				
12.28		さい川							2月13
		石打							
雨天難		熊村							
		大平							遠三国境
		粟山							
		大野	24						
		鳳来寺						鳳来寺三重塔6文	
		角屋	5		柏屋与七		172		
12.29		新城							2月14日
		大木				おわりや一右エ	64		
		御油				若松屋源左エ門	180		東海道
正.朝		赤坂							2月15日
		藤川							
		岡崎							
		池鯉鮒				海老屋権兵エ	64		三遠国堺
		鳴海						四観世音大堂三重塔	
		宮			山城屋吉左エ門		180	熱田大明神	
1.2		名古屋							2月16日
		甚木寺						甚木寺三重塔	
		津島	75, 24			間屋源藏	100	牛頭天王	尾勢国堺
		桑名			堺屋三右エ門		188		
1.3		四日市							
		神戸							

	白子				つゞみや新吉	72		
	上野							
	津				若狭屋六右エ門	180		
1.4	雲津	12						
	月もと							
	六軒茶屋							
	松坂							
	くしだ	2	1					
	新茶屋				秋田屋浅右エ門	200		銭を蒔く？
1.5	小畑							
	川崎							
	くじ本							
	式軒茶屋	12						
	二見茶屋					角屋六右エ門	二見大神宮	銭を蒔く
	山田				三田市丈夫次郎様			々
1.6								
					三田市大夫次郎様 (三田市大夫次郎 方)		虚空蔵 五重塔 太 修行	2月21日
1.7								
1.8	川端							26人と別れ る13人で行
	原				若松屋儀三郎	140 (弁付)		
1.9	あふ風							2月23日
	栃原							
	下楠							
	あを							
	見せ	8						
	野尻							
	阿曾							
	柏野							
	崎村				江戸屋甚蔵	140 (弁付)		
1.10	駒村							2月24日
	間弓	6						伊 紀 国 堺 五 十 町 一 里
	長島							
	三浦							
	馬瀬							
	古本							
	尾鷲				浜田屋利八	148 (弁付)		
1.11	三木	44						2月25日
	曾根							
	二鬼島							
	新鹿							
	波田次							
	大とまり		2					
	木ノ本	2			山本屋文吉	168 (弁付)	海岸名所 親しらず子しらず など	
1.12	有馬	3						2月26日
	阿田和							
	井田	25						
	新宿						熊野権現 山後銭33文	
	みわ崎						うぐい浜那知黒石	
	宇久井							
	浜ノ宮				いかげや神右エ門	200 (弁付)		
1.13	那知山						西国一番那知山 (青岸渡寺) 120	2月27日
	小口	3						
	受川							
	本宮				尾崎大夫様	200 (弁付)	熊野権現十二社権現 二重塔	
1.14							名湯6文しめはりある湯 (24文)	2月28日
	湯川							
	野中							
	近露							
	高原							
	芝村				はりま屋伝助	180 (弁付)		コレヨリ三 十大町一里
1.15	上三栖							3月1日
	田辺	8			大和屋甚兵エ大 難所仕舞祝餅つ	130		
	南部	5					梅数知レス	
	切辺							

	印南	3, 8		しん屋左七		164 (弁当付)	天音山道成寺三重塔開帳100文	あんちん清姫
1.16	原谷							3月2日
大雨難	井関							
	湯浅	8					二雲雀山得生寺中将8文	密柑金柑橙
	宮原			山形屋平蔵 悪		165 (弁付)		
1.17	加茂谷						藤白権現 鈴木 亀井の石塔	ココまで熊
	藤白	184 (13人) 1人15文と扱う			富士屋次郎兵エ		西国二番紀三井寺	
	和歌浦						いもせの拜殿 王津島明神 東照権現 三重塔等	
	若山							
	八軒屋	8						
	川那辺							
	西坂本						根来秘密伝法院 開山興教大師廟等 二重塔 長田観音寺三重塔	
	粉川寺			車屋文蔵 悪		172 (弁付)	西国三番補陀路山粉川寺	
1.18	麻生津	12						3月4日
朝より大雪	志賀							
	花坂							
	大門						高野山金剛峰寺	
	奥院			大楽院		400	弘法大師廟等	
1.19								3月5日
大雪	紙屋				森屋甚助	75		
	慈尊院						大師母廟 二重塔	
	大畑							河 紀国堺
	瀬の畑			百姓 関谷吉五郎		148		
1.20	槇尾山							
	横山							
	信田森村						西国四番施福寺 弘化二年焼失	3月6日驚駭
	大鳥							
	堺						くずの葉稻荷大明神 大鳥大明神 (和泉一ノ宮)	
								摂河和国堺
	大坂			定宿 平野屋佐吉				
1.21	々							3月7日
				定宿				
1.22	々				平野屋佐吉			3月8日 摂河国堺
	平野	6		長平屋安兵エ 悪		200 (弁付)	大念仏大寺 融通念宗の本山である。	
1.23	葛井寺						西国五番河内国葛井寺 寺領五石 真言宗	3月9日
	道明寺						天満宮	
	古市	2					大黒天 (日本一) 通法寺	
							源家菩提所	
	上太子				外屋藤右エ門		聖徳太子妃 三骨一鷹	
	山田							和河国堺
	当麻寺						当麻寺 真言浄土兼學 寺領三百石 三重之塔二ツ 藕絲浄土曼陀羅等開帳一組120文 冥加銭一人6文	
	新座							
	御所							
	土佐			田中屋惣兵エ		172 (弁付)		3月10日
1.24	壺坂						西国六番大和壺坂寺 千鉢仏羅漢 三重之塔	
	越部	8						
	六ツ田						千本校	
	吉野						吉野山金峰山寺 寺領千石 寺中百軒 案内2文 諸宝物開帳6文	
		8						
	上市				昼食			
	ちまた							
	瀬ノ畑							
	瀬ノ畑分							
	四軒茶屋							

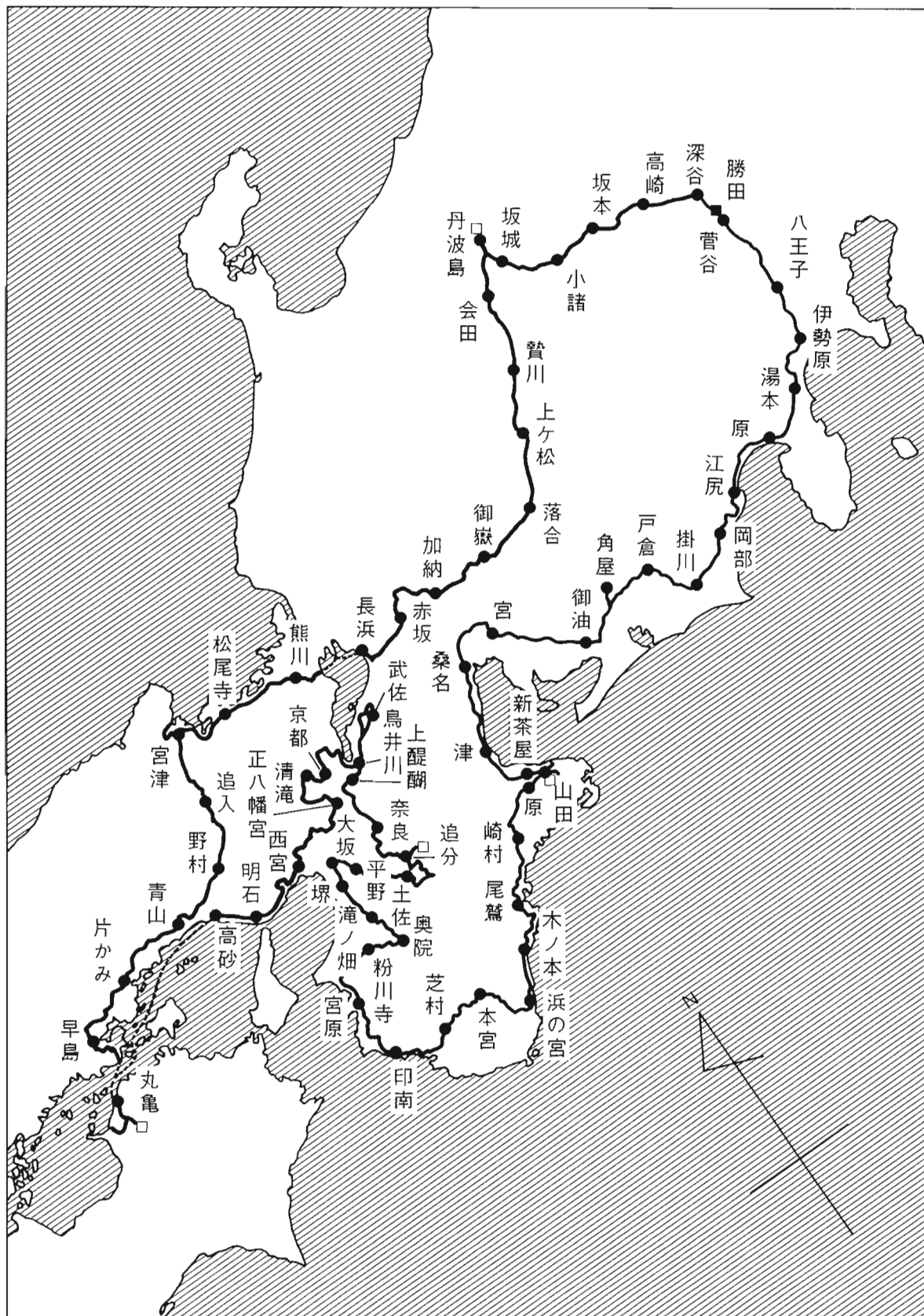
	多武峰					寺院四十二ヶ寺.寺領三千石.十三重之塔	
	岡寺					西国七番大和国岡寺.真言宗滝蓋寺.二十石	
	あすか					飛鳥太神宮八十未社	
	桜井						
1.25	追分		角屋十次郎		156 (弁付)	刀鍛冶菊一文字	3月11日
	黒崎						
	長谷寺					西国八番大和国長谷寺.鳥居焼失	
	追分					寺領三百石.三重之塔	
	金谷					三輪明神	
	三輪						
	田原本						
	龍田					龍田大明神	
	法隆寺					法隆寺.五重之塔	
	小泉						
	郡山						
	西ノ京					薬師寺	
	唐招提寺					唐招提寺七堂伽藍12文	
	菅原天神					菅原道真誕生地	
	西大寺					西大寺	
	法花寺					法花寺.尼寺	
	不退治						
1.26	南都		小刀屋善助上上		200 (弁付)		3月12日 和山国堺
	木津	12					
	玉水					梅木多シ	
	長池						
	しんでん						
	宇治					平等院	
	三宝寺					西国十番山城国三宝寺黄辟山万福寺寺領四百石.稀ナル大伽藍ナリ	
	黄辟山						
	六地藏						
	下ノ醍醐		扇屋伝右エ門		165 (弁付)	諸堂.五重之塔	3月13日
1.27	上醍醐					西国十一番山城国上醍醐寺寺領三千石	
	岩間					西国十二番近江国岩間寺寺領三十石	
	石山寺					西国十三番近江国石山寺二重塔.祭式部ノ間等	
	勢多						
	草津						東海道.中仙
	守山	10					
	安村						
	鏡	6					
	武佐		近江屋喜十郎		164 (弁付)		
	観音寺					西国三十三番近江国観音寺	3月14日
1.28	八幡町					八幡宮	
	長命寺	13人 500文 (1人 39文)		藤屋平吉		西国三十一番近江国長命寺.寺領百石.三重之塔	
	植村						
	田中						
	二保						
	安村						
	森山						
	草津						
	勢田						
	鳥井川		松屋清左エ門		172 (弁付)		
1.29	大津						3月15日
	三井寺					西国十四番近江国三井寺	
	唐崎一本松					寺領五百石.弁慶引つり鐘	
	東坂本						
	西坂本					東照宮御霊屋.三王権現三社	
	比叡山					根本中堂.戒壇堂.伝教大師廟元三大師廟寺院百軒寺領五千石	大雪在り
	八瀬						
	大原						
	鞍馬					本堂焼失.仮堂.宝物間帳6文	
	貴布祿					貴布祿大明神	

	上加茂					加茂大明神未社.皇太神宮未社	
	京都		筑前屋治郎左エ門		200		
1. 30	六角堂						3月16日
	革堂						
	清水寺			吉野屋	100		
	今熊野						
	六波羅堂		筑前屋次郎左エ門		400 (2日分)		
2.1							3月17日
大雨難							
	清涼寺					清涼寺 寺領百石 剃力碓 硯ノ産地	
	清滝		外屋清助		164 (弁付)		山坂難所
2.2	愛宕山	8				奥院勝軍地蔵太郎防大権現	丹城国堺 3月18日
	亀山						
	穴太寺					西国三十一番丹羽国穴太寺	山道甚難儀 城丹国堺
	との畑						
	善峰寺					西国二重番山城国善峰寺 寺領二百石.二重之塔	
	あお						
	山崎	16					
	正八幡宮		ちとせや弥兵エ		180 (弁付)	御本社正八幡宮 護国寺 二重之塔二ツ	
2.3	橋本	16					3月19日
	桜井						
	芥川						
	惣持寺					西国二十二番津ノ国惣持寺	
	郡山						
	勝尾寺					西国二十三番撰津国勝尾寺	
	みのを					みのを大滝.みのを寺	
	弁才天社					大社なり	
	池田					諸白名酒 四五十軒	
	中山寺					西国二十四番撰津国中山寺	
	小浜	3					
	西宮		京屋多兵エ 悪		164 (弁付)	西宮太神宮寺領八十石.酒蔵多シ	
2.4	いばら住吉					住吉大神宮	3月20日
	上野						
	摩耶山					十一面観音	
	布引滝					男滝.女滝.生田森	
	神戸	8				湊川.楠正成ノ墓アリ	
	兵庫					築島来迎寺.一組100文(1名10文 トル)開帳.真光寺平清盛墓アリ. 十三重ノ石塔	
	須摩						播津国堺
	垂水					仲哀帝遺跡	
	大倉谷					忠度塚アリ	
	明石		木屋与兵エ		180 (弁付)	柿本人丸大明神.社領五十石	
2.5	大久保						3月21日 (春分)
	長池						
	別府	3				住吉大明神	
	浜宮天萬宮					浜宮天萬宮	
	尾上	6				尾上社住吉大明神	
	高砂			つり屋伊七		天王社御朱印三十石	
	石ノ宝殿					大石子高御座.焼失仮屋	
	曾根			夕食.つり屋伊七	108	曾根天満宮	
	高砂						
2.6							3月22日
2.7	(中島)						3月24日
2.8	丸亀						
	金毘羅山			森屋喜三郎	100		3月25日
	普通寺						
	弥谷寺						
	屏風が浦						
大雨	丸亀		佃久田屋金十郎		172		
2.9							3月26日
2.10							3月27日
	日比					小倉帯名物	
	瑜伽山			亀屋富八		備前国瑜伽山蓮台寺.瑜伽山大権 現.金毘羅大権現.社領五十石二重	
	あまき						備前.中国堺

	早島			井溝屋恒吉		200 (弁付)		
2.11	にわせ							3月28日
	備中一宮 吉備宮						備中一ノ宮 吉備大明神大社	
							社領六十石 (今ノ吉備津神社)	備前.中国堺
	備前 吉備 宮						備前一ノ宮 吉備宮大社	
	岡山						社領三百石 (今ノ吉備津彦神社)	
	藤井							
	入市	24						
	印遍						備前焼名物	
	片かみ			大黒屋増吉 上々		180 (弁付)		
				あびすや林次郎 上				
				々と分宿				
2.12	三ツ石							前.播国堺
	なしが原							2月29日
	宇祢							
	鶴亀							
	片島							
	正条	8						
	いかるが							
	青山	3		米屋又四郎 中		164 (弁付)		
2.13	西坂本							3月29日
	書写山						西国二十七番唐 国書写山	
雨降難							七堂伽藍 寺領八 百三十石	
							雨降り難儀	
	東坂本	3						
	姫路	16					革細工	
	法花山						西国二十六番播 唐国法花山	
							寺領二百二十石	
							三重之塔	
	東坂本						松野が原	
	はんじょう							
	高岡	10						
雨降難	野村			扇屋源右エ門 中		170 (弁付)		
2.14	左保社						左保大名神 社領12石	3月30日
雨難	山田							
	馬瀬							
	坂本							
	清水寺						西国二十七番播唐国清水寺	
							二重之塔	播.津.丹国堺
	市原							
	古市	2						
	追八			岸田屋栄助 下下		160 (弁付)		
2.15	国料							3月31日
	大たり							
	福知山	37						
	河守							
	外宮						四十末社アリ	
	内宮						八十末社アリ	
	仏性寺材						大江山 (案内72文)	
	宮津			角屋嘉四郎 上		172 (弁付)	丹後縮綿名物	
2.16				ココニ荷物ヲ置キ成 相寺へ				4月1日
小雨	切戸文殊	6						
大雨難	江尻							
	相国寺						西国二十八番丹後国成相寺	
大雨	宮津			鶴記		72 (弁付)		
2.17	くん田							4月2日
大雨難	山良	4					三庄大夫屋敷跡 国分寺	
	中山						安寿ノ宮.八十八川落合	
	田辺							
大雨	市場							
	吉坂							
	松尾寺			大雨.ヨンドコロナク 京屋宗五郎 下々		148 (弁付)	西国二十九番丹後国松尾寺 寺領 二十一石	
2.18	高浜							4月3日

雨難	本郷								
	小浜								二月堂へ水出ル所 瑪瑙細工
	遠敷								
ハツヨリ	比笠								
大雨	熊川			丹後屋七左エ門 中		170 (弁付)	関所アリ		若 江国堺
2.19	保坂								4月4日
	追分								
	今津				木綿屋清兵エ	120			
	竹生島							西国三十番近江国竹生島	
								宝物開張8文 寺領三百石	
	長浜			あめや善兵エ 中		180 (弁付)			
2.20	米原								4月5日
雨									
	醒井							日本武尊腰掛石	
	柏原							伊吹山艾 (モグサ) 名草	美江国堺
	今須							関ヶ原戦死ノ塚アリ	
	関ヶ原							合戦場 熊坂長半見物ノ松	
	重井								右美濃路 左木曾路
	背葦							惠源太義平 義平 朝長 石塔アリ 万 屋長者 屋敷跡	
	赤坂			玉屋新蔵 上		148 (弁付)			
2.21	白石								三十三番谷 汲寺へ
	坂之下							新観音堂 観音足跡石 念仏池	4月6日
	谷汲山							西国三十三番美濃国谷汲山 家根 赤銅ぶき 寺領四十石	西国札所完 全参詣
	山口							あみだ寺	
	ぎふ							金物名物 織田信長城跡	
	加納			煙草や九蔵 中		160 (弁付)			木曾路へ戻
2.22	鵜沼							勝山岩穴観音	4月7日
	太田	52							
	伏見								
	御			銭屋源左エ門 上		148 (弁付)	薬師堂大堂アリ		4月8日
2.23								弘法大師かじ名石	
	細久手								
	大久手							はい焼餅名物 柳細工	
	大井								
	中津川							太神宮誕生ノ湯	
	落合			猪口屋五左エ門 上 (13人で茶代100文出 ス 1人8文)		148 (弁付)			
2.24								狐コウヤク	此所より木 曾路
雨	馬籠							栗赤飯	信美国堺
	妻籠							今井四郎兼平城跡アリ	4月9日
	三留野								
	野尻							十二色漬物	
	須原							蕎麦名物 臨川寺浦島太郎 名石 浦島社 (案内賃1人5文)	
	上ヶ松			伊勢屋伝兵エ (茶代 100文置ク 1人8文)		148 (弁付)			
2.25	福島				松原屋万蔵ニテ 休 餅安シ				4月10日
	宮城							木曾義仲城跡	
	藪原							木櫛名物	
	奈良井							重箱名物	
	貫川			藤野屋畿蔵		248 (弁付)			
2.26				夕食 蕎麦 朝 御膳	宿引キ悪シ 同上				4月11日
	本山								
	洗馬								善光寺中仙 道別レ
	江原								
	村井								
	松本							太物類	
	岡田								
	刈谷原								
	会田			問屋善左エ門		140 (弁付)	弘法大師堂		
2.27	菅柳							秩父坂東西国百番	4月12日

	おミ					火打石 うばすて山	
	稲荷山						
	篠野					川中島古合戦場	
	丹波崎	46	14	ふじや平左エ門 上 上 (13人テ茶代200 文出ス 1人16文)			
2.28	普光寺	46	14	寺領千石 ソノ後宿 ニ戻り			4月13日
	丹波崎			戻り			
	篠野追分	22		戻り	ひしや次次郎		
	やしろ						
	下戸倉						
	さかさへ			本陣中沢四五右エ門 上上 (12人テ茶代200 文)	172 (弁付)		
2.29						村上義清墓	4月14日
	上田					太物類	
	うんの						
	田中						
	小諸			本陣上田字源治 上	180 (弁付)	浅間山別当真楽寺へ二十五町	
3.1	追分					遊女押売アリ	中仙道本道
	番掛					売女多シ	4月15日
	かる井沢					臼井峠熊野権現五社	上信国境
	坂本			山二屋文兵エ 上上	200	売女多シ	
3.2	妙義山						4月16日
	中ノ岳						
	ひやの久保					麻類網引あみ馬はづな	
	安中						
	松鼻		8				
	高崎		8			巾着糸織帯	
3.3	倉ヶ野						4月17日
	新町					菊稲荷大明神	上武国境
	本庄					岡部六弥太忠澄石塔	
	深谷			近江屋彦右エ門	232		
3.4					稲荷町万屋	100	4月18日
	田中村	12					
	勝田村						3月4日帰宅



富岡寅吉日記

一九三九（昭和十四）年

（嵐山町大蔵三二八番地 富岡寅吉家文書）

凡 例

◇嵐山町大蔵三二八番地に在住する富岡寅吉氏は、一九三九（昭和十四）年一月から今日まで五十八年間に渡って日記を書き続けている。

これらの日記は一九九一（平成三）年三月「嵐山町まち一番」に認定された。本調査報告には日記の最初の一年分、一九三九年一月から十二月までを掲載した。なお、本稿の日記本文に使用した富岡の字は日記の原文にしたがった。

◇この日記は、博文館発行『昭和十四年 当用日記』（新中形奥付、五十銭）に書かれたものである。一日一頁で、本文の他に記入欄として「天気」「寒暖」「豫記」「発信」「受信」欄があり欄外にその日の歴史上の出来事が印刷されている。編集に当たって、「天気」「寒暖」は、その日の日付・曜日の後に配置した。「寒暖」には五月十五日から八月三十一日までその日の気温が記入してある。七月二十五日以降は一日に二つずつ記入してあるが、計測した時間等は不明である。本文はペン書きの日と、鉛筆書きの日とがあるが区別していない。「豫記」「発信」「受信」は日記本文の後ろに（豫記）（発信）（受信）として印刷した。「豫記」は、すべてではないが欄外のその日の出来事をそのまま写して

いる場合もある。「発信」「受信」は筆者が葉書や手紙を出したということではなく、家族から出された（または家族宛の）郵便の覚えである。いたずらがきの部分は「落書」と記した。日記巻末の「金銭出納録」「住所人名録」「手控」は省略した。

◇頁欠落部分の天気については、菅谷村役場『当宿直日誌 昭和十四年』より補足したが、三月二十八日については不明である。

◇注は日記本文の後ろに日毎につけた。誤字については初出の部分のみ注で訂正した。また単なる書き損じと思われるものは本文を訂正し、読みやすくするために、句読点をつけた部分もある。注では敬称は省略した。

◇当時の菅谷村には、菅谷尋常高等小学校と鎌形尋常高等小学校の二つの小学校があった。寅吉少年の通っていた菅谷尋常高等小学校は一九三九（昭和十四）年九月二十八日に菅谷第一尋常高等小学校が改称したものである。同校は一九三五（昭和十）年十二月二日、類焼により焼失し、一九三七（昭和十二）年九月、現在の嵐山町立菅谷小学校の校地に新校舎着工、翌年九月一日より新校舎の使用を開始し、一九三九（昭和十四）年三月三十日に本校舎新築落成式を挙行している。当時の菅谷村の教育状況については資料一に一九三九（昭和十四）年度菅谷第一尋常高等小学校「学校一覧表」と菅谷村「学事年報甲款」（共に抄録）を掲載した。本文に登場する菅谷小学校職員は、注においてその就任年月と退任年月を記した。

◇解説「富岡寅吉さんの日記」は、博物誌調査協力員・森山茂樹が担当した。玩具の写真は小川京一郎氏が撮影したものを使用した。その他は博物誌調査委員・稲田滋夫が編集した。最後に日記掲載について快諾をいただいた富岡寅吉氏に感謝申し上げます。

富岡家の家族構成

- 祖父 富岡林造 一八八〇(明治十三)年一月生。
 祖母 カツ 一八八一(明治十四)年一月生。
 父 富岡準三郎 一九〇二(明治三十五)年一月生。
 母 かね 一九〇二(明治三十五)年五月生。
 子 富岡寅吉 一九二六(大正十五)年九月生。||日記の筆者。
 守平 一九二八(昭和三)年九月生。
 まき 一九三〇(昭和五)年八月生。
 隆次 一九三三(昭和八)年八月生。
 いね 一九三五(昭和十)年七月生。
 みや 一九三九(昭和十四)年十二月生。
 しま 一九四三(昭和十八)年十月生。

この日記がつけられた一九三九(昭和十四)年当時の家族構成(年末時の年齢)は、祖父・林造(五十九歳)籠屋、祖母・カツ(五十八歳)、父・準三郎(三十七歳)農業、母・かね(三十七歳)、寅吉(十三歳・菅谷尋常高等小学校高等科一年生)、守平(十一歳・同尋常科五年生)、まき(九歳・同尋常科三年生)、隆次(六歳)、いね(四歳)、みや(〇歳)の一〇人である。

下段の写真は一九六四(昭和三十九)年頃の家族の写真である。写真の前列左より富岡準三郎・かね夫妻、林造・カツ夫妻、寅吉・スケ子夫妻、中・後列は左より富岡守平・好江夫妻、千装昭男・まき夫妻、富岡隆次・もと子夫妻、根岸邦男・いね夫妻、田宮幹夫・みや夫妻、岩下典世・しま夫妻である。



二月一日～一月八日 頁欠落

一月一日 日曜 晴 菅谷第一小学校で新年式。

一月二日 月曜 晴

一月三日 火曜 晴

一月四日 水曜 晴 近衛文麿内閣総辞職、平沼騏一郎内閣成立。

一月五日 木曜 晴 強風。

一月六日 金曜 晴 村決算会。

一月七日 土曜 晴 現役兵平沢西忠一歩兵二八聯隊、鎌形杉田俊三歩兵二八

聯隊出發。

一月八日 日曜 晴 現役兵菅谷根岸伴治、菅谷根岸一郎野戦重砲兵第八聯隊、鎌形山口猪之吉出發。午後一時二十一分、現役兵志賀武井治平出發。

一月九日 月曜 晴

今朝は早く起きて入営兵士をおくった。そして今日は学校の職始めである。半日で家へ帰り昼から車の後おしに行った。かれつ木を集めたりした。かへりに竿をひきづつて来た。先生にいろいろ話を聞いた。

*入営兵士を送る行事については資料二参照。

一月十日 火曜 晴

今日はずづかな日であった。今日から学校のぢげようを始めてした。

明日は手工でボール紙を使ふ。今日は学校帰りがおそかった。

一月十一日 水曜 晴

今朝はえりまきをして学校へ行った。体操の時に石拾ひをした。ボール紙が来なかつたので手工をしないでしまった。家へ来てまき、隆次、守と僕でぶつけをした。

*富岡まき。筆者の妹。一九三〇(昭和五)年生まれ。

*富岡隆治。筆者の弟。一九三三(昭和八)年生まれ。

**富岡守平。筆者の弟。一九二八(昭和三)年生まれ。

***めんこ。

一月十二日 木曜 晴

今朝は曇って居ても降りそうであったが晴天になった。学校で綴方の時間に良いのを読んで聞かせた。五時間目には自分自分で書いた。それからそうちをして家へ来たならなにをするひまもなかつた。ただ、隆次が相手になつてぶつけをした。子守もした。

一月十三日 金曜 晴

今日は良い日であった。朝は、しももふらなかつた。学校できゆうを良くするためにやくめんを作った。僕もそのなかまであった。隆次達とぶつけをやった。子守と一しょ。庭そうじはとん分しなくてもよいのだ。綴方はぶつけと言ふだけかいた。明日はだんごをなげるのだ。(豫記) 明日はだんごをなげる。

*当分。

一月十四日 土曜 晴

今日は三時間して家へ来た。さとうを買つて来た。家へ来て慰問文を書いた。だんごをひろつた。鬼ごとや取りっこをした。そして遊んだ。

*鬼ごと。

川越市相原芳太郎より地図購入費として百円寄贈される(菅谷小学校『学校沿革誌』)。

一月十五日 日曜 晴

今日は朝から良い天気だった。そして恒ちゃんとおとりに行った。ひるからともらいでぜにを十四せんひろった。鬼ごとをしてあそんだ。恒ちゃんが石拾ひのぜにをもつて来てくれた。

*小鳥とり。

**甲い。葬式。

***談：河原の石を拾って河原に積んでおく業者が取りに来る。一日で三十銭になったこともある。

双葉山、安岐ノ海に敗れ七十連勝ならず。

一月十六日 月 晴

今朝はともぬくとかった。学校へ行つて三時間して家へ来て鬼事をして遊そんだ。遠くの方へ逃げて行った。いろいろ銭をつかった。ぶつけをした。

(発信) 兵隊さんへ

一月十七日 火曜 晴

今朝は学校へ行くのが早かった。してけんとび鬼事をした。自治会をした。僕は黒板にむだがきをしない事を言った。家へ来て使へに行つた。子守もした。

一月十八日 水曜 雪

今朝は曇って居てぬくとかったが学校へ行つてから雪が降って来た。そして四時間して家へかえつた。そうぢはふかなくもよいのだった。家へ来て、からねこをつくつた。

*小鳥を捕る仕掛け。

一月十九日 木曜 晴

今朝は雪が大いへん積って居て学校へ行つてすぐ雪合戦をした。そして二時間つぶして五年以上全部で雪合戦をした。僕は逃げた。そしてそうぢをしてからのこつて学年会をして来た。きまったのが十四だ。あつた。

一月二十日 金曜 晴

今日もまたこの間の雪が残って居る。そして綴方の時に四五人よんだ。ぐぐわはゑだに小鳥よくかけた。今日はえびすこつだつた。そして三ちゃん*が松山へ行つた時のぜにをなした。子守もした。算術のしゅくだいをやつた。

*山下三三男。当時高等科二年生。

**貸した金を返してもらつた。

えびす講。

一月二十一日 土曜 晴

今日もまだこの間の雪がとけづにのこつて居る。学校は三時間して家へ来た。そして子守をし、うさぎのぜにをおばあさんに七十銭もらった。子守をした。

*富岡カツ。筆者の祖母。一八八一(明治一四)年生まれ。

一月二十二日 日曜 晴

今日は日曜日で半日子守をした。そして午後菅谷へ行つておぢいさんがはらがけと、僕の万年筆をかって来た。インキも二十五銭のをかつ

た。隆次を相手にぶつけをした。

*富岡林造。筆者の祖父。一八八〇(明治十三)年生まれ。

一月二十三日 月曜 晴

今日は学校へ行って五時間して来た。そして皆とぶつけをしたり、かくなっこをした。取りっこもした。子守をした。金井屋へはがきを買ひに行った。てうめんを*買った。読方てう。まきにがよう紙を買ってやった。

*かくれんぼ。

*帳面。ノート。

一月二十四日 火曜 晴

今日は学校帰りに菅谷家へ行って兔を買って来た。そして守と二人で兔の草つみをした。そしてほうじろを買ってさしこの中へ入れておいた。おばあさんから兔を一匹買った。

(欄外) ほうじろ

*鳥籠。

一月二十五日 水曜 晴

今日は学校へ行って五時間目に満州へ行った人に満州の話をいろいろと聞いた。とても長くて家へ来たら日がくれた。手工はしなかった。そしてけ出しをした。明日は野村と当番である。

(豫記) 明日は当番である

*石けり。

*野村修彦。同級生。

一月二十六日 木曜 晴

今日は早く起きて、ほうじろを外へ出して、当番だから野村の家へ呼ばありに行つて一しよに行つた。そしてそうぢをして、日記をつけて山へ行っていねを見た。

*筆者の妹。一九三五(昭和十)年生まれ。

一月二十七日 金曜 晴

今日もほうじろを外へ出して学校へ行った皆が当番なので僕は一人で学校へ行つた。そして六年生の皆とすまうをとつた。かたりまけたりした。けんちゃんちへかいこのたねを持って行つた。子守をしながら行つた。

*富岡健治方。当時高等科一年生。

一月二十八日 土曜 晴

今日も朝早く起来て、ほうじろを外へ出して学校へ行つた。そして月曜日からじげうは少しおそく始まるのである。そしておゆをくれると言つた。子守をした。隆次とぶつけをした。明日は日曜日である。

一月二十九日 日曜 晴

今日は日曜なのでほうじろを出して隆次とぶつけをしたり子守をした。そしてるすいもした。ほうじろをにがした。けだしをした。三やんが*あそびに来た。なわないをした。ほうじろはにがしたがすぐかまへた。さんざすつとばしてあるつた。明日はべんとうをあたたためてくれ

るしおゆもくれるのである。子守をした。以上

* 石けり。

* * 山下三郎。同級生。

一月三十日 月曜 曇

今日から学校は少しおそく始まった。そして四時間して成澤萬三さんのむごんのがいせんをむかへた。家へ来て母と麦ふみもした。そして父と二人でなわなひもした。なわなひはよる。そろばんを家でならった。

* 成澤萬造。一九三七（昭和十二）年十月十八日歩兵第一連隊に応召。一九三八（昭和十三）年九月二十七日中国江西省で戦死。

* * 富岡準三郎。筆者の父。一九〇二（明治三十五）年生まれ。

一月三十一日 火曜 晴

今日は三時間目には先生が居なく、そして四時間目に志賀の出征兵士を送くった。そし家へ来て子守をした。ぶつけもした。山へ行った。そろばんをならった。明日は神社参拝である。

（豫記）明日は神社参拝である。

* 滝澤長重。近衛輜重兵連隊応召。

* * 小学校では毎月一日は神社参拝を実施しており、大蔵の児童は大蔵神社を参拝している。

二月一日 水曜 晴曇

今日は朝早く起きて神社参拝してから学校へ行った。そしてすもうをした。明日は「もぎどういん」のためじげうをしないうで遠足のやうなものをやるのである。ぶつけをした。けだしもした。子守をした。

母と麦ふみをした。

車のしくるまょうちゃんやんが来た。將軍澤の出征兵士せいせんががいせんして来た。父はそのためお客おきに行つた。

（豫記）明日、「もぎどういん」のためこうぐんをする。

* 遠山の水車。兼子六平が遠山の山下家の水車を借りて経営していた。筆者の父の実家である。住宅は小川町下里坂下にあった。

* * 兼子六平の長男。兼子正三郎。

* * * 小久保幾喜。一九三七（昭和十二）年十月十九日応召。神社参拝。

二月二日 木曜 晴

今日はいかんの下の河らに集まってこうぐんをしてから家へ来て母とこうちの麦ふみをしてかへりに草つみをして来た。こうぐんの時はいかまがた八幡様で出征兵士、しょうびよう兵の武運長久を祈った。

二月三日 金曜 晴

今日は学校へ行って先生から伊勢参宮の話をきいた。さらに四時間目に校長先生せんせいからいろいろ伊勢参宮の話を聞かされた。家へ来て子守をした。明日は川島の鬼神様である。そして先生に、こうこくをもらつた。

（豫記）明日は鬼神様

* 石川逸郎。一九三八（昭和十三）年四月―一九四二（昭和十七）年三月勤務。

二月四日 土曜 晴

今朝は起きた頃は風が強よかったが学校へ行く頃はしづかになった。

そして三時間して家へ来て川島の鬼鎮神社へ年取りに行つてくぢを引いたら五等だった。そして家へ来て豆をまいた。伊勢參宮に二十三日頃行けそうだ。学校ですもうをした。以上

二月五日 日曜 晴

今日は日曜日なのでしやぶの家へ行って少しの間あたって昭二さんと二人で子守をしながら電気屋の方へ行って神社へも来た。ひるからひる休みにけだしをして山へ行って枝をはこび出し車の後をしをして来てまきひきをした。そして夜になると天候がわるくなつて、雪が降つて来た。以上

*山下昭二。同級生。

*談：現富岡家具のところに、送電線を見回る人の宿舍があつた。立春。二月五日から十一日まで日本精神発揚週間実施。

二月六日 月曜 晴

今朝起きて見ると、庭や畠が白かった。夕べから降り続いた雪も今朝は止んで居た。そして学校へ行って電気の時間に先生が電気を起す機械を持って来て電気の突けんをした。家へ来て、いねとぶつけをして、いねを子もつた。車のしょうちゃんが来て僕に五十銭くれた。以上

土岐埼玉県知事七郷村視察。「農村更生の体験を語る」座談会に出席。

二月七日 火曜 晴

今日は学校へ行く時に、ほうじろに水をくれて学校へ行った。そして、やすりとぶん鎮を磁石に作つた。そしてそうじをする時に栄一君に

まつて居てもらつて車へ行って、自転車を持って来た。その時に十銭もらつた。家へ来たらくらくなつた。以上

*吉野栄一。同級生。

二月八日 水曜 晴

今日も朝ほうじろを出して学校へ行った。行きながらぶつけをして行つた。そして五時間目の手工の時は先生がゐなくてはつた。家へ来て皆とぶつけをした。子守もした。まきに愛馬進軍歌を書いてやつた。今日はゆつぎ当番であつた。以上

*談：カルトン（紙入れ）の紙を糊ではる。

*愛馬進軍歌（久保井信人作詞・新城正一作曲・奥山貞吉編曲 一九三

八（昭和十三年十二月録音・翌年一月発売 歌手：霧島昇・松原操）

一、くに出でから幾月ぞ ともに死ぬ気でこの馬と

攻めて進んだ山や河 とつた手綱に血が通う

二、昨日陥したトーチカで 今日には仮寝のたかいびき

馬よぐつすり眠れたか 明日の戦は手強いぞ

三、弾丸の雨降る濁流を お前たよりに乗り切つて

つとめ果したあの時は 泣いて秣を食わしたぞ

四、慰問袋のお守札を 掛けて戦うこの栗毛

ちりにまみれた髭面に なんだなつくか顔よせて

五、伊達には佩らぬこの剣 まつさき駆けて突つこめば

何ともろいぞ敵の陣 馬よいななけ勝鬨だ

六、お前の背に日の丸を 立てて入城この凱歌

兵に劣らぬ天晴れの 勲は永く忘れぬぞ

一九三八（昭和十三年）年秋、陸軍省馬政課長・栗林忠道大佐の企画により、軍馬への関心を高めようと「愛馬の歌」を一般から公募することになった。選ばれたのは香川県高松の電力会社社員・久保井信人作詞、福岡県小倉の教師・新城正一作曲になる「愛馬進軍歌」。当時は作詞・作曲はふせられていて、ただ陸軍省選定となつていた。埼玉県では、一九三

八（昭和十三）年二月一日に県経済部長・学務部長連名で「愛馬進軍歌普及に関する件」（一四農収第四四七号）を出し、「不知不識の間に馬事思想を涵養するの一助に資する為」普及に配慮することを求めている。

二月九日 木曜 晴

今日も昭二さんの家の庭でぶつけをして学校へ行った。そして、すまふもした。綴方の時に子守りと言ふだいで書いた。そして家へ来て隆次とぶつけをした。以上

二月十日 金曜 晴

今日もほうじろを出して学校へ行った。そして学校へ行ってすもうだのきへんまだのした。僕はあたまにこぶを出した。家へ来て隆次とぶつけをした。明日きげん節である。以上

（発信）台湾*

*騎馬戦。

*富岡丑三。台湾の親戚をたよって働きに行っていた。



富岡丑三

二月十一日 土曜 晴

今日も朝から静かな日であった。そして学校へ紀元節なのでにもつはもって行かないでめでたいしきをして来た。二銭キヤラメルを一つづつくれた。そして昼をくって守とうさぎのくさつみをした。じしゃくをいぢくった。菅谷のかじ屋でまきのべんとうばちをかって来た。そしてもんもかって来た。ほうぢろを逃がしてやった。以上

（豫記）今日は神武天皇がかしはらの宮で御そくひのれいをお上げになった日

*菅谷上の岡村鍛冶屋。

*談：帽子につける校章。

紀元節。

二月十二日 日曜 くもり

今日は少しどん曇であった。そして昼前は子守をして昼休みにしゃしんきを作つて、昼から守といねと三人で兎の草つみに行つてたくさんつんで来て、家へ来ていねとぶつけをした。母は車へお客に行つて来た。政ちゃんとすもうをした。小さい子供をあそばせた。以上

*日光写真。

二月十三日 月曜 晴

今日は朝早くは風が吹いて居たが静かになった。そして学校へ行ってきへんまをしたりすもうをした。そして体操の時には石拾ひをした。ぞうさんのけんさをした。家へ来て、ふるこつみ、麦ふみをした。そして隆次とぶつけをした。以上

*運動場、校庭の石拾い。

*ふるこつみ。麦の土入れ。

二月十四日 火曜 晴

今日も朝から、風が強く吹いて居て学校へ行くのもいやだった。そして学校へ行ってきへんまや、すもうをした。家へ来てぶつけ、けだしをした。馬小屋にこのはを入れた。子守をした。明日は手工がある。

手帳をかった。以上

二月十五日 水曜 晴

今日は少し曇りであった。そして学校へ行ってすまうをした。とてもおもしろかった。そして家へ来て母と一しよにさつま島、こう地へ麦ふみに行った。

*耕地。

二月十六日 木曜 晴

今日は少ししづかな日であった。そして学校へ行ってすまうをした。おもしろかった。そして家へ来て、こう地へ行って麦をふんだり、つぶてぶちをした。伊勢参宮へ行けるらしい。今日は部会の先生が集まるので三時間きりしかなかった。馬小屋に木の葉を入れた。以上

*麦畑で稲のかぶをかえたのをこまかくする。一番つぶて、二番つぶて、ふるっこみ。

二月十七日 金曜 晴

今朝は風はなくて少しぬことかった。政治さん家の庭でだしをして学校へ行った。そしてすまうをしたら先生がはいけないと言った。家へ来て隆次やいねをあそばせた。馬小屋にこの葉を入れた。いねをおぶって自転車へ乗った。僕はまつま屋から、ぼうし、たび、をかってもらった。以上。

*松山町材木町二丁目の行商人。

二月十八日 土曜 晴

今日は学校へ自転車へ乗って行った。そして今日は半日なので三時間して榮一君と一しよに車へ使へに行つて十銭もらった。そして昼をたべて家へ来た。母にがま口を買つて来てもらった。子守をした。馬小屋へ木の葉を入れた。車でおとぎ話の本をかりて来た。月曜日に参宮の銭を集める。以上

二月十九日 日曜 晴

今日は日曜日なので朝から子守りをした。大工のお母さんがしんだので今日は午後からともらいをした。そして車のお父が来てぜにを十銭もらった。明日は大工の明さんが帰つてくるのでむかへる。明日はかん音様である。ともらいで三銭ひろった。明日は参宮の銭を五円持つて行く。馬小屋へ木の葉を入れた。けだしをして遊ばせた。以上

(豫記) 明日は山下明さんをむかえろと思ふひます

*富岡とく。筆者の祖父の弟富岡吉三の妻。

*山下明。一九三七(昭和十二)年八月六日輜重兵第一聯隊応召。旧暦の正月元日。

二月二十日 月曜 曇雨

今日は朝から少し曇つて居た。そして三時間して杉山、岡本両先生から伊勢参宮について話を聞いた。そして地図と歴史のかいてある紙をくれた。それから金井君とていしゃ場へ行って山下明さんをむかえた。家へ来たら雨が降つて来た。かん音様へ行った。伊勢参宮のぜにを五円持参した。明日身体けんさをする。以上

*杉山敏行。一九三六(昭和十二)年三月―一九四七(昭和二十二)年三

月勤務。

* * * 岡本信吉。一九三七（昭和十二）年三月―一九四〇（昭和十五）年三月勤務。

* * * 金井仲次郎。同級生。

* * * 根岸の観音様。

二月二十一日 火曜 雨

今日は朝から雨が降って居た。雪もちらちら降った。そして三時間して志賀の入営兵士を送った。学校へ帰って根岸先生から参宮についてのちゅう意を聞いた。して先生に身体けんさをしてごうかくをした。今日はいねごが出来たので気持ちが変わった。受持の先生にもちゅう意を聞いた。家へ来たらもう暗かった。よくねることも聞かされた。あさって参宮をする。

* 現役兵栗原喜久次。「満州」の部隊に配属。「昭和十四年二月廿日頃第一乙種なれど現役に編入され、満州に入営すべく菅谷駅頭に於て盛大な村民の見送を受けて出発、東京駅前一同集合、代表の見送りの人とも別れ、東海道線の人となる。途中見知らぬ方々の手をふり又は日の丸をかざしての見送りも各所に。それを後にして列車は広島に到着。練兵場に整列、人員の点呼。しかし私は最後まで御呼が無く折角来たのにと少々心配になる。員数外ではと。……」（栗原喜久次手記「ノモンハンの大草原・アラカンの山又山」（一九八六年五月）冒頭より引用）

* * * 根岸久一郎。校医。

* * * リンパ腺がはれる。

二月二十二日 水曜 晴

今日は朝から晴天であった。学校へ行ってじげようはしないで昼前の二時間は少し自習をして後は伊勢参宮の話聞いた。明日はもう伊勢参宮に行くので今日は支度をした。先づ氏神様へお参りして村の神

社、大宮のひかわさまへお参りしてから学校へ行って菅谷の神社できがんさいをして〇・二十一分に出発するのである。まちどうしい。まちどうしい。三日間、家へ来ない。ひげをもらって来た。以上

* 意味不明。

* * * 経木。

* * * この日の「埼玉読売」には「菅谷小学校卒業生二百名は石川校長に引率され廿三日伊勢参宮」の記事がある。

二月二十三日 木曜 晴

今日も朝から良い天気であった。そして氏神様にお参りして神社へ行ってお参りをして土をかりて来て学校へ参宮の支度をして行った。菅谷の神社で参宮のきがんをしておくもつをいただいでいしやばへ行つて電車に乗って伊勢へ向った。東京で三ちゃん家のけいちゃんにいき合った。東京えきを十一時四〇分に夜かん列車で伊勢へ向った。けしきがよかった。そして列車の中でねた。がよくねむれなかつた。

* 談：お守りとして神社の土を持って行く。

* * * 斉藤三郎方。

* * * 斉藤敬二。正月の土産としてこの日記帳を著者に贈ってくれた人。

* * * 談：汽車に乗る前に朝日新聞社を見学してプラネタリウムを見た。りした。

二月二十四日 金曜 晴

今日もよい天気であった。浜松へ来たころはもう港がしらみ始めた。そして浜な湖を見て海を見た。きれいだった。天ノ橋も渡った。そしてひるごろ伊勢、宇治山田の中村りよかんについて、ひるをたべて外宮にお参り市内電車で内宮へお参りに行った。いすず川はとても清よ

らかだった。川の水で手を洗い口をゆすいでお参しておかぐらを上げた。して二見ヶうらに行つて海をながめた。中村りよかんへかへつた。

*伊勢神宮の、豊受大神宮(とようけだいじんぐう)のこと。

*伊勢神宮の、皇大神宮(こうたいじんぐう)のこと。

二月二十五日 土曜 晴

今朝はりよかんで早くおきて五時頃宇治山田えきを出発した。名古屋でのりかえて東京えきに行つた。たんなトンネルをぬけて東京へつくころはもうくらくらなつて居た。東京のまちはきれいだった。池袋で東上線にのりかへて菅谷へ向つた。菅谷えきに来たら家のものがむかへに来ていた。東海道本線に乗つて居るころ雨が降つた。が菅谷はやんで居た。汽車にも電車にもよはなかつた。

二月二十六日 日曜 晴

今朝はいつもの朝よりもうんとおそくおきた。おきる頃は日が出て居た。今日は日曜なので朝から良く休めた。昼を食べてから二十三、二十四、二十五日、三日間の日記をつけた。昼前父が田に行つて居るのをむかへに行つた。子守をした。恒ちゃん家へ行つてへびをわるさにした。久保先生にやる手紙を出した。今日はつかれたので仕事はしなかつた。明日は当番であつた。

(豫記) 明日番

*久保龍雄。一九二六(大正十五)年三月―一九三八(昭和十三)年三月勤務。

二月二十七日 月曜 晴

今日も昨日よりは早いがおそくおきた。おきてかんがえたらとうばんであつた。いそいで支度をして学校に行つた。だがふかなくも良いのである。伊勢のおふだを先生がよこした。家へ来て、西原へ麦ふみに行つて来て子守をした。学校ではろくに事業はしないで三時間続いて伊勢参宮の話をした。四時間目に綴方をして四時間で家へ来た。夕べ車で面白い理科の話を父がかりて来た。皆と学校で参宮の話をした。

*授業。

二月二十八日 火曜 晴

今朝はふ通におきておんどこのふたをとつて学校へ行つた。そして墨をかつたり小刀をかつた。そしてそうちをして家へかえつて菅谷へ伊勢参宮に行つて来たお札を上げに行つてキャラメルをとりかへて来た。家へ来てしのやぶへ行つて皆とすまうをしてかへりにいねを子守をして家へ来た。



伊勢参宮記念写真

明日は三月一日で神社参拝である。守に手工の手伝をしてやった。菅谷でさとうと、うきこを買って来た。

*温床。

**屋号。大澤伊三郎方。

***ウキ粉。もちとり粉。

三月一日 水曜 晴

今朝は早く起きて神社参拝をして学校へ行ったらもう朝礼をして居た。今日からべんとうはあたためないで明日からはおゆをくれないのである。それで九時始めである。学校で手工をして、もちぐさをついで家へ来ていねをつれてこうちへ行つてつぶてを少しぶった。家へ来て、根岸のぜん作さん家へたばこを持ちに行った。夜になつてもちをつくる時に僕は十いくつか作つた。明日は修身のしけんがある。

神社参拝。

三月二日 木曜 曇晴

今朝起きたころは曇つて居て雨が降りそうであつた。学校へ行つてねことりのやうに長くつないでかけまはつた。体操の時に古い方の学校から石を新校舎へはこんだ。それで新校舎の庭でくぎや金物をひろつた。家へ来て、あんもをくつて子守をしてしのやぶへ行つていねにウマイモノの袋を買つてやった。夕方まであそんで家へ来た。学校で手工の時、黒い紙をはつた。家へ帰る頃は雨は止んで晴天気となつた。そうじをして家へ来た。大工のおぢさんに三十銭もらつた。

〔欄外〕修身考査

*おらがねこをとつてくれと言つてする遊び。

**あんもち。
***富岡吉造。

三月三日 金曜 晴

今日は三月三日でおひな様である。学校で行つてお等我ねこをした。おもしろかつた。一時間目に算術の考査をした。家へ来て川へ魚つきに行つて一匹しかつかなかつた。そして夕方ふねにのつた。明日は土曜日で国史の考査をするのである。昼をたべて志賀の出征兵士を見送つた。元氣よく出征して行つた。明日将軍沢の兵隊さんが無言のがいせんをして来るのでおむかへするのだ。午後の六時四十七分にかえるのである。

〔欄外〕算術考査

*根岸喜儀鉄道第一聯隊、栗原春男公主嶺戦車兵、深澤大六黒河野砲兵の三名。午後一時二十一分武蔵嵐山駅発。一九二三(大正十二)年十一月五日、東上線開通時に菅谷駅として開業したが、一九三五(昭和十)年十月一日に駅名を武蔵嵐山駅と変更。

**小久保盛三。一九三八(昭和十三)年九月四日中国江西省で戦闘中負傷、翌五日第一師団第一野戦病院で死亡。

三月四日 土曜 曇後晴

今日は学校へ行つてねことりなどして、国史の考査をして三時間で家へ帰へつた。そして麦ふみをしたり草つみをして、それから夕方になつたのでしたくをして將軍沢の小久保盛三さんの無言のがいせんを午後六時四十七分でむかえた。家へ来て日記もつけづにねた。

〔欄外〕国史考査

三月五日 日曜 晴

今朝起きてけんちゃん家へ行って来てから支度をしておぢさんと松山へひるごろ出かけたらもうひんべう会は終つて居てつまらなかつた。

仁天堂により新井屋へよつて菓子屋でおぢさんにかりんとうを買つてもらつて家へ来た。家へ来てからつぶてぶちを持つて田へ行つて少しつぶてをぶつた。明日は理科の考査がある。家へ来ておんどこへふたをした。学校手帳も持つて行く。

*富岡喜作。

*比企乾繭販売購買利用組合創立十五周年記念産繭品評会。

**松山町材木町の薬局。

**松山町材木町の荒物屋。

三月六日 月曜 曇

今日は朝の中はそんなに曇つては居なかつたがだんだん曇つた。学校でおらがねこもした。体操の時に五、六年で旧校舎から石を新校舎のすみへはこんだ。家へ来てつぶてぶちを持つて田へ行つて夕方まで

ぶつて家へ来た。田にいる時、かま形の兵隊さんが帰つて来たのを見た。学校で理科の考査をした。明日も地理の考査がある。以上

〔欄外〕理科考査



春蚕繭三等賞賞状



学校手帳

*大野一雄。一九三七(昭和十二)年八月二十八日近衛歩兵第一聯隊応召。

三月七日 火曜 雨

今朝は雨が降つて学校で昼前の中に止んだ。三時間目に地理の考査があった。家へ来ていねをつれて寺のげんかんへあそびにいっていろいろの面白いことをした。今日は雨が降つたのでつまらなかつた。だが夕方は止んで気持ちさがさっぱりした。明日は読方の考査がある。

〔欄外〕地理考査

三月八日 水曜 晴

今日は朝から風がごうごうとふいていた。学校へ行く時はなわとびをしながら行った。ついでから読方をさんざしらべて二時間目に読方の考査をした。昼休みに面白い遊びを皆とした時はよかつた。書方の考査もするから今日は書いた。五時間目に体操をしないで手工のはとめをぶつた。家へ来てぶつけをしたり、子守をした。久保先生へ参宮に行つて来た手紙をだした。御守りと参宮ひを二十銭かえした。明日は考査なし。

(発信) 久保先生

〔欄外〕読方考査

三月九日 木曜 晴

今日は朝から風が少しづつ吹いて居た。そして学校へ行く時、なわとびをして学校でもした。今日は松組の岡本先生が来ないので旧校舎の方へ一時間目に松竹のつくゑをもつて行ってばんきょうをした。そう

じの組もちがって僕は火曜日と土曜日にするのである。今日、金土と松山にあるサーカスのわりびきけんを一枚くれた。子守をした。夕方はいねをつれて紙しばいを見た。

(豫記) 菅谷村大蔵「落書」

*談：当時菅谷小学校の尋常科六学年は二学級あり、菅谷・川島・志賀の児童は松組、平沢・千手堂・遠山・大蔵・根岸・將軍沢の児童は竹組に所属していた。筆者は竹組である。

**談：松山町箭弓神社の初午祭の時はサーカスがよく来ていた。

三月十日 金曜 晴

今日は朝からしんとして居た。学校へ行く時、なわ飛びをしながら行った。学校へ行ってラジオ体操をして、今日は陸軍記念日なので話を聞いた。家へ来ていねと一しよに紙しばいを見たり自転車に乗った。それから青治さんと三ちゃんと三人で魚つきに行った。それで三匹しかつかなかった。明日は菅谷村へ支那の蔣かい石反たい軍の人々が来るかもしれない。

*村田清治。当時高等科二年生。

**上海維新学院第一回卒業生。資料三参照。

松山町箭弓神社初午大祭。

三月十一日 土曜 晴

今日は朝から夜まで雨が降りどうして居た。学校は三時間しないで二時間で大掃除をして家へ来た。そして少し遊んでいねを少の間子守って、北海道えいさん家へつれて行って女遊びのもちをたべて家へもつて来た。雨が降ったので女遊びも夜にならない中に後した。夜になってお伽噺の本を読んだ。明日日曜日だ。良平やんにしゃぶべんをもらっ

た。よかったなあ。月曜日の時間表は三時間で読方綴方、書方である。

*屋号。金井栄一方。

**根岸良平。

**談：シャープというメーカーのつけペンで、先がガラスで軸は竹だったと思う。

三月十二日 月曜 晴

今日は朝は少し曇って居たがだんだん晴れて来た。そして昼前は三やんと二郎さんと三人で農士学校へ草つみに行った。そして半分以上つんで来て昼をたべて守と二人で畠へ行って草をつんで来た。一つばい。家へ来ていねをぶつて降次たちをつれて遊びに行った。夕方まで遊んで家へ来た。明日は綴方の研究会があるので三時間しかないのである。今日は紙しばいを見なかった。

*おぶつて。

**二月一日に八和田小学校で比企郡綴方研究会が開催されているので、このようなものであろう。

三月十三日 火曜 晴

今日は朝から風が強く吹いて居て寒かった。昨日の雨で上橋は通れなかった。学校へ行って第一時に読方の書取りをして二時に吉田先生が綴方を教へて来た。三時間して家へ来てねんこを持って七っさん家へ行ってごしうぎなので母も行って居るし父も行って居るのでいねを子守った。夜も子守った。そして夜のおそくなって家へかへた。明日は陸軍歩兵上等兵成沢萬造さんと同じく小久保盛三さんのそうしきがあるので、大、根、将の四年以上と全六年以上がさんかするのであります。

(豫記) 明日はそんなである

*談・現富岡進一宅裏に大きな杉の木があり、そこに架けられていた学童通学用の仮橋。

*吉田久平。一九三八(昭和十三)年三月―一九四〇(昭和十五)年三月勤務。

*富岡七之助方。

*大蔵・根岸・將軍沢。

*村葬。

三月十四日 火曜 晴

今日は朝からとても風もなく静かな日である。学校へ行って一時にそんなさうの唱歌のれんしゅうをして二時に読書の書取りをして家へ来て支度をして向徳寺へ行って二人のそうしきをした。後おむって家へ帰って守と僕と二郎さんと三みいさんと四よ人でこう地へ草くさつみに行つて一つばいふんで来た。今日はそんなさうでそうぢがもうかつた。

*山下三三男。当時高等科二年生。

菅谷村葬執行。資料四参照。

三月十五日 水曜 晴

朝は風が吹いて居たがあまり強くはなかつた。学校へ行って馬のたんれんを見て時業は四時間しかないで昨日の中さうぢのもので旧校舎の廻りのこしかけのくづをひろいあつめて旧校舎の物置にはこんだ。家へ来て隆次やいねと遊んだ。おばあさんと前まへ唄へたためをついだ。馬小屋に木の葉を入れた。菅谷の上かぢ屋かぢで針金を買つて来た。

*菅谷上の岡村鍛冶屋。

三月十六日 木曜 晴

朝は風がそんなに強くなく吹いて居た。事業は三時間しかない。新入学の者が教室を用ふので三時間して廻りをほうきではいた。家へ来て風を引いたのでねた。

*風邪。

三月十七日 金曜 晴

朝はとも風が吹いて居なくてとても静かだった。学校へ行って五時間して家へ来てぶらぶらして居た。夕方竹ちゃん家へかごを持って行つた。大久保高のりさんがゑはがきをおくつてくれた。明日べうべうとが居らない。

*弁当。

三月十八日 土曜 晴

朝は風は少し吹いて居た。学校へ行かぬ前にトンボとんぼを二つ作つて学校へ行つた。事業は三時間して四時五時間と五年以上が旧校舎から石やいろいろの物をはこんだ。四年以下は校庭のくづひろいをした。家に来てあつた。新童話五年生を



富岡寅吉さん作成の竹トンボ (小川京一郎氏撮影)

読んだ。

(豫記) 今日は彼岸の入である。

*竹トンボ。

三月十九日 日曜 晴

朝は風が吹いて居た。今日は日曜日なので学校へいかないで昼前はおぢいさんや父となあまたをうなつた。^{*} 昼から守と二人で草つみに行った。一つばいつんで家へ来た。

*苗代を耕す。

三月二十日 月曜 晴

朝は風が吹かないで居た。とんぼを作ってくつて学校へ行って四時間してしゃしんをとつた。^{*} 家へ来て守だのと草つみに行った。子守をした。

*卒業写真。

三月二十一日 火曜 晴

朝はちつとも風がなかった。朝の中はいねをつれて文ちゃん家へ行って少しなわとびをした。家へ



尋常科卒業写真

かへつてみいやんと二人でこう地へ草つみに行つて半分以上つんで来た。昼をたべてみいやんと守と三人で川へ魚突きに行つて七匹ついて来て、もちをたべて遊びに行つてなわとびを少しして鬼ごとをした。おもしろかつたが早く家へかへつて来た。今日は春季皇霊祭なので学校は休みであつた。

(豫記) 今日はひ岸の中日。はかまひりをする

*新藤文太郎方。当時高等か一年生。

三月二十二日 水曜 曇雨

朝は風はなかつたが、曇つて居た。学校では二時間して各字の戦死者の御はか参りをした。家へ来てさつま島でふるっこみをした。^{*} 夕方は雨が降つて降り続いた。二十七日に本を売るあたいの書いた紙をくれた。

*土入れ。

**談：教科書。

三月二十三日 木曜 晴

朝からとても風が強くて雲も少しあつた。学校で三時間目に竹松一しよになつて居太乃を竹松に分けてべん強をした。^{*} 木曜なのでそうぢをしした。家へ来て根岸へ使へに行つて来た。

*談：岡本先生がずっと休んでいたためクラスが一緒になつていたのでまたもどした。

**談：根岸商店。たばこを買いによく使に行つた。

三月二十四日 金曜 晴

朝は風が強かった。学校で三十日のてんらん会のづくわを書いた。家に来ていねをつれて遊びに行つてトンボのとても上るのをつくった。明さん家でいもをもらった。家へ来ていろいろしらべた。明日は当番である。

(受信) 大日本「落書」

三月二十五日 土曜 曇雨

朝は晴れそうであつたが学校へ行く時は少し雲つて居たが、事業中に雨が降つて学校帰りにもざあざあ降つた。家へ来て、おぢいさんのかごやをして居る家へ傘と下駄とを持って行つた。雨は夕方は止んだ。トンボを上げた。明日は日曜日である。

故陸軍輜重兵伍長宮田松之助、故陸軍歩兵伍長大塚登、故陸軍歩兵伍長青木豊作の七郷村葬が七郷小学校校庭で執行される。

三月二十六日(四月一日) 頁欠落

三月二十六日 日曜 晴 菅谷村農会
褒状授与式。菅谷村在郷軍人分会総会。

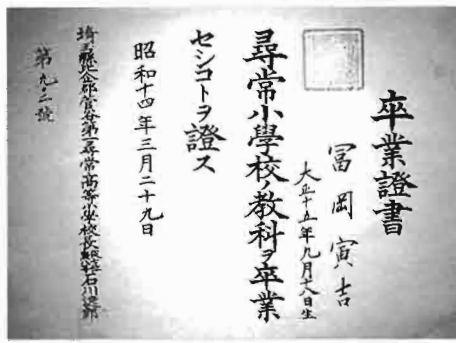
三月二十七日 月曜 晴

三月二十八日 火曜 菅谷村統後

奉公会設置協議会開催。



精勤賞状



尋常科卒業証書

三月二十九日 水曜 晴 菅谷第一小学校・鎌形小学校卒業式。

三月三十日 木曜 晴 第一小学校本校舎新築落成式典挙行。二階建校舎・小使室宿直室・便所二・渡廊下を新築し、平屋校舎・物置・便所・農舎を旧校地より移転した。校舎・校地の使用は前年の二期より開始されている。

三月三十一日 金曜 半晴

四月一日 土曜 晴

四月二日 日曜 曇雨

朝は少し曇つて居た。そして、下駄で車を作つて三ちゃん達と草つみに行つて一つぱいつんで来た。家へ来て又みいさんと農士学校へ草つみに行つて一つぱいつんで来て三ちゃん家へ行つてえうねんくらぶ^{*}をかりて見た。自転車に乗つて遊んだ。午後からは雨になつて夜まで降り続いた。

^{*}小学校四、五年生向きの雑誌「幼年倶楽部」。

四月三日 月曜 曇

朝は少し雨が降つて居た。そして幾時間か経つと雨は止んだので父と僕と守とまきと隆次と五人で車へお客に行つた。夜になつたので僕は正三さん^{*}とねた。

(豫記) 神武天皇がおかくれになつた日

^{*}談・岡本正三。遠山の水車に手伝いで来ていた。



四月四日 火曜 雨

朝は車に居たのでおそくおきた。して朝はんをたべて栄一君と川で石を並べて飛石を作った。僕はかちつかのたまごをひろった。それが後つて家へ来た。母と二人でなわなひをした。自転車に乗って菅谷、使へに行つて来た。

*談：かじか。魚の名前。ちょこっかじ、あぶらっかじとか呼んでいた。卵は数の子のようにあわこと言っていた。

四月五日 水曜 小雨

朝は屋根の上などには雪があった。朝からひる頃まで一人でなわなひをした。ひるからたあちゃんに車を作つてやった。いねをこもった。三ちゃん家へあそびに行つた。明日から事業が始まるのである。朝から雨が降つたり止んだりした。

*清水竹治。当時尋常科四年生。

四月六日 木曜 雨

朝から空が曇つて居てちらちらと小雨が下がった。学校へ行つて自分の教室をきめたり場所をきめた。家へ来ていねをおった。それからたあちゃんに箱をもらつて四りん車の少し大きいのを作くつた。そしていねと一しよに引いて歩いた。今日は学校の始業式である。

四月七日 金曜 曇小雨

朝は少し曇があったが太陽はうす光を出して居た。学校へ行つて校長先生のお話を聞いて大そうぢをした。僕は二年生の教室ときゅう校舎の室と庭そうぢをした。庭そうぢをしない中、小ぐま先生、松崎先

生、小宮根先生と三先生のわかれの式をした。家へ来ていねと遊んだ。頃は小雨が少し降り始めて夜まで降続いた。事業は一時間もしなかつた。車を引いていねと草をつんだ。

*雲。

*小恒恒次。一九三八（昭和十三）年九月―一九三九（昭和十四）年三月勤務。

*談：松崎宗一。三年生の三学期の担任。三年生の時、学校が焼けるまでは三年生の竹組の一部と四年生とがクラスになっていた。そのクラスを三四と呼び、一・二学期の担任は荒井良先生だった。

*小宮根まつ。一九三六（昭和十二）年三月―一九三九（昭和十四）年三月勤務。

四月八日 土曜 雨晴

朝は夕べから降続いた雨でどしゃ降りである。下駄をはいて傘をかぶつて学校へ行つた。きゅう長や時間表をきめた。二年生の教室をそうぢして高治さんに会つて家へ来た。三ちゃんたちと川原へ遊びに車を引いて行つた。午後からは今朝の雨も晴れて明日は天気らしい。すな遊びをおもしろくした。

（豫記）明日天気だら高治さんをおくろうと思う

*中島高治。高等科を卒業して横須賀海軍工廠に就職。

四月九日 日曜 晴

朝は少し風があった。高治さんを送らうと思つたがいそがしかったので送くらなかつた。父と二人で馬小屋のこいをとつた。後ると隆次に植木場を作つてやった。すぐにざるを持って畠やこう地で草をつんで来た。ひるをくつて三ちゃん家で本を読んで家へ来て、いねをつれて

又行った。車でねぎをはこんだりかはをむいてやった。小さい子供と馬屋事をして遊ばした。

*肥。

四月十日 月曜 晴

朝から風は少く下の学校橋を渡って行った。朝礼の時に級長の定めをした。農業をして次時に農業の実習をした。農業の時に、組や組長の書いてある紙をくれた。実習の時には川原へ石取りに行った。二かい。二つ、はこんだ。後って西昇降口をそうじして家へ来た。家へ来ていねと車を引いて仲次さんの家へ行ってけん道のまねをした。もくれんや桜の花を取った。今日はけんどうを学校ではしなかった。

(受信) 中島高治

〔欄外〕礼

四月十一日 火曜 晴

朝から晴天になりそうであった。下橋を渡って学校に行った。なわとびをした。地理の時間に理科の本と知識の宝庫を買った。体操の時にはせいくらべをした。手工はしないで木刀の作り方をおしへた。木のついた字を黒板へ書かせた。家で来て、いねをつれて根岸へ使へに行った。

*談：学校橋のこと。

**談：便利な豆事典だった。

四月十二日 水曜 晴

朝は風は少く橋を渡って学校へ行った。なわとびや鉄棒をした。真中

の高のにとびつけた。書方の手本を買った。家へ来てさつまをたべて一人でこう地へ草つみに行って一つばいつんで来た。木刀をいぢくつた。

*談：飼っていた兎のえさにするため。

四月十三日 木曜 曇

朝は少し晴れて来た。学校へ行って機械体操でとびつきをならった。そうちをして家へ来た。いねを子守った。

*談：鉄棒。

四月十四日 金曜 晴

朝から風があり、学校へ行く時に宇一さんが泣いていたのでだましてつれて行った。機械体操でいろいろした。家へ来ていねを自転車に乗った。明日は菅谷神社にかん学祭がある。しないがうり切りになった。

*野村伊造。当時尋常科一年生。

**勧学祭。

四月十五日 土曜 晴

朝は風もなく神社参拝をして学校に行った。行ったものは尋常一年生と高等一年生である。そしてかんがくさいをして家へ来た。畠に行った。いねを子守った。天下下しをした。

(受信) 野口恒吉様より

*談：ボールを「天下」の子に投げつけてとれないと「天下」は交代する。

**談：この年、高等科を卒業し、鴻巣の郡是工場に勤めていた。

神社参拜。

四月十六日 日曜 晴

朝から風は少く、いねをつれて根岸へ遊びに行った。ぶらんこに乗った。家へ来て竹治君と魚つりに行って一匹もつらなかつた。ひるをたべない中、少しふるつこみをした。ひるをたべて、斉藤三郎君の家へ行き、野口君と魚つりに行った。行く時に山下和十郎君が野口恒吉君から来た手紙を見せた。やなぎをぬいて刀をつくった。明日はまんのうをもつて行く。

*野口徳治。当時尋常科四年生。

*同級生。

四月十七日 月曜 晴

朝は少しどん曇りであつた。日は少し首を出して居た。萬のうを持って学校へ行った。山下君や守は当番なので、三人だけ後から行った。学科の時には麦や桑の畦巾、蒔巾、株間などをはかつた。萬年筆のペン先をかつた。実習の時にはまんのうで畠と果実園の木のまわりをうなつた。家へ来ていねと三郎君の家へ遊びに行った。明日は当番である。

*山下二郎。弟の守平の同級生。

*談・高等科一年生の筆者と山下昭二、尋常科五年生の弟の守平、山下二郎、村田政二は家が近くなので、通学は同じ組だつた。

*山下三郎。同級生。

四月十八日 火曜 晴

朝はつゆが下りて居た。早く起きて当番なので学校へ行った。そうぢ

をして、朝の問う問だいをやった。そして機械体操して事業が始つてからは事習である。三時間目に身長。体重。などいろいろはかつた。五時間目には体操でリレー、ボールをした。リレーは一等でボールハ勝ちであつた。野口君に発信した。学校から帰つてさつま畠でふるつこみをした。いねをつれて、さいとう君の家へ自転車に乗つて行った。(発信) 野口恒吉さんへ

*自習。

*談・ドッチボール。

四月十九日 水曜 晴

朝は、村田と清水は当番であつた。四人で学校へ行った。そして朝礼をして、学問を始めた。四時間目には旧校舎のあき室で本をしゃせいした。昼からは菅谷の者がびつち、くはを持って来て花壇を作るので土はこび石並びをした。それが終ると機械体操をして並んで家へかえつた。学校帰りに岡本君、忍田君、村田君、山下君などとおもしろい話をして来た。いねをつれて田へ行った。

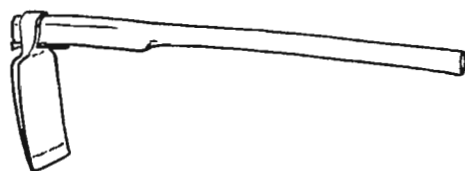
*唐鍬。

*岡本七五三または岡本将夫。共に同級生。

*忍田明治または忍田啓助。共に同級生。

*村田久雄。同級生。

*山下昭二または山下和十郎。共に同級生。



唐鍬 (イラスト：豊田浩二)

四月二十日 木曜 晴

朝はいつものやうにうす曇であつた。久保先生に手紙を出して学校に行った。四時間して作業に取りかかった。作業は終つてそうぢをして家へ来た。一人で草つみに行つて一つぱいつんできた。かえつて来てくさげづりを夕方までした。

*談：けづりこみで桑畑の草をかく。

四月二十一日 金曜 雨

朝はきりがまいて曇つて居た。自転車に乗つて学校行つた。少し立つて後のばんごうを取り字を書いて来た。帰りには將軍沢の方の者と唐子まわつて来た。その頃はもう雨が降つて居たのである。家へ来て夕方になつていねをつれていんきよにたまごかいに行つた。

*談：自転車の後ろについていた鑑札をはずして自転車に直接ペンキで字を書いたということ。

**談：月田橋を通つて帰つてきた。

***屋号。富岡喜作方。

故陸軍歩兵伍長中村市松の七郷村葬が七郷小学校校庭で執行される。中村については「中村市松日支事変陣中日記」を収録した『日支事変参戦記』（中村文雄・中村多喜子、編集協力久保茂男、一九八八年八月）がある。

四月二十二日 土曜 曇

朝はきのうとおなじように曇つて居た。そして学校へ行つて勉強して家へ来た。家へきてそうしきななのでせに七錢ひろつた。いねをこもつた。

*曇。

川越市相原芳太郎より二宮尊徳石像が寄贈される（菅谷小学校『学校沿革誌』）。

四月二十三日 日曜 雨

朝から雨もようであつた。日曜なので学校へ行かないでいねをつれて遊びに行つた。明日は遠足をするかしないかわからない。たぶん遠足はこのもようではしないであらう。

（豫記）明日は遠足かもしらない

四月二十四日 月曜 晴

朝は雨がちらついて居てこのもようでは遠足はだめであつた。学校へ行つて校長さんに聞くのと遠足をするのであつた。すぐいづみやまきの運動ぐつをとりかへて来てすぐ学校へはしつた。唐子を通り神戸を通つて岩どので一時間遊び高坂を通して松山へつき箭弓でも一時間すぐに松山駅へ行つて下りの電車で学校にかへつた。自転車へ乗て家へ来ていねを子守つた。

*真澤呉服店。

**岩殿山正法寺（岩殿観音）。

四月二十五日 火曜 晴

朝はさわやかな天気であつたのですすはきを始めた。物を出したりした。少し相ひ手をして昼をたべて守といねと、三人で草をつんで来た。すぐに魚釣の用意をして行つたが一もつらなかつた。いねと自転車で乗つた。今日はリンジ大祭なので休みである。父に熊谷付近の地図をもらつた。

*談：この日は大蔵では春季清潔法の日だった。当時は家の中には現在ほど家具はなかったので家の中のものを畳まですべて出して大掃除をした。

*靖国神社臨時大祭。

四月二十六日 水曜 曇

朝は晴れて居たがだんだん曇った。一時間して一年から高等二年までが美しい式に参加した。式が終ってじげうをして家へ来て、くわのなはをきり、かくねんぼうした。すぐ又前島でけづりこみをした。

*支那事変戦病死者合祀祭慰霊祭。菅谷村忠魂祠合祀祭及慰霊祭。

*談：桑の枝をまとめるのにはばっている縄を切る。

*かくれんぼ。

*談：家のすぐ前の島の呼称。

四月二十七日 木曜 晴

朝は夕べの雨もからりと晴てさわやかであった。川の水もまして居た。学校へ行って朝礼の時に志賀の三年生の子の死んだ話を聞いた。家へ来て島へ行った。草つみに行った。

(豫記) ネギシサンニキク [落書]

(発信) 寅吉 [落書]

(受信) 富岡守平 [落書]

四月二十八日 金曜 晴

朝は気持ちよくないかふぜにをもち、学校へ行った。四時間して内田先生の所へつばを持ちに行った。そしてしないの三、八をかけた。家へ来て田へ行った。来て魚つりに行った。明日は天長節である。

*内田實。一九三八(昭和十三年)三月〜一九四一(昭和十六年)三月勤務。剣道をならった。

*談：長さが三尺八寸の竹刀。

四月二十九日 土曜 晴

朝はとても良い日であった。学校で天長節の式をして来た。家へ来て魚釣りに行って二十九匹つって来た。おぢいさんがまるたをかって来た。久保先生から本をおくった。

(豫記) 天皇陛下の御生れになった日

(受信) 久保先生より本

*もらった。

四月三十日 日曜

朝は曇りそうであったが少し日光がさし出したので、車に籠とこの目とざるをつけて僕が引いて行った。二度引いて来た。ひるからはさつま島でさくを切り後つて田へ行った。

(発信) 久保先生

*談：養蚕の道具を川で洗うため。

*談：耕作していた島の呼称。

五月一日 月曜 曇

朝は晴れそうであったが、晴天にならず曇って居た。農業の実習には僕と小沢、鯨井、根岸の四人で下肥をしたり大ひちらしをした。魚をつった。明日はけんどう剣道がある。

*小澤長助。同級生。

* * * 鯨井重吉。同級生。

* * * 根岸直次または根岸正次。ともに同級生。

* * * * 堆肥。

五月二日 火曜 曇小雨

朝の中は雨もようでなかった。けんどうのどろぐをもつて学校に行った。五時間目には体操であったから力角をした。僕は四回して一かいまけた。六時にはけんどうで、一、正座、二、発声、三、もくねん、四、礼をならつた。そうじをして家へ来た。明日は天気なら体育デーである。農業の本をかっした。

* 角力。すもう。

* * 黙然。

五月三日 水曜 晴

朝起きると晴天で今日の体育デーも出来るだらう。べんとうを持って自転車に乗って行った。体育デーもよく出来た。家へ来ていねをあそばせいねとこう地へ草つみに行つて一っぱいつんで来た。

五月四日 木曜 晴

朝はあまり曇つて居なかった。学校へ行つて花だんに植木を植えた。家へ来て、隆次と川原によし刈りに行つて籠をしょつて来た。明日は五月のせつくだり農士学校に、小学生、ほかの人々の力角がある。僕はおうえんに行かうと思ふ。

五月五日 金曜 晴

朝は天気もよく、朝早く唐子へ使へに行つて来た。そして学校へ行つ

て三時間して家へ来た。後は角力を見た。熊谷付近の地図をかっした。

* この日は日本農士学校第八回開校記念日で午後から武道大会があつた。

「農士校開校／八周年記念祭 比企郡菅谷村在金鷄学院日本農士学校開校八周年記念祭は端午の節句の五日午前十時から執行、同校独特の太鼓を合図に全校生徒が黒紋付きに威儀を正して金鷄神社前に額つき、同校講堂で菅原検校の講経あり、来賓沖野県総務部長、水川大社有賀宮司等の祝辞、吉村岳城師の琵琶「畠山重忠」の演奏を終つて全員松林中に坐して会食、午後から学校玄関より畠山重忠城跡本丸に向けて神輿渡御あり小学児童の相撲、剣道奉納試合あつて午後四時散会した」(『東京日々新聞』埼玉版五月六日)。日本農士学校院長の伯爵・貴族院議員酒井忠正は大の相撲好きで、相撲研究の第一人者であつた。

五月六日 土曜 晴

朝は晴れて居た。学校へ行つて六組の実習地に水をくれ地図の代を十三銭やつた。三時間目には六、七組とリヤカを引いて来た大ひ堆肥に使ふ草を刈つて来た。家へ来て神戸ごうとへ使へに行つて来てから田へ行つて田うなへをした。子守をした。

* 談：農業は組(班)に分かれていた。実習は組単位。この時間には女子は裁縫をしていた。

五月七日 日曜 晴

朝はちつとも晴れて居なかった。朝、はやく松山の津乃国つくのくに*へ行つて牛馬* *のくすりをかつて来た。家へ来て唐子の自転車でランブの玉をかつて来た。いねをつれて川へ行つた。それから草刈に行つた。明日は天気なら六組は草刈である。

* 松山町材木町の津国屋。

* * 談：コロイカルというカルシウムの粉。馬の飼料にまぜる。

五月八日 月曜 雨

朝から曇って居て雨模様であった。かまを持って学校へ行った。四時間の学科の時に花壇を作った。その頃から雨が降り出した。時間の来ない中に草刈を始めて一リヤカ刈って来た。家へ来て向徳寺へ行って御釈迦様へあまちやをかけて来た。

*お釈迦様。花まつり。坂戸の永源寺のお釈迦様は有名。

五月九日 火曜 晴

朝は雨上りで曇って居た。学校に行つてからはとてもよい天気になった。機械体操をした。家へ来ていねをつれて魚釣りに行った。

五月十日 水曜 晴

朝から良い天気であった。学校では明日かまを持っていくのである。家へ来てから神戸へ自転車持ちに行つて来た。

*談：祖父が仕事に行つて自転車を置いてきた日は、翌日取りに行った。

五月十一日 木曜 晴

朝はあまり晴れそうではなかった。学校に行く時にはかまを持って行った。作業にはかしの木のまわりの草をとり花壇の整りをした。明日は唐鋏を持って行くのである。出征兵士^{*}も見送るのである。

*菅谷中島富義、川島初雁文吾、千手堂秋山茂雄、鎌形大久保甚太郎、鎌形杉田宮次、大藏藤縄正二、大藏山下周平。全員歩兵第一聯隊に応召。

五月十二日 金曜 曇

朝から曇って居た。学校へ行く時に唐鋏を持って行った。半日して山のねっこほりをした。明日は当番である。

出征兵士七名出発。

満蒙国境ノモンハンで満・外蒙両国軍隊衝突（ノモンハン事件の発端）。

五月十三日 土曜 雨

朝は当番なので早くおきて行つてそうじをした。三時間して家へ来て草つみに行った。将軍沢へ使へに行つて来た。

五月十四日 日曜 雨

朝は日曜日なのでおそく起きた。雨は一日中小降で止む間もなく降続いた。いねを子守りした。もずの子を見た。明日は天気なら神社参拝がある。

五月十五日 月曜 晴 23度

朝は神社参拝をしてしゃべるを持って学校に行った。実習の時には花壇の整理をして家へ来た。

神社参拝。

五月十六日 火曜 クモリ 19度

朝から曇って居て学校では五時間目には体操で飛ばこを飛んだ。六時ハけんどうをした。

（発信）富岡隆次「落書」

五月十七日 水曜 晴 21度

朝は少し曇って居て日は出たりかくれたりのやうすであった。学校では剣道はしないで作業をした。家へ来て明日の天気予報の用意をした。

五月十八日 木曜 晴 23度

朝は少し早くおきて学校へ行きながらうきを作った。学校で事業のおいてからかわらすてた。

五月十九日 金曜 晴 23度

朝からよい天気であった。学校へ行って機械体操をし自治会をした。明日から天気予はうがはぢまる。

*談：学級会。

五月二十日 土曜 晴 21度

朝はとても良く晴れて居た。学校に行つて体操をした。今日から天気予報がはじまるのである。將軍沢へ籠を持って行つた。川へ魚突きに行つてでかいつきで突いて来た。明日は日曜なのである。天気なら川へむしろあらいに行く。

*談：つきで。うぐいの腹の赤くなったもの。

五月二十一日 日曜 晴 21度

今日は日曜日なので早く起きて草刈をした。朝めしをたべて川へ行って魚を突いて来た。して田でうなう時相手をした。家へ来てむしろをかえした。將軍沢へ籠を持って居つてたまをもらった。

*鉄砲玉。アメ玉。

午前二時半、七郷村信用組合事務所及び倉庫焼失。

五月二十二日 月曜 晴 24度

朝は普通に起きてめしをたべてかまといしを持って学校に行つた。三時間して四時間目には実習をした。家へ来て將軍沢に二かいほこんだ。

全国千八百校の学生生徒代表三万二千五百人參集の天皇親閲式で「青少年生徒二賜リタル勅語」下賜。

五月二十三日 火曜 晴曇 22度

朝の中はそんなに曇つてはいなかつた。学校で手工の時にかこの下つこのやうなものを作つた。家へ来ていねを子守つた。明日は天気予報の番である。今日けんどうをしなかつた。

五月二十四日 水曜 雨 18度

朝は曇つて居て雨もようであった。学校に行つて剣道をした。その頃から前、雨が降つて来た。家へ来ていねを子守つた。学校帰に天気予報を立てて来た。奥野に本をかりた。

*奥野友規。同級生。

五月二十五日 木曜 曇雨 19度

朝は曇つて居てきりが野山を埋めて居た。体育デーは出来るかなんだかわからない程であった。学校へ行って体育デーをした。南組は三等である。家へ来て將軍沢へ籠を四つはこんだ。いねを子守つた。

*運動会は縦割りで東・西・南・北の四組に分かれた。東組は菅谷、西組は平沢・千手堂・遠山、南組は大蔵・根岸・將軍沢、北組は川島・志賀である。

五月二十六日 金曜 晴 20度

朝は早くおきたら気持ちがよく、天気も非常に良かった。松山あたりまで行くと菅谷の出征兵士の満才の声^{***}が聞へた。岡松屋でキリ出シをまき^{*}に買ってやってから兵士を見送った。学校では先生が二時間目に来て一時間後つたら帰ってしまった。家へ来て魚突きに行つて五、六匹突いて来た。いねを子守った。夕方お寺で金井君や村田君と高飛びをした。よつちやんに高飛びのはしらを^{***}作くつてもらった。

*談・松がたくさん茂つていた現在の菅谷の東原団地あたり。

*中島長太郎。輜重兵第一聯隊応召。午前六時二十三分、柳橋由雄と共に出征。

***万歳。

***談・大蔵の安養寺。下寺ともいう。

***柴田美作。

五月二十七日 土曜 曇 20度

朝は起きて庭をはき、空ハ曇天であった。上寺^{かみでら}で過り^{***}だいをすべつて学校へ行った。三時間目に岡本先生に海軍記念日の話を聞きやく場の人に桑のかはを一貫メむくと三十銭になると言ふことを聞いた。帰つて来て金井君、山下君、村田君などと草つみ^{***}に行つた。金井君の家で高飛びをした。高飛から帰つて来て守と桑のかわをたくさんむいた。夕方になって車へ妹や弟を乗せた。

*大蔵の向徳寺。

**滑り台。

***桑の皮剥き。「学童を総動員／桑條剥皮の普及／立派な製紙原料

熊谷蚕業取締支所では大里郡下六千四百町歩桑園から産出される桑條から小学児童の手によって年最低七万五千円、出来得れば卅万円を目標として製紙原料となる桑條剥皮を生産、資源開発、農家の副業指導に尽さうと小学校、実行組合に大童で呼び掛けてゐる。製紙原料となる桑條剥皮は條桑育の際切捨られる枝條の基部の不発芽部分を二尺五寸の規格に切り二本の竹を樹てその間で條をしごき両側につけられたきず口から皮を剥ぎ太陽で二時間くらゐ乾燥する簡単な手間によつて出来るもので出来上つた剥皮は全部山梨県扶桑製糸会社で原料として一貫卅銭で引受けるのであるが小学生の内職として最適のもので同取締支所の実験の結果は百貫の條桑から十四貫の剥皮が得られ一日十貫は子供でも楽に出来るといふ」(『東京日々新聞』埼玉版五月十三日)。「埼玉読売」八月二十三日にも同様の記事「国策の龍児桑皮／製紙会社からの注文殺到に／張り切る比企郡農会」がある。

***安養寺の留守居をしていた同級生の金井仲次郎方。

***箱車。

五月二十八日 日曜 曇 20度

朝はあまり晴れて居なかつた。父と草刈りに行つて来た。幾時間か立つて魚突に行つてたくさんついて来た。いねを子守った。

五月二十九日 月曜 曇 17度

今日は朝から曇つて居た。鍬とさつま苗を持って学校へ行った。実習の時は僕が実習当番なので号令をかけた。して作切りをし下肥をくれた。そうじを一人でして当番なので物置の整理をした。朝のべんきょうの問たいを出して家へ来ていねを子守り大蔵へ籠をはこんだ。

*談・農業当番。高等科一年生は七組、二年生は六組に分かれていた。

五月三十日 火曜 曇 17度

朝から少し曇天であった。剣術の道具を持って学校へ行った。手工の時間が来ない中に六、七人の者に籠目をあんでやった。手工の時に先生にほめられた時は気持ち良かった。六時間目には剣道をした後で柔術をおそはってそうじをして家へ来た。四時間目に慰もん文を書いた。

五月三十一日 水曜 晴 19度

朝は曇って居た。しなだけもって学校へ行った。五時間目には図画をした。六時間目に剣道をした後で柔道をした。家へ来て魚つきに行った。明日は神社参拝である。

六月一日 木曜 雨 18度

朝は雨が降って居たので神社参拝をしないで学校へ行った。五時間目に話を少しして算術のあたりじま^{*}いをして家へ来た。兵隊さんへやる手紙を出した。^{*}

(発信) 兵隊さんへ

*談・先生が出した問題を解いて先生にみせて、正解だったらおしまいにしてよい。

*応召入営兵士慰問状郵税(切手代)として六月十日、百七枚分三円二十一銭が役場から小学校に渡されている。

神社参拝。

六月二日 金曜 晴 17度

朝は少し曇って居たが天気になりそうであった。天気予報のつなやな

にかをなをして学校へ行った。機械体操をして家へ来た。桑のかわをむひた。

六月三日 土曜 晴 28度

朝は少し曇って居た。学校へ行って来てホタル取りに行った。いねを自転車に乗せた。明日の朝草刈りをしようと思う。学校帰りに月曜日の実習の入用の物を持って行くのを見て来たら全部草刈りて各組二名が実習地の手入れである。それと三米トルの長さの棒でちよつけいが二センチの竹を持って行くのである。雨天の場合は藁を持って行つてなわないである。

六月四日 日曜 晴 21度

朝は少し曇って居た。一人で棒縫^{*}のあたりで草刈りをして居ると新藤兄弟と金井が来たので八つ沼^{*}の方へ行って刈って家へ来た。桑の木のかはをむいた。それから兄弟で草摘みに行つてたくさんつんで来た。昼休みに將軍沢へ籠を持って行って来た。夕方太陽が没つしてからホタル取りに行つて七匹取つて来た。明日は月曜日なので実習に使ふ物を持って行く。

*地名。坊ノ上。

*当時高等科二年生の新藤文太郎と尋常科三年生の益平兄弟。

*谷沼。大字大蔵字小谷津二五六番地の沼。

六月五日 月曜 晴 24度

朝は少し曇って居てきりがまいて居た。一人で草を一籠かって来た。鍬と、竹を持って学校へ行った。そして半日しかなかった。四時間

目には全部で草むしりをした。各組組長は実習地の時無大根よまなだいこんの間引をした。土寄せをした。家へ来て向徳寺へ申しこみの紙を持って行った。桑のかわをむいた。夕方ホタル取りに行った。明日は当番である。今日は学校帰りに天気予報をして家へ来た。自転車に乗った。貯金を積んだ。

* 農繁保育所の申し込み。資料三参照。

** 六月十五日～二十一日まで百億貯蓄運動強調週間実施。

六月六日 火曜 晴 25度

朝は朝当番なので早く起きて学校へ行った。その時、六年の金井や秋山、鯨井などと一しょに行った。学校へ行ったら当番はしてあった。機械体操をした。今日も半日であった。三時間目からグラランドの上にレンガ(レンガ)ならべた。そうじをして家へ来た。明日から大蔵の向徳寺で幼稚園が始まる。家へ来て少し休み野廻りに行って草をつんで来た。桑のかはをむいた。綴方を清書した。以上

* 金井春二。当時尋常科六年生。

** 秋山富治。当時尋常科六年生。

*** 鯨井武治。当時尋常科六年生。

**** 幼稚園。農繁保育所。資料五参照

六月七日 水曜 晴 21度

朝は早く起きた。空一面に曇って居た。一人で甘藷畠の方へ草刈りに行ってたくさん刈って来た。そしていねを自転車に乗せた。桑の葉もいた。今日から農繁休みである。

向徳寺には幼ち園を開いた。桑くれもした。おぢいさんとわるいごみ

を畠へはこんだ。草つみに行った。

(豫記) 農繁休み

六月八日 木曜 曇 22度

今日は朝霧がまいて居た。

籠をよてさんのう畠の端で草を刈って家へ来た。そして桑くれの手伝をした。そして少し小雨の降って来た時いねを連れて棒縫の方へ草摘みに行つてつんで来た。

昼を食つていねを向徳寺に連れて行って少し遊んで家へ来た。

幾分が経つて桑の皮をむいた。

祖父と御日町組の畠の草けづりをした。後つてさんのう前*へ行った。

夕方日が暮れてから兄弟でホタル取りに行つて三十匹取つて来た。

(豫記) 農繁休み

* 地名。山王前。

六月九日 金曜 小雨 21度

朝は早く起きて草刈りに行った。その頃は霧がまいて居た。して少し刈つてから、小雨が降つて来た。

家へ来て、桑くれの手伝いをした。いねを子守った。正午の時に隆次にべんとうをもつて行ってやった。桑切りの手伝もした。お寺でポールのきょうそうをした。夕方桑の皮をむいた。

六月十日 土曜 晴 21度

朝の天気はとても良かった。一人で田面に草刈りに行った。

家へ来ていねを連れて鎌形を通り鎌形の店^{*}でせんべいを買って車へ行った。車で坂の下の方へ行って遊んだ。坂ノ下でかしわ餅をもらったり正ちゃんに銭をもらって家へ来た。少し経って菅谷へ使へにいねを連れて行った。今日少し蚕を上げた。

本家へ父をむかへに行つた。

ブンズウを取つたり桑の皮をむいた。明日は天気予報の番^{***}である。

*談：杉田商店。

**さやえんどう。

***談：高等科の男子が担当していた。

六月十一日 日曜 曇小雨 22度

朝は忙しいので草刈りには行がなかつた。そして今朝は朝日焼けであつた。大工の家、鎌形の家^{*}、菅谷の家^{**}、をけ屋の家^{***}から御蚕上げのすけつとうが来た。いねを子守つた。菅谷天気予報もちに行つて来た。使をした。

六月十一日、お蚕上げ

*祖父林造の兄弟の家。

**祖母の実家。

***屋号。山下三三男方。

志賀齊藤吉造近衛輻重兵連隊応召。八時二十三分出発。

六月十二日 月曜 曇 23度

朝は昨日の雨で庭がジメジメシテ居タ。朝は草刈りに行かなかつた。桑の木のからをはこぶ後押しをした。いねを子守つた。少し経つていねを連れて魚釣りに行つたらふながびよんびよんとかゝつた。

午後は父と二人でさんのう前へこくそ^{*}をはこんだりちらしたり車の後

押しをした。それから草けづりをした。した所はこくそをひいた所だけである。明日から学校が始まるのである。

(発信) 村田政二^{**}「落書」

*蚕糞。

**当時尋常科四年生。

六月十三日 火曜 曇 25度

祖父さんと草刈に行つた。たいへんに草が、あつたので忽ち刈れた。今日から学校が始まるので草を刈つて居る間も何となく気がせかれた。朝飯をたべて居ると山下昭二君^{*}が迎ひにきた。

学校から帰ると前の畠で、祖父さんと父と母の三人で大麦刈をして居たので僕も早速行って相手をしたが中々、早く刈れなかつた。

みんなが、二條刈る間に一條やつとしか刈れない。中々蒸し暑かつた。上簇した蚕はもう今日は真白に繭をつくつた。

*同級生。

「この日は筆跡が違うので筆者が書いたものではない。」

六月十四日 水曜 曇 26度

祖父さんと草刈りに行つた。

昨日と同じ所へ行つて刈つて来た。

学校は後れはしないかと祖父さんよりも先に家へ来た。

今日も学校は半日なのだ。

学校の体操中に転廻や箱飛などをした。

家へ帰る時に山下昭二君の天気予報の手伝をした。

家では庭のむしろやなにかをかたづけた。

六月十五日 木曜 晴 26度

神社参拜なので草刈りに行かなかった。

学校は三時間して午後は大そうじをした。庭そうじ

明日はとうぐわをもって行くのである。家へ来て兄弟で魚釣りに行ってつって来た。麦たばはこびをした。

神社参拜。

六月十六日 金曜 曇 27度

おぢいさんと草刈りに行って来た。

とうぐわをもって学校へ行った。

先生はどうしたのだから学校来なかった。四時間してかりた山のそうじをした。ついでに土俵を作った。

明日はけんどうがする。

(発信) 金井仲次郎 [落書]

*談・学校が借りていた山。現在菅谷小学校の西の駐車場になっているあたりか。

六月十七日 土曜 晴 25度

おぢいさんと農士学校の下の山へ草刈りに行った。

家へ来てしないを持って学校へ行った。朝礼にならぬ中にかりた山で角力をした。機械体操もした。家へ来て、まゆかきをした。

鬼蟲取りに行って大きいのを一つ取って来た。

魚釣りに行ったが、二、三匹しか釣れなかった。ついでに角力をして来た。六月十九日は害虫駆除をするのである。明日は日曜日。

(豫記) 十九日は害虫駆除である。

*まいかき。上簇して一週間から十日位するとマブシから繭を取り出す。

*くわがた。

菅谷青木高よりレコード購入費として八十円寄贈される(菅谷小学校「学校沿革誌」)。

六月十八日 日曜 晴 25度

おぢいさんと耕地へ草刈りに行った。そして草を刈るのをすけてもらはなくもかれた。

今日は日曜日なので学校へ行かないでまいかきをした。

野村君の家へ天気予報のハコボクを持って行った。

それから一生懸命に毛羽取りの事をした。

夕方になって守やまきといねと四人で川へ行って魚をいくつかとった。

明日は害虫駆除である。

(発信) 山下昭二 [落書]

(受信) 山下三郎 [落書]

*野村修彦。同級生。

*白墨。

***出荷する前に繭のけばをとる。

六月十九日 月曜 晴 25度

朝は少しねぼうをしたので草刈りに行けなかった。

そのかわり庭をはいたり害虫駆除ノ支度をした。

朝めしをたべて皆と学校橋付近に集って先生の来るのをまつた。

先生が来ない中に転廻やガラなどして魚を取った。

先生は来た。川南に集まり。一、二、三、と男女が各組を作った。僕

は三組の副組長であった。

だんだん害虫を取った。その数はちやうど二百匹であった。今日は三回水泳をした。

*漁法。縄にくさをつけ、二人で水面を引っ張り魚を追いこんでとる。

六月二十日 火曜 晴 27度

おぢいさんと耕地へ草刈りに行った。家へ来て自転車に乗って学校に行った。

そして四時間目にかしの木へ手工の竹取りに行ってきた。

五時間目には作業のタイルいけをした。

学校帰りに菅谷の自転車屋へよって電池をかったり、さとうをかって家へ来た。家へ来ていねをつれて魚釣りに行って来た。

*屋号。米穀肥料商関根清一商店。

**談：『菅谷小学校沿革誌』によれば一九三八（昭和十三）年度卒業児童の寄付でタイル二百五十個を購入している。運動場のフィールドの線として埋めたのではないか。

***談：松浦自転車店。

***談：岡松屋で買った。

六月二十一日 水曜 晴 26度

おぢいさんと草刈へ行った。僕は籠をもって行かなかった。

朝学へ行く時にけんちゃん家で竹割りをかりて行った。

学校へ行って五時間目に山下家へ竹もちに来た。

手工をした。川へ魚釣きに行ってきた。

*屋号。山下庫次郎方。

六月二十二日 木曜 曇雨 27度

今日は皇軍なので草刈に行かなかった。そしてべんとうをもって学校に行った。一年生から高等二年まで二れつになって嵐山に向った。行く時に高等科は大平山をこして行った。嵐山で一年と二年と高一、二は小倉城止へ行った。

小倉城止で少し休んで城止を下りた。それから塩山のふもとを遠くまで鎌形へ出た。それから千手堂橋の近くで昼をたべて川あそびをして学校へ帰り家へかへった。夕方は小雨が降った。

*行軍。

**城址。

***通って。

六月二十三日 金曜 曇 23度

おぢいさんと草刈りに行った。草はともあったので早く家へかへれた。

手工の支度をして学校へ行った。

六時間目から手工をした。手工はひねを作ったのである。

今日は天気予報をして家へ来た。

家で面白い遊びをした。明日はべんたうが居る。

*びく作りのために竹を割ってひごのようにしたもの。

六月二十四日 土曜 曇 25度

おぢいさんとそう作場の上へ草刈りに行った。

今日は一籠一人で刈れた。そして土曜日ではあるがべんとうを持って行った。三時間した。始まらない中に六組の実習地に下肥をくれたら

朝礼に後くれた。大根も大きくなった。三時間してから手工なので竹をわけた。そしてたてよこのひねを作った。家へ来てビクをあんだ。中々よくあめなかった。鬼虫を取った。

*地名。櫻索場。

六月二十五日 日曜 雨 21度

今日は朝から雨が勢よくふった。

だから草刈りへ行けなかった。

そしてどこへも行かないで家で昨日の続きのビクを作った。昨日よりも良くなった。しまいにはとても良く出来た。

それから売り店やなにかをした。明日天気なら草刈りである。だから鎌も持って学校へ行く。

六月二十六日 月曜 小雨曇 22度

朝は小雨が降って居た。そしてビクを持って学校へ行った。

学校は三時間であった。

家へ来て田へ行ったり、使をした。菅谷へ行ってきた。

六月二十七日 火曜 曇 23度

朝は傘を持って学校へ行った。

が上家あたりまで行ってわざわざ家へ傘置きに来た。

学校へ行って二時間し、三時間目には校庭の草むしりをした。

家へ来て田へ茶おけを持って行った。

魚釣りに行った。六月二十九日から七月四日まで田植休みである。

*屋号。金井廣吉方。

六月二十八日 水曜 曇 21度

朝は起きて支度をして学校へ行った。

三時間目には庭舎のまわりにあるかきねにするかしの木のまわりの草や肥をくれる穴をほった。

家へ来ていねを子守ったり、かくねっこ、売りやごとをした。

夕方おぢいさんにビクのふちをまいてもらった。

明日から田植休みである。

六月二十九日 木曜 小雨 20度

おぢいさんと川原へ草刈りに行った。

家へ来てからおとうさまと田へこゑを引ひた。

ひる前に馬だて^{*}をほったりはなどり^{**}をした。

昼からは、田をかくのである。

田から家へ来ていねをつれて守をつれて魚をつっているところへ行つた。

*談：馬耕では耕い残すような所。

**談：田を耕す時、馬の鼻を取って誘導する役。小学校五、六年生からしていた。

六月三十日 金曜 曇小雨 25度

朝はお父さんと草刈りに行った。

帰りには山下君と一っしよに家へ来た。

それから向徳寺へ申し込みの紙を持って行った。

家へ来て、耕地へ麦刈りに行って半日かって来た。

昼からはやっぱり麦刈りであった。夕方は小雨が降って来た。

(豫記) 名和長利死す。

七月一日 土曜 曇小雨 24度

今日は神社参拝なので草刈りに行かず、ほうきを持って神社に行った。まだ何人も来て居なかった。

参拝をして家へ来た。

昼前は子守りをしながら川へ魚釣りに行った。

午後は鎌を持って田に行った。田は暗くならない中に後って甘諸島へうつつた。

車の後押しをした。午後温度当番なので野村君と一しよに、学校へ行った。帰りに使をして来た。今日から新聞を取り始めた*。

(豫記) 弘安の役 元軍神風に壊滅

(受信) 富岡マキ [落書]

*談：取り始めたのは朝日新聞。当時、玉川の新聞店より大蔵分をまとめて運んできたのを各家に青年団員が配達していた。

神社参拝。

七月二日 日曜 雲 26度

朝は草刈りに行かず少しおそくおきた。

新聞見たら天気予報もあった。

朝から麦刈りなので鎌を持って甘諸島へ行った。

昼前の中に甘諸島は刈り切り、午後前の島へ行った。そして今日は麦刈りが後った。

父が車へつけて引く肥の後押しをした。田へ行つて肥をちらした。

草引きをした。後おしもした。

(豫記) 新田義貞越前藤島に戦死年三十七才(延元三)

七月三日 月曜 曇 23度

父は祖母さんに起こされて父と唐子川原へ草刈りに行った。

草があつたのでたちまちの中に刈れて早く家へ来られた。

朝はんを食つて籠をしょつて田へ行った。田では少しはな取りをした。

昼からも田うないではな取りをしたがうまくいかなかった。

夕方家へ来る時に馬に乗つて来た。

(豫記) 遣隋使の始 小野妹子拜す(推古天皇。一五)

(発信) ドイツ [落書]

七月四日 火曜 曇 25度

朝は父と唐子へ草刈りに行った。

草はあつたので早く出来たので家へ来た。

朝からはなどりなのでくはをもつて田へ行った。

苗代の上の田をうなう時ははなどりがいらなかった。しまひにはなどりをした。

昼からは始めての田をかいだ。夕方上代あけしろ*をした。

明日から学校へ通ふのである。一日中はなどりをした。

(豫記) 米国独立(西紀)(一七七六)

*代かきの仕上げ。

七月五日 水曜 小雨 27度

朝は父と二人で一籠草を刈つて来た。それから支度をして学校へ行つ

た。学校でとてもひくく飛行機が下りた。

学校は三時間して家へ来た。帰る時にけんちゃんが自転車へ乗せて来てくれた。

家へ来て花火を上げた。

西の山へ行つて屋根を作る相手をした。

麦からはこんだ*。

今日から学校が始まる。トランプを作った。

(発信) イタリヤ [落書]

*談：借りていた杉山で、木の下に麦からを積んで、雨に濡らさないようにしておく。その麦からを馬に踏ませて堆肥にする。

七月六日 木曜 曇 26度

今日はおばあさんにをこされた。おきて見ると未だうす暗かった。

田へ水が廻ったのでかくのであった。田へ行つて幾時間かやつて家へ

来た。学校へ行くのにせいた。

学校では三時間目に実習地の草むしりをした。それが後つて桑のかわ

廊下へはこんだ。

家来てから菅谷へ使へに行つて来て田へ行つた。

そしてなへ取りの相手をした。明日は事へん二周年紀年日である。

(発信) フランス [落書]

七月七日 金曜 晴 30度

朝は晴れそうであった。学校へ行つて一時間目に事変二周年記念日の式をした。

家へ来てから田へ行つた。それからとてもあたまがいたくなつた。

(発信) アメリカ [落書]

(受信) 東京 [落書]

*日中戦争前面化のきっかけとなった一九三七(昭和一二)年七月七日の盧溝橋事件二周年。日中両国とも宣戦布告せず、日本はこの戦争を「支那事変」と称した。この日の行事として「菅谷村小学校では七日全校生徒職員総出で村内出征将兵留守宅の労力奉仕」(「埼玉読売」七月九日)がある。

七月八日 土曜 晴 30度

昨日からあたまがいたいのが今朝も続いた。

学校へ行つて二時間目に先生から天津の話聞いた。

体操はひまをもらった。

今日は関口三郎君*からさうがんきょう*をかりた。

そのそうがんきょうで星がお月様ぐらいに見えた。

*同級生。

**双眼鏡。

国民徴用令公布(七月十五日施行)。

七月九日 日曜 曇 31度

(豫記) ベウキ

埼玉県比企郡菅谷村大蔵富岡守平君 村田政二より [落書]

マキトケンカヲシナカッタ

七月十日 月曜 晴 27度

(豫記) ベウキ

埼玉県比企郡菅谷村大字大蔵 富岡隆次君 富岡少佐 [落書]

修身考査

七月十一日 火曜 曇 28度

朝は、はらぐたいのが少しなをつたのであるって学校へ行った。学校へ行って一時間目には話をした。それは夏休みの話である。二時間目には算術の考査をした。そして五時間してべんとうをたべた。六時間はけんどうをしてどぐつけるきようそうをした。算術考査

*歩いて。

菅谷村出身陸軍飛行士根岸隆仁よりマイクロホン購入費として百円寄贈される(菅谷小学校「学校沿革誌」)。

七月十二日 水曜 晴 30度

今日は朝当番なので早く起きて学校へ行った。したら誰も来て居なかった。窓のカーテンをあけたりガラス障子をあけて居る中に中村君*がちゑのわをもつて来たのでわるさをした。それから教室をそうじした。五時間して家へ来た。せみを取った。二時間目には先生が五年の教室へ行ったので国史をしらべた。三時間目に国史の考査をした。

国史考査

*中村元介。同級生。

七月十三日 木曜 晴小雨 29度

朝は普通に起きて植木場の整理をして居たら新聞が来た。それから学校へ行った。そしていろいろの本をしらべた。三時間目に下田先生*が農業の考査をした。四時間目には理科の考査をした。明日も考査がある。今日は農業の実習当番なので畠を耕やし、下肥をかけて来た。家へ来てから遠山の水車へめんを持ちへ行って来た。明日は天皇様*である。

○ (豫記) 吉宗室鳩巢に六諭衍義和訳を命ず。普仏戦争起る。西紀一八七

*下田茂寿。一九三九(昭和一四)年三月〜一九四四(昭和一九)年三月勤務。

**天王様。大蔵神社の末社八坂神社の夏祭り。

七月十四日 金曜 晴 30度

今日は天皇様である。学校へ行って五時間して家へ来た。明日は草けづりをもつて行くのである。それから農休みなのである。午後は夕方夕立が出たが止んだので天皇様をした。明日も天皇様である。農休。

七月十五日 土曜 晴 29度

今日も天皇様である。

朝早く起きて草けづりを持って学校へ行った。

そして三時間して四時間目に草けづりをした。

家へ来てシャツとサルマタとをはいて天王様へ行った。

そしてタイコをはいたり天王様をモンだりおししの後をついていたり水泳をした。

氷水をのんだ*。

*談：大蔵の竹本屋。清水金平方で。

農休。

七月十六日 日曜 晴 29度

今日も農休みである。朝から川へ行ってあそんだ。

ひるからはさかなつきのどうぐをもって行って、いくひきかついて来た。家へ来てから花火を上げた。

農休。

七月十七日 月曜 晴 32度

朝は早くおきておぢいさんと草刈りに行った。

そして学校へ行って二時間目に読方の考査をした。

そして五時間して家へ来て花火を上げた。

埼玉県比企郡菅谷村大蔵 富岡寅吉殿 富岡隆次中佐ヨリ〔落書〕

七月十八日 火曜 晴 30度

朝はおぢいさんと草刈りに行った。そしてけんだうのどうぐをもって

学校へ行った。四時間、五時間と川へ行って水を浴びたり、魚を取ったりした。

六時間目にはけんだうの時にはどうぐをつけてした。

七月十九日 水曜 晴 32度

朝はおぢいさんと草刈りに行って、草はあったので早く刈れた。そして学校へ行った。

少しおそくなった。

三時間目にづぐわをして上げた。四時間目から又川へ来て魚を取った。水をあびたりした。家へ来てから魚つきに行って二十匹つって来た。

その前におばあさんと麦からはこびの車引きをした。

七月二十日 木曜 晴 31度

今朝も早く起きておぢいさんと草刈りに行った。

草はあったが根くぎ*がぶってあって刈り悪かった。

家へ来て支度をして学校へ行った。三時間目には農業の実習をした。

六組は自分の実習地をせいりして種を播くばへにしておいた。

そして五時間目には唱歌の考査をした。

そうじをして家へ来て竹治君、政二君、守平君、などと川遊びに行つて来た。

(豫記) 岩倉具視斃去年五十九(明治十六年)

*談：目くぎ。堤防に移植した芝を固定するために打つ割った竹。

**清水竹治。当時尋常科四年生。

七月二十一日 金曜 晴 28度

朝は早く起きて祖父さんと草刈りに行った。

草はあったので早く出来て家へ帰れた。

そして学校へ行く支度をして行った。学校へ行って事業は一時もせつに防空演習の習いをした。僕は防毒班であった。

そしてバケツに砂を入れてまいたりした。伝令もした。家へ来て川へ行つた。そして魚をとって来た。明日から川へ行かないと思ふ。

今日より防空演習である。

(豫記) 家康方廣寺鐘銘「国家安康」を怒る(慶長十九) 明日より川へ行かないと思ふ

七月二十二日 土曜 曇小雨 28度 25度

今朝も早く起きておぢいさんと昨日の所へ草刈りに行った。

草はあったので早く出来ておぢいさんより早く家へ来られた。

そして支度をして学校へ行った。

学校で三時間目に校長先生から蚕の話聞いた*。

それと外にうまいもの話も聞いた。

家へ帰りに山下君に愛国少年の本をかりて読んだ。

明日から又農休みである。

今日も防空演習である。

*談：当時、学校の宿題で初秋蚕一グラムを夏休み中に育てた。その話を聞いたのか。

七月二十三日 日曜 曇 29度 26度

朝もおばあさんにおこされておぢいさんと一しよに草刈りに行った。

今日はおぢいさんより早く出来ておぢいさんにすけた。

家へ来てからいねをつれて魚釣りに行った。

午後は昼休みに防空演習で金井屋*あたりで焼夷弾の事をするので見に行った。油屋の家でならいをした。すごいおとのもした。けふの出るのもした。

*金井屋商店。金井又作方。

**屋号。大沢久三方。

***予行。

菅谷・川島・大蔵・根岸・将軍沢・遠山の各部落で防空防火訓練実施。

七月二十四日 月曜 曇 27度

今朝もおぢいさんと草刈りに行った。今日は唐子の天皇様*である。

だからそうじり*をして家へ来た。

そして守や政二君と唐子の神社へ行った。そしてさ、らを見た。

小使ひも使った。

岩をはれらかした所へ上ったり石のなげっこをした。今日も防空演習である。

(発信) 兵隊さんへ

*天王様。七月二十四日は、唐子村上唐子の氷川神社の例祭。唐子村神戸の神戸神社(天王様)の例祭は二十四、五日。下唐子の唐子神社(お諏訪様)の夏祭は二十六・二十七日で、どの神社でもササラ(獅子舞)が奉納される。お諏訪様の夏祭については、一九一四(大正三)年頃の様子を描いた打木村治『天の園』(第四部)第三章天馬の「縁の下の仲間」がおもしろい。この日の唐子の神社は上唐子の氷川神社をさす。

**不明。

***談：ハツバをかけて崩した所か。

***七月二十九日に出征軍人慰問状用として郵便切手百枚分三円が村

費より支出されている。

七月二十五日 火曜 曇 28度 25度

朝は目をさまして居ると、おぢいさんがおきたので二人で中河原へ草刈りに行って来た。

学校へ剣道の道具を持って行ったがしなかった。そして二時間した。二時間目には考査をかへした。

三時間目に庭の草むしりをした。

そして普通のそうじをして家へ来た。守やなにかと魚釣りに行って二十匹ぐらいつって来た。明日は事業はしない。

(豫記) (1) 徳川綱吉武家法度制度を定む。(天和三)

(2) 豊島沖の開戦(明治二十七)

七月二十六日 水曜 曇晴

今朝もおぢいさんと、草刈りに行った。今日も祖父さんよりも先に出来た。家へ来て学校へ行く支度をして、学校へ向った。

今日は、にもつは持って行かないでふるしきだけ持って行った。

そして暑中教育中学校へ行く日をきめた。高一年は二十七日ヨリ三十一日マデ。午後剣道に行くかな。その午前は林間教育をする。

五日の日に日記と地図と半紙を持って行くのである。明日から楽しい暑中教育である。

*資料七参照。

七月二十七日 木曜 曇 31度 26度

今朝は草刈りに行くこうと思つたら村田君が「今日は学校へ行くのだ。」

と言つてので草刈りの用意をして行った。そして土手の草を組別にきれいにした。

それから家へ来て朝めしをたべて林間教育なのでカバンを持って行ってベンキようをした。

その時に防空演習をした。午後は剣道なので自転車に乗ってシナイ、ハカマをもつて行った。帰りに水泳をした。

田の草取りもした。

(豫記) 幕府町人の長脇差を禁ず(天保一四)

嵐山に林間学校で来ていた東京の小石川小学校の児童二名が遊泳中に溺死。

七月二十八日 金曜 晴曇 31度 28度

今日の朝もおぢいさんと草刈りに行った。今朝もおぢいさんよりも先に出来た。

家へ来て林間教育に行った。とてもゆくわいだつた。

林間教育もおへて家へ来て田へ行って来た。

昼からは剣道の道具をもつて学校へ行った。今日はかたと道具の付け方をした。

家へ来てうす引きの手伝ひをした。

(豫記) 豊臣秀頼家康の孫千姫に婚す(慶長八) 日布移民事件解決(明治三十一)

*談：大麦を炒りこがし、ひいて粉にする。麦焦がし。はったい。

七月二十九日 土曜 晴 31度 27度

朝はおぢいさんと川向へ草刈りに行った。今日はおぢいさんよりもおそかった。家へ来てから林間教育に行った。そして十時位までして家

へ来た。午後は土用げいこに行くのである。林間教育からかえると間もなく学校へ行くのである。今日は用があるので自転車でいった。

剣道をする時には高二年生の人が道具をつけて高一年生がうちこんだのである。かへりに吉野君と二人で自転車で行って水をあびて帰りにメンをもって来た。

(豫記) ムツソリーニ生る(一八八三)

七月三十日 日曜 晴 31度 26度

朝はおぢいさんと草刈りに行った。そして草がなかったので農士学校の下からごんごん上って会くわんの下の方まで行った。そして草はたくさんあった。家へ来てから林間教育に行った。

林間教育もついて家へ来て二時間程あそんで昼を食べて、しないと、はかまをもって学校へ行った。

学校へいつてかたをして居る中に、西坂先生と、小澤先生が教へに来た。

*談・菅谷会館。忠魂祠の前にあり、小学校焼失後、筆者が尋常科四年生の時はここで勉強した。

*西坂経孝。愛媛県今治中学校卒業後、日本農士学校に入学し一九三四(昭和九)年三月卒業(三期生)。当時、助教授。後に福岡農士学校副校長。福岡農士学校は一九三二(昭和六)年創立。

*小沢庚市。松中卒業後、日本農士学校に入学(九期生)。この時は生徒。

七月三十一日 月曜 晴 32度 28度

今朝もおぢいさんと昨日の所へ草刈りに行って来た。

家へ来てから又林間教育に行った。今日は林間教育の一番後りの日で

あった。そうじをして家へ来た。今日も早昼飯で自転車で学校へ行った。

学校へ行って今日も少し遊んだ。今日は剣道が一番しまいの日である。剣道も後って支度室でサイホウをする板をならべて菓子をもったり、水をのんだりした。明日は学校へ行く。

八月一日 火曜 晴夕立 26度 24度

今日は少し早く学校へ行くので草刈りに行かなかった。

政二君の家にいたら山下三郎君が来たので二人で一しよに行った。学校へ行ってラヂオ体操をした。ラヂオ体操をして菅谷神社に参拝した。後ってから大蔵川原へ砂もちに来た。

学校へ行って内田先生より話をきいてそうじをして家へ来た。そして夕方は夕立が来て石屋の西の杉の木に落雷した。

(豫記) 加藤清正熊本城を築く(慶長八)

*屋号。野口民吉方。

*談・雷が落ちた時に近くをリヤカーをひいて通っていた人がすいつけられたという話だった。この日の落雷については大字菅谷地内について新聞記事がある。「菅谷に落雷 一日夕刻県北山岳地方を襲った雷雨は午後四時卅分ごろ比企郡菅谷村役場前東電菅谷五十一変圧器に落雷したが人畜に死傷なかった」(『埼玉読売』八月二日)。

八月二日 水曜 曇 29度 26度

今朝もおぢいさんと一しよに農士学校の上の方へ草刈りに行った。

今朝も早く出来て家へ来た。

家へ来る帰りにに置針を上げて来たが一匹もかかって居なかった。

家へ来て朝めしをたべて田へ行ったがすぐ家へ来てしまった。

家へ来て少し遊んで川へ行って魚をつつた。

午後図画を半分ぐらい書いて見た。今日も夕立が出さうだ。

(豫記) 電話発明者グラハムベル逝く。大正一一

*魚捕りの道具。夕方川の中にしかけ、朝引き上げる。

八月三日 木曜 曇 28度 25度

今朝もおぢいさんと草刈りに行った。今朝は中川原^{なかがわら*}で刈った。山下君や山下の父も草を刈って居た。

家へ来てからいねが気持がわるいのでいねを子守った。

(豫記) 大宝律令成る。大宝元

*談：都幾川河床で水路にはさまれた水の流れていない部分で農士学校の
前あたりをこう呼んでいた。

八月四日 金曜 小雨 25度 24度

今朝もおぢいさんと草刈りに行った。

そして家へ来てから飛行機のおもちゃをつくった。

(豫記) 後藤象二郎伯逝く 年六〇 明治三〇

八月五日 土曜 雨 27度 25度

今朝はおぢいさんと中川原へ草刈りに行った。草はなかったの草を刈るのがおそかった。家へ来たなら今日は学校へ行くので山下君が僕の中でまってる居た。

二人で学校へ行った。おそいと思つたがそんなにおそくなかった。

先生に地図の見方をおすはった。

家へ来てからきのこ取りに行つて来た。少し沢山取った。

学校帰りに三人のちよきんをした*。

(豫記) 徳川家康^{トクジヤ}呂宋国王に書を遣る。慶長七 英米海底電信開通 西紀一八五八

*談：寅吉・守平・まきの貯金だったと思う。

八月六日 日曜 半晴 30度 27度

今朝は草刈りに行かなかった。家で家の事をした。

そして昼前の中は守やまきとじんだん棒^{*}へ魚釣りに行って四、五匹釣つて来た。

昼からは少し休んですいくわをたべた。

幾時間かたつて祖父さんと二人で馬小屋の肥取りをした。

後つてからさんのう前の方へ行って手足をあらつたり万能をあらつて来た*。

(豫記) 百済王良馬を献ず 応神天皇八

(受信) 久保先生より

*談：くぬぎをじんだんほうと呼んでいた。現在の嵐山町営南部グラウンドあたりで、大蔵の田の水が都幾川に流れこんでいた。そこに水たまりが出来ていてじんだん棒の木が生えていたのでこう呼んでいた。

**談：堀があつて水が流れていた。

八月七日 月曜 晴 28度 26度

今朝はおぢいさんと一しよに中川原に草刈りに行った。

家へ来てからおぢいさんと田の草取りに行った。

おはつてから家へ来た。

午後西瓜をくつた。それから暑い中に魚釣りに行って来た。

それから桑くれもした。

(豫記) 商法実施令公布 (明治三二)

(発信) 久保先生へ

八月八日 火曜 晴 28度 26度

朝は早く起きて、鎌や夏休みの友をもって自転車で学校に向った。行く途中根岸の所へ来ると根岸君が今家のせどで支度をして居たのでさそって二人で話をしながら唐子を通って学校にはしった。学校へ行ったら早かった。僕は、五番目位であった。

そして幾分か遊んで下田先生が来て一人で三ツのボツチの間を刈るのであった。後つてから先生に地図の事についておすわった。帰りに古い学校の庭からこすもすをこいで来た。^{*}

(豫記) 皇軍北平に入城 昭和十二

*背戸。家の裏口。

**談・移植のため、引き抜いて来たのだろう。

八月九日 水曜 晴 32度 28度

きのうの続きで今朝も水車に居た。朝をきて朝飯をたべて遠山水車のたくにもどった。

そして水車でたかしさんや、なにかと川で魚をつった

昼になったので又坂の下へ行つて昼をたべて水あびをした。

車でチーボウヅラモラウカナ

(豫記) 上海に大山事件起る (昭和十二年)

*芝辻十三の息子。遠山水車の兼子の親戚で東京に住んでいた。

**談・知恵坊主。旅行の土産でもらった玩具。

八月十日 木曜 曇 26度 24度

おぢいさんにおこされて二人で川向ふへ草刈りに行った。草はあんまりなかった。刈つて居ると三郎さんも来て刈つた。

刈り来つてから家へ来て足を洗らつた。

そして朝飯をたべてから隆次と二人で草つみに行った。

草をつんで大堀おおほりに行つて魚をおいとばした。

家へ来てから蕃茄トマトを飯つて少し経つてから皆と山へきのこぬきこぬきに行つて来た。

(豫記) 銅銭の始め (和銅珎銭) 和銅元年

*食つて。

**談・この時季ではきのこは乳ちだけだろう。

八月十一日 金曜 曇 31度 29度

今日は十一日なので学校に行くのである。草刈りにも行かないで早く起きて早飯をたべて山下君と二人で橋を渡つて学校へ行つたらとても早かった。

そして蕃茄をくつた。

朝礼をしてから全校員が川原から砂はこびをした。

それから草むしりをした。

(豫記) カーネギ死す 一九一九

八月十二日 土曜 晴 29度 26度

今日も又学校へ行くのである。早く起きて支度をして居ると山下君が自転車で僕の家へ来た。だから二人で一しよに自転車で唐子を廻つて

行った。

行く途中山下君が唐子の所で自転車から落下した。

それから続いて学校へとはしった。

松浦自転車店へ自転車をなほしてもらうので置いて二人で行った。

学校へ行ってから実習地の草むしりを根岸君とした。

それから三時間位理科のペン強をした。帰りにも自転車で家へ来た。

三時頃玉川の小間物でフンムンキをかって来た。

(豫記) 米国最初の鉄道成る(一八三〇)

八月十三日 日曜 曇雨

今朝も早く起きて桑くれをした。そして朝飯を飯って支度をして山下

君と一しよに学校橋のきんじよに行った。

そしてマルタを渡って居ると下田先生が自転車で来た。

少し立つと宮島先生も来た。いよいよ皆があつたのでこかげに行つ

て組をきめた。

僕は一組であった。四組にわかれた。一組は富岡實さんの家へ行った。

そして唐子の方の島まで行って草むしりをした。後って成澤萬三さん

の島の草むしりをした。後ってから水泳をした。

*出征兵士の家。一九三八(昭和十三)年一月十日歩兵第一聯隊に現役で
出る。一九四四(昭和十九)年六月十七日戦死。

**八月十五日の『埼玉読売』には次の記事がある。「菅谷校の除草奉仕
比企郡菅谷村小学校五、六年生百五十名は十三日職員に引率され、村
内出征将兵遺家族の田畑桑園等を十班に分れて除草奉仕した」

八月十四日 月曜

埼玉県比企郡菅谷村大蔵 富岡寅吉君「落書」

八月十五日 火曜 晴 27度 23度

埼玉県比企郡菅谷村大字大蔵二九七番地イ号 富岡林造様「落書」

八月十六日 水曜 晴 27度 21度

埼玉県比企郡菅谷村大字大蔵二九七番地イ号 富岡準三郎様「落書」

八月十七日 木曜 晴 29度 25度

今朝早くおきた今日も目がいたい*。今日は蚕上げである。

そして昼から蚕上をして四時頃おわって西瓜をかって来た。

八月十七日 お蚕上げ。

*談：めつぱ(ものもらい)が出来ていたのだろう。

八月十八日 金曜 晴 26度 24度

今日もまだ三日も前からの続きで目がいたい。そして今朝おきたらう

みが出た。夏休みの友ともをつけた。

八月十九日 土曜 25度 23度

埼玉県比企郡菅谷村大字大蔵 富岡マキ様「落書」

千手堂 関根五月「落書」

*妹のまきの同級生。当時尋常科四年生。

八月二十日 日曜 雨 24度 23度

スモウ

八月二十一日 月曜 曇 25度 24度

朝おきて朝がほやらなにかを見た。今日は七月七日なので七夕しらたひ*である。だからまんぢゅうを作った。

それから二十一日なので学校へ行った。朝の中は雨が降った。

学校へ行って先生に話を聞いて家へ来た。

*旧七月七日で七夕。

八月二十二日 火曜 晴 30度 27度

今日はまゆかきである。だから早く起きて支度をしてかきはじめた。

そして一日中かいたので二十貫の上かけた。

午後は大臣の家へ百匁白まゆをもって行って来た。***

それより前、大工の家から水まくらをかりて来た。***

*屋号。金井柳作方。

**談：品評会に出すので持っていったのだろう。

***談：朝草刈りに父と行っているので、多分祖父が熱を出したのだろう。

千手堂高橋照士歩兵第一聯隊、鎌形長島林平歩兵第一聯隊、鎌形小林豊作歩兵第一聯隊応召、午前六時二十三分出発。

八月二十三日 水曜 曇 29度 23度

今日は早起きをして父と一しょに草刈りに行った。

草はなかつたが、わり合いに早く刈れて家へ来た。

今日も少しまゆをかくのである。幾時間かかいてから自転車で車へめんを持ちに行った。

行ってから橋かけの相手をした。だが面はひないので面***をもたないで

家へ来た。明日は兵隊おくりである。

*談：天日千しの干麴（干しうどん）が乾いていないので。独ソ不可侵条約調印。

八月二十四日 木曜 曇 28度 23度

今日は兵隊送りである。だから早く起きて朝めしを食って神社へ行つたらまだ早かった。

その中に小市さんが来て御合さつをしてから歌を歌っててん車場***へ向つた。てい車場で小市さんを送くつて学校へ行った。

学校では理科を勉強して来た。家へ来ると間もなくお昼であった。

午後はいねとあそんだ。なほ夕方になると雨が降って来た。

*金井小市。近衛歩兵第一聯隊応召。午前七時二十三分出発。

**挨拶。

***停車場。

八月二十五日 金曜 晴 28度 25度

今朝も父と中川原へ草刈りに行った。草はなかつたから良くない草を刈つたので早く出来て家へ来た。

家へ来てからすぐ大工の家からリヤカーをかりて来た。

そしておぢいさんが菅谷へ行くので橋の所でリヤカーをになつてから

家へ来ていねと遊んだ。

自転車でさい藤君の家へ使へに行つて来た。四時頃テンヅイ***にあぜか

りをした草を取りに行つてしどめを取つて来た。

*地名。現在の嵐山海洋センターあたり。

***クサボケの別称。実を食用にした。

八月二十六日 土曜 晴 27度 24度

今日は学校へ行くので草刈りに行かないで庭をはいて居ると山下君が来た。

そして朝飯を食って支度をして居ると又さそいに来たから二人で学校へ行った。そして先生にする仕事を聞いて先づ実習地の草むしりをした。それから下肥をくれてえんげんをうりに行った。そして五十七銭になった。かへって来て豆を取り茄子も取って売って家へ来て午後車へ面をもちに行つて来た。

*いんげん。

八月二十七日 日曜 晴 28度 26度

午前

今朝も父と一しよに川原へ草刈りに行った。

草を刈って家へ来てから菅谷へ使へに行った。

薬屋にはヒサンエンはなかった。岡松屋でさとう一円買って来た。

キヤラメルも買った。そして家へ来て十一時半頃兎を明さんの家へかけた

午後

それからタバコヤにあつたくわつどうに行つた。

*鳥本虎雄薬店。

**談：殺虫剤の一種。

***屋号。金井勝五郎方。

****談：映画。幕をはって業者が巡回して来た。

八月二十八日 月曜 晴 28度 25度

午前

今日はおほんなので草刈りに行かなかった。そして水をあびたりして遊んだ。

銭も使かった。

午後

正午からもあそんだ。

そして西瓜もくった。

自転車へ乗った。

*旧曆七月十四日。

平沼内閣総辞職（「欧州情勢複雑怪奇」として）。

八月二十九日 火曜 晴 「記入なし」

八月三十日 水曜 曇後晴 「記入なし」

八月三十一日 木曜 晴 28度 25度

今日は晴デス

東大平山美しくしく時ノ川波清らかなれば菅谷の村と名に負いて人の心
もすがすがし。

ちありじんあり勇さえありてあるがなかなるもの、ふかれと人にしられしえいゆうもかつてはここにすみたりき

日々にまなぼん心の玉を かくて止まらずば埼玉の玉の光もあらわれん*

*菅谷小学校校歌。一九一七（大正六）年制定。作詞：菅谷第一小学校訓

導新井順一郎、作曲：東京高等師範訓導田村虎蔵 一、とおの大平山美

しく／都幾の川波清らかなれば／菅谷のむらと名に負いて／人の心もすがすがし 二、智あり仁あり勇さえありて／あるが中なるものふ彼と／人に知られし英雄も／かつてはここに住みたりき 三、日々につとめ

ん学びのわざを／たえずみがかん心の玉を／かくて止まずば埼玉の／玉の光もあらわれん

川島権田久一郎歩兵第一聯隊応召、鎌形杉田俊雄近衛歩兵第一聯隊現役、大蔵斉藤国平近衛歩兵第一聯隊応召。午前七時二十三分出発。

九月一日 金曜 晴

今日は九月一日で神社参拝であり始業式である。

早く起きて神社へ行って掃除をして家へ来て学校へ行った。

学校へ行って第二に始業式をしてそのつぎに国旗けいよう式^{*}をして菅谷神社に行つて武運長久やいろいろのことを祈つた。

それから学校へ帰つて来て草むしりをした。

後つて教室で先生の話聞いた。

*菅谷小学校『沿革誌』によれば、一九三八（昭和十三）年七月十七日、卒業生の同窓会「亦楽会」より「大國旗掲揚場並ニ大國旗寄贈」とある。興亜奉公日。興亜とは亜細亞^{アジヤ}を振興すること。一九三九「昭和十四」年九月一日から国民精神総動員委員会の提唱で始まつた行事。毎月一日は、国旗掲揚、早起き、宮城遥拝、神社参拝、禁酒禁煙、勤勞奉仕、勤儉節約などをする事になった。太平洋戦争開始後は、一九四二（昭和十七）年一月から毎月八日の「大詔奉戴日」にひきつがれた。第二次世界大戦開始（独軍ポーランドに侵入）。

九月二日 土曜 晴

今日は学校へ行くのである。

大蔵区長山下卯之吉より児童百科大辞典全三十巻が寄贈される（菅谷小学校『学校沿革誌』）。

九月三日 日曜 曇

今日は日曜日なのでおぢいさんと中川原へ草刈りに行った。

そして家へ来てから父とこひはこびをした。

それからけづりこみもした^{*}。

生命ホケンに入ったので菅谷へ行くのである。

金井倉次さんをおくるのである^{**}。

*談：桑畑の除草。

**金井倉次郎。青年学校の指導員。一九三八（昭和十三）年八月一五日

山岸宗朋と共に浜松の高射砲第一聯隊に応召。一九三九（昭和十四）年九月三日帰郷なので「迎える」ではないか。菅谷小学校『学校沿革誌』によれば、翌九月四日に青龍刀一振を同校に寄贈している。

九月四日 月曜 曇

今日は月曜日なので学校へ行った。

そして朝礼の時に毎日昼休みに三十分間行進のれんしうをする話をした。

それから四時間目には農業の実習をした。

それから実習地に下肥をかけた。

それから草むしりをした。

昼休みに行進のれんしうをした。午後は花壇の廻りにさく木をうった

九月五日 火曜 晴

今日も学校へ行った。そしてラヂオ体操をした。

それから四時間目に体操をした。

昼休みに行進をした。

午後は機械体操の所へすなばを作る所を作った。

九月六日 水曜 晴

今朝は父と草刈りに行って来た。

そして学校に行く時にまきを自転車へ乗せて行った。

そしてラヂオ体操をした。そして昼休みに愛国行進曲を歌った。

行進もした。

午後から六時間目に機械体操へすな場を作る所を作った。

帰りにもまきをのせて来た

家へ来てあづきもぎをした。

*愛国行進曲「内閣情報部選定 作詞：森川幸雄 作曲：瀬戸口藤吉

一、見よ東海の空あけて 旭日高く輝けば

天地の正気澆刺と 希望は躍る大八州

おお晴朗の朝雲に 聳ゆる富士の姿こそ

金甌無欠揺ぎなき わが日本の誇りなれ

二、起て一系の大君を 光と永久に戴きて

臣民われら皆共に 御稜威に副わん大使命

往け八紘を宇となし 四海の人を導きて

正しき平和うち建てん 理想は花と咲き薫る

三、いま幾度かわが上に 試練の嵐哮るとも

断固と守れその正義 進まん道は一つのみ

ああ悠遠の神代より 轟く歩調うけつぎて

大行進の行く彼方 皇国つねに栄あれ

九月七日 木曜 晴

草刈り あづきもぎ*

*この部分は、消しゴムで消しており、他に記入なし。

九月八日 金曜 曇

今日も父と一しよに草刈りへ行った。そして学校へ行った。

午後一時二十三分の電車で將軍沢の鯨井角太郎さんの出征を見おくりた。

すなはこびをした。

あづきもぎをした。

おすわ様である。

*近衛歩兵第四聯隊応召。

*談・諏訪祭。旧暦の七月二十五日、現在は八月三十一日の晩している。

九月九日 土曜 曇雨

今日は当番であった。

だから早く起きてまんぢゅうをくって学校へ行った。

そして三時間してすなはこびをした。

僕は吉野君とはこんだ。

かへりに農士学校の田の所まで来たらにわか雨が来た。

そのためにびしょぬれとなった。

(発信) 山下和十郎「落書」

九月十日 日曜 晴雨

今日は日曜日なので父と根岸川原へ草刈りに行った。

そして父より先に出来たので先に来た。

家へ来る時はよっちゃんやへんちゃんと二郎さんなにかと家へ来た。

それから又前島へあづきもぎに行つて昼までもいで午後明さんの家で

うさぎをかけてもらった。

それから又あづきもぎに行つた。

乃木祭。

*不明。

**不明。

***山下二郎。弟守平の同級生。

九月十一日 月曜 晴

六組のたねまき

今日は草刈りに行かないで家で働たらいた
それから学校へ行ってさかだちをならつた。

五、六時間と農業の実習をした。

六組は白さいの播種をした。

すなはこびをした。

家へ来てざうさんがけをした。

九月十二日 火曜 晴

今日も早く起きて家で仕事をして学校へ自転車へ乗って行った。

そして学校へ行ってそして草花の種をまいた。

それからすなはこびもした。

九月十三日 水曜 晴

今日起きて見るときりがまいて居た。そして学校へ行った。

そして三時間目に後期用の本をかつた。

そして学校のじげうがおわつてからすなはこびに行った。

すなをはこんで来て家へ来てくわくれをした。

それからかねさん*が本をもつて来てくれた

*富岡カネ。当時高等科二年生。

九月十四日 木曜 晴

今朝は早くおきて桑つみに行った。

そして学校へ行って一時間目から大そうじをした。

そのわけは土曜、日曜日に埼玉県中の学校から先生が来るからである*。
それから午後男の二組、僕等も二年の教室をそうじした。

学校がへりに美作さんよしきにしゃしん*をもらった。

*新聞には次の記事がある。「◇郡教育会の薬草講習会は十六、七両日午

前九時菅谷村第一小学校、講師は薬剤師栗原廣三氏」(『埼玉読売』九月

八日)、「郡教育会主催の小学校教員薬草採取講習会は十六、七の両日菅

谷第一小学校で開かれる。当日は県学務課長も臨席の筈で講師は県衛生

課壺井技師並に日本農学校栗原広三氏」(『東京日々新聞』埼玉版九月十

六日)
**柴田美作。

九月十五日 金曜 晴

今朝も早く起きて、おばあさんとさんのう畠へ桑つみに行ってしよ

かご*に二はいつんで来

た。

それから学校へ行った。

そしていろいろ仕事をし

た。第一時間目に庭のそ

うじをした。

午後作業をして家へ来

た。



しよいかご

それから夕方おばあさんと又桑つみをした。
明日は埼玉県中の先生が集るのである。

*ごまかい。

九月十六日 土曜 晴

今朝も早く起きたが桑つみに行けなかった。

そして自転車で学校へ行って二時間した。三時間目には体操なので川原へ遊びに行って石をひろって来た。

それから学校へ来て、遠山へ行った。小菅山*やなにかと出かけて居ると村田君と吉野君が来ておいついた。それからはずぬ*ままではすをとって車へ行って面をもって家へ来て茶摘み。

*小菅山栄。当時尋常科三年生。

**大字千手堂の蓮沼。

九月十七日 日曜 曇

今朝は早く起きて桑くれをした。それからおぢいさんと桑つみをした。又桑くれをした。

それから昼をたべて少し休んだ。桑をくれてから少し遊んでくり取りに行こうと思ったら雨が降って来てだめだった。

休んでからくりをたくさんとって来てうででゆでてくった。

(豫記) 明日は蚕上げ

(受信) 千葉の中山より*

*談・兼子源吉。筆者の伯父。中山で馬の世話をしていた。

九月十八日 月曜 クモリ小雨

今日は蚕上げなので早く起きた。そして栗をくった。

少し明るくなったのでひらい始めた。一エンダイ*ひろい切ってから朝はんをたべて学校へ行った。

家を出発してから橋まで行くと、山下君と戸口愛作君*がが学校へ行く途中であった。

僕は、ちがう道を通って菅谷の家へ二けんよって学校へ行ったらちやうど山下君などと一しよであった。学校へ行って一時間してひまをもらって来て家へ来て蚕をひろってって昼になっても昼をくはないで二時頃くっておわった。

〔欄外〕 九月十八日 お蚕上げ

(豫記) 今日は蚕上げであった。

(受信) 今日は馬の乗クラ* **

*蚕の飼育台。

**戸口愛策。当時尋常科三年生。

***乗鞍。乗馬用の鞍。意味不明。

筆者富岡寅吉少年の誕生日。

九月十九日 火曜 小雨

今日は蚕が上がったのでせいせいした。

そしていねと使に行つて来てから学校へ行った。

朝礼はしなかった。

機械体操にとびついた。

四時間目には体操でいろいろした。

けんどうもした。

九月二十日 水曜 雨

今日は朝から雨が降って居て止みそうもなかった。だからはだしで学校へ行った。

そして足を洗って教室へはいった。

それから六時間目にはぢゅうどうを幾十分かした。

家へ来てくりをくった。

(受信) 金井小市様 富岡二三郎様より

九月二十一日 木曜 雨

今日も朝から雨が降って居たのではだしで学校へ行った。

そして止んだので学校ではだしであそんだ。

昼を食べて唱歌をして家へ来た。

九月二十二日 金曜 曇

今日も学校へ行く時は少し雨が降って居った。

学校へ行くと雨は止んだ。

だから外へ出て遊んだ。

昼休みの時間に今日は行進をした。いつものとは違ふことをした。

それが後ってから書方をした。始めてのすずりですって書いた。

それから家へ来て栗取りに行つてたくさん取つて来た。

学校へ行くときにはがきを入れて行った。

(発信) 金井小市様 富岡二三郎様

九月二十三日 土曜 雨曇

今日もいつものやうに雨が降って居たので傘をもって学校へ行った。

そして天気なら戦死者のぼさんをするわけであつたが雨天だったのでしなかつた。

そして三時間目は体操で雨が降つたのでしないで女は遊ぎで男はユダイ人の話を聞いた。

家へ来てまいかきをした。くりをうぜた。

*ユダヤ人。

九月二十四日 日曜 晴雨

今日は日曜日なので父と根岸川原へ草刈りに行つて来てからまいかきをした。

草刈りから帰つて家へ来ると泉井のをけ屋さんが来て居た。そして僕は一日中まいかきをした。

時々をけやさんのそばでよく見た。

午後もまいかきをした。

をけやさんはふるをなをして、ゆとうといふものを作りなをしてから、家へかへつた。

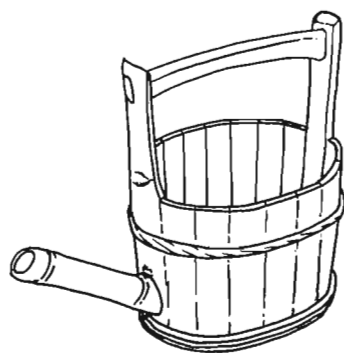
*下肥をまく道具。

九月二十五日 月曜 晴

今日は草刈りをしないで学校へ行った。

そして実習の時間に間引やなにかをした。

それからひるをたべてぼさんをした。



ゆとう (イラスト：豊田浩二)

こんやはかつどうに行くのである。

千手堂西澤義光近衛輜重兵連隊、富岡二三郎近衛輜重兵連隊応召。

九月二十六日 火曜 晴

今日は朝からとても良い天気であった。

だから弁当だけもって学校へ行った。

そしてラジオ体操をしてから小運動会をした。

こじんのかげつこの時はベコであった。

午後は二千米をかけた。

家へ来た。

(発信) シバツジ

*ベケ。びり。

*芝辻十三。

九月二十七日 水曜 晴

今日は天気だった。

そして学校へ行ってすもうした。父は二三郎さんの所へめん会に行つた。

関根秋男^{*} 富岡「落書」

* 応召中の富岡二三郎。

* * 弟守平の同級生。当時尋常科五年生。十五夜。

九月二十八日 木曜 雨

今朝は早くから雨が降って居たのではだしで学校へ行った。父はまだ

かへって来ない。

午後は家へ来た。僕「一字不明」

明日はどうばん

九月二十九日 金曜

戦死者の

戦死者の墓にさゝれる彼岸花 富岡寅吉作

九月三十日 土曜 晴

今日は朝当番であった。

早く起きて植木山へ使へに行つて来てから又使へに行つて来てから学校へ行った。

三時間してつくゑをはこんで家へ来た。

それからおかぶかりをしたのでうたをつくつた。

おかぶ刈り こしをのばして 日をながめ

* 陸稻。

十月一日 日曜 晴

今日は神社参拝であった。

だから早く起きて神社へ行った。そして庭をそうじして栗をひろつて家へ来た。

それからあさめしをくつて山へ栗取りにいったくさん取つて来てうぜてたべた。

午後はあたまかりをした。

ゆかいこみもした。^{*}
さつもをした。^{**}

*風呂の水汲み。

**不明。

十月二日 月曜 晴

今朝は早く起きてざしきをそうじしてから学校へ行った。

学校へついでからラヂヲ体操をした。

そして修身の時間に満州義勇軍から来た手紙を読んでくれた。

四時間目に飛行機が飛んで来た。^{*}

農業の実習の時には六組は下肥をはこんだり、水をくれたり、きくうゑをした。家へ来て手伝をした

*談・菅谷村出身の航空兵根岸隆仁^{（たかひと）}が操縦。

十月三日 火曜 曇

今日は菅谷の方に用があるので、自転車で学校へ行ったら割合に早く行けた。

それから朝礼の始まるまで機械体操をした。

それから朝礼をしたり、体操もした。第一時に算術をした。それから四時間目には体操をした。

昼をたべると先生は小川の学校へ行ったので手工はしなかった。宮島先生も行ったので合動くん練もしないで昼休みに吉野栄一君と二人ですなをはこんだ。家へ来てからゆかいこみをした。

『東京日々新聞』埼玉版十月五日に次の記事がある。「菅谷村第一小学校高等科一年生中村元介、樺沢栄吉、根岸昭三の三君は昨年八月同社内拾得届出た

金五十銭が満期となり三君あてに交付されたところ三君は無駄に使ふよりも国防献金にしたいとて三日小川署へ依託」

十月四日 水曜 晴

今日は朝が少し曇りけであった。

それから学校へ行った。

それから朝礼の時に校長先生が今日はキンクワザント言ふ相撲取りが来た。

一時間目が後つて二時間目に来たので相撲をした。三時間引きつづいてした。

午後は図画のかわしに国史をした。これが後つてからキウ校舎^{*}で国民体操をした。

*談・新校舎の隣に移築されていた旧校舎。

**大日本国民体操。大日本体操。「一九三九（昭和十四）年厚生省が創案した体操。創案の趣旨目的とする点は、運動の複雑をさげ、特に国民生活に必要な基本的体操を多く配列した。内容は素朴な自然運動を多く採り、緊張、弛緩、敏捷性を修練するに要する材料を適度に加えた。また体力の浪費をなるべく避け、厚生医学的な運動方法と、日本古来からの運動形式も採用した。さらに各運動に生理的作用、効果、実施上の諸注意など従来示されなかった点を明確に示した点、科学的であり、近代的な取り扱いである。……」〔佐藤友久・森直幹編『体操辞典』（道和本院、一九七八年）より〕

十月五日 木曜 曇

今朝も早く起きて庭をそうじして学校へ行った。

そして朝礼の時に明日の話をした。それは、明日高等科の者が志賀から土はこびをするのである。それは今月のすゑにすみやきのこうしう

会があるのです。その土である。それから教室へ入って先生に洗心会五大綱領のかいてある紙をもらった。

それから砂はこびをして家へ来ないで学校で実習当番をして来た。それから大蔵の区長さんの家行ってそうだった。

*木炭増産講習会。「埼玉読売」十月六日に次の記事がある。「生徒も増炭戦線へ 比企郡下の木炭講習会 ガソリン代用木炭増産に拍車をかける 比企郡下の木炭講習会は九日から廿日迄菅谷村小学校庭で行はれる、参加町村は小川、菅谷、七郷、竹沢、八和田、玉川、亀井、今宿の一町七ヶ村の業者、特に会場の菅谷校では講習会に使用する炭窯をそのまま、同校生徒作業の一部に使用して高等科生徒にも製炭法を伝授する、又同村日本農士学校生徒も参加する 講習事項は九日〜十三日築窯、十三日〜十六日自然乾燥、十七日乾燥窯、十八日〜廿日製炭、二十日出炭を行ひ包装、講師は小川農林検の山田主任外齊藤、関根面技手」

*志賀宝城寺住職鷺峰玉堂を会長とする修養団体の綱領。礼儀と時間の尊重、他力心を戒め社会奉仕等を掲げていた。一九三六年四月結成。

***山下卯之吉方。

十月六日 金曜 小晴

土はこび

今朝は少し雨降りもようであった。今日は天気だら志賀から土はこびをするのである。

齊藤君の家へ行った。

そうしたら齊藤君もかばんをしょって来たので新藤君をさそってからけんちゃんの家へ行った。それから区長さんの家へ行って、リヤカをかりて学校へ出発した。学校へ行ってからリヤカを置いて朝礼をして土はこびをした。僕は、関口君と、吉野君と三人ではこんだ。二かい志賀からはこんでつぼう玉をもらって、又ちがう所からはこんだ。

*齊藤三郎。当時高等科二年生。

*関口政治または関口三郎。共に同級生。

***あめ玉。

十月七日 土曜 晴

今日も早く起きてうら庭をはいたり。座しきをそうじして神神へ栗ひろいに行って来た。

そして学校へ行った。

父は大工の家の二三ちゃんの祈をしに行った。

学校へ行ってラヂオ体操した。

三時間目に国民体操をした。

四時間目には、行進をしたあとで国民体操をした。

家へ来たなら飛行機がおこったと聞いたのでいそいで行って見たらすばらしかった。いろいろのひこうきが来た。

*神社。

*談・玉川村へ墜落した。赤い翼の高等練習機だったと思う。

十月八日 日曜 晴

今日は日曜日であるので家に居た。少したって守やまきと山へ乗り取りに行って、たくさんとって来た。

その前にざしきをふいて、自転車のそうじした。そして栗取りから帰って来て、車へ面をもちに行った。

ひるをもらってくつから、面をもって家へ来てからすぐ将軍沢使へ行って来た。

父とこい取りをした。

夜神社へ剣道見に行行って来た。

*肥取り。

十月九日 月曜 曇

今朝は早く起きた。

そして庭をはいたり、ざしきをふいた。

それからきくわんじゅ

うをならした。

そして学校へ行く時に

剣道道具をたのまれた

ので持って学校へ行っ

たら始まってしまった。

それから朝礼をした。

五時六時には、農業な

のであるが体操と剣道

をした。それからすみ

やきがまをつくるどろ

こねをして来た。明日

天気なら運動会の下げ

いこ。学校がへりにで

んきのたまをとつかへ

て来た。

*竹で作った玩具。

**談：前日学校から借りた剣道の道具だろう。

***談：電球が切れたので東京電燈株式会社川越支社菅谷出張所に取り替えにいった。



富岡寅吉さん作成の機関銃（小川京一郎氏撮影）

十月十日 火曜 曇

今日は運動会の下げいこをするのである。

だからべん当だけ持って学校へ行ったら山下先生が一生懸命に運動会

の順を書いて居た。カチカチとなったので教室に入った。

そして先生から話を聞いた。

先づ四年生がかけはじめた。高一年は二百米けようそうをした。五等

であった。

次に二百のしょうがい物をした。武道もした。国民体操もした。以

上

*山下新一。一九二九（昭和四）年三月―一九四四（昭和十九）年三月勤務。

十月十一日 水曜 曇

今朝は昨日運動会のようえんしゅうをしたので足がいたかった。そ

れから皆と一しよに学校に行った。そして行って見るとつくゑの上に

海軍旗が紙で作ってあって三枚置いてあった。

その旗を作り上げて先生に出した。

午後は合動くん練をしたり建国体操をした。体操の時には国民体操を

した。行進もした。学校帰りに川端君と一しよに遠山を廻って魚をも

らって来た。つけペンをかった。

（豫記）明日の晩菅谷にエイガがある。

*「一九三七（昭和十二）年日本体操保健協会が創案したもの。当時の体操界は欧米よりの新体操新方式の考えが導入され、その活用期直後、戦時体制に入った時代である。日本古来の武道より技術形式を採り入れ、

日本人の生活からにじみ出た日本的な形式による体操を創案し、国民的自覚と、国運の発展に寄与しようという熱意に燃えた目的の体操で、従来のものとは異なった意味がある。体の錬成と、精神を磨き、皇運扶翼の一途に参するにあった。目標を前方、上方、下方にとり撃破を心がけ体をその方向へ伸ばし、屈指、捻じることによって体操の効果をあげるものである。形式は、前操、後操より構成され、運動は、突く、打つ、切るの方法であった。」「佐藤友久・森直幹編『体操辞典』(道と書院、一九七八年)より」

*川端清一。当時尋常科五年生。

十月十二日 木曜 雨

今朝起きて見ると雨が降って居た。だが小降りだったのでくつをはいて学校へ行った。

そして学校へ行って雨が降って居たので教室に居た。

一時間目に修身をした。二時間目に読方をした。

三時間目に農業をした。

四時間目には理科をした。今度の理科の時は麦わらを持って行くのである。後は建国体操をしたり国民体操をした後で校歌のならいをした。

家へ来てから油屋の家

と文太郎さんの家へみ

かいをもつて行った。

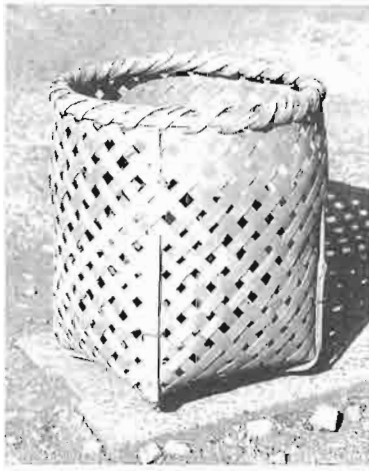
(豫記) 今日は雨天のため

エイガはない。

*新藤文太郎方。

**目かい籠。竹で

編んだ入れ物。



目かい籠

十月十三日 金曜 晴

今日は昨日の雨もからりと晴れてとても気持が良かった。

そして学校へ行った。

学校へ行ってから外で遊んで居た。それからチリンチリンと鳴って朝礼をした。

二時間目に読方をしただけで後の時間はそれぞれの仕事をした。

三時間目には行進や建国体操をした。国民体操もした。

明日はたのしいのしい大大運動会である。よろしくたのむ。かつどうに行つた。

(豫記) 今晚はかつどうがある

十月十四日 土曜 日本晴

今日ハ大運動会デス

今日は朝からとてもよく晴れて居た。今日は大運動会である。ばんこつきをつるしたり、国旗けいようをした。

四年が一番はじめにしてから高一の二百米に来てかけたら…等をとつてエンピツ一本もらつた。

しょうがい物をした。四等であった。武道、あるいは健国体操、それからリレー。又は、国民体操をした。午後少し立って高等科の有志が

とうりつ、てんかいをした。きばせんをした。南三、ウサギ

(豫記) 日本晴

(受信) 富岡二三郎

*建国体操。

**空中転回。

***談：東・西・南・北に分かれて競技して南が第三位。

十月十五日 日曜 ハレ曇

今日は日曜日なので父と根岸河原へ草刈りに行って来てから、まごの手を作ったり車の後をしをして車にのつた。

午後一回後をしをした。

まごの手をしあげた。

栗ひらいに行った。少ししかひろはない。

明日は月曜日で学校へ行く

(発信) 富岡二三郎

十月十六日 月曜 雨曇

今日は家の馬^{*}と者は松山に行ので早く起きて行った。^{**}

僕も早く学校へ行った。

雨が降って居たので校舎の中に居た。

止んだので外へ出て遊んだ。

農業の実習の時に始めてかりた畠のしのほり、或はぼや刈り^{**}をした。

家へ来て畠へこひちらしをした。

(豫記) 二十二日の日曜日に笠山に行く予定である。

*福島産雑種三歳鹿毛馬。友号。

*十月十三日から十八日まで松山町箭弓グラウンドで実施中の軍用保護馬検定受検のため。菅谷村より九十七頭(登録は九十九頭であったが二頭不参)出場し、八十頭合格、十七頭否(落第)。軍用保護馬指定は六十頭(後にさらに九頭が追加指定)。軍用保護馬検定に合格し、軍用保護馬に指定されると普通鍛練を受ける義務が生じた。菅谷村では幼駒班(三、四歳馬)一、壮馬班(五歳以上の馬)二、七郷村では壮馬班(五歳以上の馬)一、混成班一が編成され、軍用保護馬普通鍛練指導員が鍛

練にあたった。菅谷村では筆者の父富岡準三郎と内田武一(鎌形二七七六)が指導員に任命された。なお、十一月十六日に菅谷村より二十二頭が軍馬として徴発されている。資料六参照。
***ばさ刈。雑木林の下木刈り。

十月十七日 火曜 雨曇

今日は神嘗祭なので学校へ行かないで家に居た。

雨が降って居たので家に居た。それからだめになっちゃった。

だれかペンをだめにしちゃった。明日かあんだよ^{*}

あばよ

めんもりを三ツ作ってこしらへました。^{**}

(豫記) 馬加八郎「落書」 今日(今日)は天皇陛下が皇大神宮^{**}いろいろの神に

初ほをそなへる。

*買うんだよ。

**竹の孫の手。

***三重県伊勢市にある伊勢神宮の内宮。天照大神^{あまてらすおおかみ}をまつる。

十月十八日 水曜 晴

今日は朝から少し晴れて居てよかった。

それから学校へ行って機械体操をした。

九時始めなので易意^{*}に始まらなかった。

三時間で御ひるをくって四時間目におうたいこうしん^{**}をした。

五時間目につぐわをした。

六時間目におもしろい理科の実けんをもした。

それから家へ来て玉川へ行った。

*容易。

* * 横隊行進。

十月十九日 木曜 晴

今朝は曇天であったがだんだん晴れて来た。

今日は十七日の^{*}のべである青年団のかけっこである。

だから学せいはじげうはしないでおうゑんをした。

こしかけを出して見て居た。僕達は、合同くんれんをしただけである。

青年団のかけっこは二等であった。

* 順延。

* * 青年団の運動会。

十月二十日 金曜 晴

今日は靖国神社のりんじ大祭であるのでにもつをもたないで学校へ行った。

そして学校へ行って三時間位い、まって居たら始まった。

そして十時十五分に一分間のもくとうをして来た。

今夜はとてもよくわつどうを見た。

小川小学校で小川・大河・竹沢・八和田・七郷の五小学校合同体育祭を挙行。
靖国神社臨時大祭。根岸観音祭。

十月二十一日 土曜 晴

今日は畠をうなうので万のうを持って学校へ行った。

一時、には算術を半分して話をした。

二時、国史をした。

三時、国史の話と地図せつめい。

四時間目には畠うないをしなかったので村田君山下君などと東しようこう口でべんとうをたべて来た。

家で少し遊んでから、菅谷へ使へに行って来た。

それから、こくれんぼう^{*}をした。明日は笠山に行くのである。

* かくれんぼ。

十月二十二日 日曜 晴

笠山行き

今日は高一年生の笠山へ行きたいものだけを先生^{*}が連れて行くのである。

だから早く起きて朝めしをたべてから学校へ向かった。

そして橋まで行くと村田君と山下和十郎君が来たので一所に行った。

駅へ行くと幾人が来て居た。

少し経つと先生も来たので十二銭出してキップをかって七時二十三分

で出て行った。大河村には石灰岩をほる所があった。

笠山はとても遠くのほりわるか^(マツ)ったのの方の堂平山^(どうたいらやま)はとてもほりよ

かった。

* 篠藤惣次郎。当時高等科一年担任。一九二六（大正十五）年三月～一九四〇（昭和十五）年三月勤務。

十月二十三日 月曜 曇

今日はじゃりはこびをするのである。

朝礼をした時に者を大切に^{*}する話をした。

一時は修身をした。第十三身体。

二時は読方の後をして第一課をした。

三時は理科であるがじやりはこび。
四時農業のわけだがじやりはこび。

五時、六時それからひきつづいて大そうじをした。
家へ帰へって来てから畠へ行つたが整地が出来ず万能を持って行つて
うなつた。今夜はやくし様である。

(受信) 富岡二三郎 兼子源吉

*安養寺の薬師様。

十月二十四日 火曜 曇

今朝も少し曇って居た。

そして学校に行つて機械体操をした。

それで今日から防空演習である。

一時には算術を少し話をした。

二時には読み方をしたが巻二の本をわすれる

三時はヨウロッパ州の地理をした。

四時はおもん文をかいた。

五時は五年以上の合動くんれんをした。

そしてそうじをしてから農業とうばんをして家へ来た。来てからすな
をはこんで来た。

(発信) 富岡二三郎

十月二十四日より六日間、第三次防空演習実施。各部落で防空・防火・防毒の
訓練実施。

十月二十五日 水曜 雨

今日も防空演習である。

学校に行つて始まらない中算術をしたり本をよんだ。

一時は算術をした。先生はいない。

二時には防空演習のため、いろいろのはんをきめて、それぞれのはち
まきをよこした。

三時にも防空演習。

午後も一回防空演習をした。

その時には役場の方が、しょうゑだんと、がすだんとぼくだんの三種
を持って来てそれぞれのはんでけしとめた。家へ来てリヤカーをなし
に行つて来た。

(発信) 富岡二三郎 兼子源吉「線を引いて消している」コレハ二十四
日

*焼夷弾。

**ガス弾。

***爆弾。

十月二十六日 木曜 雨

今朝起きて見ると雨が降って居た。

だから傘をさして学校へ行つた。

そして自習をした。

家へ来て自習をした。

一時は修身をした。第十三課身体の所

二時、読方をした。そして第一課を後した。

三時、理科をした。はみがきの所。

四時、農業をした。

五時、唱歌のれんしう。明治節の歌

学校では防空演習をしなかった。

(発信) 藤ナワ正二

十月二十七日 金曜 晴

昨日の雨もからりと晴れて今朝はとても良い気持ちだった。

はだしたびをはいて学校へ行ったらほじゅう兵^{*}の人がたくさん来て居た。朝礼の時に話を聞いた。

一時、算術をした。ふくしゅう。

二時、読方であった。始まるとすぐ空しゅうであった。

三時地理をした。ドイツ

四時、綴方のわけ。

五時、体操 健国体操。国民体操をした。それから家へ来ておもん文を書いた。地図をかった。

*補充兵。一九二六(昭和二年)、それまでの徴兵令にかわり兵役法が制定された。兵役法では、男子は満十七歳になると第二国民兵役に編入され、そののち四十歳まで兵役の義務を負った(国民皆兵)。毎年四月から七月の間に徴兵検査が行われ、前年十二月一日からその年の十一月三十日までの間に、満二十歳になる者は、身長、体重、視力などを測定され、性病や疾病の有無を調べられた。その結果、甲、第一乙、第二乙、丙、丁、戊の各種にわけられ、平時は甲種合格者の中から、現役要員が選ばれ現役(陸軍は二年、海軍は三年)に服した。それ以外の者は、第一、第二補充兵や第二国民兵に編入された。補充兵は、現役の補欠要員として召集、教育された。一九三八(昭和十三年)年から第二補充兵も、帝国在郷軍会の分会員となり、訓練が実施された。

十月二十八日 土曜 晴

今朝は学校橋も無事に通れた^{*}。それから学校へ行って自習をしてから

機械体操をした。

一時、算術をした。負数。

二時、国史をした。

三時、体操である。転回。すもうをした。家へ来てから昼を食って自転車へ面箱^{*}をつけて水車へ行って面を持って来た。

防空演習

*談：雨降りて都幾川が増水すると学校橋は橋板をはずすので通れなくなることがある。

**麵箱。みかん箱程の大きさ。

十月二十九日 日曜 晴

今朝は早起きをして車に乗って父と一所に鎌形の水車へ米を持ちに行ってきた。

朝飯を食って仕度をして父母と三人で耕地へ稲刈りに行って刈り上げて家へ来たら昼であった。

昼を食っててんづみに又稲刈りに行った。

そして大きい田の稲を半分位刈って家へ来た。帰りに稲束を幾束がもって来た。以上。今日も防空演習

(受信) 兼子源吉

*地名。現在の嵐山海洋センターあたり。

十月三十日 月曜 曇

夕べ雨が少し降ったが今朝は止んで居た。学校に行ってからいろいろの体操をした。

そして朝礼の時に、日光の東照宮のもけいがあるので菅谷のせいとは

十一月一日にそれを見るのである。との話、ゐもん文も上げた。
一時修身をした。しよく業。二時読方。三時理科セメントの話。四時
農業。五、六と農業の実習をした。家へ来た。

教育勅語下賜記念日。

校医根岸久一郎より小学校校旗一旒が、青年学校指導員金井義雄より青年学校
校旗一旒が寄贈される（菅谷小学校『学校沿革誌』）。
壮丁補充兵の五日間の訓練終了。

十月三十一日 火曜 晴

昨日のも様では今日は雨降りになりそうであったが今日は晴天気となっ
て良かった。早く起きて国旗を持って駅へ行ったら出征軍人はもう来
て居た。その人は菅谷の中島六郎さん*と言ふ人である。それを見お
くって、学校へ行ったらじきに始まった。各学校も来た。そして国旗
を出した。それから健国体操。国民体操、合動くんれん等をした。明
日は日光東照宮のもけいを見るのである。

*鉄道第一聯隊応召。午前七時二十三分出発。

十一月一日 水曜 晴

今日は一日なので興亜奉公日でもあり神社参りでもある。だから神社参
拜をして学校に行った。
そしたらまだ早かった。機械体操をした。
一時、算術をした。始めの中は話ばかり。
二時、国史である。鎌倉ばくふの所。
三時、国史のつづきをした。
四時、唱歌れんしゅうをした。

五時、図画のせつめいをきいて居ると、日光のもけいを見るので止め
て見に行った。それから草花の移植をしたり物置のせいりをして来た。

十一月二日 木曜 晴

今朝起きて見ると夕べの雨はやんでさっぱりした気持ちであった。
それから学校へ行った。
それから自習をした。そしてかねがなつたので朝礼をした。明日は明
治節である。

一時には唱歌れんしゅうをした。

二時にはしゅうしん*をした。

三時には農業をした。そしてべんとうをたべて四時には合動くんれん
をした。五時は唱歌だが杉山先生がいなためしなくてそうじをして
家へ来て手伝った。

（豫記）明日は明治天皇の御思を仰ぎ明治のみよのさかへをいはう日
である。

*修身。

十一月三日 金曜 晴

今日は目出たい明治節であるので国旗を立てて学校へ行った。そして
体操をした。
いつもの朝礼の様に並びそれから幾分か分れて昨日のやうに並びかへ
て式をした。校長先生の話を聞いて明治節の歌を歌った。式が後つて
から体操の出来る仕度をして外へ出て遊んで居ると合づのかねが鳴つ
たので集ってラヂヲ体操をした。後つてゆうぎ、健国体操、行進、一
べい分列*をして国民体操もして体育大会を後して家へ来て車へ傘をも

ちに行つて来た。

(豫記) 明治節 明治天皇の御思を仰ぎ明治の御代の御さかへを祝ふ日
(受信) 兼子源吉

* 閱兵分列。隊列を組んでレコードの行進曲に合わせて行進し、「頭右」で観閲者である朝礼台上の校長に敬礼し、「直れ」「歩調やめ」「全体止まれ」で行進が終わる。校長は整列した部隊を巡視して検閲する。軍隊の儀礼的行進をまねた団体訓練の一つで戦時下の運動会の特徴を示す代表的種目である。

十一月四日 土曜 曇

今日は部会^{*}の体育祭である。

支度をして学校へ行つた。

幾分か経つといろいろの学校のせいとが来た。

それから始めて菅谷神社に参拝して始めた。

それから君が代合歌^{*}し、男の健国体操、いふぎ、行進、国民体操、一

べいぶんれつ等いろいろした。

それから愛国行進曲を歌ひ後てから校旗にけいれいして家へ帰つて来た。

そしてさつま島へさつまほりに行つた。大きいさつまがたくさん

あつた。

つばほりで三貫九百十匁目あつた。

* 菅谷・七郷・福田・宮前の各村の五小学校からなる菅谷部会。

** 合唱。

〔十一月五日〕十一月十二日 頁欠落

十一月五日 日曜 晴 小川警察署管内武道大会開催。

十一月六日 月曜 曇

十一月七日 火曜 曇後晴

十一月八日 水曜 晴 午後五時、馬匹三十三頭及び志賀水野恵助近衛歩兵第二聯隊、志賀多田米三郎近衛歩兵第一聯隊、遠山山下光太郎近衛歩兵第一聯隊に動員下令。

十一月九日 木曜 晴

十一月十日 金曜 雨 「国民精神作興ニ関スル詔書」 渙発記念日。

十一月十一日 土曜 曇 八和田村葬。

十一月十二日 日曜 晴 鎌形八幡神社で召集兵三名の健康祈願祭執行。

十一月十三日 月曜 晴

今日も朝は少し風が吹いて居た。

今日は役場に用があるので自転車で行つた。いづみやに寄つて運動ぐ

つを聞いたらなかつた。

だからたびやにいったらあつた。

そしてきしや^{*}に行くところ根岸さんはもう役場に行つたと言つたので役場

へ行つて手紙を渡して学校へ行つた。

そして五、六時間目には土はこびをした。僕と根岸君は人よりよけい

にうんとはこんだ。明日は午後一時二十三分に兵隊が出る。

(受信) 中島高治

* 屋号。根岸千之輔方。当時役場兵事主任。

十一月十四日 火曜 晴

今朝起きて見ると屋根一面に霜が降つて居た。そして支度をして竹や

国旗を持って学校へ行つた。

行きながらはとても寒かつた。

学校に行つてから、自習をした。

朝礼の時に皇后陛下から下したまわつた、^{れいし}令旨を奉読した^{*}。校長先生

そして午後一時二十三分の電車が出る出征兵士を見送るので旗を持つ

てていしやばへ行って見おくれた。五時間目には手工で竹鉄砲を作った。ウサギが出来る。

四月十八日に出された「結核予防ニ関シ皇后陛下ヨリ賜リタル令旨」奉読式。十一月十三日より実施された結核予防週間は、令旨奉戴結核予防国民運動として展開された。

志賀陸軍軍医中尉水野恵助近衛歩兵第二連隊応召と多田米三郎近衛歩兵第一聯隊応召の二人。水野は一九四二（昭和十七）年二月十四日戦死。

十一月十五日 水曜 晴

今朝も昨日の様に霜が降りて居た。

そして下駄をはいて学校へ行った。

行ったらじきに自習がはじまったので自習をした。ゴムをかったりガラスペンをかった。そして朝礼をした。今日も報徳訓を言はなかった。明日はたのしい遠足だ。

僕等は平の山慈光寺である。

（平村の都幾山慈光寺）。

都幾山慈光寺

（都幾山慈光寺）

（発信） ナシ

（受信） ナシ

「ローマ字の落書あり」

*談：岡松屋が校舎の廊下に店を出して学用品を売っていた。

**二宮尊徳の教え。

父母根元在天地令命 身体根元在父母生育 子孫相続在夫婦丹精

父母富貴在祖先勤功 吾身富貴在父母積善 子孫富貴在自己勤勞
身命長養在衣食住三 衣食住三在田畑山林 田畑山林在人民勤耕
今年衣食在昨年産業 来年衣食在今年艱難 年々歳々不可忘報徳
***談：ローマ字は「知識の宝庫」で覚えた。

十一月十六日 木曜 晴

今日は兵隊送りである。だから早く起きて旗を持っていしやばへ行った。

そして兵隊を送くってから学校へ行った。幾分か経ってから校庭に集まって人数をしらべてからしゅっぱつした。鎌形を通ってだんだん行くと平村に入った。慈光寺に行ったらいろいろと物があつた。国宝も一つ見た。そこで昼を食べて大河を通って古寺のしょうにゆうどうに行つた。入って見ると、とても長くひろかつた。そして小川を通って菅谷に来て家へ来たたら電気がついて居たのです

「欄外」遠足日

（豫記）今日は遠足

（発信） 中島高治

（受信） 兼子源吉 乗くら

*遠山山下光太郎近衛歩兵第一聯隊応召。

十一月十七日 金曜 晴

今朝は霜は降りて居なかつた。

そして学校に行つて

一時 算術を少しして話をした。

二時 読方をした。

三時 地理をした。

四時 綴方のわけだが図画をした

五時 書方 せいしよした。

そして岡松屋へ使をしてから家へ来た。

キンカンキンカン「落書」

(受信) 大久保高則おおくはたかのり

*大里郡男衾村の人。

十一月十八日 土曜 曇

今日は土曜日なのでべんとうをもたないで行った。そして少し経つとサイレンが鳴ったので教室に入って自習をした。今日も校長先生が居なかった。

一時 算術をした。新らしいこと。

二時 国史をした。

三時 体操、国民体操。機械体操。巾飛び。相撲等をした。

そして家へ来てから馬苦勞うまぐるらさんを田へ案内してから家へ来てゆをあげた。幾十分か経って小林光雄こばやしみつおさんを見送るのでいねをつれて自転車で行って来た。以上。

(発信) 兼子源吉

*サイレンは一九三八(昭和十三)年十月十七日に木蘭柳吉より寄贈された(菅谷小学校「学校沿革誌」)。

**馬喰。

***談・風呂の水を抜くこと。

***近衛輜重兵連隊応召。午後一時に出征健康祈願祭を行い午後五時出発。

十一月十九日 日曜 曇

今日は日曜日である。だから早く起きて、家に居て朝食を食って、さつまを出してからいねをつれて遊びに行つて来て昼を食って、いね。

隆次。まき。守。等と一つしよに菅谷駅通りにあるサーカス見に行つた。傘を持って行つて菅谷の家に傘をあづけて行つた。

行きながら菓子をかかってやった。

行つてみるとすばらしい家が建つて居た。中ではおもしろい事などいろいろした。帰りには皆と一つしよに帰つて来た。

*談・現在のあさひ銀行あたりだと思ふ。

**談・祖母の実家。

十一月二十日 月曜 曇

今朝起きて思ひついたら朝当番であるのでぼたもちを食つてべんとうをもつて学校に行つた。

そして窓をあけて外へ出ていろいろの体操をして自習をした。

一時 修身をした。自立自営。

二時 読方をした。おもしろい課。

三時 理科、とうじき。

四時 下田先生のいないため自習。

だから五時間目はしないで家へ来て、手伝つた。つちかけをした。

(受信) 中島高治

*談・前日は旧十月九日の亥の子の日なので、ぼたもちを作つた。旧十月十日。十日夜。

十一月二十一日 火曜 晴

今日は昨日の曇日も今日はとても良い天気となった。

竹鉄砲を持って学校へ行った。

そして少し立つとサイレンが鳴って自習時間が来たので自習をした。

一時には算術をした。代数もした。

二時 読方をした。猫のかきめぐり。

三時 地理、ヨーロッパのイギリス。

四時 体操を少しして次にてんくわい

五時をして、次に相撲をした。前列がかった。六時には手工をした。

それからそうじをして家へ来て麦わらをきてきくわんじゅう

*麦から。

**意味不明。

十一月二十二日 水曜 雨

書き上げ

今朝起きて見ると曇って居た。そして本家へリヤカーをおいて来てから学校へ行った。

竹鉄砲を持って行った。行きながら雨が降って来た。

そして自習をした。

一時、算術新嘗祭の話をした。

二時、国史をした。面白い語もした。

三時、しゅぎんをした。

四時、図画をした。家のある景色

五時もひきつづいてした。

そして家へ来て高等本のわけを皆書き上げてしまった。

(豫記) (明日は初米を皇大神宮にそなへよろづの神々にあげ陛下自らめし上る日。)

*詩吟。

十一月二十三日 木曜 曇

今日は十一月二十三日なので新嘗祭であるので学校は休みである。

そして朝飯を食ってから、母とちり飛しをしてから菅谷へ使に行つて

サトウやマツチ。ハイトリピンを買って来た。

そして杉葉をひろつた。いろいろと遊んだりはたらいたりして昼となつ

たので昼を食べてから兄弟四人で農士学校の相撲を見に行つた。行つ

たらまだ早かつた。

いろいろの農士学校の生徒が作くつた物を見てから相撲を見たのである。川北がゆうしようきであつた。

*談：風を利用して脱穀したもみのゴミをとばす。

** 蠅取瓶。

*** 談：たきつけにするため。

*** 談：川南・川北に分かれて戦つた。相撲には小学校三、四年生から参加した。

日本農士学校社禊祭。酒井農相外多数来校。

十一月二十四日 金曜 曇晴

今朝起きて見ると雨が今にも降るやうに曇って居た。だから傘を持って学校に行つた。そして行って見ると黒板には、

第一時。算術。二学期復習。

第二時。読方、第七課。海洋の漢字練習。

第三時。地理。ヨーロッパの地図

第四時。書方。(八月洞庭。)精書*。

第五時。綴方。自由題。(下書)

と書いてあった。だからこれを終おちしてから家へ来た。そして自転車に乗って河原の方へ行った。家うちへ来た。

*清書。

嵐山松月楼で、平沢寺裏山「長者塚」より発見された経筒等に関する講演会(講師 稲村坦元ほか)開催。

十一月二十五日 土曜 晴

今朝の曇も急に晴れた。

学校に行く時にはとても良くなった。そして学校に行つて少し経つとサイレンが鳴つて自習時間が来たので自習をした。

そして朝礼の時には話ほしないでラヂヲ体操をした。

第一時間、算術をした。僕もさされた。

第二時、には国史、宗教の所。

第三時には体操のわけだが国史をした。後あとで農業当番をした。その時は根岸君と二人で(下肥)三ばいはこんだ。(下肥)そして家へ来てから耕地へ麦蒔の手伝に行つた。

十一月二十六日 日曜 晴

今日は日曜日である。昨日の晩、演習*をしたので少しおそく起きた。

そうしていねをつれて遊びに行つた。来てから畠へ菜を取りに行くのだったが、つがうじゃう田*へ行つて来た。

そして麦を蒔いて家へ来た。

*談：兵隊ごっこの大規模なもの。

*都合上。

十一月二十七日 月曜 晴

今朝は少しあさねぼうをした

そして起きて見ると庭や。屋根。畠は霜で一面になって白かった。

そして支度をして学校に行く途中はソウジさんの家*の所であたつて居た。

第一時。修身である。自立自営。

〳二時 読方 自分も一回読んだ。

〳三時 理科、とうじきの所。

〳四時 農業 第二十六課 菜、大根の害虫。

〳五時 農業、実習のかん*らんの移植をしたり各組の実習地をきめた。

そしてそうじをして家へ来た。

*野村宗次方。

*甘藍。キャベツ。

十一月二十八日 火曜 晴

今朝起きて見ると昨日のやうに大霜であった。今日は手工があるので竹鉄砲を持って学校へ行つた。今日は朝礼はしなかった。

第一時 算術なので先生が問題を出した。

〳二時 読方。少しして目のけんさ。

〳三時 地理。イギリスの所。

〳四時 地理 フランスの所をした。

〳五時 手工なので話を聞いた。今度はてうこく刀をつかつて手工をするのである。

家へ出てからいろいろとした。その時は、わらあつめやなにかいろいろした。

(受信) 兼子常吉 斉藤国平

十一月二十九日 水曜 晴

今朝もいつものやうに霜が降って居た。そして下駄をはいて学校へ行った。そして自習をする時間が来たので自習をして朝礼の時に校長先生が話をした。

第一時。 算術をした。先生の問題。

々二時、国史 鎌倉時代の文化。

々三時、目には火の用心の事を書いた。

々四時、体操。下田先生が教へた。機械体操

々五時、図画 先週の続きをした。

それから学校帰りに大沢自転車店*で彫刻刀を買って家へ来て山下君や村田君と三人で二籠はいた。

*当時は各種自転車・金物類一式・農産種子販売業。

十一月三十日 木曜 晴

今朝起きて見ると霜は少くあまり寒くなかった。

そして下駄をはいて学校に行つて少し経つとサイレンがなったので自習をした。そして少ししたら鐘が鳴って庭に集つていしゃ場へ行った。そして遠山の入営兵士*を送った。第二時、修身、質素の所。第三時、読方。その時はソマトラ島*。

第四時理科をした。

第五時唱歌をした。

家へ来ていろいろ手伝った。

(豫記) 明日は火防デーである。

(発信) なし

(受信) なし

*高橋徹。近衛輜重兵聯隊応召。

*ソマトラ島。

十二月一日 金曜 晴

今日は神社参拝なので早く起きて支度をして神社に行つてそうじをしたり参拝して家へ来てカバンと火の用心と書いた旗を持って学校へ行った。

第一時、算術をした。先生の問題。

第二時、読方ケンエツをした。六、七課

第三時、地理 フランスの所。

第四時、は旗を持って旗行列をした。

第五時、書方をした。露おかぬ。方もありけり夕立の 空よりひろき

武蔵野の原を清書した。家へ来て手伝をした。

(豫記) 元寇の時の敵の大将はクビライ汗であった。

*太田持資(太田道灌)の歌。「太田持資上洛の時武蔵野はいかはかり廣き野そと勅問侍りけるに讀る 露をかぬ方もありけり夕立の、空より廣きむさし野のほら(関東古戦録)」「新編武蔵風土記稿」卷之六山川。防火デー。

十二月二日 土曜 晴

今日はいつものやうに霜が降りて居た。今日は、大根を学校へ持つて行くので大根をしばつて下駄をはいて行った。農士学校の向の三本辻*

まで行くとサイレンは鳴った。^{***}

第一時、算術 先生の問題 五十五頁等

第二時、国史、北條氏のめつぼうの所

第三時、高二と一しよに体操をした。

それから農業当番をしてから菅谷へ根岸君、金井君等と使へに行つて来て品評会の大根を見ると赤い紙がはつてあつたから三等であることがわかつた。

*農士学校構内の丁字路。菅谷へ農士学校玄関の道と学校橋から農士学校の果樹園を通つて菅谷小学校へ行く道とぶつかるところか。

**談：朝自習のサイレン。

十二月三日 日曜 晴

今朝もいつものやうに霜が降りて居た。朝飯もすんでから本家へリヤカーをかりに行つた。そしてかりて来てから父にわらをつけてもらつて隆次と二人で玉川の家へ引いて行つたのんでせんべいを十銭買つたりキャラメルをもらった。かへつて来てから今度は又父に菜^{*}をつけてもらつて隆次、守平と三人で水車へ菜をつけて行つた。そして小倉の神社の所へリヤカーを置いて行つて吉野君と一しよに遊んだ。帰つて来たら女の赤子^{**}が出来て居た。

*白菜。

**筆者の妹みやの誕生。

十二月四日 月曜 晴

今朝起きるとやはり、霜が降りて居た。足袋、下駄をはいて手袋をはめて車の後押しをして本家まで行つてすぐに学校へ向かつた。行きな

がらはとても寒かつた。すると五年生の木園君^{*}が来たので一しよに行つた。今日は農業の考査があるので自習の時間にしらべた。朝礼はなかつた。休み時間に前廻りが出来た。一時、修身をした。二時、読方をした。ソマトラ島。三時、硫酸塩の所。

四時、農業科の考査をした。後つたのでそうじを一人でして家へ来た。農業科考査

(豫記) アト二十八ネレバお正月

*木園国松。当時尋常科五年生。

十二月五日 火曜 晴

今日は下駄屋^{*}へ行かふと思つて早く仕度をして下駄屋へ行つたら、ほうの木^{**}を売らなかつた。だから奥野君と一しよに学校へ行つた。それから自習はろくにしないで遊んでしまつた。

第一時、算術。二元方程式をした。

第二時、読方 保険、ソマトラ島にはんをした。

第三時、地理 (イスパニヤ。ポルトガル)

第四時体操、すまう。棒取り^{***}をした。

第五時手工、竹鉄砲を上げた。

家へ来てすぐにリヤカーを引いて玉川の家へなわ持ちに行つた。からうす引き^{****}

*奥平商店。奥平源太郎方。

**談：彫刻・版画用の板。

***談：一対一の棒とりっこ。

****米と籾殻にわかる作業。

十二月六日 水曜 晴曇

今朝はあまり霜はなかった。

いつものやうに仕度をして学校へ行った。今日は自習はなかった。機械体操もした。そして幾分が経つとサイレンが鳴ったので教室に入った。そして

第一時、算術、先生の問題をやった

第二時、国史 北條氏の滅亡の所。

第三時 珠算、けたの大きいのをした。

第四時 体操、サイレンが鳴って集ってからタンコマーリ*のなげっこをした。前列は二回かった

第五時 図画 男はてうこく刀ざいくをした。家へ来てから守やまきと麦ふみをした。

*談：野球のボール。硬球。

十二月七日 木曜 曇

修身考査

今日は霜はなく雨が少しちらついて居た。だから傘を持って学校へ行った。そして家の中に居て修身をしらべておいた。カチカチと鳴ったので教室へ入った。

第一時 修身の考査をした。

々二時 読方をした。その休み時間になたぬきの糸をほった。

第三時 下田先生のみないため自習。

第四時、理科の表面張力いろいろ

々五時 唱歌、出征兵士を送る歌。

そうじをして家へ来て、おぢいさんと、前の畠へ麦ふみに行った。

十二月八日 金曜 晴

今日も霜はろくになく学校へ行った。今日は地理の考査があるので学校でしらべた。

第一時 算術をした。

休み時間に地理をしらべた。

第二時、読方 保険。

休み時間に自習をした。

第三時には地理の考査をした。

々四時、綴方をした。

々五時 書方をした。

そして家へ来てからいねとぶつけをした。

地理考査

十二月九日 土曜 晴

国史考査

今日は入営兵士*を送るので支度をして神社へ行ったらもう来て居た。

それから萬才をして歌を歌ってていしゃばへ行った。

そして外の字から来る兵隊**をまつて居た。それから兵士が来たので歌を歌って送った。

十二人入営をした。

学校へ行ってから第一時に国史の考査をした。むづかしかった。家へ来てから守ともち置き**にゐつて幾匹もとつた以。以上

* 金井吉二歩兵第一聯隊現役と富岡暉三歩兵第五七聯隊現役。

** 將軍沢金子幾太郎・菅谷山岸良之助・志賀根岸皓・平沢大野金正・鎌

形杉田幸作・鎌形杉田富三、以上六名歩兵第一聯隊現役。鎌形小峰吉次・根岸小沢熊五郎・根岸大沢忠治郎、以上三名歩兵第五七聯隊現役。歩兵第五七聯隊は佐倉にあり、この日出発した大沢忠治郎によれば一週間いてすぐに中国に渡ったという。
***とりもちをしかける。

十二月十日 日曜 晴

今朝も霜が降りて居た。

そしてめじろを出してから竹本屋の方へ行った。

それからもちを持って山へ行った。そしてうぐひすを一つとってにがしてしまった。

それから家へ来て昼を食って遊びに行った。

川河へ魚つきに行った。

後で鬼事をした。僕はなかなか取られなかった。

農休みであつた。

*談・大蔵では、農休は九日から十一日までの三日間であつた。

十二月十一日 月曜 晴

今日も農休みである。

そして支度をして学校へ行ったらまだ早かった。そして朝礼の時に大宮の氷川神社の話をした。^{*}それから教室へ入って

第一時、修身をしないで自習。

第二三時とは体かくけんさをした。

第四時農業をした。

第五時、は五、六、七、組の三組で実習当番のため麦ふみをした。自分

分は先生にはかの事をたのまれた。以上

(豫記)・健康 ・薬ヨリ養生 一二看病 一二二薬

*誓詔祭。この日午前九時、官公署では明治天皇の氷川神社への勅書を奉読して一斉遙拝をした。

十二月十二日 火曜 晴

今日もめじろを出して学校へ出かけた。

今日は体育テストをするのである。

第一時に算術の考査をした

それから二時から体育テストを始めた。^{*}高等科は第一に三回飛び。健垂。六〇米。負重等をした。

そして昼を食ってから幾十分か休んで二千米をするのである。

その前にはフットボールもした。

出発してから菅谷の宿しゆくを通って菅谷の一番下しもの方まで行って来て、十分十八であつた。

算術考査

(豫記)・勤勉 ・蒔カヌ種ハ生エヌ。

(受信) 入営 富岡暉三 山岸良之助 金井吉一

*一九三八(昭和十三)年七月に全日本体操連盟が改正した「体力検査標準」を参考にした種目が行われていた。十四才以下の男子の場合、六十メートル疾走、走幅跳又は三回跳、送球投又はスポンジボール投、逆上り又は懸垂屈臂又は臂立伏臥臂屈伸、国民保健(ラジオ)体操の五種目。

**懸垂。

***重いものを持って走ることか。

十二月十三日 水曜 曇

今朝起きて見るとすっかり曇って来た。

今当番なので早く支度をして学校へ行つた。

そしてカーテンをあけたり窓をひらいたりした。

第一時、今日の体育テストの事をした。

第二時もある続きをした。

第三時もあった。

々四時にはボールをした。

々五時には、自分のすきな図画をした。家へ来てからゆかいこみをした。

(豫記) 勝つかぶとのをしめよ

(発信) 大日本埼玉国 昨日の三名

十二月十四日 木曜 晴

今日は理科の考査があるのである。

学校へ行って少ししらべた。

そしてボールをした。

第一時修身をした。

今日の午後から農士学校から菅原先生^{*}と静岡先生^{**}と二人来て大陸。欧州の話をするのだそつだ。

第二時には理科の考査をした。

第三時に机をはこび出した。

それが終わってから家へ来て畠へ行ってかたつこやなにかをかいた。

(豫記) ・勤勉 ・艱難^{カンナン}汝^ニ玉^ニニス ・時^{トキ}ハ金^{カネ}ナリ。

(受信) 富岡二三郎

*菅原兵治検校。この年の九月二十八日から十一月二日まで拓務省嘱託として「満州」・朝鮮・中国を視察。

**安岡正篤学監。前年十月九日から十一月一日まで中国視察。十二月二

十二日から七月八日まで欧米視察。

***枯れ枝。

十二月十五日 金曜 晴

読方考査

今日は夕べの風で霜のふらなかつた。

そして小鳥を出して学校へ行つた。今日は読方の考査がある。ボールをした。

朝礼はなかつた。サイレンとともに教室にかけこんだ。

第一時算術先生^{メイトル}が米の話をした。

々二時読方の考査をした。

々三時地理、昼を食ってから話をした。

々四時綴方自由題。

々五時、書方。今日は書初の手本をうった。春風伝喊聲と書いてあつた。

(豫記) ・感情 ・短気^{カンキ}ハ損気^{ソンキ}

十二月十六日 土曜 晴

今朝は霜はなし。夕べの雨のため庭は少し氷って居た。

支度をして学校へ行つた。

寒かったががまんをして居た。外に出たらすぐサイレンが鳴ってしまつた。

教室に入つて

第一時、算術 前へ出て黒板へ書いた。

々二時 国史、いろいろの話。

々三時 国史、北條氏の滅亡。

それが終つてから実習地へ下肥をかけて家へ来てかれっこかきに行こうじやさんが来た。

(豫記) 謙讓。親シキナカニモ礼儀アリ

(発信) 富岡二三郎

*談・毛呂からとみさわさんという人が醤油を仕込みに来ていた。

十二月十七日 日曜 晴

今朝起きて見ると雨は降って居ないで少し雲って霧がまいて居た。

いね。や、隆次。と、下の方へ遊びに行った。父が帰って来て守とまきと父、三人で山へ行った。

そして木の葉を三かごはいて昼頃になったので家へ来たたら十一時であつた。

昼を食つてから守と前畠の麦ふみをして、全部ふんだ。それからさん

のう畠へ行つて居る父の所へ行つてけづりこみをした。

(豫記) 節儉・口ト財布ハ閉ヅルニ利アリ

(受信) 山岸良之助 富岡暉三

十二月十八日 月曜 晴

朝起きて見ると朝もろくにあまり寒くなかつた。

今日は唱歌の考査があるのである。家でゐくらかはらがいたかつたがすぐなほつたので学校へ行った。リリンリリンと鳴つて朝礼の様にならんで大根のしょうじょうをくれた。第一時修身。話をした。

第二時 読方 「不明」

々三時 理科 十一

々四時 農業の考査をかえした。八・三*

々五時 唱歌の考査 そうじをして家へ来た。いろいろ。

(受信) 金井小市

*霜。

**談・十点満点の八、三点。

十二月十九日 火曜 晴

今朝もいつものやうにしたくをして学校へ行った。

今日は朝礼はなかつた。

第一時 算術をした。

第二時 読方 人をした。

第三時 地理 ヨーロッパ州

第四時 地理 南米州

々五時 手工

家へ来た

(発信) 金井小市

十二月二十日 水曜 晴

今朝は菅谷の家に使をするので自転車に乗つてくま手をつけて行った。くれてからすぐ学校に向つた。第一時の始まらない中にボールをした。朝礼をした。

第一時 算術 昨日の続き。

々二時 国史 北條氏の滅亡の所。

々三時 国史 続き

々四時 体操 ボール

々四時 体操 ボール

々五時 手工 いろいろ
家へ来てから畠へ行ってけづりこみ ゆかいここみ、わらまわしをした。^{*}

*談：大人がワラを二回打つ度にワラをまわす手伝い。

十二月二十一日 木曜

〔ローマ字書きあり toraki:ri Tomioka〕

・富岡寅吉

・寅吉 富岡

一戦勝二乗ジ勢尚加ル。

白山古廟澤南

誰知次第有神助 歴九月如春月自花^{*}
わすれて書かない。

一線

〔この日の文は落書〕

*長享二年九月二十五日(西暦に直すと一四八八年十月二十九日)父太田

道灌暗殺の仇敵扇谷上杉定正を討つべく平沢の地に布陣した太田資康を

陣中に訪ね滞在した京都相国寺の禅僧万里が去るに当たり、平沢白山神

社の送別の詩歌会で詠んだとその著書『梅花無尽蔵』に記されている漢

詩「社頭月」。太田資康詩歌会跡は一九四〇(昭和十五)年三月県指定

文化財となった。

一戦乗勝勢尚加(一戦勝ちに乘じ勢いなお加わる)

白山古廟澤南涯(白山の古廟澤の南涯)

皆知次第有神助(皆知る次第に神助あるを)

九月如春月自花(九月春の如く月自ずから花なり)

十二月二十二日 金曜 クモリ晴

今朝は大へんに霜があった。

そして今日は今学期の一番終りの日なので大そうじがある。

だから三時間ぶんもって行つた。そして朝礼はなかった。

第一時には読方をした。

々二時には唱歌^{*}練習をした。

三時から大そうじを始めた。その前に考査をかへした。

終つてから家へ帰つて来てから山へ車の後押しに行つて来た。

〔ローマ字あり tonioka toraki:ri〕

*唱歌。

十二月二十三日 土曜 晴

今朝起きて支度をした。

今日も菅谷の家へ行くので自転車でナキリミ^{*}をつけて行つた。

そして岡松屋で使をして学校に向つた。

そして朝礼をした。

教室に入つていろいろ話を聞いた。中でも二十八日には農業当番で行

くのである。家へ来てから山へ行つていろいろして車の後押しをした。

(豫記) 明日は砂はこびのため学校に行く。

*菜切り箕。竹で編んだもの。

十二月二十四日 日曜 晴

今朝起きて見ると大霜で大変に寒かった。だが一線の勇士の事を思つて学校に行つた。

山には馬が幾頭も居た。今日は日曜ではあるが雑用をするのである。

そして朝礼をした。しのもあつめた。

尋常科は砂はこびをして僕等は山の木の葉をはきである。はききつていしそろいをして家へ来た。そして、てまへがつてを作った。以上。
(豫記) 明日は大正天皇祭

*、**不明。

十二月二十五日 月曜 晴

今日は霜はあまりなかった。今日から冬休みではなく寒たんれんなのである。

そして朝めしを食って支度をして山へ木の葉はきに行った。

そしてたくさんはいた。

おぢいさんは馬で幾だんもつけた。ひるを食って学林で三かごはいて家へ来てゆのしたをむした。

〔落書きの絵あり〕

* 幾駄。

** 将軍沢にあった学校林。

*** 風呂焚きをした。

大正天皇祭。故陸軍航空兵准尉小屋野文恵、故陸軍歩兵伍長内田唯雄、故陸軍輜重兵上等兵田島銀三の七郷村葬が七郷小学校で執行される。

〔十二月二十六日～十二月三十一日 頁欠落〕

十二月二十六日 火曜 晴

十二月二十七日 水曜 晴

十二月二十八日 木曜 晴

十二月二十九日 金曜 晴

十二月三十日 土曜 晴

十二月三十一日 日曜 晴



当時の大蔵の仲間たち

(写真下)

新藤岩治

金井仲次郎

野村修彦

新藤文太郎

富岡健治

富岡寅吉

野村英雄

齊藤三郎

(旧姓)

(一九九五年十月)



一九四五年当時の富岡家
(写真上)

【解説】富岡寅吉さんの日記

嵐山町大蔵にお住まいの富岡寅吉さんは、小学校六年生の正月から日記をつけ始め、以来今日まで書き続けておられる。その間の日記は、すべてが大切に保存され、本人の手元に所有されている。

子どものころ、誰でも一度は日記を書き始め、すぐに飽きて放り出した経験をもっているものだ。十二歳の正月から、一度も休まず書き続け、しかもそのほとんどが保存されているとは、驚異的なことである。

しかも書き始めたのが、一九三九（昭和十四）年の一月、日中戦争から太平洋戦争へと、日本が破局への道をひた走っていた時代のことだ。やがてくる敗戦をはさんで、物資の不足と大きな混乱の中でも、富岡さんの日記は休むことなく書きつがれた。

その最初の記念すべき一冊を読ませていただいた。当時の子どもの生活や時代の雰囲気、手に取るようにわかる貴重な資料である。当然のことであるが、今の子どもの生活とはずいぶん違う日常生活があった。一年分の日記の内容を、かいつまんで紹介してみよう。

まず当時の子どもの遊びである。

冬の寒い時期は、なんととっても「ぶつけ」がさかんだった。十一月日から連続三日ぶつけのことが書いてあり、学校の綴り方も「ぶつけ」という題で書いている。そのほかには、鬼ごご。けだし。かくねっこ。とりっこ。雪合戦。すもう。ほうじろをすつとばしてあるつた、などという記述もある。

二月になると、体をぶつけあって遊ぶきへんま（騎馬戦）がさかんになる。へびをわるさした、というの、きつと冬眠中の蛇を見つけて遊んだのだろう。日光写真がすであつたこともわかる。三月といえはまだ寒かったはずなのに、すでに魚突きをしている。当時の子どもたちは元気がよかつたのだ。魚とりは五月ころからさかんになる。

高飛び遊びでおもしろいのは、よっちゃんに柱を作ってもらっていること

だ。つまり手作りの道具を使つての走り高跳びで、今の子どもたちと大変違うところではないだろうか。同じようなことが、箱をもらつて、四輪車の大きいのを作つて、ひいて遊んだ、ということにもうかがえる。

六月の夜には、すでにホタルがたくさん飛んでいた。三十匹もとつたと書いてある。魚釣りに行つたらフナがびよんびよんかかつた、とあるが今はどうだろう。大堀にいつて魚を追えばした、という書き方には、元気いっぱい躍動的な子どもの姿が目につく。さて、九月から十二月にかけては、急に遊びについての記述が少なくなる。家の仕事の手伝いが忙しかつたからではないだろうか。

日記を読んでみると、今の子どもに比べると遊ぶ時間が多く、しかも遊びが多彩である。しかし子どもは遊んでばかりいたのではない。じつによく家の手伝いをしていた。父親や祖父といっしょに、しよつちゅう草刈りにいつている。馬に食わせるためだつたのだろう。親子がいつしよに働く機会が毎日のようにあつたのだ。親子の断絶などという問題はおこりえようがなかつたろう。

また子守をしたという記述がじつに多い。今幼いきようだいをつれて遊んでいる子どもの姿をみかけることはほとんどない。昔はこれが遊んでいる子どもものふつうの姿だつた。少子化、塾通い、お稽古ごとというおきまりの言葉がすぐに思い浮かぶが、富岡さんの日記を読んでいると、子ども社会の変貌ぶりが如実にわかる。

さて手伝いの様子を日記から見よう。

寒い時期から春にかけては、山へ行つての枯れつ木集めや車の後押し。馬小屋に木の葉を入れるという仕事も多かつた。野良仕事としては、麦踏みやふるっこみにつぶてぶちがある。家の中では縄ない。朝登校前におんどこ（温床）のふたを取り、帰つてきたらふたをする仕事。

四月あたたくくなると、くさげづりや河原へ行つてよし刈り。五月になれば田うなえが待つているし、草刈りも始まつた。六月からは蚕の仕事がふえる。

桑くれの手伝いからこくそはこび、繭かき、けばとり。大麦刈りも始まって、刈った麦を運ぶ車の後押し。やがて夏が近づけば田んぼの仕事が忙しくなる。子ども仕事は馬のはなどりだ。真夏になれば、草刈りに田の草取り、そしてまた蚕の世話が始まる。桑つみ、桑くれは九月も忙しく、解放されるのは中旬過ぎになる。九月十九日の日記には「蚕があがったのでせいせいした」と書いている。蚕上げの日は昼飯を食べる時間もなく、二時ごろ食べた、というからよほど忙しかったのだろう。

秋になれば、こい運びと畠へのこいちらし、けづりこみやあづきもぎもする。おかぶ（陸稲）刈りも手伝う。日常生活では、家の雑巾掛け、風呂の水をくむゆかいこみ。朝起きて座敷や庭を掃除してから登校だ。秋が深まる十一月、十二月には、麦蒔き、麦踏みの畑仕事。大切な燃料だった杉葉ひろいがある。おとながワラを打つときに手伝うワラ回しもあった。

こうしてみると、当時の子どもたちは、家の手伝いをするということ、元氣よくみんなと遊ぶことが、生活のすべてであったように見える。しかしもちろんそれだけではない。学校もあったし、大人社会とふれる体験もたくさんあった。

当時の学校は、一年中で一番寒い寒の時期には、特別の工夫があった。一月の三十日からは、授業の開始時間を遅らせ、お昼の時には弁当を暖めてくれて、お湯もでた。二月末までは続いていたことがわかる。校庭の石ひろいや花壇の手入れ、農業実習の様子などが、詳しくかかかれている。暖かい時期になると、雨の降る日ははだして登校したことなどが書いてあり、今とはかなり違う子どもたちのようすがわかる。

日常生活では、葬式があると銭をまく習慣があったようで、ともらいで銭を十四銭ひろった、などという記述が時々見える。大人には悲しい葬式も、子どもにとってはさてどうだったのだろう。サーカスを見に行ったり、まわってくる紙芝居をみたり、活動写真を見たりすることが、子どもたちのかぎられた娯楽だったようだ。

さて最後に、なんといつても見逃せないのは、子どもたちの生活を覆う時代の影だ。この日記が書き始められる二年前、一九三七（昭和十二）年七月七日に、日中戦争が起きている。学校では戦地に送る慰問文を書き、出征兵士を送るときには子どもたちも動員された。ふだんの生活でも、毎月一日の朝は、登校前に神社の参拝があった。のちには月の半ばの十五日にも参拝するようになった。鎌形八幡様で出征兵士と、傷病兵の武運長久を祈った、という具体的な記述が見える。

出征兵士のがいせん、というはなやかな様子も書いてあるが、三月のある日、戦死した兵士の無言のがいせん、を駅で迎えている。このときは村葬で、子どもたちが多数参列している。

七月七日には、学校で事変二周年記念日の式があり、このころから防空演習が始まる。その後、防空演習は連日行われるようになった。九月にはいると、昼休みに愛国行進曲を歌ったり、三十分の行進練習なども始まった。また、修身の時間には、先生が満州義勇軍から来た手紙を読んでくれたりしている。

やがて、「朝早く起きて、旗をもって停車場へ行った。遠山の入営兵士を送った」ということが日常化してくる。この年十二月二十四日の日記には、「朝起きると寒かったが、第一線の勇士のことを思っ学校に行った」とあり、子どもたちの柔らかな心が、戦争にむかって、少しずつ形を与えられていくようすが読みとれる。

日記は一人の人間の生きた証である。一年三百六十五日、一日もかかさず日記を書き続けるためには、並はずれた強い意志が必要だ。その強靱な意志を支えているものは、一日一日を大切に生きたいという意識ではないだろうか。小学校六年生の正月から書き始められ、今なお書きつがれている富岡日記に学ぶことは多い。同年輩の人が読めば、当時の生活を生き生きと思ひ出せるだろう。時代の証言としての資料価値も大きい。大勢の人に読んでいただきたいと思う。

（嵐山町博物誌調査協力員 森山茂樹）

資料一 一九三九（昭和十四）年当時の菅谷村第一尋常高等小学校と村の教育

状況の概要のわかる資料として、A菅谷第一尋常高等小学校学校一覽表とB菅谷村学事年報甲款（ともに抄録）を掲載する。

A 昭和十四年菅谷第一尋常高等小学校学校一覽表（抄録）

	在籍児童		計
	男	女	
尋常			
一学年	二二	一九	四一
二学年	二八	一七	四五
三学年	三五	三五	七〇
四学年	二四	二四	四八
五学年	二四	一八	四二
六学年	二三	一八	四一
計	二〇	二五	四五
高等			
計	三〇	四六	七六
一	三一	四六	七七
二	三二	四七	七八
三	三三	四八	八一
四	三四	四九	八三
五	三五	五〇	八五
六	三六	五一	八七
七	三七	五二	八九
八	三八	五三	九一
九	三九	五四	九三
計	三九	五五	九四
合計	三二六	二九九	六一五

施設事項の概要

教授に関する事項

- 一、教授細目の修正利用 一、教科研究主任の教材研究 一、教授法研究会の開催
- 一、成績調査の実施 一、揭示教育 一、自習時間の特設（自学自習の養成）
- 一、学芸会展覧会開催 一、改善要目の徹底

訓練に関する事項

- 一、埼玉県教育是 一、本校教育是 一、校訓 一、奉安殿奉拝 一、朝礼訓話 一、各神社境内清掃 一、神社参拝 一、戦没者墓参 一、非常時局下に於ける国民精神の強調

社会教育に関する事項

- 一、青年学校の督励 一、男女青年団の指導啓発 一、道路愛護 一、交通道德 一、各種講演会映画会 一、本村内史蹟調査 一、従軍将兵の慰問 一、従軍将兵の戦捷祈願

其他の施設事項

- 一、職員会 一、職員研究発表会 一、体育貯金衛生デー遠足水泳 一、父兄会母子会競技会 一、各種研究会出席 一、学事視察 一、御即位記念基金造成

B 昭和十四年菅谷村学事年報甲款（抄録）

(一) 学齡児童の状況

(イ) 就学に関する規則施行の状況並就学奨励に関する施設要項

- 一、就学に関する規則施行状況 各条項とも完全に行はれ殊に就学に於ては入学生児童身体検査施行と同時に保護者を聞き就学奨励をなし並に向学心を促し諸般の注意をなしつつあり

- 一、就学奨励に関する施設事項 菅谷学童保護会並に鎌形教育会の設置あり 貧困児童其の他の就学困難なる児童に被服教科書学用品を給与す

(二) 小学校の状況

(イ) 学校の設置、廃合及設備の状況

- 一、学校の設置廃合 二学区に分る
- 明治十九年五月菅谷、大蔵、鎌形の三校を合併し城山学校を開校す
- 明治二十五年七月菅谷、鎌形、両校に分離し其の後それぞれ高等科を設置し現

在に至る

昭和十四年度中設備せる金額一九八〇円なり

(ロ) 学級編制並二部教授の状況

校名	学級数	編成	学級平均児童数	
菅谷尋常高等小学校	尋常科九	高等科二	単式男女混合	五一人五
鎌形尋常高等小学校	尋常科三	高等科一	複式男女混合	四七人〇

(二) 教員の需要供給勤続転免

菅谷尋常高等小学校 需要供給 十一学級に対し正教員十一人、代用教員一人

勤続転免 十三年一人、十年一人、九年一人、三年一人、

二年一人、其他一年以下

鎌形尋常高等小学校 需要供給 四学級に対し正教員五人

勤続 三年一人、一年三人、二年二人 転免なし

(ホ) 教員の俸給、加俸其の他待遇上の状況

第一学区 正教員月俸平均五十九円 専科正教員五十円

第二学区 正教員月俸平均五十七円

加俸年額 六十五円一人、四十二円二人、二十四円六人

(三) [略]

(四) 青年学校の状況

(イ) 学校の位置、廃合及設備の状況

一、学校の設置廃合 昭和十年学則を変更し菅谷青年学校となる

一、設備の状況 教練銃三一 背囊三〇 水筒二〇 銃器室、図書、其の他

実習地、農業舎等

(ロ) 教員の資格別、教員の需要供給勤続転免、俸給加俸其他待遇上に関する

状況

一、教員の資格別 専任助教諭一人、常務助教諭二人、兼任助教諭八人、其の他

三人

一、教員の需要供給 過不足なし 季節専任女教師二人

一、勤続転免 専任助教諭の勤続一年

一、待遇上の状況 専任教員月俸四十四円 兼任平均年手当十六円

(ハ) 指導員に関する状況

一、教練指導員 歩少一人、歩伍二人、歩上一人、名誉指導員：騎少一人

平均年手当五十円、何れも村内出身者にして熱心に指導す

(二) 生徒教授訓育の状況、生徒学業の進否

一、生徒教授訓育の状況 教育勅語の御趣旨を体し勤労愛汗鍛錬主義を以て農民魂の養成を目標とす 役員の召集日は日直当番、銃器当番等の勤務、学務委員と連携して入学出席奨励、優良生徒並に出席優良瀨生徒の表彰

一、生徒学業の進否：著しくその向上を認む

(ホ) 生徒修学旅行に関する状況

一、四月二十七日 御嶽山自転車行軍本科一年以上一二〇名参加

一、三月二十五日 大里郡小原村文殊寺へ徒步行軍本科一年以上一二二名参加

(ハ) 入学志願者に関する状況

普通科該当者 男ナシ 女二

本科一年年齢該当者 三十一名 就学猶予四名

本科二年以上入学転学者 十一名

(ト) 教練査閲の状況

十一月二十五日受閲 受閲生徒数一三二名 受閲歩合一〇〇%

優良表彰生徒 五名 学科査閲 優良の講評あり

(チ) 生徒研究、実験、実習及之に関する設備の状況

一、研究実験：作付研究(低学年) 甘藷麦類の多収穫研究(高学年)

一、実習：家庭並部落実習地、共同種子消毒、薬網工共同実習

一、設備の状況：作業場

(リ) 学校と実業界との関係

村農会と連携し種子共同消費、県奨励品の普及、増産計画に邁進す 発展途上にある村信用組合を援助し報告貯金、記念貯金等を計画し金融円滑を計る

(五) 「略」

(六) 学校に於ける体育及衛生

(イ) 学校医、幼稚園医及学校歯科医幼稚園歯科医執務の状況並学校看護婦の設置及執務の状況

学校医は春秋二回身体検査をなす外時々学校衛生状況を視察し衛生講話をなす
歯科医の設置なし 学校看護婦の設置なし

(ロ) 設備の衛生に関する状況

校舎は新建築にして理想的の設計なり 通風採光等良好
設備も次第に整備されつつあり

(ハ) 教授衛生に関する状況

毎日校舎内外の掃除は勿論月二回大掃除をなし或は衛生日を定め児童の身体状況に留意し体位の増進を図る 衛生教授要目を定め教授す

(ニ) 学校に於ける体育運動に関する状況

毎週体育日を定め毎月行軍を実施し春の遠足秋の体育競技会武道等により運動をなさしめ体位の向上をはかる

(ホ) 学校、幼稚園職員生徒児童幼児の健康状態に関する状況

学校職員は病気のため二名長く欠勤せる外は健康体なり
生徒児童は皆健康にして身体検査の結果をみるに發育状況良好なり

(ヘ) (ト) 「記入なし」

(七) 学校園学林及樹栽の状況

(イ) 学校園学林等の施設地関する状況

1. 学校園 校地内に学級別に設け教材と関連せる植物を植栽し情操陶冶と同時に共同勤務の精神を涵養す

2. 学林 大字將軍沢にあり 面積六町二反二十五歩
二十一年生の松樹あり 児童の作業により手入を行ふ

(ロ) 生徒及児童樹栽に関する状況 学校園、実習地は児童の植栽するものにして学林は毎年三回生徒児童により手入をなす

(ハ) (九) 「略」

(十) 男子青年団の状況

(イ) 男子青年団の設置、廃止の状況
菅谷青年団……創立は大正六年三月十日なり
鎌形青年団……大正六年三月十七日に設置す

(ロ) 経営及維持に関する状況

菅谷青年団……役員は団長、副団長理事評議員等にして九支部を設け村費補助金四十八円団員離出額は二十二円四十銭なり

鎌形青年団……役員は同前 四支部を設く 村費補助金二十二円団員離出金二十二円なり

(ハ) 教育及修養に関する施設並状況
教育及修養に関する施設は左の如し

農事視察 修養会 体育競技会 早起会 武道会 農産物試作場 品評会
入退堂者歓送迎 国旗掲揚 神社参拝 敬老会 出征将兵遺家族慰安並に勤勞奉仕 道路修理と指道標の設置、掲示 交通整理 危険物投入函設置

状況……何れも相当の成績をあげたり

(十一) 女子青年団の状況

(イ) 女子青年団の設置、廃止の状況
菅谷女子青年団の創立は大正十二年三月三日なり
鎌形女子青年団の設置は大正十二年二月二十二日なり

菅谷女子青年団の創立は大正十二年三月三日なり
鎌形女子青年団の設置は大正十二年二月二十二日なり

(ロ) 経営及維持に関する状況

菅谷女子青年団……役員は団長、副団長、理事評議員等にして九支部を設け
村費補助金二十八円団員醸出金其の他の収入五十円なり
鎌形女子青年団……役員は同前なり四支部を設け村費補助金十二円団員醸出
額金十円なり

(ハ) 教育及修養に関する施設並状況

施設事業左の如し
部落修養会、講演会、競技会、遠足、廃物利用、養蚕、敬神崇祖の実践、モ
ンペ作製着用、出征将兵遺家族の慰問、勤労奉仕、養兔、生産倍加運動
状況……何れも好結果なり

(十二) (十三) (十四) [略]

(十五) 教育品展覧会の状況

(イ) 開催の回数及日数観覧人の状況 回数一 日数一 観覧人員六〇〇
(ロ) 陳列品の種類別点数
書方六〇〇点 図画三〇〇点 手工一五〇点 裁縫二〇〇点 蔬菜二〇〇点

(ハ) 開設の効果

学校家庭の聯絡上好結果なり 村内一般の向学心を高めたり

(十六) 教育会の状況

(イ) 教育会の組織

菅谷教育会及び鎌形教育会あり それぞれ役員を置き全戸主を以て会員とす

(ロ) 会数及会員数 会数二 会員数七〇五人

(ハ) 事業の概況

貧困児童の学用品、教科書等を給与す 入学及び出席の督励、休暇中の部落
学習督励

(十七) [略]

(十八) 市町村会の状況

学事に関する議事については村当局及び議員は熱心にして全会一致円満のう
ちに諸設備其の他につき完璧を期して議す

[十九]二十三、表は略]

資料二 出征兵士を送る行事について

出征兵士の見送り・出迎え等の行事については時期により、また同一村内に
おいても地域により異なっている。ここでは、向徳寺文書より一九三〇(昭和
五)年十二月十八日施行「菅谷村大蔵風俗改善に関する申合」の「五 入営帰
郷者に関する事」の部分と大蔵区有文書の「大正十四年度記 大蔵区長 現
金受払簿」より作成した「一九三九(昭和十四)年大蔵区会計収支」を掲載す
る。

菅谷村大蔵風俗改善に関する申合

五 入営帰郷者に関する事 壮丁の入営帰郷者に対する送迎は鎮守社頭に於
て祝意を表すること 送迎旗は二旗以上立てざること 金品の贈答酒食の饗応
は之を廃す 但親戚及特別の関係者は此の限りにあらず 入営帰郷に際し兵の
礼廻りをなさざること 餞別は大字より葉書百枚贈ること

一九三九(昭和十四)年大蔵区会計収支

一月 八日野村阿喜良野村作次両君の入営の餞別/紙二丈ツ、四円一四銭

一月 九日両君の出発に付御神酒一升 一円三〇銭

一月廿五日宅地租第二期分(五名分) 一円四一銭

一月三〇日成沢万造君遺骨の凱旋に付/生花台一对ローソク二本五円四一銭

二月 二日毎月二日の祈願 一円五〇銭

二月 九日榛名神社初穂料納入例年道り 二円

二月 九日菅谷第一駐在所自転車購入の寄付 六円

三月 二日毎月二日の祈願 一円六五銭

三月 一〇日成沢万造君の花輪 五円

四月一六日春季衛生費 四円
五月 二日 毎月二日祈願 一円三五銭
五月 七日 千人針の布二丈五尺と糸 二円一六銭
五月 七日 千人針を作る女子青年団に茶菓子 五〇銭
五月 二日 藤縄正二山下周平両君応召に付餞別す／半紙四丈一〇円一二銭
五月 二日 両君の出発に付御神酒一升 一円三五銭
五月 一七日 天気予報の旗と紐／生徒に五〇銭給与す 一円八銭
五月 二〇日 道路費として村より補助金受取一三年度分(収入) 二〇円五四銭
六月 二日 毎月二日の祈願御神酒其他 一円四〇銭
六月 二日 小川警察署新築に付寄付金／大蔵分割当 三五円一八銭
六月 二六日 農会費(五名分) 三円八九銭
七月 二五日 宅地租(五名分) 一四銭
八月 二日 毎月二日祈願 一円四〇銭
八月 二三日 金井小市応召に付餞別 五円七銭
八月 二四日 金井小市応召の出発に付御神酒一升 一円四〇銭
八月 二五日 県税地租付加税上半期／新藤斧三郎外五八名 四銭
八月 二五日 県税地租付加税上半期／大沢八三朗外四名 六円二五銭
八月 二五日 学校橋に付て古鉄線買入富岡七之助に払う 七〇銭
八月 三〇日 齊藤国平君現役入営に付餞別 二円七銭
八月 三一日 新藤君の入営に付御神酒一升／二本帝松 一円五〇銭
九月 二日 毎月二日の祈願 一円四〇銭
九月 二五日 畑雑地租(五名分) 三円五八銭
九月 二五日 雑地租(五名分) 二銭
九月 二七日 富岡二三郎応召に付餞別／半紙二丈 五円七銭
十月 三日 銃後後援強化週間に付武運長久祈願 一円四〇銭
十月 三日 学校橋修繕に付古釘二百本買入 四〇銭

十月 三日 学校橋修繕に付竹買入 七〇銭
十月 五日 学校橋修繕に付押打杭材の板四〇間 四円
十月 五日 学校橋修繕に付杉皮山東二束／菅谷米山材木店に支払ふ 二円三〇銭
十月 五日 上川原占用地小作料(二名分)(収入) 八円
十月 六日 昭和一四年諸経費抹消に付字費提起割合金徴収の上繰入(収入) 一三二円五五銭
十月 八日 警防費大字分担金／七月廿四に実行したるもの金井義雄君に払ふ 一円四〇銭
十月 八日 菅谷学校生徒炭電作りの土運搬のリヤカー五台借入たる損料一円
十月 二三日 学校橋補助金村より一四年度分受入(収入) 三〇円
十一月 二日 毎月二日の祈願 一円四〇銭
十一月 二七日 小林光雄君に付餞別 五円七銭
十一月 二八日 光雄君出発に付御神酒一升 一円五〇銭
十一月 二〇日 出征兵士慰問袋寄付金 二三元六六銭
十一月 二四日 畑雑地租(五名分) 三円五八銭
十一月 二四日 畑雑地租(五十九名分) 二一銭
十二月 二日 毎月二日の祈願
十二月 二四日 県税地租下半期(五名分) 三円五八銭
十二月 二四日 県税地租下半期(五十九名分) 二一銭
「この時期は、半紙二丈を台にして水引・のしをつけたものが七銭で、その上に二円の餞別をのせて出征者に渡したようだ。」

資料三 上海維新学院第一回卒業生の日本農士学校・菅谷村訪問について
A 『東京日々新聞』 埼玉版 一九三九(昭和十四)年三月十日記事
白粉を知らぬ村へ 維新学院の支那青年来訪

「日本の姿」見学に来朝中の維新学院第一回生の新支那青年一行は十一日比企郡菅谷村千手堂部落を見学する。この部落は昔から白粉をつけぬ部落の名で通り、僅四十二戸だが特徴ある純日本型の農村で一行は村の青年の労働振り共同作業場などを見学するこの区長を満六年勤める内田茂作氏（五六）は語る「この部落は地味な百姓一方で何が儲かるからといってその方につかぬ、堅いやり方を続けてゐるのです」なほ部落の公会堂「里仁堂」の傍らの自然木に大きな鐘を吊し「暁鐘」を名付けて毎朝五時部落民の一斉起床、作業開始の合図としてゐる 日本農士学校へ また維新学院生一行は十日午後五時四十七分比企郡菅谷村東上線武蔵嵐山駅に到着日本農士学校の荘に至り菅原検校の「東洋農村の本質と使命」を約二時間にわたって聴講、校内に一泊、早朝同校独特の陣太鼓と共に飛び起き行事をすませて渡辺教授等の朝講義を聴き午後は実習地の見学をなし千手堂部落視察後十一日午後四時廿分發東上する

B 『東京日々新聞』埼玉版 一九三九（昭和十四）年三月十二日記事
若きその情熱を 新東亜建設へ

日本農士学校で交歓 中支維新学院の一行を迎ふ
雨の朝を比企郡菅谷村日本農士学校に迎へた新支那中支維新学院第一回八十五名の一行はこの朝槻川の清流に顔をそ、いで金鶏学院に詣で、明德堂で朗誦、礼拝をなし、菅原検校の「東洋農村の本質と使命」を聴講

生徒達が箕笠で働く桃畑の作業を見、バスに分乗して菅谷村千手堂部落に至り公会堂里仁堂菩提寺光照寺、鎮守春日神社をみて、四百年の旧家名主十五代目の消防組頭関根茂良氏宅に憩ひ、二、三の詩吟と中国歌を交換し午後一時帰京の途についた、引率者生徒隊長長山崎正之助氏は「生徒たちの父兄たちで今も抗日の剣をとつてゐるものもありませうし、戦死したのもありませう、自ら遊撃隊員にして抗日戦に立つてゐた者もあるのです。日本の真の姿に触れ、帰国の上新支那興隆の柱石となるやうその目的が達成され、ばこの上ないことで

す」と語った、伊藤学務部長代理福島視学官は「……東亜に生きる誠は一つである、東洋平和のために一緒になつてやつていかう……」と挨拶した。一行中の揚子謙少年は「□熔東洋文化復興孔孟精神」と書き贈つたに対し、菅原兵治氏は「十年無限心中事一宵清話得知音」と書を交換した

C 日本農士学校学校日誌『山莊有情』には次の記録がある（『川薪会報』第一〇号、十四頁より重引。川薪会は日本農士学校卒業生の同窓会）。

三月十日、十一日 維新学院生来校、友人百人を迎へ山莊は生機躍動す。十日午後七時半五台のバスに分乗せる彼等は林生徒隊長の指揮下に宿舍入り、なれぬ手つきで飯を盛り、急がしげに喰べる夕食も終り八時半より検校の講演。支那の古経や陽明、淵明等引用して学校設立及び東亜の将来を談ずれば皆瞳を輝かせつつ聞き入る。明くれば十一日、学生等が早朝から打振ふ木刀の素振百本を見学す。ボクトー、ボクトーと小声で言いつつ眺めている彼等を見れば異邦の民とは言えぬ懐しき情の通うを見る。目鼻立ちは日本人とは一分の違いもなく、揃いの服装に隊伍を整うる処は立派な東亜の礎石的人材のみ。雨中を農場の仕事実習の見学をなし、自転車にして分乗して千手堂部落の見学を為す。先づ藁屋根こんもりした寺院に住職を訪ね、春日神社に日本の神社の内容を知り、関根茂良氏宅に到り三百年連綿たる旧家に在郷将校の軍服あるを見て、戸長にして百姓然して軍人、解せぬ面持ちの末曰く、諸葛孔明子の草廬をとへるが如しと、正午学校に帰り一堂に会してライスカレーの午餐会、日支の音楽を交わして嬉々たり。午後一時一同感銘を籠めて帰京す。

資料四 故陸軍歩兵上等兵小久保盛造・故陸軍歩兵上等兵成澤万造の村葬における菅谷村長・小学校長・在郷軍人分会長の弔辞

A 菅谷村長の弔辞
謹ンデ

故陸軍歩兵上等兵小久保盛三君

陸軍歩兵上等兵成澤万造君

ノ英靈ニ対シ村葬ノ礼ヲ以テ追悼ノ誠ヲ捧ゲマス
凡ソ皇国ニ生ヨ亨ケ身ヲ軍籍ニ置クモノ聖戦ニ参加シテ御国ノ為ニ活躍スルハ
日本男子ノ本懐トスル処デアリマス

小久保君ハ生等ト共ニ机ヲ並ベ村事務ヲ執掌共ニ語り共ニ励マシ忙シクモ楽シ
イ日々ヲ送り迎ヘシテ居リマシタ其ノ間僅カニ数ヶ月デアリマシタガ時アタ
カモ支那事変勃発当初デ応召者ハ引キモ切ラズ軍馬ノ徴発モ数回又防空演習等
モ行ハレ誠ニ多忙デアリマシタ其ノ間ニ於ケル君ノ活躍ハ同僚等シク驚嘆スル
処デ真ニ軍人ラシキ体力ト実行力ノ持主デアルコトヲ深く知ルヲ得マシタ
応召ニ当リ生等同僚心バカリノ小宴ヲ開キマシタ時君ノ挨拶ニ僕ハ思フ存分活
躍シ敵ヲウントヤツツケ必ズ骨トナツテ帰ルト叫バレマシタ言葉ハ簡單デアリ
マシタガ並居ル者ハ皆襟ヲ正シ十有餘ノ眼ハ一斉ニ君ノ眼ニ口モトニ注ガレタ
ノデアリマスソレ程君ノ態度ハ君ノ言葉ハ真剣デアリマシタコ、等ニモ君ノ真
髓ガ閃メイテ居リマス

悲シクモ尊イ戦死ノ報ヲ受ケマシタノデ君ノ生家ニ訪レマスト折カラタ餉ノ膳
ニ向ツテ居ラレマシタ父君ハ静カニ出テ来ラレ御悔ヲ申上ゲマスト盛三モ之デ
本望ヲ達シタノダ兄モ戦線ニ居ルカラ必ズ此ノ敵ハ打ツテケレルデアラフ其ヲ
楽シミニ待ツテ居ルト涙一滴落シモセズ雄々シクモ尊ク叫バレマシタ慰メヤウ
ト訪レタ者ガ反ツテ慰メラレル結果ニナラウトハ嗚呼ソノ心情ヲ推シテシバシ
暗涙ニ咽ンダノデアリマス

去リニシ日一聯隊デ行ハレタ君ノ告別式ノ時君ガポケット深く秘メラレテ居タ
紙入ガ渡サレタノデアリマス見レバ敵弾ニ打抜カレテ居リマス中ニアツタ札ト
教葉ノ写真ト五十錢銀貨及父上ヨリ送ラレタ激励ノ手紙トハ共ニ美事ニソノ中
央ヲ打抜カレテ居ルノデアリマスソシテ是等遺品ハ尽忠報國ノ赤キ君ノ血潮デ
染メラレテ居ルデアリマセンカ此レヲ見タ瞬間大奮戦振ガ眼前ニ彷彿トシテ

シバシ言葉ヲ発スルコトガ出来マセンデシタ

成澤君ハ幼少カラ体力優レ意氣盛シナ男ヲシキ男デアリマシタ召集ノ令ニ接ス
ルヤ文字通り勇躍征途ニ上ラレタノデアリマス君ニハ今事変中最モ苦戦トシテ
知ラレタ蘆山金輪峯ノ激戦中惜シクモ敵弾ニ傷ツキ倒レタ小林部隊長ヲ安全地
帯ニ移サンモノト十字砲火ヲモノトモセズ隊長ノモトニ馳セ寄り隊長ヨト叫ビ
乍ラ素早く背負ヒ正ニ断崖ヲ駈降リントシタ一刹那集中砲火ノ為小林部隊長モ
ロトモ壮烈極マル戦死ヲ遂ゲラレタノデアリマス君ノ真面目誠ニ躍如タルモノ
ガアリマス

君ノ生家ハ老人ト若キ妻女ト幼ケナキ嬰兒トデ守ツテ居ルノデアリマス然シテ
今ヤ杖トモ柱トモタノム唯一人ノ君ハ戰場ノ露ト消エタノデアリマスソノ悲シ
ミヤ如何バカリト生家ヲ訪ヘバ老イテ病メル父君ハ伴モ御國ノ為ニナツタト唯
一言後ハ涙ニ咽ブ家人ヲ警メ励マシテ居ルノデアリマスソノ雄々シキ心根ニ熱
キ涙ノ込ミ上ゲテ来ルノヲ止メル事ハ出来マセンデシタ

嗚呼此ノ両勇士ノ颯爽タル英姿ニ再会スルノ期ハアリマセン悲シト言フモ愚デ
アリマス我等ヒタスラニ両勇士ノ武運長久ヲ祈リタリシニ本日茲ニ白布ニ覆ハ
レタル死骸ト相ヒ見エ様トハ

只々熱イ雫ノ頬ヲ濡スノミデアリマス
然シナガラ両勇士ヨ君ノ忠靈ハ靖國ノ御柱トシテ鎮マリ武名ハ千載ニ輝キマス
亦以テ瞑スベキカナ冀クハ英靈愈々國是ノ貫徹ニ加護アランコトヲ茲ニ村民ヲ
代表シ恭シク弔意ヲ表シマス

昭和十四年三月十四日

菅谷村長

B 小学校長の弔辞

弔辞

故陸軍歩兵上等兵小久保盛三

故陸軍歩兵上等兵成澤萬造

両君の霊に告ぐ

花は桜木人は武士とかや両君の人となり正に此の如きか 今事変勃発に当り召集令状を受くるや何れも欣喜勇躍歓呼の聲に送られ郷を後にして暴支膺懲の聖戦に向はる

誠に国家危急存亡の秋国民総力以て時難を克復し東亜永遠の平和を希求せざる者なきなり両君亦こゝに思ひを致し身命を忘れて第一線に奮戦せらる。まことに大和男の子の意気や天を衝き連戦連勝武勲実赫々たり 然れども膺懲の戈何時収まるやも知らず激戦又激戦終に名譽の戦死を遂げらる 誠に痛哭哀悼の極なり然りと謂へども両君の忠魂は悠久に護国の神と鎮りこの聖業達成貫徹の為神州志士億兆の奮起を促さん 希くは両君の霊以て瞑すべきなり茲に聊か生前の武勲を讃へて英霊を慰む

昭和十四年三月十四日

菅谷第一小学校長 菅谷青年学校長 石川逸郎

C 在郷軍人分会長の弔辞

弔辞

故陸軍歩兵上等兵小久保盛三君

故陸軍歩兵上等兵成澤萬造君ノ両英霊ニ恭シク白ス今次支那事変勃発スルヤ行軍ハ凜然トシテ暴支膺懲ノ師ヲ進ム

君等マタ其ノ大命ヲ拝シ勇躍聖戦ノ軍ニ従ヒ或ハ極寒酷熱ヲ忍ビ或ハ艱苦欠乏ニ耐ヘ勇戦奮闘敵ヲ敗走潰滅ノ已ム無キニ至ラシメ我軍大捷ノ礎石ヲ築カレシカ遂ニ江南戦線ノ華ト散ル洵ニ哀悼痛惜ニ堪ヘサルナリ

然リト雖コレ武門ノ譽男子ノ本分武人ノ本懐ニシテ帝国軍人ノ榮譽コレニ過キタルハ無シ

今ヤ東洋平和ノ曙光ハ眼前ニ迫リ皇軍ハ意気軒昂支那全土ニ涉リ其ノ勇名ヲ

轟カセリソノ武勲ハ全世界ニ赫々トシテ響キ涉リ鬼神モ其ノ影ヲ潜ム

コレ誠ニ君等ノ力戦苦闘ニ因ル賜モノナリト謂フヘシ

然レ共一タビ視野ヲソノ家庭ニ転スレハ小久保盛三君ニハ唯一無二ノ便利トスル父親兄妹アリ

マタ成澤萬造君ニハ係リ子ノ相続人ヲ失ヒル老父母及ヒ車ノ片輪ヲ失ヒル如ク夫ニ離別シ悲歎ニ暮ル、妻アリ父ヲ失ヒル愛児アリ

何ヲ以テ之ヲ慰メ何ヲ以テカ之ニ応ヘン

嗚呼両君ノ忠烈無非ヤ洵ニ軍人ノ龜鑑トシテ永ク青支ヲ照サン両君亦以テ瞑スヘキナリ冀クハ英霊長ヘニ我カ帝国ノ鎮護タレ茲ニ村葬ノ行ハセラル、二際リ謹ミテ弔意ヲ表ス

昭和十四年三月十四日

菅谷村軍人分会長 小林才治敬白

〔役場に残されているこの日の村葬に寄せられた弔電・弔辞にはこのほかに次のものがある。弔電：県議笠間茂平・麻布聯隊区司令官・横川重次・森田茂一郎・比企郡農会長・小川高等女学校長・早川連合分会長。弔辞：愛国婦人会埼玉県支部長 土岐嘉子（印刷）・恩賜財団軍人援護会埼玉県支部長埼玉県国防義会長 埼玉県知事土岐銀次郎（印刷）・財団法人大日本消防協会長 正三位勲二等侯爵木戸幸一（印刷）・（成澤萬造あて）時宗管長 大僧正星徹定（印刷）・（松中第七回卒業生小久保盛三あて）埼玉県立松山中学校同窓会員総代 土田善一・埼玉県町村長会長大理 副会長宮下林平・埼玉県知事土岐銀次郎・埼玉県神職会比企支会会長 高坂留吉（印刷）・日本赤十字社社長 正二位勲一等公爵徳川家達（印刷）。〕

資料五 農繁保育所資料

〔向徳寺文書一五〕

A 農繁保育所（託児所）開設経費補助申請書

今回統後努力保護の為 農繁期幼児保育所左記要綱により開設致し候条経費に

対し補助金御交付被成下度申請仕候也
昭和十四年五月十七日

時宗管長大僧正星徹定殿

記

向徳寺保育所 経営主 永井諦善

創始年月 昭和十四年六月六日

本年度開設キ 自昭和十四年六月七日至十二日 六日間

自々 十四年七月一日至七日 七日間

実人員 男 一〇二人 内応召者遺家族十人

女 九八人 内応召遺家族二十人

計 二〇〇人 内応召遺家族三〇人

延人員 一三〇〇余人

係員 保母及指導員 僧侶学校職員男三人 女三人 計六人

設備 一 本堂内一四坪 寺院一〇坪内砂場四〇坪

二 滑り台一 ブランコ十余人乗一 四、五人乗一

三 紙芝居 六組

四 蓄音機及幼年用レコード三〇枚

保育の方法

三才より九才まで收容保育 午前八時より午後七時まで

午前七時より八時まで自由遊戯

八時より三〇分間朝礼及唱歌、初日爪切、漸次挨拶、手洗、食物整理を教ふ

八時半より九時まで自由時により河岸に引率 十時間食

十時半より十一時まで指導遊戯、十一時より十二時まで自由 中食

午後一時より二時睡眠、二時半より三時まで紙芝居、三時半小中食、五時菓子

大体三十分を限度とし自由指導様子を見つつ交互に課す

備考

一 午後七時閉所なるも日暮まで居るもの多し

一 農村にて保母を得ること困難なり依学校職員の応援を乞ふ

田植期土地状況により一定に開所し得ず 当字の如き他より田植晚く七

日間の内下半期は住職夫妻のみにて保育に従事せり

一 開設予定期間

養蚕期 六月四日より十三日まで十日間

田植期 七月一日より十日まで十日間

一 設備費

滑り台 一 約四十五円

ブランコ 二 〃三十五円

蓄音機 一 〃三十五円中古品

砂遊場 四坪 〃十円

筵 二十枚 〃六円

計 一三二円

一 経常費 保母 四人 〃二十円

間食費 百人分十日間 四十円

雑費 〃十円

遊具其他 〃十五円

一 收容人員

自三才至八才 一〇〇〇人以上 十日間

B 農繁保育所成績票〔第二回提出七月二十二日〕

名称 向徳寺保育所

位置 菅谷村大蔵

経営主体 住職、永井諦善

〔新聞記事によれば一九三九年六月、菅谷村では六日から一週間、志賀寶城寺・千手堂光照寺・大蔵向徳寺の三ヶ所（『埼玉読売』）で、七郷村では、七郷小学校訓導が三人一組となつて、七郷小学校、広正寺、積善寺、吉田公会堂、古里公会堂、馬内公会堂の五ヶ所で農繁保育所（託児所）を開設する（『東京日々新聞』埼玉版）と報じられている。〕

資料六 馬に関する概況調査〔昭和拾四年七月「軍用保護馬関係綴」〕

昭和十四年十月十六日 比企郡菅谷村長

- 一、馬の主たる用途 農用、輓用
- 二、馬の労役の状況
 - 1. 輓用 使用日数 一ヶ年三〇〇日 一日平均九〜一〇時間
 - 2. 農用 使用日数 農閑期 大部分使用せず 農繁期 二十五日 一日九〜一二時間

三、使用法

馬種の種類 藁、生草、麩、麦糠、大麦、大豆粕
 日糧 藁一日二貫、生草のみにては十五、六貫、麩三升〜五升
 大麦三〜五升、麦糠五〜七升 大豆粕二〜三升

飼育回数 一日 四回〜十回

調理法 麩大麦大豆粕は煮沸して与ふ

四、幼駒育成の状況 なし

五、鍛錬実施の状況及其成果

鍛錬出場成績 九〇%

鍛錬科目 1. 馬停止間の調教、2. 牽馬間の調教、3. 乗馬間の調教、4. 野外騎乗間の調教

六、馬の購入地方、売買方法、馬商の数及素質状況

北海道、岩手、福島県、群馬、長野、栃木、山梨県等なり

売買の方法 牛馬商より購入 馬商なし

七、一年間に於ける馬の移動の概数 平均二十五〜三十頭

八、伝染病、骨軟症及其の他発病の状況

伝染病、なし 骨軟症、なし 胃腸病等に罹ることあるも極めて少し

九、護蹄に関する事項

特に毎日水洗して蹄油を塗る人なきも半数位は春より秋に至る間川入をなすに付護蹄の程度割合によし

蹄鉄の改装は月一回〜二ヶ月三回の者大部分なるも数人の者は年二、三回位のものあり

十、其の他必要と認むる事項 なし

十一、馬政に関する将来の意見及希望等 なし

資料七 暑中教育農業実習登校日

月日	曜	作業予定	学年	当番組
7.27	木	全 草刈、組実習地手入レ	高1	2
7.30	日	全 草刈、除草	高2	3
8.1	火	当番作業ノミ配当表ニアリ	高1 高2	4 4
8.3	木	全 草刈及種子蒔	高2	5
8.8	火	全 草刈及実習地手入レ	高1	3
8.11	金	当番作業	高1 高2	6 6
8.12	土	全 共同地除草その他	高1	5
8.15	火	全 組実習地ノ手入その他	高2	1
8.19	土	全 同前	高2	2
8.21	月	当番作業	高1 高2	7 4
8.29	火	全 高1実習地手入レ	高1	1
8.30	水	全 高2実習地手入レ	高2	3
注意		故ナクシテ欠席スルナ、用具ハ考ヘテ持ツテクル		
農業実習日始業		午前6時 全ハ1.2男子全部 7時30分迄		

嵐山町博物誌調査報告 第2集

平成九年三月二十四日 印刷
平成九年三月二十五日 発行

発行 嵐山町教育委員会

〒三五五・〇二 埼玉県比企郡嵐山町大字杉山一〇三〇・一
電話〇四九三・六二・〇七二四

印刷 朝日印刷工業株式会社

※ 表紙写真は、籠職人富岡林造（富岡寅吉氏祖父）
富岡家庭先にて、一九五三（昭和二八）年十一月